女子文壇

第三巻第壹號

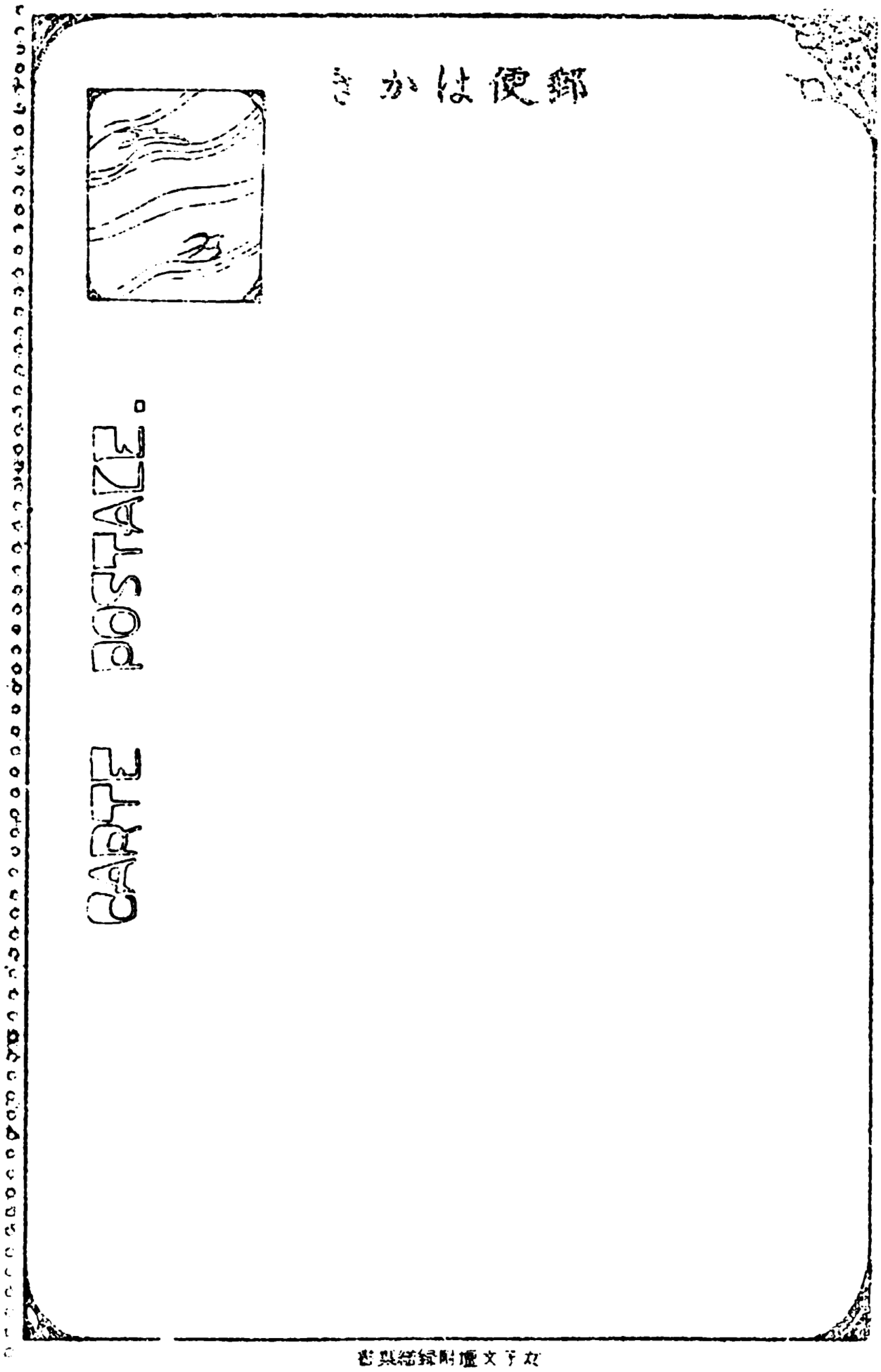
明治四十年一月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



板 子 羽




文



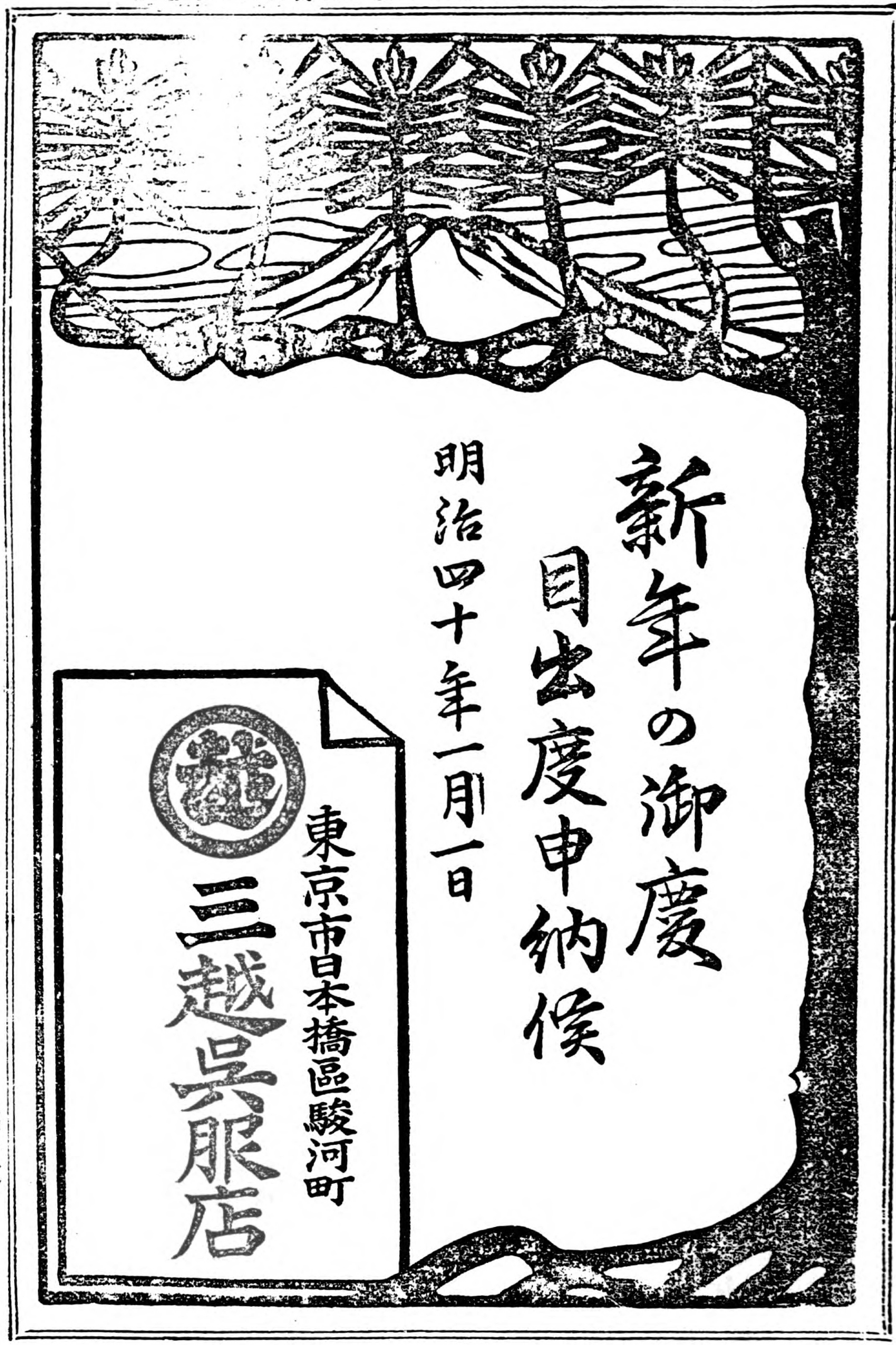
女子文壇附録絵葉書

姿と聲



岡田三郎助先生筆

（文壇第三巻第一號附録）


新年の御慶
目出度申納候
明治四十年一月一日
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

明治卅九年改正内外 圖書目録

無代進呈 御入用の方は郵券二錢御送被下度候

大詩聖カーリダーサ原著
高橋五郎 小森彦次 共譯

梵劇 さんたら姫

最新刊

四六版二百七十頁
二度摺頗美本
定價金五拾錢
郵税八錢

歐米の劇本は其の多きを以て著しく、印度の戯曲は其の乏しきを以て著し、今其の世に乏しく隨つて最も珍らしき戯曲中に於て最も名高く、遺薫今に香しきカーリダーサが一生の傑作サクンタラ姫をとりて優美艶麗の美文に譯出す、眞に破天荒の業にして、一讀天女の清歌妙舞を見て心身恍惚の思ひ有らむ、而も、譯文に一新機軸を出せるのみならず亦印度の爲め、否東洋の爲め氣焔萬丈――眞に近來稀に見る文壇の佳作也。

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著

增訂六版

文鑑 千草の錦

菊判和裝
定價金六拾錢
郵税拾錢

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、記行、論説、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり、國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也。

宮中御歌所寄人
華族女學校講師
中邨秋香先生新作
小野鵞堂先生淨書

新編手紙

(男子用)

木版半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價四拾錢
郵税四錢

女子消息 文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振がな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれければ習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

(男子用)

木版半紙摺
頗高尚優美
男女各一册
定價六拾錢
郵税六錢

新撰 女子書簡文例

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句洋々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を逹せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六 (電話本局五七七番)(貯金口座四一〇九) 前川文榮閣

中村春雨著　青木繁畫

舊約物語

箱入美本

挿畫　三色版畫八葉泰西名畫寫眞版廿四葉

定價　金壹圓五拾錢　小包料十五錢

著者先に新約物語を世に出すや好評嘖々、大なる歡迎を受けて忽ち三版を重ねたり。而して今又切にして新たなる要求を充さんが爲めに舊約物語に筆を採らる。抑も舊約書は必ずしも基督教の專有物にあらず、此中には宗教あり文學あり哲理あり美術あり科學あり歴史あり曆筭あり預言あり未來記あり又天地創世の太初に於ける神話奇譚、古代の風俗習慣箴言等悉く此に網羅せらる、彼のカーライルが稱へて世界最大の文學としたる劇詩約百記もダビデが高調深玄なる「詩篇」も戀愛詩「雅歌」もエレミヤの「哀歌」も皆本書の含藏する所「創世記」の初めより「馬剌基」の終りに至るまで全卷悉く趣味豐富光景多樣にして眞に人目を眩せしむるものあり、著者が清純雄麗の筆はよく其骨子と趣味を平易に傳へて餘蘊なし。神秘派畫家青木繁氏が精苦の三色版畫八葉、泰西名畫一十四葉又共に內容と釘裝の光彩を加ふるもの敢て江湖の一讀を俟つ。

中村春雨著

新約物語

（三版）金壹圓　小包料拾錢

挿畫三十葉クロス綴製本堅牢箱入美本

詩歌集書目

與謝野晶子選

黒髮

（近刊）金五十錢　郵税八錢

こは萬朝報、中學世界其他諸雜誌に寄稿せる青年士女諸氏の短歌中より、晶子女史の選拔を經て、優麗なる一卷の好詩集となせるものなり、悉くこれ新進氣鋭の作、文事に志ある青年男女諸君の必讀愛誦せらるべきもの也、中澤弘光氏の挿畫亦一段錦上の美を添ふるもの。

歌集　**夢の華**（與謝野晶子著　中澤弘光畫）金八十錢　郵税八錢

歌集　**髮れ髮**（晶子女史著　藤島武二畫）金卅五錢　郵税四錢

歌集　**戀衣**（晶子女史　登美子女史　雅子女史　合著）金四十錢　郵税四錢

詩集　**白羊宮**（薄田泣菫著　滿谷國四郎畫）金壹圓　小包十錢

詩集　**白玉姫**（薄田泣菫著　滿谷赤松畫）金八十錢　郵税八錢

詩集　**毒草**（晶子女史　鐵幹　著　藤島武二畫）金五十錢　郵税六錢

民謠　**子守唄**（薄田泣菫著　中澤弘光畫）近刊未定

發兌元　東京市京橋區五郎兵衛町　振替貯金口座三八一七番　金尾文淵堂

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御申添を乞ふ



速かに大懸賞附きの本誌を求めよ後るれば一年の悔あらむ

見落す勿れ

婦人世界

後るる勿れ

正月元旦發行毎月一回二卷第壹卷一冊拾五錢郵税一錢五厘半年分郵税共九十錢一年分一圓七十五錢

口繪
新年の松（御題に因める美麗無比彩色畫）村田丹陵◎彩色畫跡見花蹊
跡見女學校の内部◎名家の新婚寫眞◎新年松（和歌）三輪田眞佐子筆

娘時代の生活法　村井弦齋

△婦人の一代は如何なるものぞ
△婦人は何を目的とすべきか
△美と神とは如何なるものぞ
△外形の美は如何にすべきか
△顏は如何に美しくすべきか
△耳は如何に身體と關係するか

△眼は如何に美しくすべきか
△口元は如何に美しくすべきか
△音聲は如何に美しくすべきか
△鼻は如何に美しくすべきか
△鼻は如何に養生すべきか

◎九十歲の長壽を保てる我が祖母の健康法　藤田清子

◎新年大懸賞珍附錄

（本號にあり　見落す勿れ！　後るる勿れ！）

△賞品（婦人持十八金金側懷中時計一個△十八金寶石入金指輪十個△繻珍帶側一筋△白縮緬一反△銀側懷中時計二個△金帶止△絹張洋傘△置時計△羽ショール△用箭筒△化粧品千餘點）

◎かるた取りの名人實驗談（奇拔）……
◎顏の形と髮の結び方（新橋お愛の實驗談）
△丸顏に似合ふ髮△長い顏に似合ふ髮
◎西洋婦人の出產（山田產婆）
◎結婚の前に忘れてならぬ事（榊博士）
◎私の感心せる女學生……三輪田元道
◎見合ひ（小說）……村井弦齋

◎婦人の肥滿を治する奇法　醫學博士木村德衛
◎婦人の晴衣は何が似合ふか（趣向清新）
◎弦齋夫人正月料理談……
◎珍らしき汁粉と雜煮△鹽鮭の料理……醫學博士加藤照麿
◎玩具の選び方……
◎名家結婚年齡調べ◎年齡を當てる法
◎少女欄（少女諸君のお相手として本欄を設く）

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）賣捌　全國書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

東洋社風琴

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
デスク形	二〇円	三〇	三三	四五	四五	五三	六三	七五	八五	一〇〇				
普通形	一七円	二七	三七	四三	四八	五六	六六	七七	九〇	一〇〇	一二〇	一五〇	一八〇	二〇〇

製作堅牢 音律正確
裝飾優美 價格低廉



(第十二圖)

洋琴、ヴヮイオリン、
手風琴、樂隊樂器

(樂器目錄郵券貳錢にて進呈)

● 増訂 ヴヮイオリン初步教則本
定價五拾錢 ● 郵税六錢

● オルガン初步教則本
定價四拾五錢 ● 郵税四錢

● 増訂 オルガン進行曲教則本
定價三拾五錢 ● 郵税四錢

● オルガン使用法及修理法
定價二拾五錢 ● 郵税貳錢

東京市神田區南乘物町十二番地(今川橋交番東へ入り左側)

合資會社 東洋社

圖書器械標本
樂器總目錄郵
券四錢にて進呈

電話本局二七二一 ● 電信略號トオヨ ● 振替貯金五一四一

● 森田、阪、鹽井、尾上、諸大家選評

明治才媛文集

自第一集至第十二集各定價廿五錢 ● 郵税四錢
普通文消息文言文一致文に分ちて各種各樣の文題を網羅し

● 大町久保田口諸大家選評

女子習文

無上の一大寶典!!!

● 明治秀才文集 ● 第六集迄既刊
各集卅錢郵税六錢

● 長崎縣高等女學校長溝口鹿次郎先生編
訂正 女學校用 算術教科書
上中下三冊 文部省檢定指示中

● 馬場 尾上 戸川 諸大家選評
明治新體詩集 第一二集既刊
各集廿錢郵税貳錢

● 近藤正一先生著

家政寶典

上下合全一冊 ● 定價七拾錢 ● 郵税八錢

時事新報評 主婦任務の要旨を始めとし婚禮接遇訪問座作進退の作法室內裝飾挿花點茶の心得に至るまで叮嚀に叙述したるものなり、

國民新聞評 禮法儀式、日本室內裝飾、點茶挿花に分ち圖を以て詳說せり特に室內裝飾の章は至極面白く說かれたれは有益なる好參考ならん和裝菊判、

新年の富士



三宅克己先生筆

恭賀新年

株式會社秀英舍

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

會員募集

御自分のお宅に居つて高等學校の全課程を講習なさらうとする本會にはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全な女學講義錄を發行して頒ちます講義の親切丁寧な事は固より新式教授法によつて獨習に最も便なる方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉で僅に都會一ヶ月の學費があれば優に全學期を終はることが出來ます

▲規則書は申込次第送ります

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる册子、
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲每號雜錄四十餘頁を附す
▲會員の質問は直に解答す
▲會員の歌文を誌上に揭ぐ
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

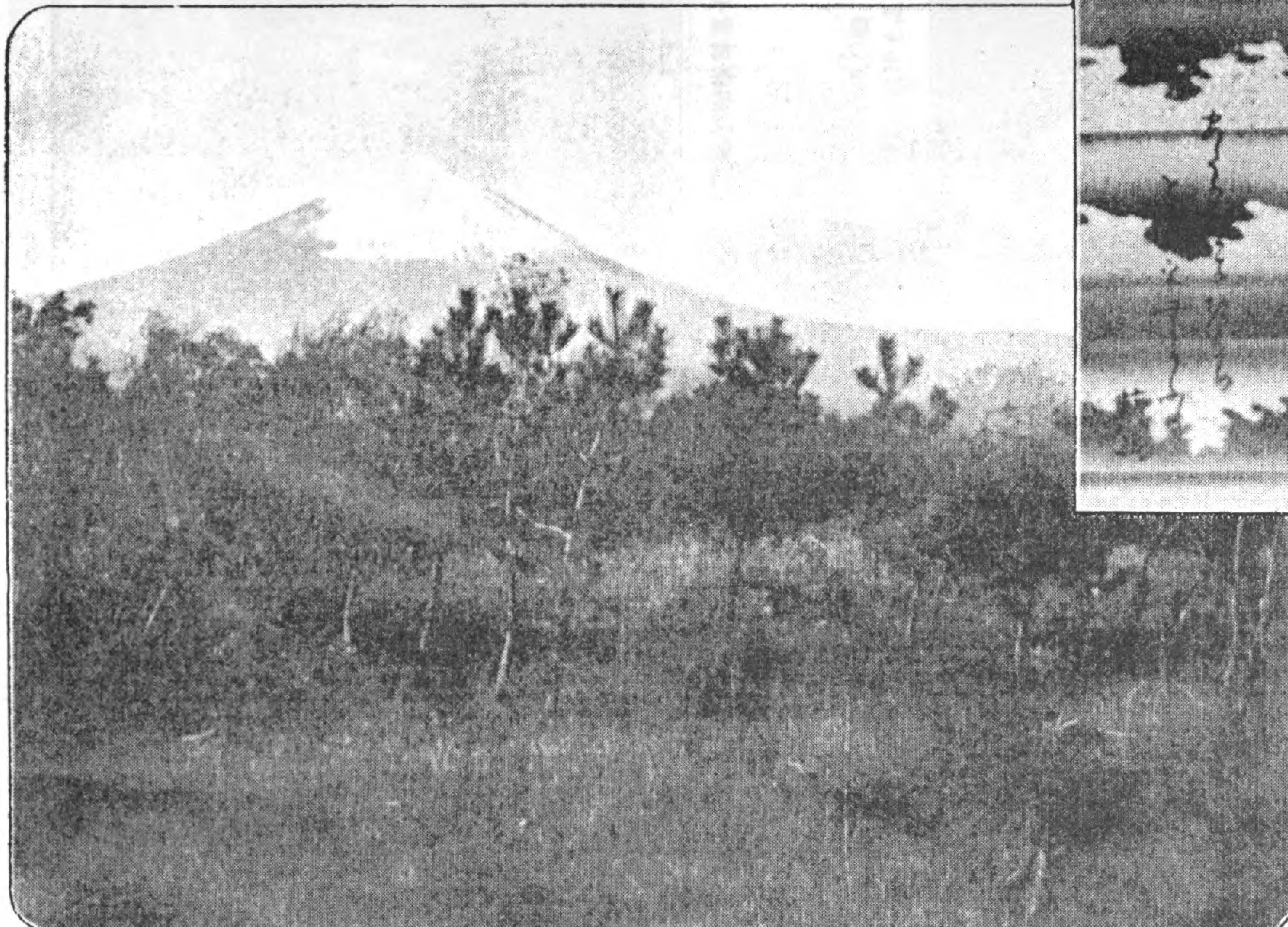
▲報知新聞評　高等女學校の全學科を知名の女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかる可く各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に「姬百合」と題する五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益に趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

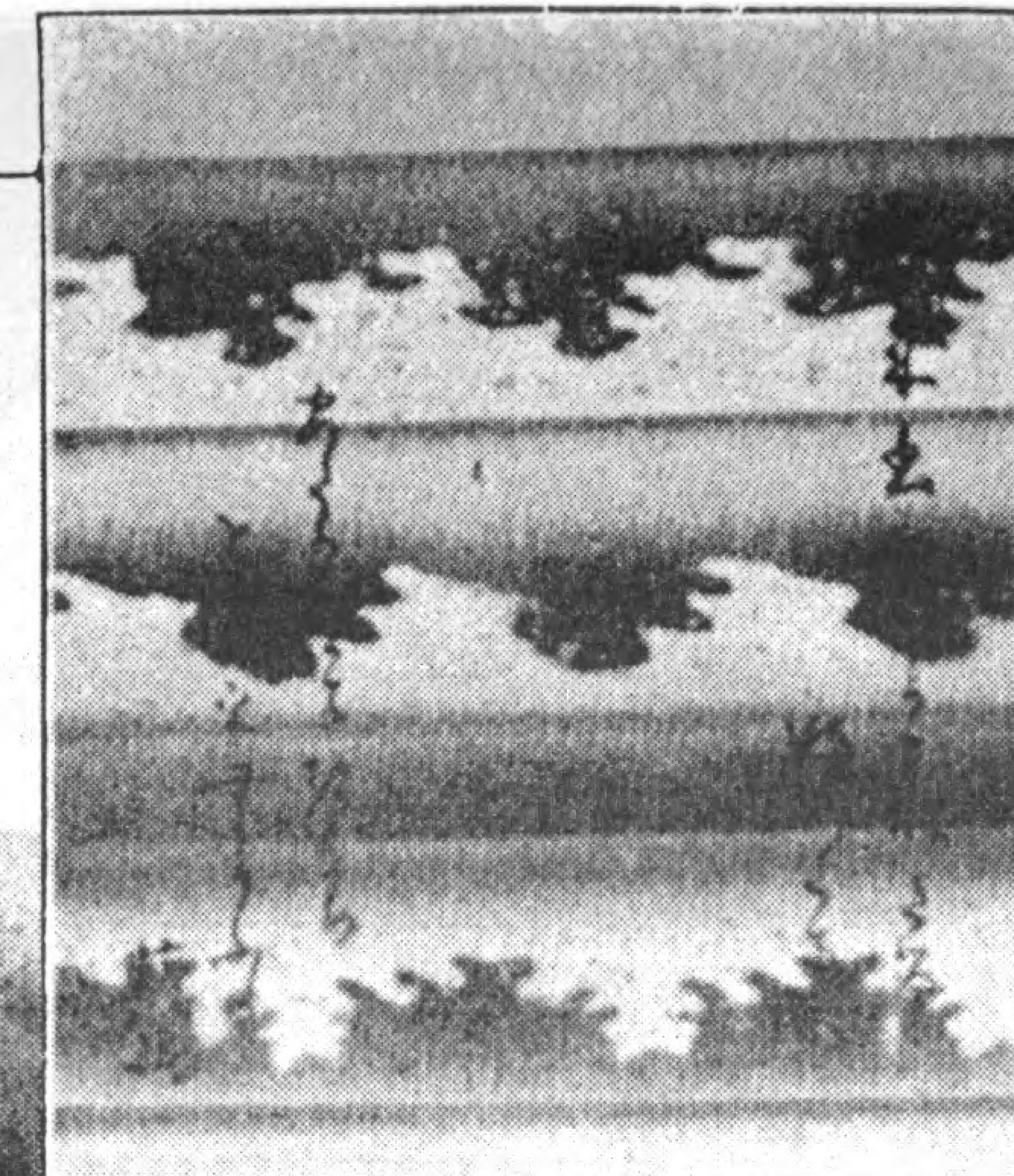
東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

新年松

（勅題）





佐々木信綱
先生謹詠

誌友おもかげ(一)



(羽前)渡邊智惠子



(兵庫)柳田白ゆり子



(山口萩)三好ふき子 須子照子 清水きく子

(青森)角田きゑ子



(名古屋)林田美根子



(誌友諸孃にお寫眞の寄贈を乞ふ)

誌友おもかげ（二）



（青森）萩井とみ子



（土佐）景石女史



（播磨）竹内雪子
中村よしゑ子

（下総）橘川照代子
同　松子



（静岡）深谷岩子
飯田けい子

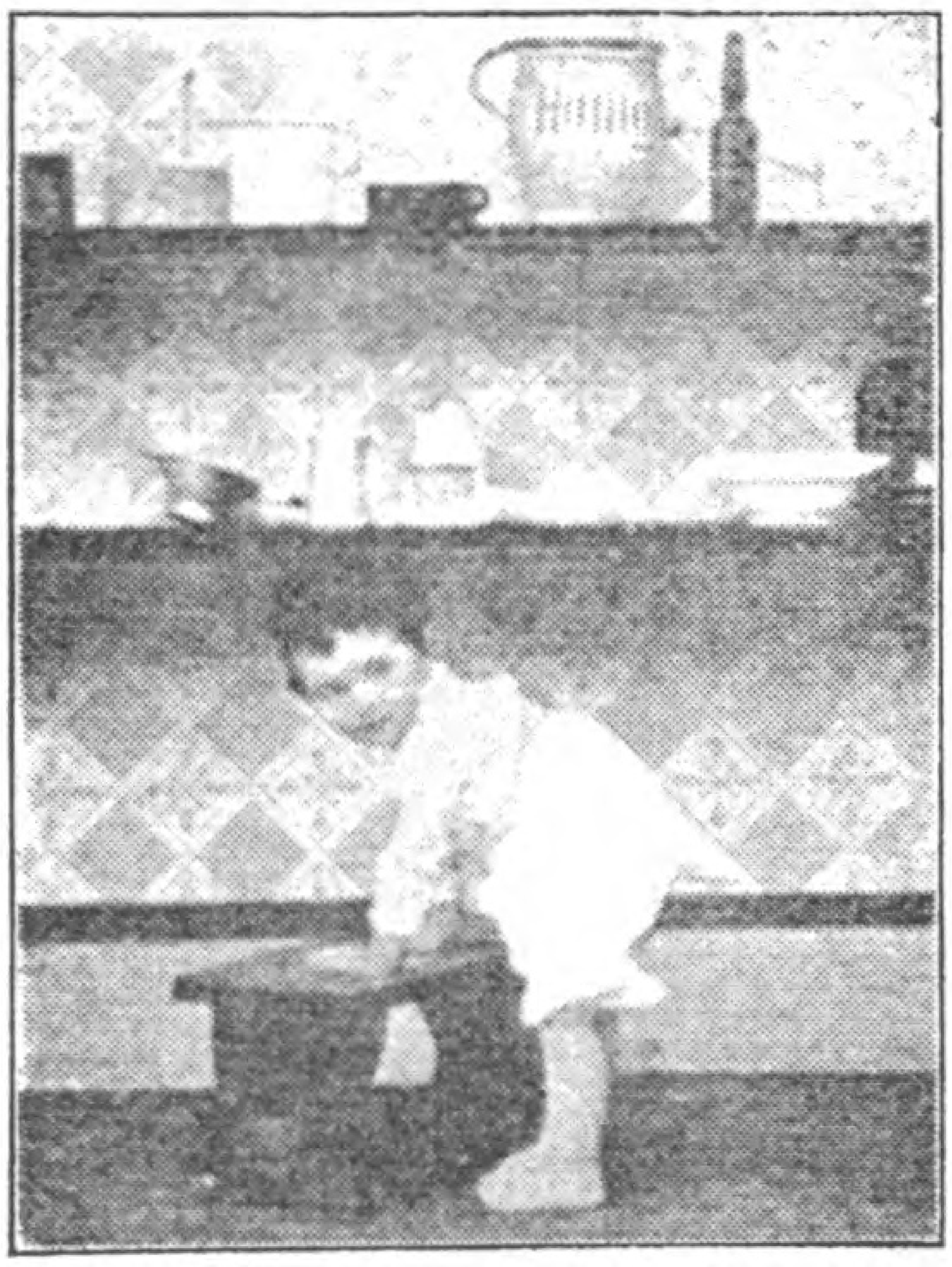


（寫眞は希望により返し致します）

手がとどかぬ



(1) あれがとりたい



(2) かうしないと、とどかないや

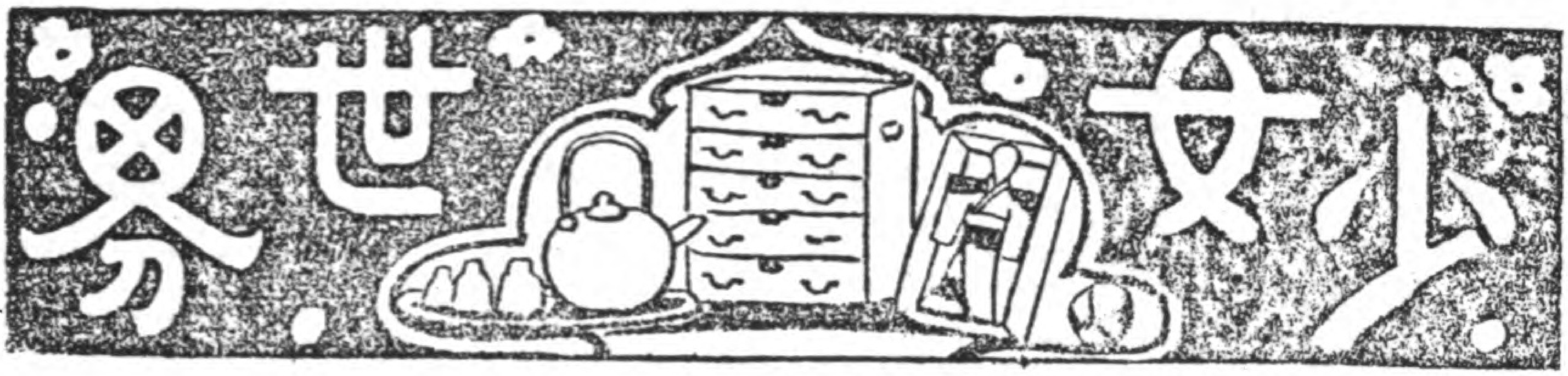


(3) おもさうだ



(4) くだけた

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



本年の新發展

昨年九月呱々の聲を揚げた本誌は、更に本年一月より一大發展を致します、夫は記事を増加し、發行日を繰り上げる事で、從來の行數に對し、一頁に於て六行を殖やして、二十行としますから、全體では十頁以上の増加と同じ割合に成るのです、随て趣味深い有益なる記事も、より多く掲げる事が出來るやうに成りました、且つ發行日も繰り上げて毎月一日としたのです、で先づ第二卷第一號、即ち本年一月發行の本誌の内容は左の通りであります。

◉**お伽話** 卷頭には小波氏が小松小緑と題する得意の作を掲げ、猶當時の小説界に於て、名聲隆々たる、廣津柳浪氏に囑して、最も興味あるお伽話を書て貰ふ事としました、柳浪氏が小説に於ける手腕は世の知るところであります、お伽話は果してどんな面白いものが、出來るでありませうか、其他二三の大家が各々得意の伎倆を揮はれます、諸君樂んでお待ちなさい！

◉**少女訓** には津田梅子女史の有益なるお話を掲げ、

◉**史談、園藝、手藝** の方面に於ては、櫻井中尉の内親王殿下拜謁の記、前田曙山氏の箱むろ、金子紫草氏の和蘭の女王、白井準繩氏の印度の綸詞、また前號より引續いては、白崎女史の造花の話、赤沼女史の裁縫の手ほどき、三木女史の編物等いづれも見落す事は出來ぬもので、其他木村小舟、竹貫直人氏等も例に依つて有益なる記事を寄せられます、又第二號以下からは、少女衞生、料理法なども、時に掲げる事と致します。

◉**少女會館** 開館以來非常の歡迎を受けた本館は本號より一層擴張して各室共、少女諸君の投書を滿載致します。

◎**新年大附録** 新案の小學教科双六といふのを附録とします、尾竹國觀氏の筆に成る、大版極彩色刷であります。

毎月一回一日發行（四十年より）定期増刊年四回
正價一冊拾錢郵稅一錢五厘 ● 前金四冊參拾八錢八冊七拾五錢十六冊壹圓四拾錢外に要郵稅

販賣用電話本局二千六百廿番　東京本町 博文館　振替貯金口座第二百四十番

（丙の二）

第貳拾貳回年度報告

○貸借對照表

借方　負債に屬する分

一 株金	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一 諸積立金	二三三、一八四・九〇〇
一 預り金及保信金	二八八、八五九・七二六
一 支拂手形及未拂金	七九三、五七五・二六〇
一 非常特別税金	一一八、一一五・二〇〇
一 前季繰越金	二一、八〇〇・八五〇
一 當半季利益金	一八三、七一六・九三二
合計	二、三七九、二五二・八六八

貸方　資産に屬する分

一 不動産器械及什器	一、一七二、七一四・八七三
一 需用品及備品在高	三八、〇八七・五六八
一 原料、仕掛物及屑物在高	八〇四、五八七・七二二
一 製品及製品送荷在高	七五、三三二・一六〇
一 約定済製品在高	七五、一九二・一六〇
一 得意先、未收入金及假拂金	一八八、八七三・一一〇
一 職工貸金	一二、五九九・二八〇
一 銀行當座預金及現金	一一、八六六・〇〇五
合計	二、三七九、二五二・八六八

○利益金處分

一 金拾八萬參千七百拾六圓九拾參錢貳厘　當半季利益金

一 金貳萬壹千八百圓八拾五錢也　前季繰越利益金

計金貳拾萬五千五百拾七圓七拾八錢貳厘

内

金五萬圓也　器械及建物代消却

金壹萬圓也　法定準備金

金壹萬圓也　役員賞與金

金六萬圓也（一株に付金三圓即年一割二分）　株主配當金

金五萬圓也（一株に付金貳圓五拾錢即年壹割）　株主特別配當金

金貳萬五千五百拾七圓七拾八錢貳厘　次季へ繰越金

右之通り候也

明治三十九年十二月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛

專務取締役　端善次郎

取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助

監査役　人見新助

監査役　金子良吉

監査役任期滿了に付改選の結果坂本金之助、人見新助金子良吉の三氏再選重任す

毎號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三巻第一號目次

新年大附錄 ○聲と姿（石版極彩色密刷額繪）岡田三郎助先生筆 ○明治文壇出世作一覽

錄（→

明治文壇 出世作一覽

大要

▲出世作、必ずしも傑作にあらず、然れども當時の讀書社會に多少の反響を起し、作者の名を傳ふるに到らしめたる著作は出世作として其名を遺すも亦他日の參考たらずんばあらず▲本表は小說、新體詩、紀行及び評論の一部を擧げ、純文藝に重を置きたれば、學術、敎育、政治等の著書にて文藝と交涉あるものゝ洩れたるが多し▲本表に網羅する處一百篇、行數に制限ありて書目を逸したるも少からず、それらは所謂出世作なるもの、別に存在せずして文壇に名を成せし人々と共に、終りに其人名のみを擧げたり、或は本表編纂者の寡聞にして未だ知悉せざる出世作もあらん、深く作家諸君に謝す▲本表を作るに素より公平を旨としたれど人に好き〳〵あれば見る處を一にせざ

河内屋	廣津柳浪
門の草	小山内八千代
枯野の眞葛	水谷不倒
佳人の奇遇	柴四朗
開國始末	島田三郎
我觀小景	三宅雄次郎
當世書生氣質	坪内逍遙
たけくらべ	樋口一葉
谷間の姫百合	末松謙澄
塔影	河井醉茗
探偵小說	黑岩涙香

黑瞳	上田敏
湖上の美人	鹽井雨江
照日葵	須藤南翠
天地有情	土井晩翠
闇中政治家	原抱一庵
油地獄	齋藤綠雨
最新東京繁昌記	伊藤銀月
歸省	宮崎湖處子
黃菊白菊	大町桂月
巨人石	遲塚麗水
俠客春雨傘	福地櫻痴

[illegible]醒雪、笹川臨風、田岡嶺雲、沼波瓊音、久保天隨、登張竹風、淺野馮虛、戸澤姑射、小山内薰、馬場孤蝶、長谷川天溪、松原二十三階堂、千葉江東、内海月杖、國分靑厓、緒方流水、中内蝶二、内村鑑三、巖本善治、松井柏軒、正宗白鳥、山路愛山、木村鷹太郎、堺枯川、中島孤島、村山鳥逕、薄田斬雲、西村渚山、黑田湖山、山崎紫紅、土肥春曙、杉谷代水、德田秋江、相馬御風、海賀變哲、坪谷水哉、石橋忍月、岡鬼太郎、繁野天來、小栗無絃、靑柳有美、戸川秋骨、平田禿木、前田曙山、上司小劍、濱口白羊、一色醒川、鮫島大浪、伊良子清白、山本露葉、淸水橋村、松原至文、幸德秋水、中谷無涯、内藤鳴雪、佐藤紅綠、高濱虛子、河東碧梧桐、岡野知十、條野採菊、幸堂得知、南新二等其他猶多かるべし

女子文壇

第三巻　第壹號

（明治四十年一月一日發行）



第三巻の始に

我が『女子文壇』が初めて世に出てより年を越ゆること三、冊子を編むこと二十有九冊、其間、號を逐ひて隆々進歩し來れるは愛讀者の熟知せる所、編輯の方法は常に新機軸を出さん事に務め、無名の作家が手に成りし詩文と雖、一字一句の選評を忽にせず、滿紙始の一行より終の一行に至るまで、健實と親切の本意を以て之を編む。將來の發展の如きは時間が與ふる正直なる判斷に任せ、茲に初刷の卷を出すに當り、聊か躰裁を美しくし、內容を善して、文藝を愛好する諸孃の坐右に薦む

明治四十年第一日　記者同人

をんなの歌

與謝野晶子

歌の觀かた……わるい歌に氣を付ける……女の作者……女の歌を作る……みだれ髮……京の三本木……閨秀……男とも女とも思はず……舞姫……夢の花……戀ざめ……白木屋の帯……縁合せ

歌はどう云ふやうに詠むが善いかとお尋ねになると私は困るのですよ。どう申上げて宜しいやら、つまり作者作者が種々の考をもつて居るので御座いますね。先日も大勢集りました時私が

　豹の斑をこそめでにしか
　誰がかきのせし豹の肩

と云ふ有明先生の新體詩の一節は、誠に短歌として絶妙なものだと思ふと申しました時

「これは御存じで御座いませうが豹は虎に似た獸で毛の斑は虎の其れよりも誠に美くしいもので御座います、自分は豹の毛の斑文は好きてあつた美くしいものと思ふて居た、然し其の恐ろしい獸であると云ふことは忘れないて居たにかゝはらず何時の間にやら豹の肩に乘つて居たと申すのです。豹は戀を云ふたので御座いますが、このかきのせしとある修辭も私は非常に面白く感じましたのでした」

さう私が申ますと平野萬里さんが、自分はさうも思はないまだ〳〵それより佳い短歌が澤山あるてはないかとお云ひになりました、さう云ふもので御座いますから古い歌でも佳いと思ふて居るのがめい〳〵異ふのて御座いますね、今の萬里さんがある時、萬葉の中で非常に佳い歌を發見したとお云ひになりますから伺ひますと

　冬ごもり春の大野を燒く人はあきたらずてかわが
　心燒く

と云ふのだとお云ひになりました、私はさう云ふ歌のあることは忘れて居るのでして、一寸お聞しました時は萬里さんのお歌かと思ふた程てした。然し絶對に

變つた考へをもつて居る人は私達の仲間には御座いません、佳いと云ふ歌は決して誰れも惡いとは思ふて居りませんので御座います。私はから思ふので御座います、歌はまだよく解らないが詠て居ると云ふ方が御座いますね、女の方の中には謙遜て云ふてお出でになる方もあるでせうが、これ程世の中に不思議な事は御座いませんでせう、古い歌にもせよ新らしい歌にもせよ善惡が解らぬやうな人は未だ歌を作る天才を發輝さすることの出來ない人か天才の無い人なのですから幾年も幾年もそんな事ならばやめて仕舞ふがいゝでせう、つまらぬ事ですもの外の事を遊ばせば宜しう御座います、また歌をお作りに成らぬ方でよくお解りになる人が御御います、こんな方は自分は作者にならふとは思はないなどお云ひに成らずにどうか作つていただきたいもので御座います、短いものですもの歌と云ふ本來の意義が解れば直ぐに出來るだらふと思ひます、善い歌が先に解るのもよろしいですが惡い歌によく心がつくのもよろしい、私など十三四の頃後撰か拾遺の中の戀の歌で中納言の君とか云ふ女房が雪の日に紅葉の枝とか松の枝とかにつけておくつたとか申す、何とか云ひしものにぞありけるとか云ふ歌を見ましてこんな拙い歌が女の作者の少ない爲に入つたものであらふ、女の仲間として羞しい事と思ひましたのが初めて歌を作る動機になつたので御座います、古い集など讀みます時註釋などをしてある人を決して師などと思ふて讀ではいけません、自分と共に行く先達と位思へばいいでせう、先達がよく遠道をさす事もあるのですからまづ自分で磁石でも見て居て先達の言葉は只しるべにすればよろしい、さうすれば無暗に古歌に盲從したりすることも無くなるでせう、古今の中には糸によるものならなくにと云ふ歌よりも惡い歌は外にあります其の歌が名のある作者であつたからさう云ふ評も殘つたのでせう、新古今の山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯にさびしきと云ふのより外にひどい歌くづも御座います。去年の春頃から私の歌の風が變つたとお云ひになるのですか、一昨年の夏からて

御座いますよ、私はそれまで片時でも自分は女であると云ふ事を忘れた事が無いので御座いました、萬葉に無名の作者が幾人あつたか知りませずまた和泉式部や式子内親王や俊成の女など云ふ天才の人はあつても、まだ女の歌ふ事が澤山殘つて居ることとをしりまして、それをすてるのがいかにも惜く、また女が努力しなければとても歌の上に男と歩むことが出來なからふと思ひますものですから、何でも其時代「一昨年の夏まで」には女の歌を作らふ作らふと思ふて居りました、その頃御一處に作つて居りましたとみ子さんの

　手づくりのいちごよ君にふくませむその口紅の色
　あせぬまで

などを女の歌の純なものと思ふて居りました、都からきた友達に畑のいちごを御馳走いたす、只それだけて御座いますが女の情も觀察もあふるゝやうにあらはれて居るでは御座いませんか

　誰がためにつくる花輪とほほゑみてことさら名を
　ばとひ給ふかな

これも今から見ますと幼いやうでは御座いますが、女の歌としては特色のはつきりとしたものだと思ひました、さうて御座います七年程前のお歌てす、自分の歌て御座いますか、「みだれ髪」がその頃の歌で御座います然しまだととなふたものては御座いませんてした、そして「毒草」に集めましたのが女として歌を詠みました最終なので御座います

　友染の袖十あまりまろうより千鳥きく夜を雪ふり
　いてぬ

京の三本木と申しますのは加茂川の上の方の町で家は皆水にのぞむで建てられて御座います、北の方には荒神口からただすの森が見えます、眞東は大文字山にあたるのてせう、よほどもう北で御座いますから晝ても千鳥が美くしう飛びかふて居ります、名高い宿屋料理屋てはいばらき、しがらきなどが御座います、これもさう云ふ家の川ざしきへ、人に連れられて祇園の舞子が五六人千鳥をきゝに來て居るので御座います圓うよつて火桶をかこんで居ります。この歌などはやゝ今

目のかたぶきに近いものですね、また

なほ戀ふとやのろひの弓のつるにながき琴の緒だきてまどへるのみぞ

と云ふやうな前の時代の最終を代表したやうなものも御座います、御らん遊はせここに

野を思ひ牧場をおもひやはらかき羊に似たる眼おもふとありね

と云ふのが御座いませう、をかしいので御座いますよ、この歌初めはね、羊に似たる手おもふとありね、とあつたので御座います、宅が眼となほしてくれましたのですが、自分はその時何だか不平だつたのですね、變な顔をして居りますと宅が、白い毛のむじやむじやはへてるやうな手の戀人はをかしいてはないかと申しましたので私も思はずふき出しましたのでした、社へお出でになる若いお方などによくお話して笑ひますのですがそのたびに何だか私の手首を見られるやうて羞しう御座います。話が前にかへりますがその後は私はもう人様並に男の中へ出てもよい閲歴が出來たかも知れないと存じまして、一昨年の夏ごろからは自分を男とも女とも少しも思はずに歌を作つて居るので御座います、それからは女の歌を作る時にもひろびろとしたことが歌へるやうな心持がいたします、「毒草」には

紅梅の花櫛姿いつきえて二尺にたらぬ袖御目なれし

などと申して自分なるものがどうしてもはなれる事の出來なかつた歌も御座いましたが、これて御座いますか、これは戀人の目が自分をこの家に初めて見た頃の、紅梅や櫻の花櫛して二尺五寸の袖は紫かそら色かはてなる姿が、いつのまにか一尺七寸もない双子のぬのこをきてもあやしまぬやうに成たとまあぐちを申したのですね、おなじ袖の歌て御座いますが舞姬には

元日や長安に似る大道に遣羽子したる袖とらへけり

と云ふのが御座います、大變なちがひて御座いませう、これは戀などと別に云ふのではないので御座います、只都の春を歌ひましたので、市井の艶女町むすめ

と若い男がたはぶれて居るので御座います。舞姫の初めの歌ですか、別にいゝとも思ふて居るのではないのです、何日やら皆樣と御一處に夜通して歌詠ました時蓮步と云ふ字が當りましたのですが、蓮步こなたへ君をいざなへなどいたしましてもおもしろく行きませんとう〳〵かう云ふのに成りましたのです、これも前期を終つた後の歌ですから男の歌で御座います、今作者の夢に逢た人のどれ程美くしい優しい人であるかを思はすのには蓮步と云ふ字が誠によくきくやうに思ひましたのでした、蓮步と云ふ耳にうつたへる言葉の後ですから雨とのみ云ひまして音とは云はなかつたのですが今の夢と調和した音が聞えてあるつもりで御座います。夢の花の初めの歌がお解りにくう御座いますか、さうて御座いましたか、

　恐ろしき戀ざめ心何を見るわが目とらへむひとやはなきや

人の一代のうちて戀して居る時の心ほど良い心で居る時はなからうと思ひますが、さあその戀が今覺めかかつて來たと自覺したのですね、昨日まてこの君の何も何もが美くしう見えた眼が今日は一つ一つ殘酷に批判しつくさうとする、あゝ誰れかこの眼をとらへて囚獄のくらがりへつないてくれぬてあらふか、さすれば自分も人すつると云ふ惡はをかさずすむてあらふにと申すのです、やはり男で御座いますね、自分の心にかなはない歌も御座いますとも。

　京の晝に朱砂して押しぬ嵐山あし手ほどよく歌かき給へ

このほどよくと云ふ字がきになりましてしかたが御座いません、人樣のお歌てもきになつて仕方の無い句も御座います、高村さんの帶は白木の伊達むすびと云ひますのをどうしても白木と云結びやうがあるやうて氣になつてしやうがなかつたのでしたが、ある時夢で白木の帶の伊達むすびとしたらいかゞでせう白木屋で製つた帶とさうきこえないてせうかと申して居ました高村さんですか只今は米國へお出てに成つて居りますお上手でお出てになることは申すまでも御座いません

がこの方は私と一處で苦心しておなほしになるらしふ御座います、宅や平野さんは原稿紙へすぐきれいに書くと云ふやうな詠口なので御座います、女の方でもとみ子さんはその方です、七年前初めて御目にかゝつた席上で扇と云ふ歌を詠むことになりましたが、ものゝ三四分ばかりで

人前を顔にあてたる舞扇うらなる歌をおもふひまなく

とお詠みて御座いました、私などは三十分もしましてから

白檀のけぶりこなたへたえずあふるにくき扇をうばひぬるかな

と云ふのがやうやう出來ましたのでした、その時の會は誠に面白う御座いました、然しそれはまだ女の作者の出初めてしたから花をもたして下さつたのでせう宅は只今あちらへ參つて居りますもう四五日すれば歸つて參ります、まちがつたお話などしてしかられることて御座いませう、またお出て遊ばして下さい今日は國なまりておこまりて御座いましたでせう御免あそばせ。

女學生とは何ぞ

所謂煩悶(若き不平)は一の學科なり

羽仁もと子

男子でも女子でも年若きものには、兎角不滿足の多いものて、殊に學校に通つては、教師の監督をうけ、家庭にあつては兩親の命令に從ひ、周圍の長上からも、時に干渉をうけるといふやうな時代には種々の窮屈を感じ、若しも長上の監督にして、稍嚴重に過ぎるやうな場合には、その仕打に對して、實際不平と云ふ樣な感情を持つもので御座います。子を持つて知る親の恩と云ふやうな言葉もある程で、その時代が過ぎ去つてから考へて見ますと、兩親は云ふまでもなく、先生でもその外の長上でも、自分のためを思つてくださらぬ

なら、人の嫌がる小言の云はれるものではないものを、ナゼあの頃はア丶も得手勝手な感情を持つてゐたのであらうと、思ひ出して恥かしくなるやうなことも澤山にあるのでありますが、兎にも角にもその時代には、眞面目に種々の不滿足を感ずるもので、その不滿足の目を以て周圍の社會を見るといふとさなきだに缺陷の多い社會は、愈々益々不足に見えて、厭世的に傾くやうなことも澤山あります。私共はこの塲合にどういふ風に身を處するのが、最も賢こい方法でありませうか、御參考までに大略を申し上げて見たいと思ひます。

世上の人は多く一概に年若き男女の抱く不平不滿を、大いなる危險物のやうに、また非常なる罪惡のやうに感じて、之を抑へよう抑へようといふ方にのみ考へ過ぎてゐるやうで、偶々は年若き男女、殊に女子の中には、この不平不滿のあるといふことを、一概に婦德の恥と心得て、自分の心に合點の行かぬ事にても、唯その儘に從つて行くのがよいのだとしてゐるやうな向もありますけれど、よく考へて見ますといふと不平不滿は智惠と經驗の猶淺く、すべての理解の徹底せざる所より來るもので疑問の母で御座います。人にして不平不滿を感ずることがなかつたならば、人の世に進歩といふものがなくなります。私共は不平不滿に苦しめられて、自ら種々なる考慮と硏究に入り、昨日までは知ることの出來なかつたことを、今日は自ら了解し、昨日までの不滿は何々の思ひ違ひ、即ちその種の智惠の足らざりし結果であつたと知れて來ると、實にまた新たな不平に思ひ到ります。その不平も前の如くにして解釋されると、また次々といふのみでなく、一時に幾つもの不平の込み合ふこともあり、また前々からの不平のいつまでも解釋されずに殘つてゐるものもあるといふやうなことゝて、兎にも角にもその中から種々の敎訓を見出して行くのです。これあるがために私共が日々に進歩し新たになるのでありますゆゑ、靑年男女は殊に最も疑問に富まねばならぬものであります。從て不滿のあるのは、むしろ必要によつて天より授かるものであらうと思ひます、この故に私は年若き男子にも

婦人にも、不滿のあることを當然であると思ふもので御座います。

それゆゑ私は私共の不平不滿を抑壓するといふ側には立たず、どうしたならば我々の不平不滿を、最もよく役に立てることが出來るかといふこと、即ち如何に不平に處すべき乎といふ事を考ねばならぬと思ふので御座います。そして學生といふ言を解釋するは、やがてこの事を解釋することになると思ひましたのが、即ちこの女學生とは何ぞといふ見出しを撰びました譯で御座います。

普通學生と云ひますと、學校に通ふ方々ばかりを指してゐるのでありますけれど、大なる意味より云へば、すべての人間は學生であり、人間の年齡の上より特に學生と稱すべき時代を撰びますならば、それは云迄もなく青年時代でなければなりません。學生の職分は學ぶ事であります力に合はして容易い學科を修めてゐるのは、餘り益にならないやうに、人生の學生時代にも、不平不滿の少い境遇は却てためになりません。皆樣が若しも不平の多い境遇に居られますならば、むしろ感謝すべきことであります。眞面目に正直にその不平を自分に與へられた學科であるとして、夫に當つて種々の研究を積まねばなりません。自分は學ぶものである不平不滿は學科であると考へてゐるといふことは、不滿に處するまづ第一の要訣で、次に自分の課業となるべき不滿は、出來るだけ自分自身の正しき側に立てる不滿でなければならぬこと。即ち朝寢をして小言を云はれた場合に、小言の云ひ方がひどいと云ふて不平に思ふと云ふ風の不滿は、それこそあつては不名譽な不平であるので、全く就て考慮すべき價値のないものであります。次は厭世に陷るのは學校の學生に例へると自分の學力が不充分で、その課業に堪へられず、試驗に落第したと同樣のものであるといふ事。その次には不平不滿の解釋が、殘らず自分に出來るものだと云ふやうに思ふとの間違ひであること。何ぜなれば、千古の人智を盡くしても猶かつ解釋の出來ない疑問は人の世には數限りなくあるのであつて、それがまた一方より

云ふならば、人世のなほ進歩すべき餘地の多きこと、人世の幸福は未來に於て、益々增進すべき希望を示してゐる所以でありますゆゑ、まだ年若き一人の人が、自分の身邊の事柄を悉く解釋し得るといふことのあり得べからざることは、云ふまでもなきことです。最後に記憶すべきことは人の世の事柄は單に智識のみを以て解釋されべきものでなく、智識の上に、更に人情と熟練とを加へて、初めて解釋され得べきものが澤山であるのでありますから、智識の一點に於ては自分に如かざる先輩でも、人情と熟練との功によりて、自分よりは事に當つて正しき意見を出すことの出來る塲合が澤山にありますゆゑ、自分の方が智識の增つてゐるといふ一點を以て直ちに先輩の所説を輕ずることは大いなる誤りであると云ふことです。怱卒の際とかく委曲を盡しかねましたけれど、大體の考を申し上げましたなら、皆樣にはその先きの應用は、いづれも充分にお出來になることゝ信じます。

夜店

楠緒子

買物に行く道すがら夜店の前を見るともなく見て通れば、何もをぐらき洋燈の元にさま〴〵の品をぞならべたる、まづ唐物やの前に一坪ばかりの地に敷物をしきて、古き書物古き雜誌ひき散して擇り取り三錢とあるあり、幾多の人が幾多の腦力をや費して書き集けんと思はるゝものは、今此處に反古の値に賣らるゝなり、然も群がりて手に取りて見る者は多けれど買ふは少なかるべし、五十ばかりの婆がうづくまれる其隣を見れば、破れて、はき捨てたる足袋を再び糸につゞくりて賣るなり、紺たび白たびなか〳〵に是は古書物の末路よりも車夫共によろこばるべしと思ふ、母と覺しき女と十二ばかりの男の兒として今川燒を賣る、父は何處に何の稼をや爲る、燒鍋に饂飩をつぎ餡を入れ、じゆく〳〵と音するを見つゝ睦じく二人は語る。

と見れば、おでん燗酒が寺の門脇に荷を据ゑたり、醤油の煮つめらるゝうまき香に誘ひよせられけん、半纏きたる男の屋臺に首をつゝ込みて立ちて喰へど、賣る者の姿も見えず喰ふ男の顏も見えず、その前に、さんぎ、を畫きたる白き幕を引き廻らして、何者の陣取るとも知らずひつそりと靜まりたる店あり、中には若き男や居る髭ながき爺や在る、それぞ身の上吉凶禍福の判斷、あたるもあたらぬも道ゆく人の出來心、ふとうらなはれて行くも多かるべし。

簀の子のうへに饅頭をならべ側には蒸籠も据ゑて、ふかし立て〳〵と呼ぶ店のとなりに繪を賣る男あり、繪といふに興じて少し近う寄りてさしのぞけば、景文の山水、文晁の花鳥、光琳の六歌仙、應擧の文珠、菱川師宣の浮世畫のさても古めかしう、よくも斯く取りつくろひたる事よ、光琳の六歌仙といふ中の業平の顏、黒主の面のおどけたるはいはずもあれ、喜撰の目つき口つき過ぎし日、某の會の餘興に百面相したる男にその儘に似たりと思ふこそをかしけれ、饅頭蒸す湯氣たつ隣に夜風に吹れて曝さるゝ光琳や應擧や、もし魂あらば泣くらんか笑ふらんか、眞面目がほして賣る男は、小町の袖をゆびさして、これ此彩色を見ませ、光琳ならでは斯うはと言ふ、げにも光琳ならではさうはと思ふらしき二重外套着たる男の煙草吸ひながら、買ひたげに前に立ち一つ眺めて立てり、人はその繪と賣る男の顏と買はんとする男の顏とを見比べて群れり、われもその内の一人にて、あの男の儘にあの繪を買ふらんか、買はゞいくらに買ふらん、いくらに賣るらんと、物好きに猶も見てゐたけれど、買物のおそくなればと心急ぎてゆきすぎぬ、あとは如何になりけん。

三つの道

小山内　八千代

同じき望ありて家を出でたる三人の若者は、道にて

其一人の草鞋の紐引き切つて躊躇へるを、心急くまゝ後に殘して、とある原とも覺しき處に掛りしが、日は早や暮れて行くべき方も定かならねば、心ならずも其儘に草枕ひき結びて、明けなば急がむことを誓ひ臥しぬ。

夜は明けつ。

深くも眠れる二人の若者は、冷たき風に驚かされて其目を開きぬ。日は麗に空は長閑く、鳥も歌ふ初春の朝なり。

二人は等しくうゝ──とばかり欠伸して立ち上る行手に、思ひも掛けず望の花のいと麗しくも咲けるを見たりき。さはれ、そはいと嚴しき塀の長う連る彼方に、遙けく高う咲けるなりけり。二人は暫時うち案じたる兎角の末、甲なるは其塀を攀ぢて夫を得むと言ひ、乙なるは尋常に其塀を廻りて入るべき門を見出でむこと我が主意なれと、やがて二人は思ふが儘なる二ツの道を擇みぬ。

折しも來掛りし後れたる若者は、二樣の道をさへ早や先んぜられて、是非なくも只一つ殘れる道を、乙とは反對なる右手の方に其塀を廻り始めぬ。

塀の周圍三里、其道いと〱險しけれども、今にも其門の目に入らむ事を望みて、乙なるは只管に其歩を運べど、なか〱に望めるものゝ、影も差さず、やうやく足は疲れて息苦しうさへなりゆきぬ。

心安げに足踏みかけし甲なる若者は、見るよりはいと難しきに轉び落ちたるも三度四度、手も足も數多傷きて、汗は背に濕ひ流れぬ。

右手を取りたる丙なる若者は、一人後れしさへ淺間しきに、望にもならぬ道を取る事よと、うち萎れつゝ歩む程に、草は青みて美しく、風は香りて暖かく、自ら心浮きたつ春景色に、我にもあらず頭垂れし顏を上ぐれば、夢かや目前にサとばかり廣き門の開かれて、覗けば門内幾何もあらず、望の花の錦黃金、眩くばかり亂れ咲きたるかな。見よ〱若者の顏は燿きて、嬉しやと門を潛れば、小笹熊笹蔦蔓這ひ纒りて、其邊いたくも荒れに荒れたれど、花の許に通ふ道のみは細き乍

らも明らかに開かれて、何かはしらず甘き香の彼が面を打つよ。そゞろになりて走け寄れば、風か何か枝は自ら撓になりて、若者か腕近く靡き來つ、ありがたき情の紀念といと高き梢の一枝のみは其處に殘して、餘はこと〴〵く荷ひ出づれば、怪しや門の扉は我から後に閉ぢられて、花の色香も通はずなりぬ。

五時の後、疲れたる足を引きて辿り着きたる乙の若者は、萎えたる腕にやう〳〵扉を開きて走け入れば、既に梢に彼の一枝さへ、今しも塀の上に跨がりし甲なる若者に奪はれて、名殘は僅かに散りし花片、香も無う土に亂るゝなりき。

日は麗に空は長閑く、鳥も歌ふ初春の晝なり。

先づ品性を作れ

（親を泣しむる敎育）

伊藤詮子

敎育が親を泣かしむるとは何たることぞと驚きたまふもあるべし、されど實際に於て今日の女子教育には、不幸にしてこの悲しむべき結果を見るは、慨きても尚餘りあることとなり、現に學校に在りて只管學問の研究に餘念なき方々は、今日の敎育の結果が如何なる影響を自己の心性上に及ぼすべきかは深く顧みるの暇なく、只如何にせば巧みに英語を語らるべきか、如何にせば美くしく英文を書かるべきか、如何にせば歴史、地理、理科、數學の諸問題に誤りなき答案を出し得べきかを苦心したまふならん、さればこそ學生時代はその苦心研究すべき科目の多きにも拘はらず樂しき時代として永く此時代の繼續せんことを希はるゝなれ、然れども若し一朝にして此時代の經過したる後、靜かに過去を顧りみ自から人間として又女子として何程を德の養ひたるかを思ひ玉はゞ、小學と高等女學とを通じて十一年間に得たる知識の極めて淺薄に又極めて雜駁なるのみにて何等の得たるもののなきを知り玉はん。

是餘りに敎育を侮蔑したる所見なるが如しと雖ども、實際に於て今日の敎育は餘りに廣きに失し、何物をも只その表面を知るに過ぎざる小智の人間を造るのみにて、人間に最も必要なる品性の修養に重きを置かざるが故に、其養ひ得たる人物は概ね輕佻浮薄に流れて少

しも德操なく、殊に女子にありては貞淑溫順の德全く缺けて、高等敎育を受けしめたる結果父母は却つて淚の種子を養ひたるに過ぎざる不幸を見るなり。

茲に一例を擧ぐれば我が知れる方に一女子あり、餘り好ましからざる成績を以て一昨年の春高等女學校を卒業し、己れは尙進んで女子大學にも入らんの望ありしが、父は女子に左迄の敎育は不必要なりとて許さず、人の勸むるが儘にさる小學校の敎師に傭はれ、若干の給料を得てそを悉く己れの意のまゝに用ふることを許されたれば、始めの內こそ少しく興味を感じ怠りなく出勤し居りしも、日を經るに從つて敎授ぶりの漸く會得せらるゝに至れば、性來の自負心は他の先輩の下に下るを屑しとせず、動もすれば休憩室內に於て他の敎師等と意見を鬪かはすことあり、敎授上に關して硏究せんとの志より出たる論議ならんには、一日を論戰に費やすも不可にはあらねど、素よりさる目的ありての意見にはあらず、只何事にまれ他と意見を異にしたる場合に飽くまで我意を通さんとの强情より起りたることにて、女子に尊ぶべき柔順の德、柔よく剛を制すと云ふなる勝利の第一策を知らざるこそ氣の毒なれ、斯る心を以ていかてか兒女を敎ふるの、煩はしさに堪へ得らるべき、一年ならずして終に敎師の職をも辭して家に歸り、日々オルガンを伴として調子の亂れたる怪しき唱歌に近きあたりの家を苦しめしが、斯くて何時迄もあるべきにあらず、自からは亞米利加へ渡りて今少しく硏究し來らんなど恐ろしき大望を父母の前に述べ立つれど、父母は頑として聞かず、夫なくて一生を送るが如き不具者を造らんが爲めに假令三百圓の旅費のみなりとて與ふべきにあらずと全く其耳を蔽ひたれば今は詮方なく、父母の舊思想は到底度し難し我は只我心のまゝに行ふの道あるのみと、終に籬を破りて一男子に近づき、恣いまゝに契りを結びて婚成るの後は共に米國に渡らんと約し、後更に人を以て男の方より我が父母の前に公やけなる婚儀を申入れさせしも、事の成立を聞知りたる父は一層固く執つて許さず、若し强てさる不心得を遂げんと思はゞ親子の緣を斷りて後思ふがまゝにふるまへと叱すれば、それこそ幸ひなれ其お言葉ある上は最早我心のまゝなりとて聊さか悲しとも耻かしとも思はぬさまなるに、父も母も開きたる口の塞がらぬ迄に打呆れ、投げたる棒の反ね返りて我身を打ちたる如くに感じ、最早何事を云ふとも甲斐なし只これ無益なる高等敎育を與へたる災禍と諦らめて

齎のまゝに任せたまへと涙乍らの母の言葉に、父も今更に教育の無益、むしろ有害なるを悟り、子々孫々迄女子には無用の學問をなさしめじとて、その女の計策の通り結婚の申込みに許諾を與へたりき。その姉二人は小學を卒りたるばかりにて父母の云ふがまゝに嫁ぎ今は一人二人の兒女の母として立派に人間の役目を果し居るに、妹が斯る有樣なるを見て自分達が意氣地なかりしことを父母の前に語り合へど、幸福は決して我儘なる意思の上にやどらず、後に至りて妹の姉を羨やみ自からの過ちを悔ゆる時あらん、地理歴史を學びて古今東西の事物に通じても、一身の幸福を招ぐべき道を明らめざれば、斯くの如く一度は親を泣かせ一度は自からも泣くべき時を免かれず、こは最も極端なる例なれど世間之に似寄りたる例しは決して少なからじ、今の若き方々は皆進んで高等の教育を受け若くは受けんとし玉ふなれば、斯る忌むべき弊に陷り玉はぬやう何事を學びたまふにも先づ智慧よりも德操を養ふことに心を用ひ玉ふべし。

斯く固苦しき修身めきたる談を文藝を學び玉ふ方々の前に說かんとするは、熱帶地方に行きて暖爐の話をなすが如き感あれど、文藝を好みたまふ心はやがて趣味を求め玉ふ心なり、趣味を求めたまふ心はやがて靜淑なる德にあこがれたまふ心なり、されば戀物語にあらぬ修身談を女子文壇の讀者の前に試むるもあながち冷やかなる朝の卓子に氷を盛るの比ひにはあらじ、學問は物の道理を知らしめんとの目的なるに、今の女子教育の結果は、世界の有樣をも知りて萬里を距てたる亞米利加に一人旅するをも恐れざる程の女丈夫をば養ひ得て、所謂良妻賢母となりて嚴父慈母の老を慰さむべき淑女を養ひ得ず、この弊を矯めんの道は唯一つ、純潔にして清新なる文藝の思想を今の若き方々の間に鼓吹するの外なしと信ずるがまゝに、この奇怪なる一篇を女子文壇の讀者の前に呈するになん。

▲應募書に就て

懸賞法に新案を行ふ事になつて初めての發表であるから、久しぶりの一言を應募者の方へ參らせたい、過去の進境の著しかつた跡を顧へつて見ますと、多大の感謝を共蓄に拂ふのと共に現在よりも更に味ひとか趣とかが強度にそして筆つきや模樣は幼いものであつた、この時がやゝ全盛期ではあるまいかの感に打れます。今それを皆さんの隔ないお耳に語る事を許して頂きたい。一例ではありますが、第二卷の初めの方で「お掃除」、あれは皆さんの日々朝々、あの通りの實況が繰返されつゝあつて、それが千篇一律の弊に落ずに、よく情を込て書きなされて居るではありませぬか。これに次いて「暖き日」、それから近くては「おくるま」、いづれも技量も立勝つては居ますが、趣も味ひもよく備はつて、我々にいろいろな日頃の記憶を呼び起させる力があるてはありませぬか、マアそればかりでなく、無意味のよふても、外にこれに劣らないものは多くありました、それは地位の定めてある通りて、無論離するのてはないが、よいからと云て技量や何かて服さしめた計りてなく、思はずにホヽ笑んて諾かしめる、そう云ふものを蓄て見ますのはなか／＼に樂しい事てはありませぬか。（古洞生）

東京だより

▲新年を欣ぶのは人爲的の意味で大自然には何の變りもないけれど、人間に歴史のある以上は、一年一年と區別して歩調を正しくせねばならぬ人事の凡てを正しくすると云ふのが新年の意味で、正しくすると共に若返ると云ふのも面白い辭である、今は何人も若返らなければならぬ時代て、若い者の勢力で理想を實際に行ふてゆかねばならぬ▲古來我國の女子は社會の表面に立たなかつたから餘り表立つた影響は無つたけれど、此一二年以來、兎角女子が問題になると云ふのも有らゆる方面に於て女子が社會の表に立たうとするからで問題の多いのは少しも關はぬ、才能ある女子は表立つて社會に出よ▲近頃女子のショールは細く長いのが流行する▲新聞の初刷は廣告が多く雜誌の初刷は繪が多く、初寳は勇ましく初湯は寒く、初夢は珍しくもない▲繪葉書の流行時代は去つたけれど眞に繪葉書を愛好する人は永遠に無くなるまい▲歌かるたも年々上手の人は極つて了ひ、いつもむべ山風では陳腐の感がある▲『家族合せ』と稱するもの非常の勢ひで流行したが本年は同じ出版協會から『國旗合せ』と云ふのが出た遊戯の方法も新式で且分り易く體裁も美くしいので暮の内から方々で試つて居る但し此『國旗合せ』には僞物があるから注意して本元のをお求めなさい▲御題に因んだ菓子を若し古くからあるものゝ内て求めたなら京都の名物松風であらう▲日本全國の名産を集めた大勸工場の一つ位は東京に有つて宜い、五二會などが爾爲るであらう▲昨年は戰後の疲勞で何の新聞も格別發展しなかつたが今年は活動があるらしい

姫小松

昔の人は住吉の
三社の神によき歌を
作れるやうにと額づきて
夢の中にも願ぎかけた

津守少女が八少女の
一人の中に選まれて
里神樂舞ふ日はあれど
歌の上手はあらはれず

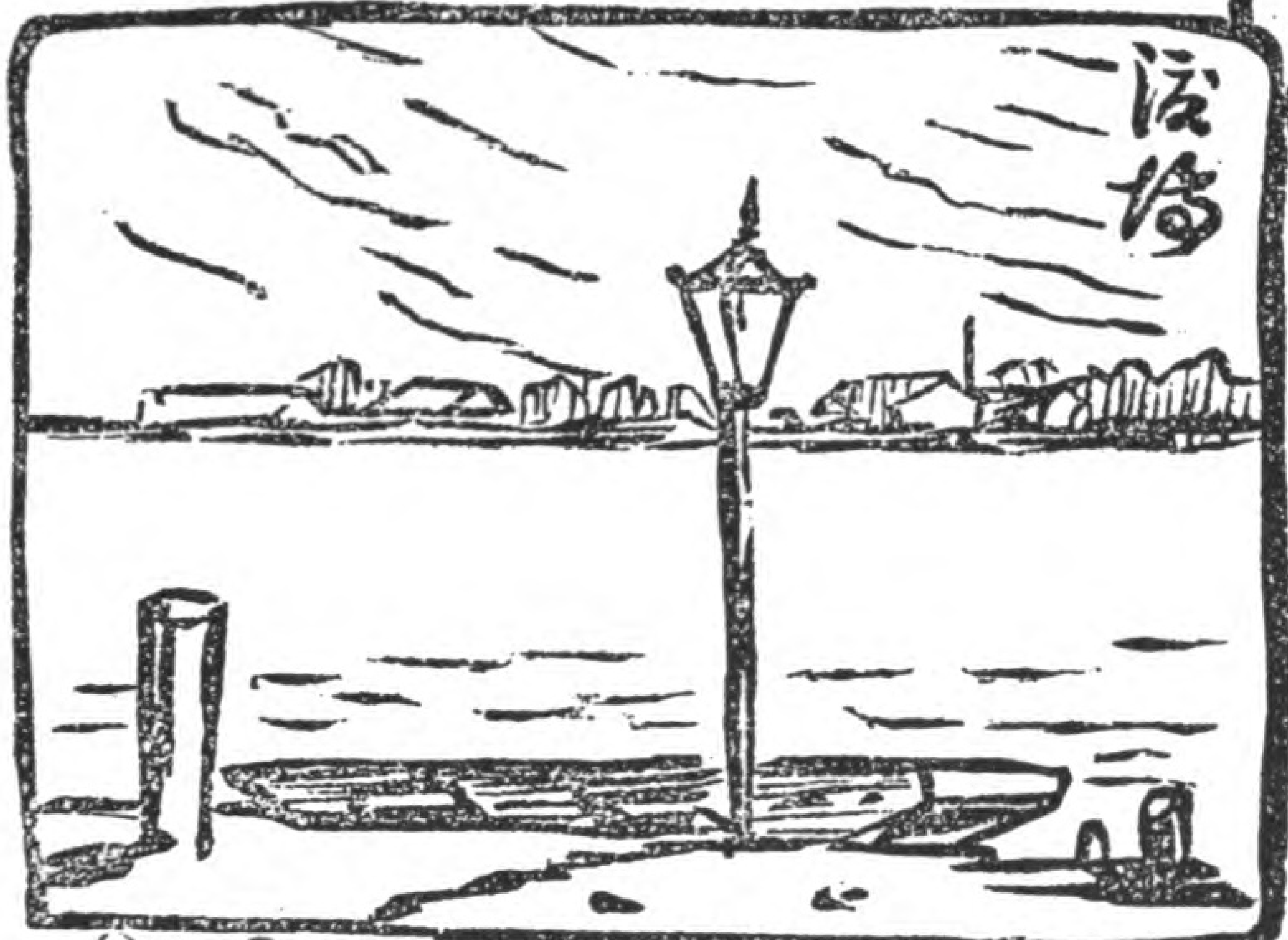
神の力に頼まずも
自然に生る姫小松
歌ごゝろある才人の
皆あらはれる世となつた

記者

懸賞當選圖畫（一）

（山中古洞先生選）







○雨（二等）
麴町區土手三番町二前田　民子

○渡場（三等）
小樽區内町六一岩谷　綠子

○はり物（四等）
本郷區湯島天神町一丁目九七
山本とし子







○お洗濯（五等）
府下南多摩郡恩方村中島縫子

○娘義太夫（同）
本所區相生町一の九江原とり子

○しらべ（同）
芝區三田四國町二番地一號
日吉方
大島さよ子

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

○忘れ物

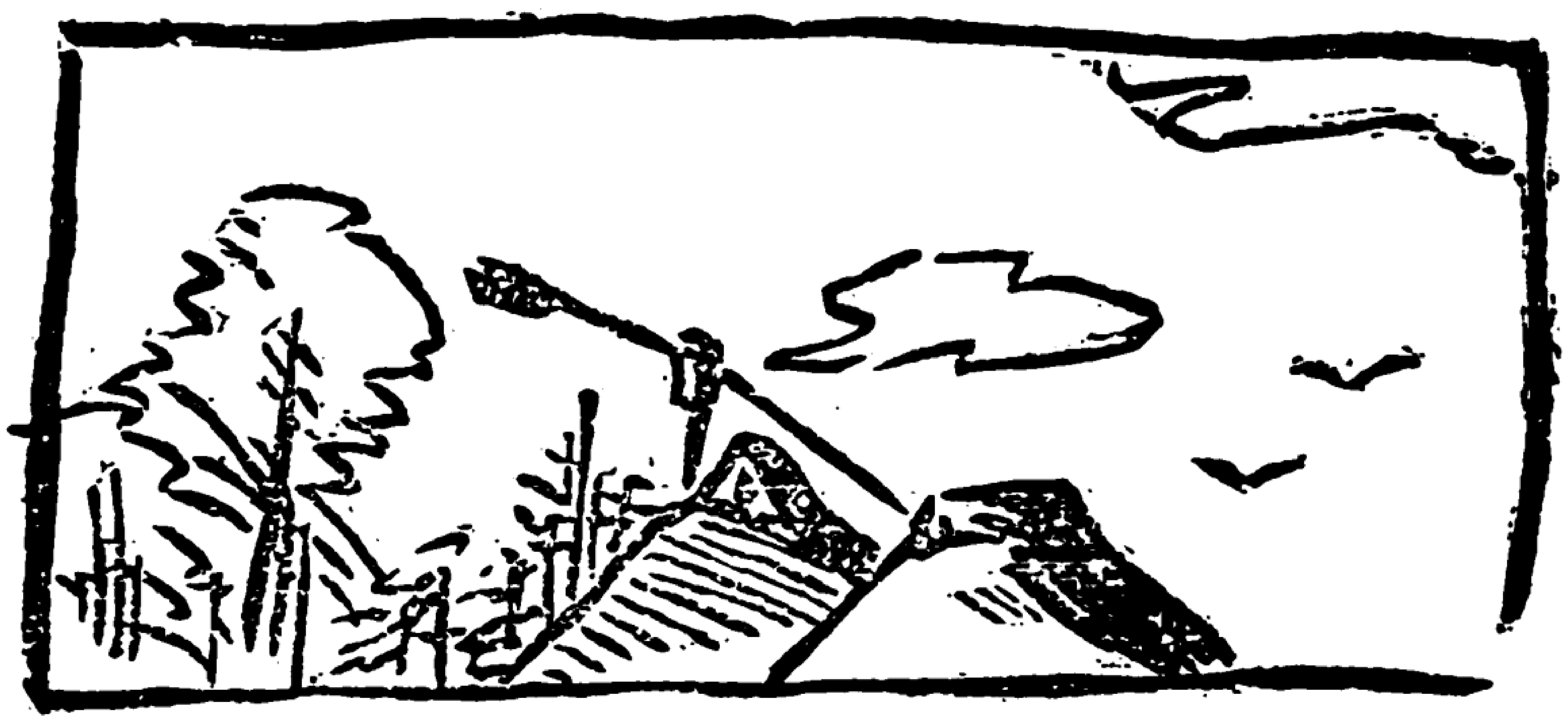
靜岡縣藤枝町　わか菜子

母様の持病の烈しい時と嵐の日の外は、毎日欠かさず此境内に茶店を出して、漫ろ歩きの客に鮓だんご煙草水菓子などを商ひ、細い々々煙をたて居る私、忘れもしない去年の今頃今日のやうな人の盛つた日の夕方であつた、今日は大分實入もよかつた故、好な鰹でも買て歸つて、早く母様を喜ばせましよと、いそ〳〵仕舞かける休み台の端に、誰が置忘れたか色褪せた紫メリンスの小包があつた、大方其内心づいて、とりに來らるゝであらうと、其儘菓子台の下に投り込んで五六日忘れて居たが、ふと心付いて、近い處ならば此方から届けてやろと、分るつもりで釋いて見ると、中は冊子で、しら萩と題して、麗はしい手績に左の文字が書いつけてあつた。

師に従うて眞柴川の上流、五戸の寒村に足を留めた時であつた、自分は僅かの暇をぬすんで、何がな書題の資を求むべく、畫帖手に、屋後の清流を泝つた、時は秋も極初めてまだ霜も置きそめぬに、何の木か、岸の丈許りなるが、まつかに紅葉してくしき巖間より、水に臨んでる美くしさ、自分は興に入るまゝに、猶奥深く分入つて、流れは愈狭まり巖は愈奇なる溪間へと達した、と見ると右手の方やゝ高い處に、大なる岩角をきりひらいて建てられた、一宇のささやかなる庵寺があつた、こんな所にもと思ふと共に、聊か渇を覺えたので、ふと立よる氣になつて、危い一本橋を渡り、自然の岩の階段をよぢて訪づれた、現はれたのは五十許りの尼僧で、自分の所望をだまつて聞て居たが、軈て點頭て、ぬるいと云ふので有合ふ粗朶を圍爐にさしくべて、わかし始めた、自分はまつまの徒然に見るともなく四邊を見廻したが、よく〳〵の貧寺と見えて、目ぼしい物は一つもないが、その淸らかに住なされてある樣は少あからず床しく自分を感じさせた、や

がて尼は剝げた塗盆で澁茶を酌んで出してくれたがその酌む時、ふと自分を見上げて又俯目になつたまなざしが、何となく自分に異樣の胸騷ぎを起させたので、自分はハテと小首を拈つて、思ひ出さうとしたが、どうしても出來なかつた、その内尼は立上つて庭へ下りて、音も優しく溢れて居る筧の下へ蹲踞んで、馬鈴薯か何かを洗ひ初めたが、その橫顏、夫が又どこかで見た樣なので、自分はいよ〳〵胸の中で色々な記憶を呼起して手繰つて見たが、矢張駄目であつた、がさうさう長居もできぬので、筧のもとへ近寄て一禮を述べ靜かに元きた道へ引返したが、その時、狹い庭に咲亂れて居る白萩が頻りにこぼれて、濡れた尼の手へ注ぐのを見かけた。往には氣に入つた流れのさまも還りには目に入らないで畵題も何もそつちのけ、自分は一心に、怪しくも心ひかれた尼の目ざしに思ひ屈して居たが、ふと流星のやうに頭に浮んだ一事があつたので、矢庭に傍の岩かどに佇る、やうに座つて、一物をとり出した、夫は自分もまだ見ぬ知らぬ生の母の寫眞なので：：云ふも恥しいが自分はもと遊女の父なし子で、名もつけぬ内に今の齋藤へ遣されたのだと、去年養母が死ぬ時に話されたが、其折實の母は是と渡された此の寫眞も、もとより二十餘年前の、花盛りの伊達姿見すぼらしいあの老尼と似つかうやうはないが、其愁を帶びた、寂しい優しやかなまなざしが、何となく夫らしく思はれるのでいつそ引返して問ひ質さうかと思つたが、ふと心付くと夕暮の色は早冉々と迫つて居るので、老ませる師の、定めて待詫びてお在であらうと思ひ浮べて、其日は本意なくも宿へと立還つたのであつた、翌朝、明けたらばと思ひ込んで居たが、其夜師は俄かに都の留守宅から電報がかゝつて、未明に發足する事と成たので、自分も夫に從うて拂曉此地を離れて、また遂にこれを明らかにする機會がなかつた、後屢書を寄せて、此疑惑を解かうかとは思つたが、若しさうで無かつた時には、一切の俗事を捨てゝ佛に仕へて居

あけ行く空（賞外）　東京　とき子



る情い身に、大なる侮辱を與へるのだと感じたので遂に果さなかつた。爾來三年、師の君も逝き、吾も天下に漂浪の身と成て生活に忙しき儘、いまだかの幽谷を訪づれて、志望を果さぬが、かの尼今も猶健在なりや否や、はたまた年頃わがしたふ實母なりや否や、余は夢寐にも忘れ得ぬのである。」

文字はこゝに終つて、あとは瀟洒な寫生繪であつた、是にも仔細あるらしかつたが、私には分らなかつた、私は此文を讀むと、少なからず其尼と、この冊子の主にこゝろを寄せられて、殆んど行てたづねて見たい程に思つたが、この持主の誰なるやは知る由なかつた、かくて一年、其小包は大切に今も私の鏡臺の底に秘められてあるが、忘れ主は遂に尋ねて來ない、あはれ此ぬしも亦健在なりや否や。

（評）逢へる時それと思ひ出されず、問ふべくして問はれず、又この忘れ物取りに來べくしてその人來らず　齒痒きは絲の綜の縺るゝ樣なり。寫し得て遺憾なし。

○風の行衛

信濃上伊那郡中箕輪村澤　有賀まさ子

世は秋風の吹き荒ぶがまゝに、何れは落寞たる光景のかなしき。妾は今入院の果敢なき身の上である。

* * * * *

高島病院の受付を貫つ直に、廣き廊下を南へ突つ切つて行くと第三、第二、第一と病室が順序よく横隊に列んで居る。妾の室は第三病室の中廊下を半と思ふ所で階段へ登り、右に折れた南側の一ばん端に、女性の手の麗しく書いた名札が入口に掲げてある、障子を開けると八疊間、まん中には炬燵が、其西に南枕の床が伸べて、枕元には例の女子の本分と表紙の取れた一葉全集、それに雑誌が二三種散らばつて居る、女子文壇は本月が始めて、見るからに綾か綿か織りなせる經緯の心をこめし華やかさ、明星は今初時雨の所を開いたまま敷布團の上に乘せてある。藥瓶は壁際に、躰温表は柱の釘に、誰が飜したのかスミレインキの沁みた跡が其下に、横の小箱には櫛鏡齒磨粉楊子糸針など。隅の一疊分は板敷で火鉢には櫻炭が赤々と燃えさかり、鐵瓶は絶えず松風の音をたぎらせて人待ち顔なのも嬉しく、まだ一入れ位は殘つて居るらしい茶袋が、折々時計の振子のやうにゆれてはさびしげに頭垂れて居る新調した許りの窓帷を除けると南一面と西が半分硝子窓で、朝から晩まで麗しい日光の慈愛に浴するありがたさ。遠く視線を放つと東、八ケ岳の群峰は頂白く檜

のやうに閃いて西、守屋が嶽の連嶺と相對時し此の諏訪の平原を抱いてとこしなへに暖かい乳房を含ませて居る。兩山系の開けた南遙かに芙蓉峯は姿けだかく一刷毛なでたやう、ほんのりと幾重の雲に浮んで、その長い裾よりかけ鵝湖の汀までさしもに曠々とした田の面は、黄金の波を漂はして刈り上げられた美しい瑞穗にやがて鼓腹撃壤の有樣を想ひやられては、いつもよりか農夫の唄も勇しく賑はしい。妾は斯樣な風光に幾多の慰めと啓示とを得て書に倦いた時必ずこの窓に凭つて、窮りなき詩趣を藏した自然の麗觀を展望するのであるが、尚一つ茲に大いなる慰藉と云ふのは入院患者が互に往訪して罪もなき四方山の話さては可笑しき昔が半生の物語に、たわいもなく笑ひ興じて沈みがちな心もいつか引き立てられるのでなか〳〵多樣な趣味がある。うちで最も勢力あるは故參の者で、今の故參者は下諏訪あたりの年の頃は九か三十、一とは越えないさる豪農家の奥樣溫順な閑雅なよく語りよく笑ふかと思へば忽ち憂愁の暗雲に覆はれて眼の光が異樣に輝く、大かたヒステリーであらう。又二十歲ばかりの花嫁御の誠に愛くるしい、少し逆上てもして兩の頰がぽつと櫻色になつた時などねたましき迄美しく、無邪氣な質の快活に滑稽を混ぜての話振面白く、只惜しいことには頭髮の毛が少し薄い、多分藥故に拔けたのであらう、其他水氣の來たと云ふ顏、食事が進まぬといふ顏、早く歸らなくては家が困ると云ふ顏、退院しようかどうしようかと云ふ顏、附添も厭いたけれど義理ある親だから大切にせねばすまぬと云ふ顏。百人は百種の色の偖て第十三號病室患者の顏は果して如何樣だらうか、妾は虛心平氣頗る樂天的な——少なくも斯く、装うて居るに違ひない、かばかりの病氣に何の煩悶、何の懊惱痛苦を來すべき價値有るものぞ。天は妾に靜思默考の時間を與へ、精神修養の好機を授けて呉れたのだ、畢竟妾の欠如せる性格を補ひ以て妾が向上進歩の道を敎へ導き給ふのだ、愼んで此の賜を享けゆめ等閑に過ごしてはならぬ、妾が身は既に天に捧げ安んじて神意の在る處に從はねばならぬ、而して偉いなる天の使命を契うて全うせむ——と心の裡に期したのは元より斯くながらどう人は觀るやら。剛健な意志は男の兒たらずとも世に處する一要件である者を、口惜しや未だ修養の足らない故か晝間折角に形づくられた意志は忽ち感情のはやてに痕もなく拂はれて譬へば砂で築き上げたうてなの如くに。くだちゆく夜の滅入つたや

う四隣が静まれば静まるほど衝突は激しく遂くには鋭い感情の獨舞台。ふと耳を欹てると何處の際涯から吹き落ちた風だらうか婆娑々々と硝子戸を叩いて、切れ切れに咽ぶ蟋蟀の悲しい運命と今更にかこたれては乙女心のさすがに、垂乳根や同胞や偲び出てゝ云ひしらぬ感慨に沈むのも時々、十二時は過ぎて冷えまさるセコンドの刻々我身も刻みゆく心地にいつか冥府の眞洞を彷徨ふかの想。軈て世は新春の香に蘇生りて人は希望の園に憧憬るゝを妾は噫！此の寂寥たる枯草野に感情の子となつてさても幾月を過さねばならぬだらうか。

（評）或は室内諸具の微を寫し或は、戸外連峰の大を寫し、轉じて他患者の容態を批評しさて終に己が限りなき煩悶を叙す、雅文縦横自在、小氣味よき文なるかな。多感の人ならずして誰かこれを能くせむ。

○古御堂

三河國豊橋市鍛冶町五五増田方　房枝

氷る夜半にもと思へど、をみなの身のさもならで、黄昏時を一人詣づる、三七日も今日が滿願、身を淨めて半開の紅梅を持添へ、借りた傘をば七分ざし、宿の裏口からそつと出て、山裾の小道を一丁許り、ほつと息をついて立止つた、目ざす御堂はもう目の前。

此村に添つて矢のやうに流るゝ寒狭川の向ひの森蔭で午の鐘が沈んで鳴つた、其時分から、どつと吹下す風に誘はれて、チラ〳〵と白いもの。畫ながら、山里なればか見る間に積つて、屋根に、木立に、敷石に、花壇の立枯の菊にさへ被綿見るやう解けやらず、暮に及んでは三四寸。

足駄も埋るばかりで、通馴れたる道ながら、ともすれば轉びさうに、裾袂を飜す風は、膚に魔針うつ如く、手足も此儘氷るかと覺えて、がた〳〵と胴顫ひ。鵞毛とは是をや、大きやかなる雪片の、吹捲く風に打亂るゝ、其中を纔かに見れば、枯木に交つて老松一樹常盤の色の美しさ、あゝ思ふ事さへないならば……と溜息する時、垂れたる枝の雪を落して、何の鳥かぱつと飛んだ。

それにもまして美しいのは、我手に持つた寒紅梅、雪に配して燃ゆらむばかり、疾く御佛に捧げようと、よろよろと歩み出した、我物と、心なく唄つた日もあつたが、今憾くてあれば、おとしても忽ち降積る、雪の傘の重いこと。

此村にはよくきくといふ温泉があるので、不便は言ふ迄もないが、近くはあり第一安いから、病める兄に付添つて二月許り前に來たのであるが、兄は少しも快方

に向はぬばかりか、日毎に重りゆく有樣なのを、傍に見て居る心細さ、二三日の寒氣に猶更よくはない。

直ちに御堂の前に來た、固より御手洗もないから、傘を疊むと扉を開いて直ぐに堂の内に入つた。内は方九尺許りの暗い土間で、吹込む雪を薄く敷き、水田に藻の花咲いたる風情。正面には臺を置いて、たけ高き觀世音が祀つてある

昔は此處に大きな寺があつて榮えたものださうなが、其れが燒けてよりは再建を見ず、是のみ灰ともならなかつた觀世音をば、此堂にをさめたので、今は詣づるものさへ稀れに、屋根も羽目板も大方朽ちて、月も雫も洩るあゝましさ。

御像もあらはに、肌寒むさうだが、猶暖かに見ゆる御瞳の光は、亡き母の其れにも似る心地がして、言はむ方ない賴もしさに、いそ〳〵紅梅をまゐらせて、凍えた手をば丁と合したのである。

願ぎ事聞え上げ、御名を幾度となく繰返して、立上ると何となく氣が弛んでよろめいた、其足許へはたと倒れた細い竹。よく見ると、長い旅路を杖にしてたものらしく、節が半ばよりへらされて、手のあとも殘つて居る。



裏の小川（賞外）神戸市德永みね子

はつと思つて見廻はすと、隅の方に菅笠一つ、御佛のみ胸に念じて、少しも心着かずに居たのである。

狐格子を細々洩る、夕の光に取上げ見ると、是も幾日か雨風に晒らされたものらしいが、一すぢ血汐の流れたやうに、手に絡んで垂れたのは、紅梅の色にも劣らぬ、緋縮緬のくけ紐であつた。

昨日詣てた時は見えなかつたのであるから、昨夜か今日來た人の置いて行つたもので、主は固より女であらう、ついに見ぬ人ながら、其俤も偲ばるゝ。

それにしても、杖笠共に忘るゝ筈もないければ、殘し置いたは何か心があらう、と思ふとぞつとして、つと立つて片扉。

外は見渡す限白妙に、黄昏の色迫つて風は益々吹募り、妾が姿も忽ち白くなつた、其音にも紛れず、恰も大濤の寄するかと、鼕々奈落から響くやうなは、寒狹川の流の聲。

妾は此時、何とはなしに、狂ふ吹雪のそれより白い、緋のくけ紐の當つて居た、頰へ黑髮ばらりと亂して、目を閉ぢたる、哀れに美しい少女の姿をば、目に浮べて身顫いした。

裏山には凍ゆるやうな狐の聲。

(評) 見ざるものを見聞かざるものを聞くこの人の特色なり、この篇少女の杖笠遣したるは何故か少し朦朧に失するを憾とす。

(五) 霜のあした

府下南多摩郡淺野村上椚田金子小一郎方　金子れん子

庭の小笹にたつ風の音にも、今朝の霜深さらしと、寢衣の襟かき合せて戸おし明くれば、昨日まで唯の一葉殘り居しそれさへも、散りにし桐の梢にかゝる殘んの月、光青白う霜にうつりて我が身は坐ろをのゝきぬ。忽然三尺の秋水を、面てに振り翳されし如き心地して折しも水くむ釣瓶の音。あゝ今朝は禮子の君に先立たれしよ、いざ我もとく朝餉の用意整へばや。踏めば音ある霜の庭に、手桶さげて水汲むことの心地よさよ。汲む水よりも汲む手よりも、白う烟の立ち昇り、その手は赤うほとぼる。あゝ寒うなれば寒うなるほど妾には朝の仕事のいよゝ心地よくなるよ。殘月いつかかなたの山に落ち、雀の喧ましく井戸の邊に落ち米あさる。一羽の鳥、氣持ちよく鳴きつゝ過ぎ行く見やれば、はや向ひの山に日當りぬ。散りのこる紅葉に赤うはえて。やがて母君の戸をあくる音のして父上も弟も妹も起き出てぬ、眼鏡かけ給はねばてはき目して楊子くはへ給ひて出て來らるゝ父上の可笑てさ、寒い〳〵と頸すくめて、下駄ひきずりつゝ走り來る弟の可笑しさ、妹は欠伸しつゝ衣服着るにむづかしきこととして居れり。忽ち鐵瓶の煮え立つ音。朝餉の用意全く整ひぬ。背戸の山見やれば、霜とけて雫かつ散る熟柿に、愛らしき小鳥の鳴くは、目白とか云ふ鳥なるべし。西の空なる白雲、忙がしう東の方へと送り去られ、高うすみゆく青空の今日の日和もまたさこそ。いざ糊や煮おかむ張物やせむ。

(評) 寒うなれば寒うなる程朝の仕事心地よしとは心地よき言葉かな

秀逸

○なゝくさ

茨城　榊原ふみ子

毎年の嘉例として我より父に申乞ひて勸むるものからいつとはなしに我が役とはなりたる七草の式、今年も又未明に起き出でゝ、家の者が取揃へたる俎板にまだ下萠なる寸綠の七草盛られたるに、羽織袴の行儀正しくやをら其前に坐りて、手に金火箸、薄刄、摺子木の臺所道具掴み餘るばかりに持ち、寒さに慄ふ聲高らかに張り上げ「七草薺唐土の鳥の渡らぬ前に」と祝し納むれば、祝ひの主とて我前に父さへ母さへ改まりたる

祝儀を陳べ、やがて御祝儀のかづけ物は毎年の定りにて扇子一對に筆紙墨、これ欲しさの我が目的なる今日の役目なり、やがて七草を小豆粥に摘み入れて、朝餐の膳も煙立ち迷ふばかりなるを、ふッふと吹きつゝ箸とる親子兄弟が團欒の樂しさに、げに邪氣も拂はれつべし、「おふみ其方は早や大きうなりつれば來年よりはこの役妹に讓るがよし」と母様の宣ふを妹の嬉しげなるに引かへ、姉なる我の猶のこり惜しげに幾歳までも勤めたげなる顔付き、父様の見給ひて「おふみが望は七草囃しの役ならで、祝儀の扇子と筆墨紙にあるならん、それならば勤めずとも嘉例として其方にも取らすべきぞ此上は否やもあるまじ」と打ち笑はせ給ふ目出度さの何はあれど新年のこの家庭の和氣、靄々たる春の霞はかゝる家の棟よりぞ立ち初むべき。

(評)いかにも目出たき筆つきなり目出たき中に姉の今年限りなるを憂ふる所あるも味ありそを父の笑はれたる更に目出たし。

○雨の夕

海南　芳枝

人を醉はす樣な物靜かな雨が、小止みも無く降り續いて、外濠には、大小無數の波紋がゑがかれて居る。すると遙か南の方から、あわたゞしく半鐘の音が響いて來て、私は時ならず胸をとゞろかせた。て濠の面を眺めながら、物思ひに沈んで居ると、水の中程で雨蛙がヒョックリと飛び上つて、又ボチャンと水の中へ姿をかくした。四邊には水輪が大きく、つぐられて遠くの方でスーと消えてしまふ。

とたんに、又北の方から餘韻の長い五時の汽笛が、雨の空を迷ひながら響いて來た。て私は知らず〱、兩の腕を頬杖にして、ヲチも無いことを考へ初めたのである。

あゝ、早今日は十一月。此の月の女子文壇も先日、來たではないか、もうお正月が來るのも間も無い、さうすれば、私も今一つ、年を取らなければならないのかほんとに月日のたつのは早い事、などゝ、あれからこれへと、思ひ續けて居ると、印半纏を着た背のひくい人が、葬式の呼び鐘を打つて通つた。其が非常に私の感じをひいて、又、考へ初める。

あの眉のつつた貧血性の町の叔母さんは、とう〱死んでしまつた。此の間まで、いつも顔を合せて居たのに……人の命は芋の葉の露の如しと、先生がよくおしやるが、あの通り……まことに、果敢ないものではないか。東隣りの叔母さんが。死ぬ事を思へば仕事なんかするのは、いやになると、云はれたのも、

あながちに無理も無い。

日は沈んだのであらうか、四邊は小暮くなつた、向ふを見ると、城山が丁度、墨繪の樣になつて、或所からは、勇しいラッパの音が聞えて來る。

（評）深き所無きに非ず。

○日記の一節　芝區　入江茂子

十月廿五日。旭の障子に映りぬるまゝ驚きて、ねむたき眼をこすりつゝ楊子くはへて井戸端にたてば、今朝は殊に富士の美くしく、松の葉ごしに見ゆるも嬉し。

同廿六日。よしあし繁るてふ浪速の友より肉筆の繪葉書を送らる。君はこの秋の月。老いませる母君を養ひまつらんため、都を去りゆきませるなり。思ひのまゝ孝養したまへとこそ。

同廿七日。庭の柿の實を少女のやゝはにかめるが如く赤らみたるもうれし、時々鴉のきてついばみ去らんとするつらのにくさよ。

小春日、椽側にあたゝかなり。

同廿八日。午後三時頃と覺ゆ照子の君來たらる。いつもながらいと美くしうおはせり。

五時少しまへ、切にとゞめしも歸りゆかせ給ふ。兄なる人のいふ「今すこしハイカラぶられずば……」御口の惡しさ。

同廿九日。夜やゝふけし、月は白く、風やみて何となく靜けくてかなし。

折しも隣家よりもるゝピヤノの音、或は高く或は短くその妙なる音にわれ知らず恍惚とす。

同卅日。故郷の妹より消息あり。

露子の君は近々に隣村の某に嫁がせ給ふと、また秀子樣には去んぬる廿日婿君むかへさせ給ふ。小學校教員のよし。

同卅一日。背戸の公孫樹漸く黄ばみそめて、梢に椋鳥鳴くことしきりなり。

愛宕の森、こんもりと向ひに暮れのこりて、夕告ぐる鐘の音、何となく物思はしき日なり。

（評）筆に十分の落着あり、この調子を忘れ給はずば必ず成功せらるべし。

○王子から田端まで　下谷　太田秋津子

汽車は王子驛を離れぬ。幾個かの車室は數多の人を載せて、今花の都は上野にと向ふなる。

後車室には新しく五たり程入來りぬ。若き女夫連の、妻は髮匂やかに眉秀れて、時に叶ひし裝ひ殊に美しく見ゆ。あとなるは皆男、三人一組らしう、一人は大なる瓢を眉にしたり。ひとしく色に出たるは、問はでも若き紅葉見のかへさならむ。

夕日燦然たる金光を投げて、車窓のグラスの輝きまばゆく、打向ひ見ては目も眩む計りなるに、我は堪へて

向ひ側に移りぬ。眺むるともなく覗入る窓外のけしき燃ゆる日影を煙突に反射せる赤煉瓦の建物は追々と離たりゆき、王子は後に成りぬ。連なる稲田は廣野にも似て、入束垂る穂の實り重げに、金風蕭瑟、うね〳〵と打つ黄なる波。あゝ今瑞穂の國の秋。遠く稲穂盡きて、森あり、家あり、目路はるかに白金の如き輝き持てる只一片の根なし雲漂ふところ。あゝそこには懐かしき筑波しげ山、澄みたる空に薄藍色して聳えたる。自然に渇仰する我は嬉しさに胸躍るを禁め得ざりき。秋晴れたる美しき日を、武藏野は稲穂のはてに見し筑波根の姿の、いかに秀麗なる事よ。その靈ある山容のいかに崇高なる事よ。正にこれ平和を示せる自然の大活畫ならずや。恍として瞰入る間に汽車は走て懐かしき靈容今は全く森に隠れぬ。窓外を眺めは又新たになりて、家を迎へ立木を送り、接するの間近き時は、松も杉も目昏めく計りに走り去り、燃ゆる紅葉の色美しと見る間に、忽ち去りて又蔭あらず、直ちに山茶花の盛りなるが現はれ來る。線路の下小家無くなりて、挾められたる眼界漸く廣やかなり。と見る、線路に近く田端へ通ふ一帶の小堤横たはりて、裾を行く小流の水白う、堤の上を荷車引行く男あり、下の流れに下駄洗ふ女あり、皆仰ぎて汽車を見つ。早田端にも近づきたらむ。汽車の速力頓に緩う成ぬ。

（評）隨つて見え隨つて寫す。



かるた（賞外）　神戸市　三宅秋傑

○恐ろしき夜

四谷　山中芳子

寢床が違つてさへも妙な心地がするのを、まして今宵は家が違つて居るのだから、睡られぬのもその筈である、殊に引越さう〳〵嫌な風説を耳にしたのだから、睡るどころか其のことを思ひ出すとゝもう襟元がぞく〳〵して、思はず妾は髪のこはれるのも夢中で搔巻を被つた、けれども恐ろしいと思ふことは愈々增して來る計て、心はそれからそれへと麻のやうに亂れる。

奥の時計がボンと寂寥を破つて一時を告げる、と妾はさながら水を浴びたやうに冷つとして終つた、すると晝間見ておいた、雜草が蔽ひかぶさつて紫の名も知ら

ぬ花が一輪、物凄く微笑むで居る家の横手の古井戸の方にあたつて、さは〳〵と小草を分ける音が幽かに洩れる……と妾は胸躍らせつゝも息を凝して耳を欹てあやしき物音を伺はうとしたが、息を凝せば凝す程心臟の皷動が早鐘を鳴らすやうに、呼吸は益々烈しく迫つて來るのである。

三年前、木々の梢も漸く枯れて、か弱い女の涙の露いやしげき秋の暮、七村花と歌つた眉美しい若き女が、身は黄金の爲に自由を失ひ、戀した人には捨てられ、悲痛やる瀨ない思ひを抱いて、ものゝあやめもわかぬ夜半。「老先短き父母樣、先生つ不孝の罪は幾重にも：：彼世に行きて：：」と、ひらり身を躍らして飛び込んだのが、此の古井戸て、それから夜な〳〵一人の若い女が現はれると、昨日來掛に大銀杏樹の傍の茶店で休息した時、六十計りの嫗が物語つたのであつた。けれども父と兄はそんなことは斷然あるべきことではないと仰つて信じられなかつたが、母と妾とは半信半疑で殊に母はいたく神經を惱まされて、僧を呼んて供養でもしてやつたらと仰しやられた。だから今頃は妾と同じやうに嘸かし心を惱まされて居らつしやるてあらう父も兄も彼のやうには仰しやつたものの、矢張り好い心地はなさるまいなどゝ、限りもなく思ひに沈んて居たが、餘り呼吸が苦くつて堪へられぬので、そと搔卷を除くと鋭い空氣が冷りつと身に染みる。ふと頭をもたげて四邊を見迴すと、枕元のランプは微かに室内を照して、物の位置を示して居る、天井の隅に大神宮樣の御札が張つてあるのが、朦朧と見えて、其の下に兄さんの書いた枯野の景の油繪の額が長く影を延いて、桂に掛けてあるお友達の寫眞にとゞいて居る。折しもさら〳〵と雨戸を撫でる物凄い音が聞えたが、妾は何んとも喩のない、恐ろしさを、ひしと感じたのである。

（評）人をして悚然たらしむ天神宮樣の御札以下殊に妙。

○氷室守

上毛　關根意磨子

立ち罩めては、宛として、神女の羅裳の樣、嫋鬤きては、杳として、天津乙女の綾帶の樣な白雲の、幾重も幾重も重なりたる奧、峯の松風は筑琴の音を立て、深間の嵐は紫匂ふ、かくも幽邃な神う〳〵しき此深山にこれよ神のつくりませるか、一つの小屋、圍は石を以て疊み、屋根は茅で葺いてある、そして其上には白百合が、時知り顏に咲いてゐる。

これぞ其中には、淸き〳〵、月の宮のエンゼルが、天の川の星を集めて、凍らせた樣な氷が、いつぱいに藏せられてある、そして今は毎日氷室守が、雲を超え、霞を踏んては、氷を里へ出してゐる。

家の前には、冬になると氷を切る、山間の湖水が、鏡の樣に碧水を湛へて、其水晶の樣に透明な、瑠璃の樣に美はしい、碧玉の樣に靑い水は、其面に、岸に望んで蓊鬱として茂つてる、千古の大木の濃い翠綠の影を蘸してゐる、水を飮みあきて、悠然水中に立てる、白黑斑らな牛が、其足を動すたびに、足を中心として水の輪が出來、それがだん〳〵廣がつて、眞珠の樣な岸の小石をピシャリ〳〵と浸してゐる、其傍には、仙人の乘り捨てしか小さな破れ舟が一つ。今しも、里から歸つて來た氷室守、渴いたのか、氷室から、片破れ月の樣な氷を出して、湖の水で洗ひ、其を桶の中で鉈で碎いて、多くの星の破片として、黑い〳〵炭の一寸もついて居さうな。鐵瓶の中に入れた、そして下から、ドン〳〵枯松葉を燃やしてゐる、いつも斯くして、彼は此暑い日に、飮むべき湯を得るのである。

嗚呼其眞黑き鐵瓶の中には、星の破片が入つてるてはないか、其が沸いたなら、星の雫が溢れ出よう、オヽ如何に其詩趣あることよ。

（評）氷を索る所味あり。

お二階（賞外）　大阪　和歌子



○夜の雨

天[illegible]　天の舍女史

あゝ。此の春の末、而かも白つゝじの花二三片、五月雨の潦に落ちて、泥に塗れたまゝ庭の垣根にせかるゝ頃、有りとは名ばかりの籬を隔てゝ、十八年の親みを重ねし妙子……あゝ。思ふまじ、言ふまじ、あゝかの魔女!!。强て胸を推し沈めんとすれど、はやそのにこやかなる笑顏の目にちらづくを如何せん!?。あゝかの妙子の姿が、かの圓窓に絕えてより、暖い情の籠つた、輝く希望の光に滿ちた、美はしい天地は、俄に冷却して死灰の如く世は全く無情の聲と、寂寞の影とにて飾られたる一のからくり店とはなりぬ。余は如何に悶えしか、如何に泣きしか。併し一度去つた影は再び歸らざりき。而して常に純白に張りかへられて、小止みなく動いた窓の障子は、堅くメめ切つたまゝ、雨に汚れ、風に綻びても優しい器用な手は、遂に働かなかつた。女の心と共に死んだのであらう。あゝ。思ふまじ、あゝ、言ふまじ。彼の女の心は已に死んだ、少くとも我が心の中には生活して居らぬ。

形骸の美は人形に如かず。而かもかの女の情に至りては人形より數百等冷かなるにあらずや。余はかく心と心とにて話して居る間にも、亦無意識に思はかの女の上に廻り行くのである。余が如何なる努力も此の想像力に打ち勝つことが出來ぬ。

戸外は何時か木枯の音も絶えて、小止みなく降る雨の音は、又しても我が弱き心を動かすので、座に居堪へず、つと立てば忽ち目につく書架の一詩集……菫に添へて妙子が送られた……。余は手に取るより早く、引き裂かんとすれば、異樣に身を翻して机上に落ちたる一片の押し菫。余は思はず戰く手に拾ひ上げた。我知らず淋しき笑は顏に浮かんだ。されど此の菫に、昔の色と香とを吹きかへさしむることは出來ぬ。あゝ。かの女は……。

（評）思ひ切らむとして未だ切り得ず。

○都の別天地

麻布　露野玉子

華かな夕日影今し赤十字社病院の裏手に沈まんとして其美妙の餘光は彼方の森此方の雜木林を通じ、廣尾より目黑にかけてあざやかである。その心地のよさ實にいつたらない。

カア〳〵と暮れかゝる秋の日を急ぎだてするやうに鳴きゆく鴉の三ッ四ッ二ッ。眞黑の羽が夕照をうけて光りつゝも、南から青山の墓地の方へ。口喧しき女の子の一群、背戸の垣根に添ひて七八歳を頭に十人許り『鴉〳〵、後の鴉はさきに、先の鴉はあとに』、聲を限りに呼びたてゝ各々家に歸りゆくかと思ふと。此度は『稚子のお守は何處へ行た、山を越えて里に行た、里の土産に何もらうた、デンデン太鼓に笙の笛……』、懶げに唄ひつゝも、ヨゝと乳を求むる稚子をすかして、子守兒は行つてしまふ。

いつしか日は沈んで、夕雲は眞紅に、いと澄みたる滑かなる庭の池に映りて、水は血を流した樣である。今迄鞦韆に餘念なかりし甥と姪とは思ひだした樣に『夕燒け小燒け、明日りや天氣にな―れ』、可愛らしくも斯う呼びながら歸り來るにつれて、ヂョンは小さき主人を守り顏に後よりノサ〳〵と。

眞紅の空は薔薇色と、順次に黃、紫、樺と移りゆく其刹那々々。遠く目黑高台の一帶は白靄淡く棚引いて、恰も墨繪のそれに似たる。唯ビール會社の烟突のみが高く中天に聳え、近く澁谷の森より薄すりと白くぼかした樣な靄の立つよと見ると、ものゝ五分ともたゝぬまにもう全速力で散り初めた、見る内に森より雜木林へ、雜木林より庭へ、庭より妾へとありとあらゆる天地間の萬物を充分に包み終へた。

折しも廣尾分院に沿へる檜木立の街道で『おれとそなたは芽生の菊―』、實に可い聲。目黒邊に歸り行く馬子であらう。續き起る鈴の音シャン〳〵『中の色香は人知らぬ―』ほそい節ではあるが、張りのある聲は、あたりの木々に反響して、何んだか胸の血が湧くやうである。やがてはそれも細りゆき木の間がくれに、鈴の音のみシャン〳〵〳〵。

ふと大空をあふげは唯一つ明星がヒカ〳〵と瞬きそめた。するとそれに呼應して、あちらにもこちらにもポッポッと星の數がふえて來る。高く低く、大く小く、遂に大虚に淺ちた。折々の星の流れにつれて平和の色は、天より地へ下る樣に思はれて、實に靜かな夕である。妾は徐ろに佇ずみて、暫く此の自然美中の人であつた。

あはれ、俗氣紛々たる都にも、かゝる別天地のないてはない。

（評）取り立てゝいふ所は無けれど何處となくなつかしき文。

○河畔の夕　　讃岐　操女史

紫の葡萄の房を盜まんと、野狐の夜毎に忍び出でゝ、村里の破垣に佇めるそれのごと、妾は今暮れゆく空を仰ぎて、名もかぐはしき香東川畔にたゞ一人悄然として佇みぬ。

夕陽は今しも西山にしづみて、たなびく紫の夕雲やをらうすれゆき、美しき夕照の光を受けて、金色の彩を帶びたる小彼の上をかへり來る白帆のかげ皆閃々とかがやきて、いと美しく、流るゝ水はさながら水晶の如く、紅葉三つ四つ浮きつ沈みつ、流れゆくもをかしく淙々たる水の音は、颯々たる松風と和して、ミューズの神の天樂の如し。上流には綠の色あせぬ常盤木の間に、交れる楓葉の既に霜にそみて、夕燒の空よりも紅く、そのかげ水の面に影りて、水のながるゝまに〳〵ひよろ〳〵するなど、恰も錦の御旗のそよ吹く風にひらめくが如く、彼方の賤が家の垣根には、朝顔の枯蔓淋しげに纏ひ、破れごもの棚の下には白菊黄菊打交りて美しう咲き匂へり。其の側には五六才の童女塒に歸る夕鴉を打ちながめて『烏々前の烏後になれ、後の烏前になれ…』などいへば、烏は互に我劣らじと、飛び行く心地せらるゝもいとおもしろや。



新體詩

河井醉茗先生選評

第二

○元旦の賦

牛込東榎町八番地　薮智子

時を刻める彩の輪は
無限の旅を急げども
正しき性のしかすがに
偉なる世をわづらひて
年の限りを知らせんと
上るよ今し鐘樓に。
清き鋭き手の冴えに
雲は七重に裂け落ちて
古りにし年を葬りつ、
新裝ひの日を呼ばひ
永劫の力を捧げつゝ
瑞氣の影に消え失せぬ
あゝ年あれぬいやちこに

元旦の賦のやうな實に陳腐になり易い題を捉えて、これだけ新しく歌ひ得たのは大いなる成功てす（醉茗）

第三

○未だ見ぬ花

京都田中村關田　宮島なみ子

未だ見ぬ花を夢に見し
今はた噎ぶ花の香や
覺めて淋しと眼を閉づる
あゝ優し女の媚なくも、
そよ、三尺の大花瓣
かたみ〳〵の點頭や
人か我かの――氣ぞ空虛
身を蕋の座にか抱さつ
「情よ震へ」と花の息吹
我夢に活く、――その花と、

此想、此格、容易には得られません、何うして此れだけの素養を得られたかと思ふ位てす（醉茗）

第四

○白塔

土佐香美郡明治村　石川潔子

風止みて太古にかへる世は靜か
紺碧たゝふ海の面は
夢にもにたる靈妙さまに、
樂聲何處深き底
ほのかに湧くやさゝめきの
海の聖者が祈禱かや。
嫦娥つぶらのすゞ眼に、
我世戀しと微笑みの
金冠光輝燦として、
天穹の遠方の御座高く
ゆらゝとのぼる靈奇香に、
ほろゑひ心地かゝりしか。
彩波洗ふ磯濱つゞき、
そゝり立つ百尺龍宮の
假の宮殿あるとぞ傳ふ、
龍頭岬希臘ぶりなる此塔の
靈光まばゆ反照りて、
白銀色やいやはえに映ゆ。
妖魔は狂ふ暴風雨の夜、

鬪みわたれる蒼海に
犧牲ともならむ扁舟幾つ、運命はかなの漁り子が
白燈放つ靈光仰ぎ、遠久の惠に神を讃ふ、

白塔とは好き題、是だけにして置くのは惜い位、まだ／＼うたいやうがあるてせう（辭者）

五等

○わが思

芝　川島たつ子

わが思ひ
雨ふる朝も風の夜も
野こへ山こへ
西へ西へふるさとへ
なれてはよるよ
そは何ゆゑと
問ふなき、そな
なにとはなしに
人にいはれぬ

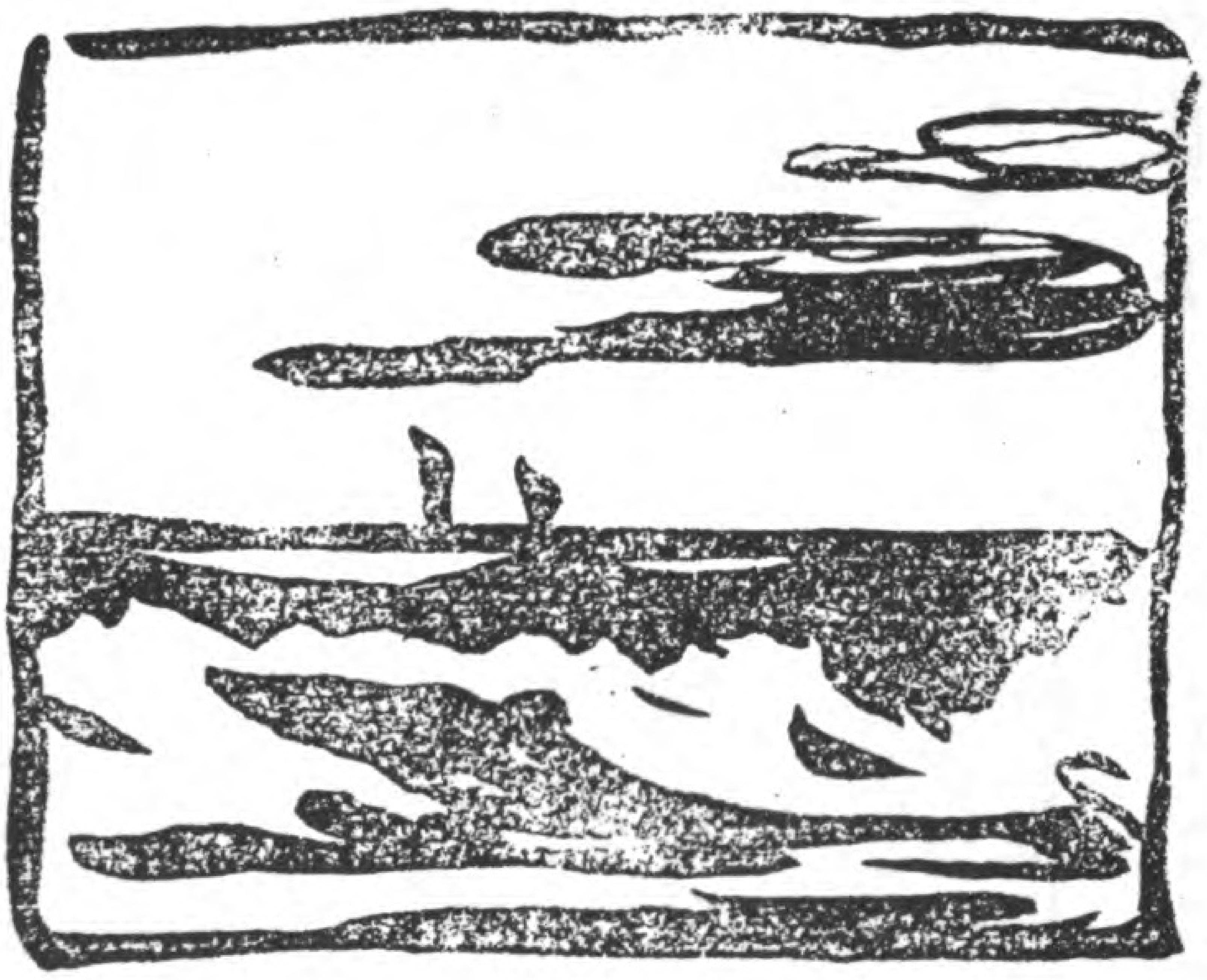
此詩は何うしても一句を一行に書かれば感興を惹くに力が足りぬ（辭者）
又日ふ、此詩は平板、下手に眞似ると平凡になる詩格

秀逸

○新年

長野縣　山田くに子

海（賞外）[illegible]區　富取はつ子



瓔珞裝ふ萬星の、
無恨の過去を後に引き、
現在にうつす曉の、
愛凝の甕いだきつゝ、

爛懷の雲に溶け行けば、
無限の未來一刻と、
紫雲棚引く九天に、
希望光明七尖、

七彩長ふいろどれば、
あゝ罪に泣く人の子は、
闇より闇と逝く靈を、
今朝新らしく榮光の、
歡樂心地に起り、
美妙をほぎて仰ぎ見る、
天に讃美の曲をきく、
人に感謝のひとき湧き、
乾坤こゝに新たとなりぬ。

豫期して得た新年の歌のうちで、此れなどは力のある方てす（辭者）

○せゝらぎ集

小樽　岩谷綠子

○

あさの務めの機織に
庭の面をながむれば、
透垣近き豆菊に
蜘蛛の巣經度緯度にひき、

倦みし腕を窓によせ、
濃葉細葉の南天と
さながら銀の箭の如く
瑠璃水晶と思はるゝ

露の玉をば抱くかな。
猶よくみれば灰色の　少ひさき蜘蛛が蜘ものの巣に
「機織師ぞ」と云ふ如く　誇り顔して大胡座。
我も女に生れたる　務はありとゆるやかに
踏板ふみて梭とれば　音は天地にひゞくかな。

○

古跡に高く聳ゆる　楓の蔭に優婉けき少女
つと倚りぬ。　弱肩にあるかなきかの
風にもみぢは金の小鳥と　舞ひ落ちぬ。
掌に落葉をのせて　伏目になりて優婉けき少女
物思ふ。　落葉ふむ栗鼠の跫音に
おどろく顔に小春の日ざし、あたゝかし
さては又、なつかし人を　老いたる母を思ひてそすれ
そゞろにも。

二節ともよし、殊に落葉の少女は可憐の姿、詩中の趣、選れて來たいやうてす(評者)

○常陸の人に

戀しき野の人君に

鹿島郡　山　蔦　子

有明月夜露おりて、　菊は仄に明けにけり、
葦鴨騷ぐ川上に、　野の人君を思ふかな
東鳴門の海よりも、　浪は遙に隔つてよ
あゝ三百里舟の路、　筑波に行かん山青き
草にうつろふ秋の日の、　光寂しき朝ながら
着欲しき朱の雲の帶、　東の方に流るゝぞ。

常陸の人は無論夜雨を指すのでせう、彼過ろ頃身にも胸にも悩みがあつたのです、近き頃は身の痛みに堪へませんけれど、精神は大いに男氣を振ひ出して來たさうです、詩に文に追々諧調にも見えるでせう(評者)

○福壽草

下野　新　井　琴　子

冬の靈凝りて成り出ての、　香り冷き花なれば、
金の冠を身一つの、　裝ひなりと微笑みて、
雪に息づく福壽草、　小さきを人よ危むな。
「誘惑」戲ぐ蝶の子は、　春線亂の桃櫻、
甘き匂ひに寄り來れど、　汝が信仰をさまたげて、
冷き雪に三寸の、　彩羽を破る鳥跡ならず。
女子二十の山住を、　淋き花に比べ見つ、
清淨宜らす神の御名、　心に呼びてひそやかに、
渇仰あつく跪き、　涙うれしと春を迎ふる。

福壽草と云ふものが既に題詠的で、如何に自然を愛するものでも、多大の感興は湧きません、まだ此詩程にうたひ得たのはよかつたのです(評者)

○み胸　北品川 丸山たつ子

海の底なる珠床に、「愛」は住むかと思ひみぬ、
山の奥なる花宮に、「愛」は住むかと思ひ見ぬ。
さはれ、まどひぬ、君が胸、更らに戀しく思はれて
眞珠、花貝、光みてるも、たかき香の蔭みなぎるも
あゝ何の榮、天地に 一の「權力」のみ胸こそ
「愛」の住む鄕。

決して新しくはない……が斯う云ふ風に似せて歌うのも一つの稽古にはなるでせう(醉茗)

○琴の音　石見 さゝふね

か細き緒の琴の音の、いみじき力あらはして、
君とわれとを引結び、結びて遠く消えにけり。
心ゆくかな垣こしの、君は彼方の母屋にして、
火影にはゆる俤や、見えては我に倚りやすき。
か細き緒の琴の音の、いみじき力あらはして、
君とわれとを引はなし、離して遠く消えにけり。
闇吹く風の末遠く、今しほがひをめぐりつれ、
君は彼方の母屋にして、火影に浮ぶおもかげや。

○炭燒女　越後 嘯月女史

薄き煙りのうすれ行き　小山やま風膚寒み
かの若櫨の折り枝の　炭燒く竈の夕暮れや。
里に離れてひとり寢の　想や夢やさむしろに
病のほつれ髪かき上げる　瘠せたる小手を恨むかな。
燃え行く櫨のもえさしの　暗き火影に秋過ぎて
戀しき人はいかなれや　落つる涙よかれてあれ。

此の如く神秘な思想に觸れた炭燒女は初めてゞす(醉茗)

○氷の海　上毛 關根意磨子

天つ光のみ惠は、こゝにはたえて少なきも、
七星の光鮮やかに、廣き氷を照らすなり。
空と氷の一つらに、連なり連なる極より、
射出す極光の白銀の、征矢に眼もくるめかむ。
天を裂き勢ひ鋭く、そゝり立つたる氷山の、
もとにや幼き海豹の、母を圍みて戯れむ。
オゝ美はしき氷の世、オゝ美はしき水晶宮、
み空の神のあふりては、潔き園にや遊ぶらん。

好い句があるかと思へば、惡い句があり、全體の調子が一定して居ません、餘り歌はない方面を題にしたのですから、好い歌になるべき筈であつたのです(醉茗)

○鶺鴒姫　近江 白露女史

夕やみせまる川端の　しづけさ追ふてさまよへば
白き河原の水清み　鶺鴒若く尾をふるふ。
歌の姿と筆とれば　筆とる儘に興起る
山に野に鳥多けれど　川を好むは少なきを。
吁さびしさに堪へぬ身か、呪咀の運命うけし身か
など只ひとり水音の　清きを己が領とする。
春を讃ずる野の鳥に　快樂を永久にうたはせよ
「さびしさ」めづる人もあらば　來りても泣け鶺鴒に。

清涼の二字を以て評すべき作（醉茗）

○落葉吟　筑波根　笹本つね子

秋の日の華やかに、　野の面をながれ來て
野末なる一本公孫樹、　あざやかに浮び出ぬ
よろこびて明き日を、　迎ふると凝視しに
寂しげに幹木ずゑ　疎なる葉影寒し
胸に泌む秋の氣の、　若き愁さそひては
何となくかへりみる、　わがかげの淡さかな
光をさけてゆく雲の、　ともすればくづれつゝ
はてもなうさまよへる、　それに似しわが思ひ
華やかに日の歩み、　あたゝかに照らすとき
かしてまた葉のみだれ、　ふと消えし追憶や

忠實に詩を讀んで、忠實に詩を作らうとする方らしい、少しもごまかしなく、又相當に幽玄の詞態を行る、願くば此歩み方をつゞけて進みたまへ（醉茗）

○眠る嬰兒　安房　内代信子

すべてのものゝ音をとぢよ、　人も靜かに歩めしか、
モザムも琴の手をやすめ、　フ井デヤもきりを終めてよ
デモスゼネスも語ぞよ、　嬰兒今ぞ眠るなる。
天つ少女のあたゝかく、　柔かき手に護られて。
黄金の高樓や珠玉のゆか、　いくその人にかしづかれ、
ゆたかに眠るあて人の、　あつき臥床も月影の、
破れし軒端の隙もれて、　木枯窓に吹き荒ぶ、
伏屋の寢床とへだてなく、　やすく眠れり嬰兒は。
知るや哲理を闡明し、　宇宙の秘庫を發くてふ、
學者博士よ心地よく、　眠れる乳兒の心情を。

知るや大厦の中に住み、
誇る甍よやすらかに、
鉅萬の富に身の榮華、
熟睡せる兒の平安を。
虚榮名利を希ひ、
朝に夕に現世の、
巷に趨る世の人よ、
暫し學べよ眠る兒に、
昔聖者はのたまひぬ、
「幼心とならざらば、
春花秋月うるはしき、
天國の園に入り得ず」と。

力の籠つた處は感心ですが、餘り力が入り過ぎて、嬰兒の眠りを歌ふにしては、理窟つぽくなりました、こんなに議論的に歌はないでも兒の眠りの聖なるは歌ひあらはされるでせう（醉茗）

初音（其外）　陸中　佐藤伊與子

厚き情に包まれて、
挿頭の花に興じたる、
島田になれし去年の日や。
母の家こそ戀しけれ。
恁くてぞ暮るゝわが春か、
熱き血汐に觸れも見て、
若うて人にとられたる、
少女の笑みぞ懐かしき。
頰の色消えよこがくれて、
夢の破れをわれ泣かむ、
十八、妻を名に呼ばれ、
はじめて知りし此愁ひ。

此作家は詩より文が上手らしい、散文風の態度が詩にもあらはれて居るので、何處となく熟れない點が見えます、詩も上手にならうと云ふには、も少し他の作を深く御らんなさい（醉茗）



○春愁　三河國　房枝子

紅梅鳩の羽に散りて、
琴に懶き春の日を、
汀に寄れば池水に、
初丸髷の影悲し、
ふさふと宜りて笑ませたる、
淡紅の手絡も何かせむ、
解かめ黒髪亂れては、
胸によう似て嬉しきに。

○水仙　横濱市　長谷川　波南子

戀失ひし少女子が
甦りたる姿して
救ひの神のみ手により、
眞白に咲ける水仙花。
神の精靈を得し如き
姿尊し又聖し、
わが世を呪ふ風吹くも
汝が姿な汚されそ。

○きらめきぬ　　下野　鈴木雪子

薄墨の絹繪の如き、野の山も林も森も、
漸やくに朝霧はれて、麗らかな美し朝日の、
きらめきぬ。――冬枯れの野草の露に。

紅薔薇は丸窓近く、美しき花を開きぬ、
なき人を偲びて吾れは、なつかしと一枝折りぬ、
(なき妹が植ゑしかたみの、――花なれば)
その刹那ほろりと散りし、美しき花の雫に、
きらめきぬ――美し朝日の。

『花召せ』と呼び聲ぞそく、花賣りのなに恥らいや、
面染めて淋しく笑みぬ、緑雨やめば破れたる籠の、
その花の雫零ぼれて、きらめきぬ：のぼる朝日の

○やれ琴　　越前　し　の　ぶ

うれしかるべき十七を　華やかなれの十七を
我から捨てゝたゞひとり　片山里にすみわびて
あやしう冴ゆる我が胸を　すさすは破れし十三絃
かすかに響く狠の　絃音を送る木がらしに
枯野の月の冴ゆる夜　すてし昨日の世なれども
あはれ何鳥とぶ鳥の　行衛はさすが忍ばれぬ
つらき浮世が夢なるか　深山の我が現かや
とてもかくても現し世を　泣かん涙もかれ果てゝ
うたて我身を慰むる　昔しながらの十三絃
思へば幸無わが琴よ　人の情とま心を
汝が緒にすげし身なれ共　我にゆかりのありしのみに
世のうた人のたゝへなく　嵐の底にうづもれぬ

○冬の夜　　滋賀縣　辰井ふみ子

石狩なる母を偲びて

公孫樹素肌をあらはせば、千島の海にたゆたひし、
北風今や時得ぬと、津輕の海を早や越えて、
壹岐に對島にすさぶ哉。」霜月寒むの夜な〳〵は、
本土の星も凍り果て、うつばり渡る小鼠の、
嘯く音に夢をぬすまれて、火入れし衾冷たきを、
獨り殘りし旅の子が、戸に立ち母を慕ひ泣く。」
石狩岳に雪降れば　名知れぬ蝦夷の隱沼は、
幾月解けぬ厚氷、獵たくましきアイヌさへ、
獵矢收めて榾焚いて、うからまとゐの冬籠、
薩加連近き大海は、寒風裂ると潮哮えて、
艀頭を捨てる船頭も、火鉢を抱いて籠り勝ち。

あゝ乾雲寒むき北の空、　わが母如何におはすらん。

○みなし子　失名

濱邊の岩にてしかくる、　一人さびしき少女あり、
露のなみだはほにつたふ、　如何にかせしととひぬれば
たゞうつむきて答なし、　父はときけば海をさし。
母はときけば山をさす、　あゝあはれなりみなし子よ

○子鼠の歌　美濃　かほる

小鼠白ねずみ、　春は朧の靜夜に
醉ひて眠れる、　花守りの
老翁がひまを小走りに、　香焚ずる花室や
月の影さす玻璃の戸に、　攀ぢて覘けば
綴錦、白に紅紫を
彩る玉の七光り　光る莚しとねにて、
結ばほしき春の夢、　淡き思のはかなくも
さゝへ兼ねたる弱足に、　落ちてうごめく
小ねつみの、　清き怨のそもさしを
秘めてかくしぬ天つ雲。

○初日　宇都宮　芳野靜子

見よ東海の畔を、　宵天白く縵を逢ひ
荒波こゝしづまりて、　島とみ空は火に染みぬ。
空よりわきし新潮は、　磯邊に玉と打ち砕け
砕けし玉は風を呼び、　風は美妙の樂を爲す。
樂韻やがて雲をつき、　紫雲のとばり綻べば
森羅萬象おしなべて、　初日の影を迎へたり。

○色鉛筆　周防　笹丹女

みどり、紫、紅や、　黄、樺色の色々の、
色鉛筆の其心に、　如何なる靈か潜むらむ。
世に秀でたる繪だくみが、　さえたるみ手に取られては
白紙に觸るゝ音も清く、　自然を寫す彩りや。
身は白刃に削られて、　倚も堅き藝術に、
盡さむ力及ばぬを、　恐るゝ襟の氣高さよ。

○冬木立　讃岐　尾形千代子

脆き運命の堪へ難み、　吹く木枯に誘はれて、
散りにし葉片根に沈み、　痩にけるかな山の容姿。
寒き姿のひといろに、　梢並べて立つ木々の、
枯林に鳥の音も寂びて、　斑に染むる雲さむし。
あゝ緑葉とほこりぬる、　榮をし説くは夢に似て、
さりとは奇き木の精の、　甦らむ春も近かるに――。
ひと日木立のイ立に、　思ひ深かる身を寄せて、
老いゆく齢を悼まむに、　そゞろ淋しき我生命哉。

○いのり　安房　大井秋月女史

小百合花さく故郷に、　復び歸る時あらで、
目路たゞ遠く雲迷ふ、　沙漠の旅を我や行く。

神よ導け運命の、　鞭に倒れん罪の子を、
綠のかげに新らしき　生命の泉掬ぶべく。

○夜の歌　天地　天の舍女史

金鼓とゝろと鳴りひゞき。　どよめく鬨の聲たえて。
ひらさき沈むひんがしの、　空にうづまく黒雲は、
山のそびらにかけ消えて、　光明の聲は地に落ちぬ。
見よたゝかひの人の子は　血糊にさびし太刀折れて、
「無限」の前にくだり來ぬ。　躍る血しほの脈たえて、
振るに得堪へぬその腕は、　平和のかみと握手して。
エデンの園に咲く花の、　溢るゝ露をむすび來て、
渇けるのどを濕ほせば、　わかき生命はよみかへり、
女神の腕をまくらして、　身はやすらひの床にあり。
夕日に映ゆる金殿の、　堅きとびらを閉すとき、
むらさきの若きうすもゝ、　雲のとばりは開かれて、
紫微の玉座にいと近う、　身は運ばれぬ夢のまゝ。
かゞやく星の二十八、　金の兜にちりばめて、
衛戎のしころ堅めたる、　王の率ゐるつはものの、
夜の天地をしづめては、　かへる久遠のしゞまかな。

○夜汐　磐城　いつみ

星空に滿つ眞夜中ひとり、　頭もたげて心瞳きむれば、
高くはあらぬ力こもれる、　陰府、群魂の呻きの如く、
はたまた夢のさびしみ深き、　魔の子がどよめく呪咀の始も、
遠鳴る夜汐にふと目さ醒ば、　空と水と相合ふきはみ、
ゆられ／＼てよぎりつ今ぞ、　おゝ落ちゆくはアダムとイヴか、
おぼろ／＼に霧よ立舞ふ。

○姉は逝にて　土佐　田內花泣子

美しき十九の花の身の、　燃ゆる情をそゝがせて、
稚けきわれを養育せし、　慈愛の姉は逝にけり。
遺し給ひし歌卷に、　墨の香はこもれども、
朱塗の机に白玉の、　御手は永久に空しうて。
雨ふる宵の淋しさに、　詩ともがなと筆とれど、
胸の想はかへらざる、　姉を慕ひて迷ふのみ。
今、春はきて野に山に、　聖き自然の御惠の、
慰藉の光明放てども、　深う閉ざせるわが胸の、
淋しき影はあゝ消えうせず。

○いたづき　牛込　泉三乃子

けさ秋風の身に沁みて　野末流るゝ雲見ては

そゞろ想のしづむかな
歡樂秘めし日の神の
泪の床はつめたきに
ふる葉に落つる露しげく
なげきのふすま寒ふして
胸の琴柱も冷ゆるらむ
禿筆舐ぶる詩の箋に
つらき運命と知りながら
胸にあふるゝ詩屑は
消し世の後の我が身かな
あゝ戀の緒の絶たれては、
いたづき重く身は痩せて
枯野の芒穗に出てゝ
何さわぐらん、寂しくも
夜風にゆらぐ我が身かも
いづれ消ゆべきものならば
詩箋にのこる紫の
つめたき血潮かれぬ間に。

○巖上　和歌山縣　三田かめ子

天つ御神の幸ありて、
身は磯菜摘む乙女子と、
事なく生ひし我が胸に、
君が姿を慕ひしが、
さゝく居ませと今日はしも放ち難なの手と手をば、
八重汐遠く隔てつゝ、出船勇みし荒磯や。
しぶきに砕け消ゆるなる、果敢なの戀にうちわひて
春を裝ふ十八の身を彼の君に見せばやと。
ゆらぐ後れ毛頰の邊に、亂れてかゝる春風や、
待つよ巖に只ひとり、君に想ひを運びつゝ。



草苅（賞外）　神戸市　伴利子

○麥の芽　京都府　竹葉女史

惠や深き愛土の、
情の露にうるほひて
茶の花寒き大空に、
事なく生ひし麥二寸
のびよと切にさゝやきし、
雲雀の親はすぐもりて
我が世の榮はこれよりぞ、
愛の若芽にもえいでむ

○湖水　小倉市　安藤せい子

神夢覺めし昔より、
十重の茂りに包まれて
星も宿らぬ深山に、虛飾を忌む詩の神が
此所をとばなる我が領と、壯嚴の靈集めては
此の湖にひめにけり、

尊き男神の手になりし、
むげんの美妙かなでゝは、
女神が統る大國の、
露に香をふくませて、
岩の根もるゝ眞淸水の
此の湖に流れけり、
御園に咲きし花草の
此の湖にためにけり

○紅萩白萩

備後　紅秋子

昨日天帝の御使が
紫の雲過ぎしあと
白の花には白露を
露重たげに打ち伏して
世にも尊き聖僧の
過ぎ行く跡は悶さへ
甘露の甕を捧げたる
紅の花には紅露を
さても同じに惠みしよ
初めて悶へ知りし哉
白衣の裾に拂ひつゝ
忘れし如く首を擡げぬ

○白百合

尾張　野口寧子

河は三尺河原は五尺、
露をとゞめて今咲きそめし、
香ゆかしき白百合の花。
流るゝ水の音籟ある如く、
山の麓の松下陰に、
香ゆかしき白百合の花。
五尺河原の花さく土手に、
そめし花瓣雲より白く、
人の往來のそれさへ絶えて
露を含みし花瓣白く、

○夜の街

上州　きくのや女史

二人して、
ふしうれし、
黑々と、
月いてぬ、
掛行燈に、
町衆よ、
門つけの
新内や。
物干場
紺屋の。
銅鑼なりて
頬かぶり。
つと入りて、
あとやさき、
絃も更けぬ
袖おもき。
暗まぎれ、
川すぢ
水の樓、

○つき草

湖畔　青葉女史

水の流れに淋びしくも
月に夕べの雲紅かく
定かにそれとわかねども
うつす綠の葉がくれに
月草水のまゝにゆれ
たゞ忘らるゝ身なりとも
月草ものや戀ひ渡り
消えゆく間にそつらからむ
汀にかげの深うして
さゝやく聲のわびしさよ
わかやぐ光り色もなく
別れし人を戀ふらむか

○碓氷川の源

芳枝子

美しき眞淸水あらがねの、
此處にたゝえて幾千年、
悶えの人に與ふる乳か
汝がしらべのゆかしさは、
快樂の境に導くが如。
羽衣奇しく薫秘めし
慕ひて此處に天降り、
匂ひこぼるゝ御袖より、
汝に御肌を淸めんと、
髮のかざしは落ち入つて
溶けて染むるや碓氷山。
土の下より湧き出てゝ
永劫にもかれぬ甘き味は
自然の愛か慰藉か
誠神秘のとけ入りて
天つ乙女は汝が姿を
紅の裳裾地に曳きて
王の御手をさしのべて
ッとさしのぞく一刹那
浮ぶ紅葉の紅の

○愛の花（賞品婦人持銀側時計）

東京麹町區飯田町五丁目四番地　高仲菊子

上

「貴女もね是非いらつして下さいよ」

客の婦人春子は斯云つて待たせた車に腰を下した、羽衣ショールを無造作に細い首に捲く時手袋をもれてリングが光つた。

「ハイ其内に參上致します」と綾子は慇懃に頭を下げたが其眼よりは露が落ちさう。

「さようなら」がら〳〵と俥に搖られて行く人の影、美しい若々しい丸髷の銀の簪に輝き、佇む綾子の目にはどんなに映つたであらう、折柄弱々しい日は落葉して梢計りの柿の木に射して雀の一羽水道ばたの落米を拾ふて居る。

「まあ奇麗な方ですね、何處樣の奥樣で」我に返つて見れば隣の婆さん。

「彼の方？麹町の方でね、元私のお友達でしたの」

「いゝお友達をお持ちなすつて宜ふござんすね」

賞められたのか嘲されたのか綾子は不快に思はれて家へ入つて自分の机に身を投げた「あゝ！」何處ともなく宙を眺めて過去の幻でも追ふかのように想に耽つた「春子さん彼の方はほんに幸福だ、私と同じ位の家に生れ同じ學校を卒業して、私は此樣な身となり、彼の方は何不足ない體で……噫！自分は好んで此樣な身になつたとは云へ、あの芳雄樣がなされた事、春子樣は御存じあるまいから決して〳〵お恨み申しはしないけれど芳雄樣はまあ何と思召していらるゝやら、少しは憐と思召して下さつても……おゝ最早考へまい恨むまい皆運命」

「自分が失望した結果、世をすねて却つて今の良人を愛し漸く淋しかつた心に一道の光明を得て親の反對するのをむりと此樣な貧しい生活に身を落したのも……噫皆前世の約束事とて

も云ふのであらう、春子樣も御羨しいけれど羨んだとて何益あらう、それよりか今の自分の境遇に滿足して良人と共に樂しい藝術の道に進まう少しでも人を恨むの羨むのと云ふ心を起しては愛しい良人に對して申譯の無い事である、美衣が何であらう、寶玉が何であらう、自分達の美しい愛に越した物が世にあらうか」と思ひ返して幽に微笑て机を立つた時格子戸の鈴の音。

下

「今日ね春子さんがいらつしてよ」

「エ？春子さん、あゝ芳雄君の令夫人が」何となく冷笑して。



「話が合つたかね」同情ある目で額垂れた妻の面を窺つた。

「エ、昔のお友達ですもの」上げた面には沈痛な色が現れわざとらしく頬笑んで居る。

「綾あんは春子さんに對して如何云ふ風に感じたね」

「あらそ其樣な事をお聞きなすつて如何なさるの？」

「いや如何も爲んけれど……」と目をそらして幽に肩で太息した。

「綾さんには氣の毒だね」とつと妻の手を取つて、

「此樣な生活をさして……」

「まあ貴郎は……如何して其樣な事をおつしやるの、

私決して何とも思やあしませんは却つて幸福に思つて居る位なんてすもの、ねい貴郎さへ永久も……」

ぢつと良人を見つめた目からはら〳〵と露がこぼれたそして無言で堅く〳〵未來を誓つた。

「あゝそうだ彼の續ぎを譯さなければならない、綾さんは彼の原稿出して終つたのね」

「いゝえまだ、最早少しよ」

「早くしないと又催足食ふよ」

二人は樂しそふに机に向つて。

冬の日は二人の机を照らして障子に寫る木の枝を飛び交ふ小雀の二つ三つ、良人はペンを妻は筆を、たまたま手を止めて睦じそふに語る影は壁に寫つて、掲げてあるバイロンの半身像は二人の樣を見下して居る。

斯て愛の花はいぶせき家にも薫るのである。

咲いて美くしい愛の花、僞もあり、善もあり、美もあり、意義ある生活を描いて、情景殊も新しい。春子を點出し來りて、胸の潮に波立たせる處もわざとらしくなく、良人との對話も情味籠り、いやみを見ず、あかるい作として之を歡迎した(選者評)

◎海の光

本所區向島中ノ郷町三十一、小林方　赤倉とみ子

曉近い鈴川の海岸、岩を衝く浪の音は物凄く砂小石を洗ふてさら〳〵さーつと引いては又ざゝゝざーつと寄せて恰ど衣の裾を延べた樣にすうと廣がつて而して名殘りの綿の樣な泡が漸々に消える。四邊寂として此の外に物の音なく世は爰に又新しき年を迎へむとして居る、此の靜けさを破つて砂を踏む幽な音がしたと思ふ時、「姉樣此邊が好いてせう。」と可愛い聲。續いて聲の主!岩陰から歩み出た十二位のが姉を助けて小高い砂の上に持つて居たハンカチーフをフロリと延べて「さあ此所なら大丈夫よ」姉は妹と瓜二つてふつくりとした品の好い顏立だが如何なる神の仕業か?あはれ十七歳の花盛りを凉しかるべき兩眼は花を掩ふ霞ならて膠もてつけし如くぴつたりと閉ぢられて居るのである「鈴ちやん有難うよ。靜で好いのねえ」と色白の肌に移りのよい古代紫のショールを一寸押へ、片手て妹の手を探りながら並んで腰を下した。「姉樣は此樣な所がお好きだけれど先に東京て鐘の音をかぞへながら加留多のお淡ひをした時の方が餘程面白かつたわ」「さうさうそんな事もあつたつけねえ、私がこんなにさへ成らなければ今年も皆揃つて樂しくお正月を迎へるのに……」と我身の不幸を思へばいつか聲も曇るのである「實際に困るのねえ、此樣にさへ成らなければ芝の

兄樣もねえ」と一寸顏色を窺つて氣付いた如く口を噤むだ「何？え？」と言へど答がないので暫時話も絶えたが何思ひ出してかはら〳〵と淚を落して「それはもう兄樣だつて此樣な片輪に成れば……私はもう一生こうして終る心よ、けれど決して不幸な身では無いと思ふわ、御兩親はお達者だし好きな音樂も習へるし何一を不足なくして居るのは……勿躰ない罰が當るわ、それに鈴ちやんはこう親切にしてくれるし」と淋しく笑つて「ねえ鈴ちやんだけは何時迄も力に成つて頂戴よ私は一番便りなんだから」と胸の苦しさ悲しさを辛くも咳にまぎらせば「姉樣もうそんな悲しい事仰しやつては厭よ、さう〳〵此靜な所でと思つて竹を持つて來たの」と傍の袋より取り出す尺八を渡せば「あゝ人が居なければお日樣の昇るまで……けれど何にしやう」「玉川では」輕く頷いた姉は海棠の莟の如き唇て歌口を濕しつゝ靜に曲を奏で初めた。「山城のいてや見ましと駒とめて……向水かはむ山吹の花の露そふ春も暮れ……」と音は嚠々と響き調は浪の音と和して靜な岸邊には時ならぬ微妙の樂が奏せられた、感に入つてじつと聞いて居た妹は突然姉の袖を引いて「あら、お日樣が出てよ」と。妙の音ははたーと止むてぱたり竹を砂の上に落した、姉は柔い妹の手をしかと握つて「鈴ちやん私は何だかこう樂しくて〳〵もう二人で何時迄もこうして居たい樣な氣がしてよ、もう辛い事も何もない世の中に二親揃つて姉妹仲よくこうして初日の出を拜む事の出來るのは」と莞爾打笑むを妹も姉の顏の希望にみち晴々せしに逐引き入れられ「姉樣二人は幸福者ねえ」と思はずもひしとより添ふて愛くるしい頰には云ふにいはれぬ喜びの色を見せたのである。

初日ノ出を斯う云ふ場合に用ゐた小說は殆んどない、所謂悲壯美の感が起る作て、心境の悲しいのと、景色の壯なると、合體して一の美なる感想を起させる、盲ひたる花の少女が、浪打寄する磯際に「玉川」の一曲を奏するあたり詩趣滿幀、何等の優婉ぞ（選者評）

○喜び

赤坂區丹後町九十八　齋藤茂子

古年の雪うすふ消えのこッて、綠の色いや深き松かざりいかめしき門の少さき名札を見て、國旗に夕日のかたむく頃から車が澤山止まつた。中に四五台馬車も見えた、新築のさほどひろくもない樣であるが庭園のひろい、ユッタリとした建方である。カーテンをしぼると下の方はるかに流をへだてゝ町をながめる西洋風の大廣間、電燈の光り輝きみちて目さむるはかりの裝飾

美しい、正面には、四十位の立派な人物の油繪かゝげてある、其前にどことなく似通ふた二十五六の青年が、感激せまるが如く表情にあふるゝ目をかゞやかして語つて居る、兩側にはフロックコートや羽織袴の紳士、御振袖や夜會服の淑女、が居ならむで、熱心に聴いて居るのである。と彼方のドアを開いて徐に上氣したほほをおくれ毛にハラ〳〵となぶらせて、はいつた愛くるしい令孃を見て少し片ほゝえんでまた青年は話つゞけるのであつた、「て、母は何一つ私の求める物を與へぬといふ事は有ませんてしたので其費用の何れから出るかと、いぶかしく思ふた事も有ましたが、母は少しも申しませんてした、只私が夜學から歸つて參りますと母はいつも細いランプの許て目鏡をかけて針をはこんで居られるのを見まする、」と云ふて側の一段高い所の椅子にかけてゐる黒縮緬の破布をまとふたおかしがたい面の内に柔和な殊に笑ふ時などゞ目じりにしはのよる、なさけ深さうな、切下髪の母を見ると、目を下に落したが、やがて又一段聲に力をいれて、「決して油断をしてはならぬ、と自身の引しまる様に思ひましたが、又必要のある場合は決して私は心を勞しませんでした母は心よく出してくれました、そして母より常に聞きましたのは、父が失敗致した所の醫學を研究して父の名譽を回復せよとの言葉て有ました、それで、父の面影を今日初めて見ましたので有ます！今日迄度度醫學上の書籍の内に此寫眞、此名は見て居りましたので、私と性の同じなる事を母につげましたが母は、いつも他人てあると申して居りました、私は幾度父であつたならば、と思ひましたろう」と少し聲がうるむで「て有ますから、私は父の遺財のあります事も存じませず、父のかくまで醫學上に功あつたといふ事もぞんじませんてしたのは、母のはからひて伯父初め、すべての親戚の者よりしれぬ樣にして有つたのてす！されば今日此所に學士の稱號を得るまで、まよいやすい青年時代を無事に、父の名を汚すともなく經來りましたのは實に母のたまもので有事をほこるので有ます、今日此所に母がつけました衣服は私覺えて初めてて有



おとも（賞外）京都市 濱部郭公女

ます、決して老いた身にも絹物はつけませんて有ました、……イや話があまり長くなりまして大に失禮致しました、今日はどうぞ充分興じていたゞき度ので有ます、」すと、徐々に段を下ると、ピヤノの音はいづこともなく通い來て、和らぎの室に滿ち渡るのであつた。

强て主張を言へば敎育小說とでも言ふべく、新しい敎訓の意義が含まれてある、斯う云ふ種類のものは兎角かたくるしくなり易いが、やはらかに趣味深く書きこなされたのは作者のお手柄であらう（選者評）

秀逸

○姉と妹

失名

人形と面白く遊んで居た八重子の、何思ひだしたか、姉のそばへ來て針持つ手を取り、「姉ちやん大阪の母ちやん處へ歸りましよう、私こんな處いや、早く歸りましよう」と、せがむのである。小供心にも田舍の秋の夕暮が身にしみて淋しう思うのであろうか、姉はなんとなぐさむべき言葉も出ない、むつがる妹をひざに抱寄せて八重ちやん「アノ大阪へ行つてもね誰れも居ないのてすよ」と云へば「母ちやん何處へ行つたのエヽ何處々々」と姉の顏をのぞきこんて「姉ちやん何うしたの泣くの、いやだわ、私し無理云はないから姉ちやんも泣くのいやよ」今云つた事の心づいてか妹にかく云はれて淚をハンカチにてふき「オヽそうでした、姉ちやんが泣くと八重ちやんも悲しくなるのだつたね、よしましよう、八重はお正月がすむと此處からお隣の梅ちやん等と同道に學校へ行くのてすよ、そして十五になると、大阪へ歸りますのね、わかつて八重はほんとうに、怜悧ものね」と云ひきかせば分つてか分らずにか、うなづいて「あの姉ちやん乳母は歸らないわ、私門戶へ見てきまちよう」と戶の外に立つて居る後すがたの可憐さ、愛らしさ、ほんに淋しいも其はず、私と乳母の外たよりとする人もなく、何を考へてるのであろうかあの胸に、母上さへ此世にいませば、何不足もなく三人が睦まじう暮すべきに、まゝならぬは浮世、賴みがたなきは人心、忠實らしき良吉のあのしわざ、母上の三十九日も濟むや濟まぬに大金持ち出して今に行く處も知れぬ始末、氣の毒なのはあの乳母、こうして二人を引取つての世話、奧様への御恩送りと、何から何迄我子の様に親切にして、もう氣の毒でならないゆゑ、せめてもの手だすけと、しなれぬ賃仕事、何事も浮世々々とあきらめ只八重子の生長と、あの方の御

卒業を待つばかり「オヤ私とした事が火もともさないでいたわ、八重ちやん早く御入りよ、乳母やまだ歸りませんか、「姉ちやん乳母や何處へいつたの、早く歸るといゝわね、今に歸りませうから待つていらつしやい、お土産がどつさりありませうからさあ御飯に致しませう」「姉ちやん乳母やが歸つてから御飯にしましよう、ほんとうにおそいのね」夜の色はいよ〱深くなつた、虫の聲はいよ〱高くなつた、晝さへ淋しき田舍は夜に入りて人通もなく、足音すれば待つ人かと見れどそれにてもなし、二人の頼みと思ふ乳母は、姉妹の爲に少々の金策に大阪なる八重子、すみ子の伯父の家へ入つたのである、二人のみなしごさへ引取ると云はぬ情なき人、乳母やの頼みを聞き入れたてあろうか。

汽笛は今の前きなつたがまだ乳母やは歸りてぬに、二人の姉妹は門戸へ出て東の方のみ望めて居る。

姉も妹もかわいさうな境遇が能くあらはれて、子供心にも故郷慕ふ秋の夕の淋しさは、文字以外の韻致、さるにても是ほどのやさしい作を書いた人の名も住所も知れないとは何うした事てあらう、原稿には抜けて居る、わざとてはなく忘れたのてあらうが以後は注意せられたい(選者評)

○清き懺悔

佐世保　初瀬滴水女

近郷近在て名高い蓮の名所、晝は少さな子守娘等の唯一の遊び場所だが、夜になればそれはそれは寂しい西方寺の境内に登つて來た二人の少女がある、一人は年は十九計り、二十とはなるまい、一人はそれよりも三ッ四ッ年上らしい、共に傍の松の木に腰を下して、先ず年上の女が口を切つた、「文さん、何なの、最前貴女が懺悔すれば心がすまぬと仰言たのは」文子と呼ばれた女はひどく打ちしほれて居る「あの事ですか、私思ひ切つて貴女に計り御話しませふ、こんな崇高景色に對しては本當に懺悔せずに居られませんわ、ね道さん」文子の眼には涙が宿つた。

「丁度私は狼の群から取りかこまれた羊の子の樣ですわ。いつ殺されるかわかりません、人道とか戀愛とか云ふのは狼の樣な人間が慾を滿たす餌にすぎません」道子の顏はだん〱うつむいて來る、文子の顏は益々靑ざめて來る。

「私まだ貴女に御話して居ませんでしたが一月計り前までは、戀し戀人と云つては何だか變ですが、ともかく仲のよい人が一人居ましたの、小學校の先生して居ますわ、今でも。

私その人を信じ切つて居ました然し其の人は私を見捨てましたのです、私は終に失戀の人となりました、而

してその先はお定まりの厭世てす、當座は死のふとまて思ひつめました、そして一層死ぬならその人を殺して死のふと考へた事もございました、本當に私は今から考へればどーしてあんな考が出たらふかと、思ひますわ」

文子も道子も無言、二人とも眼からは涙がホロ〱流れて居る。

「あゝ私は實に罪深ふございました、こんな景色に對しては猶更悔悟の心が湧き出てますわ……………」

堪へ得じな此の想、文子はワッと泣き出した。

「文子さん、懺悔すればその罪は消へると思ひますわね、そんなに御泣きなさらんても」

道子のなさけある言の葉は文子には心の奥まてしみ込む如く感じられるのてある。

一しきり吹きすさぶ風に枯れた木の葉がハラ〱と二人の前に落ちた。

文子は今更の如く親友の深切を感謝して道子の手をにぎりしめるのてある。

さんげ其ものは豫期されたほど深く詳しくない、此作の人を動かすのは知つて其塲合と周圍の景と、友情などてあらう（選者評）

○ゆく〱雲

岩代　服部水仙子

「忘れもしない僕が十三の時だ」術なげに溜息ついて一雄は、吸ひさしの朝日を灰につき込んだ手を靜に組んて凝乎と眼を閉ぢた。

「暴れ盛りのわけて家格の言はする我儘三昧、見るもの聞くもの自分の思ふ儘に振舞つて、若しも其意に逆ふ者があつたなら、それこそ片端から鐵拳を振り廻すと云ふ按排て……年の割には力も强かつた……て僕の目には大人とて恐ろしいものとは映らなかつた、女や子供だとて控目にはしなかつた、手下をそゝのかして芋畑を荒したこともあれば、毛虫を握んて人の襟元へ投げ込む位は常のこと、あらゆる亂暴を逞しくして居たものてあつたが或る日のことだ」

「學校て例の亂暴をやつて、終に教師に隣室に起立を命ぜられたのを、逃げて歸つて勢よく裏門から飛び込んて見ると、君、君には未だ話したことは無かつたが僕には一人の姉があるのだ」幽に眼を開いて客はと見れば、これも組んだ片腕は胸に、片手に美しき髯を弄びながら靜に耳を傾けて居る。

「其姉がそう慥か其頃十八だつたと覺えて居る、其朝取る取らせぬの爭ひの果、畢僕我を通して捕ひて置いた雀籠の、其戸を今開けやうと仕てるぢや無いか短氣

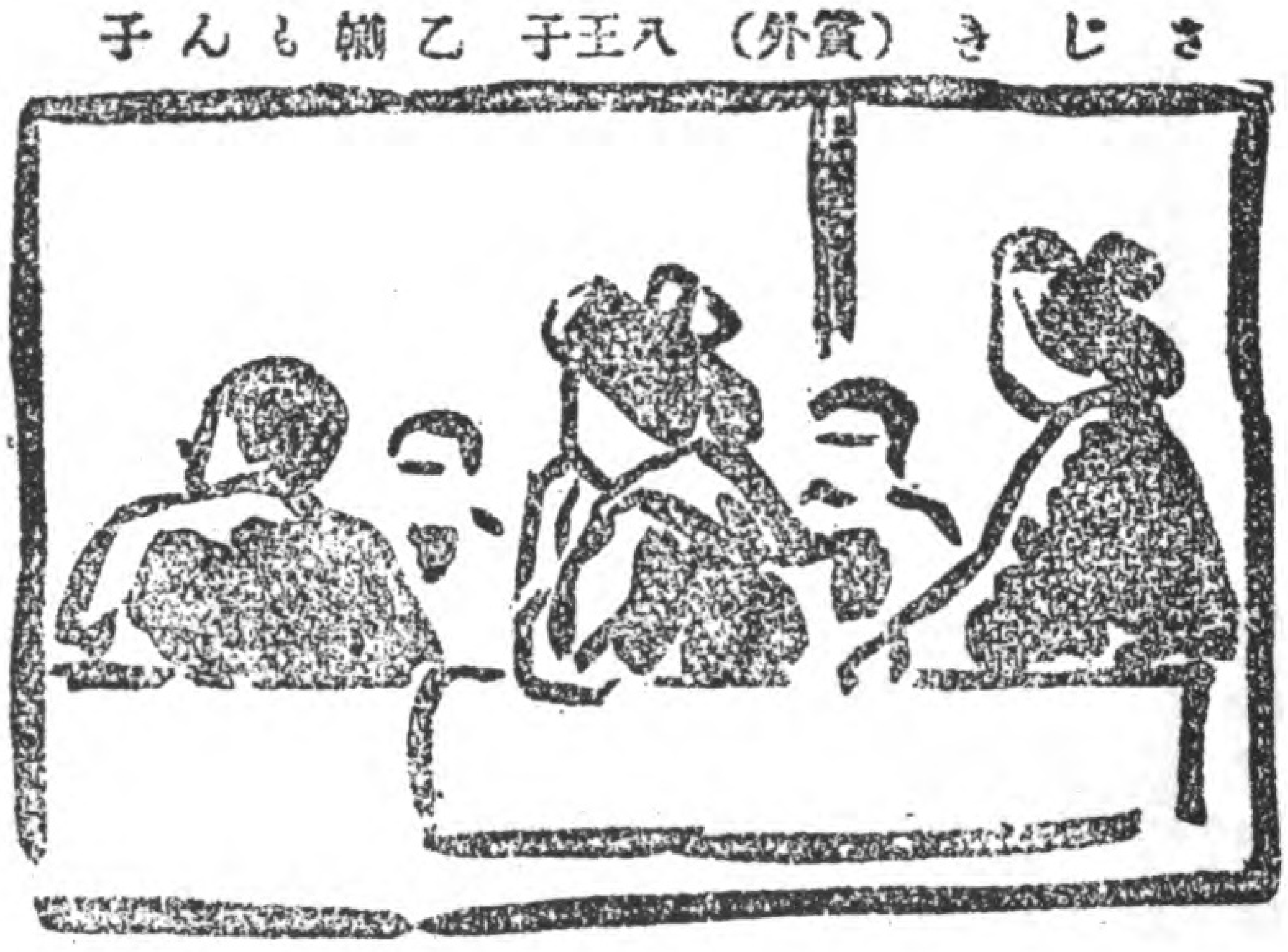
の僕だ、何するつと一言躍り掛つた時はもう遲い羽ばたき強く雀は飛び上つて見る間に姿も見えなくなつてしまつた、さあ赫然となつては前後の見境も無く僕は生憎と傍に有つた手頃の石を摑むより早く……消魂しい叫び聲に自分もはつと氣がついた時は如何だろう……押へた兩手の指の隙間からポタリ〳〵と滴る赤黑い血……」

「三日惱んで一月ばかり病んで、片目ばかり現してた繃帶を取り除けた時はもう……見る影も無い不、不具者であつた！」

固く閉ぢた睫毛からホロリと一滴頰に傳はつて、一文字に結んだ脣の顫かすか。

「姉を不具者にした！の一言は如何に僕の胸を打つたか見るに忍びない姉の顏を如何したら避けられやうかと悶えに悶えた揚句が明くる十四の春、飜然と村を去つて目ざすは音にばかり聞えてた東京、丸二年と云ふものは紙屑も拾つて步つた、ボーイにもなつた、或る時はまた博徒に養れたこともあつた。イヤもう其後のことは語るまい、君が皆知つてる筈だ」

裏庭に落葉掃き集める音高く、何處からか一葉、銀杏の葉が吹き入つた。


さじき（賞外）　八王子　乙幡もん子

「君、察しても呉れ給へ、決して醜い方ではなかつた姉は花の盛りを僕の爲めに散らされてから卅四歳の今猶、獨淋しく故鄕の一間に閉ぢ籠つて居るのだ」

「すまぬ、君、考へても見て呉れ、如何に強ひられたからと謂つて僕一人、美しい妻を得てそして樂しい夢に耽つて居ることが出來やうか……雪江孃の眞情はいつもながら、感謝して居る、決して〳〵愚かに、思つて居ない、けれども其清い熱愛を受けることの出來ない僕の身にもなつて考へて呉れ給へ」

「イヤ能く解つたよ」靜に默想の頭をあげた菊地貞夫、彼の決死隊に其名も高き我友、海軍中佐戶山一雄に、妹雪江が切なる思を打開けて、ひたすらに彼が平常の無妻主義を飜すべく說いたのであつたが、姉に義理立つ一雄が決心に動かされて、解つたとこそ謂ひさて戀に惱める妹を何としよう。

悵然として腕を組める一雄の張りたる肩越しに、土堤の柳の縺れ合を、憎しと眺むる心に響く晚鳥一聲、空

には頻りに行く雲の足はやし。

能く似た趣向はあつたやうに思ふ、必ずしも獨創の筋ではない、只行文の妙、一字一句も忽にしない作者の用意はいつも敬服に値ひする（選者評）

○めぐりあひ　名古屋市　楓の花

似てる、眞個に能く似てる、横顔だから明瞭とは解らないけど、何うしても彼の人だ、彼の人に違いない、何、違つてたところて、謝まれば濟む事、一寸聞いてみやうと思つて。

「彼の貴女、若しか人違でしたら濟みませんが、貴女は今木のお澄様じやなくつて？」

私は思切つて斯ういつて、自分と差向に腰掛て、片手を窓に頬杖突いて、うつとりと外面を眺てる、嬌艶ぽい人の袖を引いてみました。

と彼方は徐いて此方を、振返りましたが

「あら！貴女はお清様ね、厭だわ私、全然見違ちやつたんだもの：：：」と向直つて、

「先ア、暫くの間に、概う丁然奥様ね私本統に見違ちまつてよ、ても丸髷が宜く似合つて、善い奥様だわ」

熟にと顔を視られて、私ははつと赤く成つて俯向て仕舞ました。

雖然！變つた？變つたとは此方の云ふ事洗い髪を根の低い銀杏に束ねて、荒い辨慶縞の素袷に博多と黒繻子との、晝夜帯を引掛に結んだ：：：噫是がお澄様とは：：：昔の儘の可愛い口許のほくろが無かつたら、私は倒低お澄様と呼んでみる氣は出なかつたでしやう。

お澄様は四五年前、琴の稽古で姉妹の如に仲好くした私のお友達、容色好て悧巧者て、音樂が達者て、中てもバイオリンが一番得意でした。自分は女學校を卒業したら音樂學校へ入學る者望だつたのを、十八の春、何でも材木屋とか、可成の財産家から縁談があつたので、兩親が慾に目が眩れて、無理にお澄様を其方へ遣る事にして了つたのだそうです。

輿入の其晩家を出る時、お澄様が俥の上から「お母さん、私嫁つたつて直ぐ離縁て來るんだから、荷物なんか、悉皆よこさ無くつても可いよ」と言ひなすつたとやら、彼麽花嫁さんは見た事が無いと、琴の師匠があきれて話してましたが、お澄様のあの氣性ては、甚麽に心外だッたろうと、私は本統に氣の毒で堪りませんでした。

其儘間も無く、私は此方へ嫁つたので、其からの事は

少しもきゝませんてしたが、異逆此麼に變つてゐやうとは……私は何とやら涙ぐまれて參りました。

「貴女何處まて？」

「エ、私？豐橋、概う此次なの、彼の貴方は矢張名古屋の？」と聞きますと

「オホ、彼麼家なんか、いつか出ちやつてよ、何うせ私みたいなものは、何家へ嫁つたつて長持はありはしないわ」と蓮葉にいつて、寂しい笑。

「其麼事はないけど、彼麼に希望てらした目的が、不可なくなつたんだから誰だつてねう、本統にお推察して。」

「有難よ、雖然お清樣、私は結句此方が氣樂で可いと思つてるわ、生中何々女史なんて、人に立られて究屈な思するよりも、仕度儘の道樂商買で、旅から旅へ飛びあるいてる方が、面白くつて、餘程私の性質に合つてゐる、何うして暮したつて、一生だもの……」

投げるやうにいつて、拔いた銀簪で、じれつたげに前髮を掻きながら。

「お清さんには色々話したい事もあるんだけど……」

わかたけ（賞外）　南多摩郡　金子信子



一寸小首傾て。

「吉本座てのは、確豐橋たつたわね、それじや私近いうちに行かも知れないわ、左樣したら其折には、いづれまた……」

嗚呼!! 吉本……、それてはお澄さんは……

折から滊笛が一聲ピウとなつて、滊車は轟々と豐橋驛に這入ました。

これも人の世の姿、丸髷と、銀杏返しと、身の成行は變つて行くけれど、昔なじみの顔おぼえに、氣象を知ればこそ、其人の哀な境遇にも同情する、汽車中てあるだけ人生行路の圖が一層あきらかにあらはれた（選者評）

○花紅葉（上）

日本橋　小林櫻花

麓の岡に耻かしく紅を粧ふ花紅葉、鳴く牡鹿の妻戀ふる秋の中旬、四疊半の書齋の机に倚り掛りて二人語り合ふは鶴岡勝一と云ふ法科大學生と妹の綾子である綾子は芳紀十六、流行の束髮は何處となく氣高に見える「お兄樣今日は何處へも御出掛なさらなくつて？」急須に湯を注ぎ乍ら兄を見上た「さうだね午後から五二會へでも行つて見やうかと思つてもゐるが」と煙草の灰を落している「そう妾も今にお兄樣の御嫁に……あの妾の姉

様になる繁子さんと午後から行つて來やうかと思つているのよ、御兩親も行つてもよいと云つていらしつてよ」「綾ちやんは中々口が惡くなつたね」「えゝ兄様、妾なぜ口が惡いのです本當の事を云つて惡るければ噓を云ふのですか、此間兄様が常に信實を語れと云つて華盛頓のお話をなさつたじやありませんか」「さう一々槍込ては困るね」

（中）

一時を報ずる時下女のお竹は狼狽しく書齋の襖子を開けて「草尾様が御越になりました」と取次たれば勝一の讀み掛けのブックに枝折を狹んで「草尾君かッ！通してくれ」下女は辭儀して去つた「やあ失敬、大層御勉勉ですなア草尾は例の調子「何も勉强じやない餘り面白いから見ていたのだ、君此所へ來たまへ、さア之へきたまへ」手づから敷物を進めた「時に君ア五二會へ行つたか」「いや僕ア今日行かうと思つたのだ、妹も行くと云つていたつけ」「アゝさうか」時計を見ながら亦言葉を續けて「一時過だから長くは見れんが一寸行てからうじやないか」袂よりはハンカチイフを取り口のあたりを拭ひながら語り居る途端、綾子は茶盆を持つて入つて來た「草尾様よくこそ、暫く」と恭しく挨拶して宇治の香床しき銘茶を注いだ。

（下）

綾子の注ぎし茶を飲みながら一時話の根は絶えたが草尾は口を切つて「君」と呼んだ「僕ア君に何時から云はうと思つたか知れないが君の顏を見ると云へねが君本當にきいてくれたまへ」「何んだね僕ア君と交はる事亦年久しいがだね、その様に君があらたまつて僕に話すのは初めだが何にかね」「實つア…あの君のシスターにラブをしてゐるのよ、之だけ云つたら僕の胸が開けたと云ふのだ」首はうなだれた「ハゝゝゝア其れは草尾君本當かな」「君は本當かとはひどいじやないか」「本當なら僕も云ふが妹も君にラの字だよ」「君はそれだから困る僕か云つたらすぐからかつてしまうから」「本當だ、草尾君共に好みやいしているなら少しはからかつても好いじやないか」談話益々しめやかなれど暮るゝに早き冬の日は早や西山に彩を映して鐘の聲、煙霧の外に響いてゐる。

かう凡てが喜劇的に行けば、世に煩悶する男女もなからうが、又實際斯う喜劇的なのもあらう、直情徑行の貴ばれる若い人達の理想の夢は此一篇にあらはれて居る（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

二等

花の魂ひそかに誘ふ夜の風に
天なる鈴の音なりやまず

安房 佐久間ノ里 暮の山

〔評〕幽遠

三等

三年ぶりをさな心にまりつけば
君笑みましぬ我が手たゆたふ

小石川區 武島町十八 木塚紫水

〔評〕艶麗

四等

つよくいひて出でし都の秋六年
そゞろに戀し柿赤き村

上毛碓氷郡 東横野村 磯雅井菫子

〔評〕逸情

○

秀逸

奈良 せい子

思ふこと言はで暮れにし雨の日を
机にさびし水仙の花

三河 しぐれ女

○

かくて遂にいづち行くてか手によりし
芭蕉の葉蔭さても戀しき

弘前 てる子

○

ふるさとの歌うたふ子の聲低し
工塲の窓の夕ぐれの雨

磐城 村岡花月

○

笛の音の主を戀てこゝに三年、
心亂るゝ白萩の月

下總 隆子

○

御髪梳く病の母のほゝ笑みに
淋しうこぼる山茶花のはな

埼玉 夕月

○

院宣をかしこみ帶びて駒はする
嵯峨野のあたりたゞ尾花かな

信濃 帶刀きさへ

○

六條の大路小路に秋たけて
尊轎寒う雨にぬれゆく

信濃 成澤とき子

○

雲に見る愁の影をそゞろにも

笛の音止めて思入る哉　豐後　平山良子

◯
別れにし人を戀ひなく此の夕べ
小庭の芙蓉雨にみだるゝ　伊勢　守岡みちを子

◯
そのあした露の一枝を奥都城に
手向けて過ぎぬ花賣少女　伊勢　乙部菊子

◯
朝月に唄流し行く花賣の
鬟のほつれや初秋のかぜ　神戸　河村津子

◯
故郷の夢あたゝかきまどろみの
さめてつめたき秋雨の窓　近江　はる子

◯
うけて舞ふ天津少女の袖もがな
おぼろ月夜に櫻散るなり　やす子

◯
枯野らを凪に追はれてたゞひとり
旅にゆく身に夕日冷たき　本郷　朝井綠子

◯
なやみ有る胸抱きつゝ窓に寄れば
秋海棠に雨細う降る　芝　入江茂子

◯
西愛宕東比叡に霧こめて
花うるはしき京の町かな　安房　白百合

◯
星さえて夕野花なき淋しさに
地に怨すれば蟋蟀啼くよ　安房　大井秋月女史

◯
春の女神快樂の鼓野に打てば
花紅に霧たち昇る　安房　水哉子

◯
天地に朝の光りゆらめくや
聖者夢よりさめしに似たる　房州　夢の家

◯
世を人を圓滿なるべきものとして
吹けば望の夜笛の音もよき　愛知縣　毛利とく子

◯
はら〳〵と散りてみだるゝもみぢ葉に
秋をかなしむやまの溫泉の宿　埼玉　吉敷里子

◯
悲しみはとこしへいえず我胸に
ありと思ひぬ夜の雨きけば　石見　三好おりの

◯

紅梅の三日四日はやさひと枝を
ゑたせて送る寒見舞かな
麹町 野菊子

○

餌をやると日なたの椽に鳥籠すゑて
笑顔ならぶる姉妹哉
長崎 小笹顔子

○

何となく飽かぬ夢みてうつゝにも
人や呪ふと思ふ朝かな
飛騨 萬さよ子

○

歌誦する妹が姿はあらずして
萩のあづま屋夕月さむき
徳島 佐藤ふみ子

○

天つ女が額にかざりし玉やこれ
すゞしう笑める露眞白珠
やすみ

○

露添へて都の友に送らばや
いて湯のみちの白萩のはな
上毛 五十貝すゑ子

○

歌反古をひつきにかへてかなりやの
なきからうめぬ連翹のかげ
上毛 眞砂壽子

○

父君のうせしをしらで此秋も
たづねきましぬ京の書だくみ
豊後 後藤さゆ

○

金色の髪ふるふ獅子に似て
をゝしうつくし夕ばえの空
三重 帆山靜子

○

繪ぎぬのべてあるじはあらぬ小春窓
はら〳〵散りぬ山茶花のはな
千葉縣 林霞江

○

畫眉鳥に野守が夢はぬすまれて
廣野の霜に曉の氣ゆるゝ



晴著（賞外失名氏）

○ 横濱市 齋藤とし子

高らかに鷄なくや東の御空ほの〴〵初日生れぬ

○ 成田 紅涙女史

黄昏の枯野辿れば歌思ふ我又歌の人となる哉

○ 和歌山 太田光子

吹く風に水なき空をゆく舟のかぢとるぬしは木枯しの神

○ 信濃 有賀まさ子

海の香はわか身をめぐるよろこびと年の新しほあふれてよりぬ

○ 三河 鈴木梅子

たまさかに君かり訪へば葎路秋ざれの日を虫啼き出てぬ

○ 麹町 野菊子

美はしき土彩の雲を法衣にて現はれましぬ春の大神

○ 麹町 まぼろし工

華やかに初日がなげし影うけて村の老松みどり榮えあり

○ 金澤市 かほり子

初日影千とせの影もうつるかな門邊流るゝいさゝ小川に

○籬垣の玉子肌に泣かせつゝ過る枯野を夕時雨かな　下野　大原のよ子

○眉白き法師が琵琶の曲終えて運命身にしむ夜を秋の聲　新潟　菅原草舟

○花園にとり／＼咲ける秋の花いづれを取りて父に手向けむ　佐賀　江副梅千代

○富士の森の木立もくれはてゝゆふべさびしくはつかりのなく　姫路　白菊子

○はら／＼と紅葉の錦みだれ落てまひる静けし山かげの庵　讃岐　操女史

○牛しかる翁の聲は遠くなりて牧場の草に霧さふのふる　若松市　石井秋浪

○秋深くおこつ虫の音身にしみてはかなき浮世又なげくかな　小倉　松江孤舟

○黄昏に物思ひつゝ仰ぎては母ます方の浮雲を見る　群馬　かるかや

○紅葉ほろ／＼落ちてうたゝねの小猫おどろく寂静かなり　北越　渡邊一枝女史

○荒鷲のあらぶがまゝにまかせおきし遼東の野に白菊香る　奈良　岸田たれ子

○隣の人數の人と笑みかわし合はぬ調を興がる夜ふかな　越前　新保露子

○千代興母にすゝめて爐のほとり僕あむ夜を木がらしのふく　神田　迦月女史

○別れ行く妹の影の小さくなりて夕月高し松原の道　京都府　大田松江

○君が代は千代に八千代に末ながく契やこめむ白菊のはな　徳島縣　関みれ子

○沈みゆく夕日のひかりうつろひて山を包めるさぎりうつくしき　潮信　松汀子

○風凪ぎて波に夕日の影淡く入江三里に金波ゆらめく　牛込　泉三乃子

○病む姉のみとりする夜を少まうもかたへに寝れし時思ふかな　美作　玉子

○佐保姫が織りなす錦分け入りて今日も聞かなん鹿の鳴く聲　豊前　早月女

○飛ぶ鳥のいぱん淋しき田の畔や豆さゝならし秋の風ふく　うきぐさよれ

○水車めぐる川添たそがれて夕べ遠山路に消え行く　常陸　白ゆり子

○露はしや花とちりにしますら男の魂さまよふ遼東の空　石川　白百合

○破れ垣につゆをいのちの綴として匂ひいでたる白菊の花　安藝　みどり

○何事を細語らんか秋風に絶えずうなづく枯れすゝきかな　伊勢　守岡みどり子

○窓のもと落葉にすだくこほろぎの身に泌む夜を御祝守る　揖水畔　奈賀多野子

○亡き友の宿をくりてかへり来る松原三里秋の雨下る　豊後　藤園舎女史

○御代なれや我が郎埼の陸師にまゝやき渡る新春の風　埼玉縣　高山ふく子

○月澄みて遥く遠しげき秋の夜に雁の一群北へと飛びぬ　伊勢　乙部菊子

○我が胸のもだえはかうと緋牡丹の花を流しぬ君住む里へ　伊勢　中村つれ子

○月かげのさえ行く夜半を寂として沖邊はるかに千鳥なくなり　伊勢　中北春子

○古瓦おちて苔むす廢園に黄昏告ぐる虫の聲かな　下野　櫻女史

○うなひ子のまゝごとすなる日なた縁さゞんかの花ほろ／＼と散る

○　三河　溝口きい子
秋の野べに千草の花のいろ〳〵におもひみだれて虫のなくらん
○　山陽　紫露子
里の娘が菊の花摘む秋の日の野はあたゝかく蜻蛉むれ飛ぶ
○　海南　芳枝
うたゝねの夢よりさめて打ち向ふ鏡にうつる夕栄の顔
○　大阪　金森よしゑ
母こひしふるさとこひし秋の夕もの思ふ窓に月さえわたる
○　岩代　郡蓉波
法の師の讀經の聲にいま絶えて窓訪ふ風に紅葉一ひら
○　備後　松本蓮子
江の水に夕日は淡くうすれ行きて月に澄むらむ角笛の調
○　周防　三宅幾都子
見わたせば風のみかよふ冬がれやひとり香れる白菊の花
○　静岡　高柳定子
色あせて垣根に殘る白菊に翅やぶれし蝶の訪ひきぬ
○　下総　伊藤道子
秋の雨の音も淋しきよもすがら母のやまひをみとりするかな
○　上毛　関口初子
をさなとち親しかりにしその人にゆくりなう逢ぬ村はづれ道
○　北蝦島　梅香
うたゝねの夢のしばしを蝶となりてすみれ咲く野を西へ東へ
○　出雲　世良むらさき
山守が酒温たむる松葉火の消えなんとして暗く鹿の聲
○　南多摩　金子信子
思ふこと胸にあまりて恥しやいかにせしやと母にとはれぬ
○　福井　巴姫
おばしまに思はてなき身をもたせ磯松ならす秋の風きく
○　麹町　浅井千鳥子
秋雨のわびしき窓に歌誦して君待ち居れば萩ちりみだる
○　上毛　つぎ子

有月夜枯野の原をさまよへば秋風寒しうらぶれの身に
○　武蔵　伊東群子
年若き畫工一人欄によりてそゞろ見送る行く秋の空
○　志摩　小林政江
窓あけて手まねく人のいと若し京のはづれの梅さけるやど
○　南総　赤星女
秋の日はひろき牧場に低う落ちてわらべの羊よぶ笛とほき
○　神戸市　藤堂清子
みがきえぬ心をぞ思ふすめる夜の月のかゞみにひとりむかひて
○　信濃　櫻井操子
我とわが心のうちに慰めてひとりほゝえむ逝く秋のくれ
○　周防　井川春子
夜をさむみ障もる風の身にしみて燈火暗く母の咳入る
○　鹿児島　大津喜和子
打まねく尾花がもとに立ちよれば人まち顔に野菊笑みたり
○　巣鴨　本橋好子
新らしき港波にすがり姉妹涙にくるゝ秋の夕ぐれ
○　長野　桐原登志子
大路行く人の話も此頃は寒さ談ふ外なかりけり
○　美濃　鵜島芳翠
風ふきてさゞ波なせる穂すゝきの影に高きよ秋の野の月
○　下野　あら川三枝子
さらぬだに思ひ亂るゝ此夜半を友におくれし雁なき渡る
○　赤坂　内田きし子
木下やみひるものすごきみ社にかゝれるかゞみ神さびにけり
○　備中　大山芳子
白菊の花の雫に筆染めて書きて送らん君戀ふる歌
○　麹町　今井下枝
風寒み母そのかげを思ひねの夢路のすゑのふるさとの山
○　神戸市　木田しげ子
来む年は斯も悔ひじと去年の今日の契顧ゐる年の暮哉

○　大阪　山崎京子
旅人の私語たえて夜はふけてひとりねられぬ汽車の旅かな

○　麹町　田中常子
なつかしき君がおとづれ手にとりてうれしかりけり秋の夕ぐれ

○　佐賀縣　陣内登代子
すきまもる風に夜の間のゆめさめて枕べ近く鈴虫のなく

○　牛込　細谷すみれ子
酒しひられてそとぬけ出てしおばしまや風折々に桃の花ちる

○　柴瀧　落葉紅子
み社に今宵滿願の祈終えて老女ほゝ笑むおぼろ夜の月

○　神戸　河村りつ子
月落ちて露いとしげき秋の夜に雁の一聲たれ訪づるゝ

○　本所　ます子
いろ／＼の鳥を女神の放ちたる樣してあけぬ湖の雲

○　富山　壁子
かれわたる尾花がもとの虫の音もかなしむにゝたる秋のくれ哉

○　滋賀縣　松ヶ枝
去年植ゑしにはの紅葉も色つきぬかへりきまさぬ君うらめしき

○　豐後　向井花子
黒髪に香たきこめて夕ぐれを母ます空の雲眺めけり

○　安藝　曾川美代
詩姫の萩の小庭にまひませばみ袖のまに／＼白萩のちる

○　美作　性全家女史
故里をさして行くなるかりがねよ老ひたる母の夢な驚ましぞ

○　直江津　しづ江
女馬子唄うたひつゝ里川の土橋過ぎ行く秋の夕暮

○　香川　花江女史
月きよく虫の音しげき秋の夜半かみよ此世に詩くだしませ

○　鹽谷梅乃
菊咲けるま垣のもとにいぬころのれつれあそびて晝靜かなり

○　石川　あけぼの
胡蝶舞ひ鳥なく園をわけゆきて小狗の墓に萩かざしけり

○　神戸市　今田櫻町
何となく深山淋しき秋のくれ紅葉ばちりて鹿ぞなくなる

○　甲斐　ちかふじ
業なりてわれ行けばとて故鄕に待つらん父のなきぞかなしき

○　石見　さゝふれ女史
しなり月のたま／＼かろき朝晴を牡丹くづれて白き蝶とぶ

○　茨城　隆子
風よふけ木の葉ちりしけかくてこのおもひて多き秋よとくゆけ

○　長崎市　瑞富あさ子
朝夕にたのしく向ふ文机は我身を立つるしなりなりけり

○　三河　中島磯子
照りもせば故鄕の空のこひしきにくもれ旅れの夜半の月かげ

○　上總　林楓江
秋の霧貫びてゆふべの露に消えし雁の和毛かおまぎらふ雪

○　備前　久子
秋の夜の月さす窓に只一人逝にし友の上なしぞ思ふ

○　美作　秋吟女史
露深き秋の山路を分け行けば木の間もれ來るさな鹿のこゑ

○　伊豆　上原露葉子
幽細き山越の道な菅笠の二つ暮れ行く野のたそがれ

○　伊勢　中村てつ子
花ならば雨になやめる海棠やあはれわが身の榮はなくして

○　奈良縣　中宮よしみ
詩姫がこぼしおきける涙にやきゞくに宿る白玉の露

○　富山縣　すみれ
菊の花賤が庭にも咲くみればあまれき君が忠しらるゝ

○　神田　入太ゆかり
駕ながきくすし白馬に跨りて行くよ小春日古手かざしつゝ

○　秋田縣　比良多磐子
來ずなりし花賣少女誰やらに似しとばかりにしのばるゝ哉

○ わがやの庭のもみぢ葉散りはてゝいざかきよせて酒煖めむ　北海道　梶　水仙子

○ 埴へかれて小琴とりいでてなき夫の好みし曲を奏でゝも見つ　名古屋　梶田愛子

○ 逝く秋をかなしと云ひて泣く友をなぐさめかねて吾も泣きしか　陸中　正木しらはぎ

○ 雁ちらひて月にそむけし紅ゐの顔につめたく白梅のちる　徳島市　藤谷あい子

○ 京の町小春日和の店さきや扇折る人烏帽子塗る人　堺市　竹曳文子

○ 閑寂蕭る秋の聖堂に詩誦せば御名を宣るなり我が耳へ神　常陸　石崎ふく子　秋の夜（選外）

○ 野ら衣ほす賤の垣根は荒れつれど一木かをる白菊の花　南多摩　村田かつ子

○ 破れ垣に匂ふ白菊手折りきて父のみ墓に供へまつらむ　常陸　鈴木貞子

○ よなく〳〵に月を宿して人しらず戀をさゝやく谷川の水　伊勢　露の舍女史

○ 新玉の年をことほぐもろ人の袖にもかをる庭の白うめ　盛岡市　縫　つき

○ 朝の雨を京の少女とおしむかひめてつゝきゝぬ川添ひのやど　芝　川島たつ子

○ 一人病みていでゆの宿の園のまど淋しき今宵二十日月見る　磐城　許　斐のぶ

○ おのづから書のしをりとなりにけりはら〳〵と散るもみぢ一ひら　尾張　加字田愛子



○ 誰ひとり音づれもなき夕ぐれに聞くもさびしきふる寺の鐘　府下　鵜澤董子

○ 夕暮に草笛吹くは誰が子ぞや高き調べに桃の花散る　横濱　吉川清子

○ まちわびし友は來らずけふもまた百舌なく背戸に秋雨のふる　上毛　岩　蔚子

○ 月白く眞砂をてらす砂の海駱駝歇し影黒う引く　群馬縣　芳山常盤子

○ あれはてし庭の垣根に咲き出てゝかをりゆかしき白菊の花　千葉縣　石原三枝

○ 紅葉の散り浮く時は白川の名のみばかりぞ流れ行くらん　美作　性全鈔女史

○ 月宵故郷の空に雁ないて老の殿覺やいかにあるらむ　高松　玉識女

○ 妹よよく訪へりともの給はて御墓の松に只秋の風　石川をばな

○ 別れにし君しのびつゝ今宵またみ文いだきてひとり月見る　名古屋　林田糸子

○ とふ人もなきかくれ家に千代かけてかをりゆかしく白菊の咲く　下野　根岸秋水

○ みいくさのせこが歸りておしれ知る今年の秋はにぎはしき哉　信州　内山春江子

○ 君を戀ふ心も今日は亂れけり思ひ出多き秋の夕暮　西播　土井かつ子

○ 亡き妹の日記くりかへす長き夜を雁なきわたり小雨そはふる　愛知縣　林ゆき子

翡翠色の羽に夕日の影うけてかはせみ庭の樋をかすれとぶ　大坂　俵　文子

○　羽後　前田儷女史
色も香もたへなるのみか盛りさへひさしかりけり白菊の花
○　靜岡縣　石神喜惠子
癸てんの小琴破れて夕暮たゞわが胸痛し秋さめの窓
○　陸奥　加藤美枝
うつむける秋海棠の花の上に痩せたる蝶の一とまれる
○　若狭　塚本ふさ子
兄君のかへりをそしとながむれば雁高く月澄み渡る
○　千葉縣　尾張榮衣
仕置場のあとゝ聞こえし古塚のあたり眞白に薤草咲く
○　岩代　岸野菊子
病む母の藥もとめて賤の子のいそぐ夜道に霰たばしる
○　茨城縣　前原琴子
心なき虫もなくなり八千草のなかば枯れたる山寺の秋
○　備中　稻木智惠子
たそがれや與作が馬の過ぎ行きて跡涼しくぞ鈴蟲の鳴く
○　神戸　櫻井白菊
山深み鐘のひゞきは谷に落ち淋しさせまる秋の夕暮
○　美濃　西村秋子
桐の葉の一ひら散りし夕ぐれにあたりさびしく寺の鐘なる
○　兵庫　柳田白百合子
母まさば共にめでんを母まさば歌によまんを白菊の花
○　大阪市　梅村幸枝
いくたびも曇りみ晴れみ神無月かはく間ぞなき旅人の袖
○　石川　白百合
箏の音のたゞ美しく聞ゆなり白菊馨る村長が家
○　備中　塚本流星子
今日も亦門邊にたちて眺むれば君ます方ゆ雁の一つら
○　鹿兒島縣　中島はる子
花陰に胡蝶のひそむ夕暮を冷たき雨のしと／＼と降る
○　常陸　西野春江
桃さきて歌に詠まれし河ぞひの五戸の小むらに冬の雨ふる
○　豐前　工藤美香子
病癒へて君學成りて三年ぶりかたみに語る今日のたのしさ
○　弘前　みどり子
細うきゆる除夜の鐘の音きゝながら我が身泣くかなともしびのもと
○　弘前　青葉會
ほがらかに初日さしのぼる海原や叔父住む島はむらさきにして
○　陸奥三戸　堀口ふじ子
なき友を忍ぶあまりにさまよへばなほ忍べとやさを鹿いなく
○　香川縣　琴陵文子
足引の山里あたりめづらしくおとめをのせし車すぎゆく
○　三河　宮本さわ子
淺くこそ人は見るらめたまづさにかきつくされぬ胸のおもひを
○　陸中　若生すみれ
何となく亡き母ぎみの忍ばるゝ木枯すさぶ秋の夕暮
○　仙臺市　中ノ目のぶ子
年たちて二八の我はおもはゆよ羅襟きる身の市に花賣る
○　大阪市　川口名美子
馬子が唄は森の彼方に今きえて芒の原に月昇るなり
○　濵田邦子
ゆく秋の雲に故郷忍ばれて露もみぢ散る夕さびしも
○　羽前　つゆ子
庭先の熟せし柿をあさりゐし烏かへりて秋の日くれぬ
○　成田町　長谷川しん子
菜の花に雨やはらかきこの夕べふとまび入りぬ眞白群蝶
○　下總　渡邊みよ子
雁なくや降りみ降らずみ夕闇の浦の苫屋の灯寂し
○　播磨　古月女
嫁ぐなる姉をみおくるこの夕うれしと思ひ悲しとも思ふ
○　長門　汲子
小夜更けて木枯し荒ぶ枕べに灯び暗う消えんとぞする

○亡き母の面影偲ぶ野の末に夢にもにたる雲の流るゝ
常陸　小松崎　直重子

○君戀ひてうつや砧の音もとゞろ君がみ胸に思ひひゞけと
磐川　近藤　愛香

○君が家はいく杉むらのうれ〳〵の道なし行けば萩の花咲
美濃　落合　かぎ子

○家路たどれば辿る鄙唄やゝに消えて芒野三里秋風わたる
上毛　金子　野菊

○なにとなく君ます如き心地して我さまよひぬ夕月の濵
飛彈　松野　みどり

○大かたの木の葉は早く散り果てゝ窓のやれ簾に殘く木枯
安房　秀月女史

○新尼の經しめやかに聞ゆなり小雨そぼふる里の萩寺
千葉縣　董花笑子

○蛩一つ岩にのぼりて渚邊に鴎れむりて日はほがらなり
茨城縣　烟上花唖子

○うらぶれの身はさらでだにわびしきたはや秋立ちて雁なき渡る
伊勢　かげらふ

○かぎりなく光さやけき月見れば己が心も澄み渡るかな
佐賀縣　秋月靜舫

○おのづから殘るも淋し白菊の花のいたゞき何をわかまし
近江　馬場たつ子

○別れつる君がうつし給ながめつゝ思ひ出多き夕雲を見る
宇都宮　芳野靜子

○淋しさは秋雨細き夜なりけり人野とほき野の寺にして
福井　みす子



落葉（賞外）
麻布區　赤崎あい子

○鶴の鳥丸うふくれぬ裏枯の萩に芒に霙ふる夕
越後　宮島泣星子

○ゆく雲に思ひはそはて今日もくれぬ病みて雁きく舘旅屋の窓
下野　江面眉葉子

○羊追ふ里の子草にかくるればかすかに聞こゆ草笛の聲
遠江　篠原富美子

○ふる里の夢よりさめていれがての夜半を時雨に雁なきわたる
京都府　佐藤清子

○さゝがにの糸にやどせる白露に影なくだきてすめる夕月
備前　正富ゆかり子

○捨られて飢えし小猫の死骸にしぐれそぼふる秋の夕ぐれ
備後市　岡露堇

○思はずも語り過して出立てば凍るばかりの冬の夜の月
淡路　やく子

○百舌啼きて小鳥かくれし秋の野の櫟のあたり雨のしぶくよ
福島縣　曾澤君子

○何となうたゞ何となうかなしけれあはれ此むしあはれこの月
筑後　滋子

○今よりぞ彌生の花のまたれける君のまがきに生し姫桃
東京　直子

○烟たつ磯邊に家のほの見えて夕月淡し田中細道
三重縣　高山多花子

○ふるさとのみ空戀しき雨の夕入相つぐる山寺の鐘
近江　武村琴音

○片山の紅葉も今は秋くれて小田の案山子に鵲のなくなり
紀伊　高橋河内子

○　東京　吉江　香

まして行里未だ遠し冬の日のいかにせよとかくれかゝるらむ

○　常陸　大和田清子

出入の舟賑はしき入江に朝霧晴れて初日まばゆき

○　呉市　大藤敏子

白雲の八重にかさなる遠にても思はむ人に心隔つな

○　相模　池田敏子

杣人の焚木に添えし一枝は何處の山の紅葉なるらん

○　宇都宮　大岡城南

古寺の銀杏の老樹落葉して梢淋しく夕鳥なく

○　京都市　張田秀子

野葡萄のかげし追いては雄の栗鼠が雌をぞ呼ぶなる秋淺き日や

○　讃岐　東原胤子

難波江のあまの伏屋もあれはてゝ軒端淋しき荻の下風

○　讃岐　芳子

をさな子を車にのせてゆく人の君かあらぬか故郷の道

○　滋賀縣　辰井ふみ子

霜月やみ寺のくりの襖絵ににたる尾ばなの影さむき野路

○　高槻　赤松春雨子

冬こもる深山の里の夜あらしに松の上寒くわたる月かげ

○　東京　松風子

たらちねのいます方をぞふしおがみあらぬ思ひにくるゝ旅の身

○　越前　暉佐尾

門にたちて惠み給へと小さき子の乞ふ聲悲し冬の夕暮

○　丹後　城下百合子

しづかなる若葉月夜をなばしまに笛にふくればなく時鳥

○　紀伊　藤子

世のさまの遷り變るを見ながらに知らず顔してすめる月かも

○　土浦　佐野清子

鴫たちし行衛ながむる旅僧のうしろ姿に夕月淡き

○　常陸　酒菜つれ子

打ちわたす松原ごしに富士見えて夕日に歸る鴫のひとむれ

○　長崎縣　秋蝶

夕空のかゞやく色はうすれつゝ野づらさびしく秋風ぞ吹く

○　磐城　遠藤華月

まぼろしに君がみ影を追ひ行けば紅葉散る野のみ墓に消えぬ

○　磐城　鈴木家子

ほの〴〵と初日かゞやく富士が嶺はとはに變らぬ國の姿よ

○　攝津　祝よし子

夕まぐれ蘆原いそぐ老僧の衣に寒く秋の風ふく

○　牛込　和田てる子

村はづれともし火淡き一つ家の雞鳴きて年新たなり

○　和歌山　岩崎辰子

二葉三葉散り殘りたる桐の木に夕日淋しく鶺鴒鳴く

○　八王子　井澤菊江子

牛引きて歸る少女のつみ取りてみだれし髪にかざす白菊

○　大阪市　大坂ひろ子

何となく思ひ亂るゝ夕暮れを君在すかたへ雲流れ行く

○　横濱市　折部色子

君と眺る今宵星さえ月てりて海士のいさり火又一つ見ゆ

○　下野　江面眉葉女

天にして君がことしの御歌いかに吹く木枯に地はさびしきな

○　大阪市　島田ひろ子

愛てましゝ庭の白菊けふこゝに折りて手向くる身こそ悲しき

○　北越　平川靜枝子

小鼠が琴を弄する音もしてはるの雨夜のねさめ興あり

○　宇都宮　大岡順子

城山の森の彼方に日は落ちて夕月寒う梟の鳴く

○　香川縣　三好はるゑ

こゝろゆく秋の夜半かな月すみてあしわけ小舟琵琶の音ぞする

○　香川縣　三好はるゑ

夕ぐれや浪の松原靄こめて漁小船の櫓の音高き

和歌

○ 八戸町 各久井 きえ子
秋の夜の更け行くまゝに月澄みて孤寂かなり八太郎の磯

○ 和歌山 花 節
詩に倦みて思ひを外にめぐらせば遠き尾上にさを鹿のなく

○ 姫路 藤田 秀子
鳴く蟲の聲のあはれに吹く風の一きは寒しゆく秋の月

○ 福島縣 片寄 しな子
なつかしき亡母君の夢さめてかすかに響く山寺の鐘

○ 千葉縣 川島 白明子
書くまじな母の文には通りつと早瀬あやうふ雌の細徑

○ 安藝 六廣泉 小蒂(霞外) 麹町 冷花子
秋の夜のさやけくてらす月影に一入戀し故里の母

○ 京都 秋靈 女史
とほつ親のかきぞめ歌の床にかけて水仙いけぬ年たてる朝

○ 周防 岡部 佐保子
ゆきましゝたらちね戀し黄昏を返り花さく野に佇めば

○ 陸前 鈴木 榮子
そめて見る心の色も日にそへてかくなりけり木々のもみ葉ら

○ 愛知縣 宮地 園子
をちこちの紅葉の色もまさりけりおくろきみ山べの里

○ 島縣 紫濃 子
秋雨の小窓淋しき夕ぐれや友への文のまても樂

○ 上野 田 信子
編笠をはれし朱鞘の士ふたり廓大路は鼓に更けぬ

○ 肥後 西山 さめ
美しき花を踏みて白鳥は露にかくれぬいと淸き朝

○ 南品川 町田 野里子
かくてこそうき世の中と思ひつゝあきらめつゝも何なげくらむ



○ 豊本 景霧 初雪
なつかしきこゝろに入りぬ遠つ世の圖にも似たり初秋の村

○ 肥後 坂梨 とみよ
春の月玉藻の中によき魚の生るゝ宵と照らしぬるかな

○ 紀伊 山本 とく子
吹風のかをりにそれと知られけり落葉わかなかの白菊の花

○ 飛驒 千代子
あがきたる理想はやぶれ世にすれてきぬた打つ手はさてもやつれき

○ 群馬縣 松井 清子
何時の間に春はすぎしか怠りの身を嘆かるゝさみだれのそら

○ 周防 秋貞 松亭
うちわたす谷のかけ橋苔むして岩きる水に露たちのぼる

○ 伊豫 波都 子
來て見れば木々の梢はうすくこく一葉ももれず紅葉してけり

○ 苑 子
玉くしげ箱根の山の山路も夢路に過ぐる旅ぞうれしき

○ 西松浦 武末 八重子
淋しさを何にたとへんつま木こる音もと絶えし山の夕暮

○ 幽 蘭
苺なくて手折りたまひし枝かつらいざかざしませふるさとの庭

○ 熊本市 江副 治賀鶴子
立ちのぼる阿蘇の煙に初日いでて田末の里にみ旗にぎはふ

○ 廣島縣 宮島 流葉
さらぬだに亂れやすきを秋風にしどろもどろの野邊の刈萱

○ うすらひ
春駒の踏むひづめにかけられてきゆるもあはれ野路のあわ雪

○ 京都市 柳原 悦子
なつかしき昔の友と手をとりてそゞろあるきの今日の樂しさ

○　京都　柳原悦子
兄君が植立てし白菊の主まち顔に咲き出にけり
○　磐城　天野花子
別れたる友を思ひてたゞ一人暮れ行く秋の空を仰ぎぬ。
○　下総　久保木浦子
さよふけて枯うつなるあばら家のともし火淡く桐の葉の散る
○　但馬　とみ子
我が屋の小窓をたゞく桐ひと葉はや立つ秋のしるしなりけり
○　但馬　榮子
君おもふ心ぞふかき秋山にもゆる紅葉の色にまさりて
○　印旛郡　野々宮梅女
此の月に此花陰に美しき人の手握り佗ちても見たき
○　明石　すみれ子
さびしさのますほのすゝき秋風にみだれてなびく野路の夕暮
○　栃木縣　川俣美代
打さわぐ里の童の聲絶えて木枯すさぶ冬の夕ぐれ
○　若狭　津田道子
西の海に沈き夕日の影おちて枯蘆さわぐ風の音かな
○　富山縣　清水たみ子
水の面に痩せし我影うつしみて涙にくるゝ秋の夕かな
○　巣鴨　とみ女
宵蘆を發すべりて短か夜はほの／＼あけぬ小舟の人に
○　天橋　紅葉女
風さむく鐘の音遠き秋の夜のふけゆく空に月は傾りぬ
○　茨城縣　仲田百合
夏の夜に人まつ虫の聲もせてひとりさびしき燈火のかげ
○　茨城縣　仲田百合
立田川ながるゝ水ももみぢたり水の中にも秋や來にけむ
○　會津　露月
ふるさとを遠くへだてゝ住む妹今宵この月何と見るらむ
○　千葉縣　川奈部かきね子
山茶花や籠の目白の囀りにまひる閑なる村役場哉
○　栃木縣　櫻子女史
藤の實を拾へる子等の歸へり行きて夕日かすかに社寂びしき
○　芝　さゆり女
遠山に妻戀ふ鹿ぞ聞ゆなる木枯吹きて月寒き夜半
○　北越　渡邊一枝女
朝寒や裏の堀井に顔洗ふ寢亂髪の君美しき
○　平町　入重子
木がらしや枝に殘れる柿一つ殘れる枝に雀寒うなく
○　熊本市　すゞめ
置りたる友の病をなぐさめて出づれば清し白菊の花
○　秋田縣　河津喜乃丈
雲の露に咽ひし告天子落ちて栾の花三里日はたそがれぬ
○　秋田　佐藤いそ子
遁れ來て住む山里のさびしさに友と慰むさを鹿の聲
○　羽後　柴田幸子
野に縋る若きふたりが息吹かも草弱かにいさゝ風吹く
○　筑後　菊子
行く水も秋の哀れを歌ふらし入相の鐘のひゞく村里
○　和歌山　まと子
南窓心淋しう書を讀めば秋雨寒う菊の花ちる
○　下野　眞月
日はなゝめ道行く人のあとたえて尾花が袖に露ぞやどれる
○　羽前　紅子
悪きことのかずはあれども樂のなきにしもあらぬ年の暮かな
○　大坂　俊文子
額舗のかれの音遠くたそがれて枯野十里に野嵐のふく
○　柳河　清子
なつかしき君の姿をゆめに得てひとりほゝ笑む曉の窓
○　秋田　T　夏子
えみしらも拜み伏すらん日の本の我國よりぞのぼる朝日を

○　深川　跡山千代
山寺の鐘の響に落つ桐の一葉〳〵に秋暮れて行
○　奈良縣　栗山　葵
紅葉する山田の里の小夜時雨まくらにひゞくさ雄鹿のこへ
○　上毛　和田雪子
湖越しに秋の富士みゆる野にたちてよきうた思ふ朝月夜かな
○　宇治　小林ちよ子
あれ果てし峰の尼寺尼はうせて荒れしながらに萩の花散る
○　湖畔　青葉女史
野に續く庭の蟲の音絶えがてにまばら秋雨夜はふけにけり
○　麹町　緑子
紅葉散る川添ひ小道日は暮れて流れに浮ぶ三ヶ月の影
○　三河國　山里ふて子
小萩ちりて北に流るゝいさゝ川暮れ行く秋に幽靜なり
○　埼玉縣　近藤とく子
もの言はゞことゝはましを古里の籬のまがきに咲く女郎花
○　熊本縣　菊子
端坐とれば思ひあがけよと月姫の障子にしめす呉竹の影
○　牛込　瓜生たき子
阿彌くみてきざはしみくるおん僧の黒き衣に秋の風ふく
○　大分縣　工藤たまき
あかつきを十二の聖徒いてたつや空にあや靄野に白さうび
○　鳥取　朴　樹子
すゞろなる胸かき合せ秋の夜を運ぶ針路に蟲の音近き
○　尾張　梶田愛子
思はずも遊びすごして山路を辿れてたどれど月さし登る
○　紀伊　野　宗子
おつる葉も音ばかりさよふけてれざめさびしき秋はきにけり
○　伊勢　谷口壽子
父まさぬ母君まさぬ故郷の道をたづぬる朧月夜かな
○　伊勢　大園靜子
埋火の灰かきわけて君と二人夜たゞ語りし日もありにしが
○　本郷　曾我部江子
山びこのかへす方よりたそがれて夕しづかにひなうたのこえ
○　越後　長谷川松子
みたみらがはざはみづほのほに出てゝゆたけき秋の色ぞ見えける
○　駿河　伴野ともゑ
入亜薙茂れる丘のくさのかげに如何に侘しく人を待つらん
○　山形縣　佐々木蓮花女
夕ぐれのかれいと細うきえゆきて紅葉の山に月さし出てぬ
○　いばらき　園部紫水女
峠路や藤さく茶屋の軒近ふ脊の富士みる朝ぼらけかな
○　久留米　紅　葉子
つく〴〵と思ひ暮して入相の鐘をきくにも君ど戀しき
○　久留米　山田米子
松原は霧より明けて住の江の沖なほくらき朝ぼらけ哉
○　埼玉　西田壽惠子
三千の魂と血しほにあがなひし城頭たかく月さえわたる
○　群馬縣　横田よれ子
みだれふす尾花が小徑露わけて栗の果拾ふ少女十八
○　千葉　小川ふみ子
打なびく稲葉に秋の風見えて入日淋しきをちのやま里
○　成田　天波子
縁に立ちて給の具ときつゝ眺めやる夏雲奇しう日は暮れんとす
○　靜岡縣　岡村双鶴子
亡き母の形見の小袖と見こうみおひみだるゝ夕暮の雨
○　豐前　末廣はちす
秋の日は尾花に暮れて那須野を從束なげに尼ひとりゆく
○　千葉町　野々宮清子
なき人のしるしの跡もこけむしてあはれ昔のしのばるゝかな
○　武州　色摩秋水
思ひ入る嵯峨野の奥にひく琴の同しれに鳴く松虫の聲

鹿兒島縣　貴島とみ子

○女郎花桔梗かるかや咲く野べに鈴虫姫のうたふ歌きく
松山市　松子

○只一人たどる墓路日は暮れて千草にすだく虫の音あはれ
翠葉女

○秋の月に音づる笛の主や誰れ戀慕流しの曲ぞゆかしき
尾張　野田寒子

○荒れたれど我家の門とたゞずめば昔のまゝの松風のこゑ
越後　白菊子

○たそがれをひとり文よむ窓の月に紅葉舞ひきぬ四片五ひら
若狹　衙哉子

○蘆帆の夕日うすれて琵琶の湖蘆間の舟に秋の風吹く
筑前　竹井きわの

○賤が家の破れし垣根に咲き亂れ虞美人の秋ざくらかな
諏訪　小松正子

○里人の今朝は通ひしあともなく路ま白にも結ぶ霜かな
新潟　藤波波江

○漁釣に夕榮あびて歸る子の唄に舞ひよる金色の鳥
千葉　りきえ子

○かりそめの旅路に逢ひし人までも別れとなれば名殘惜まる
越後　尾花子

○今もなほ人をとゞむる關守は碓氷の嶺のもみぢなりけり
麻布　込谷和之

○さよふけて何處ともなくきこゆなり天の戸渡る初鳥の聲
みつ子

○霧わけて冬菜あされる少女子のほつれ髮に朝風のふく
和歌山　室谷保子

○おばしまに繪扇あげて蛍よぶ手もと涼しく夕風渡る
京都　朝顔

○さらぬだにいとゞ露けき我袖をなほぬらせてと秋雨の降る
岩手　佐藤しの子

○東根の峯のもみぢ葉紅まして戀しき秋はいよゝ更けゆく
紀州　室谷保子

○泊舟夕げの煙低うはひて女波靜かに枕うつも
名古屋市　志水二葉女

○瀧の音ひゞく谷間の木がくれに絶え〴〵經の聲ぞ聞ゆる
下野　櫻太良子

○秋の野を袖ふりはへて我ゆけば千艸の中に鈴むしのなく
牛込　友成きしみ

○よるめにも年ある秋のほと見えて烟り立なり小山田の里
雙葉　さくら子

○家づとにせむと思へど如何にせむ折ればこぼるゝ萩の玉露
金澤　あけぼの

○月清く澄み渡る夜を谷こゑて妻をこふるかさを鹿の聲
千葉縣　本間菊子

○那鹿山いなゝきのぼる荷駄馬のこゑにわかるゝみねの横雲
靜岡縣　無名子

○あい見ゆる折はやかれといのる身は暮るゝ日脚も嬉しかりけり
成田　武田つれ子

○まごゝろをこめたる文見るからに君の心の奥ぞ知らるゝ
成田　渡邊かつ子

○あさあけや稲穂の面に波見えて小鳥むれたつ秋の初風
美濃　杉山芳子

○一むらの枯し野菊や薄原秋の日ひくう雁鳴き渡る
紀州　室谷保子

○せめてはと琴ひきよせて奏づればまた古りごとの偲ばれにける
上總　山田神子

○星ひとつすべりて暗き庭かげに蘭の香うごくせゝらぎの音
羽前　紅子

○鷹狩りに出て行く夫のさきくあれと見送る袖にあられたばしる
千葉縣　吉原勵子女史

○何事を思ふともあらず一碗の煎茶たのしき春雨の窓

○ 徳島市 佐藤芳子

森羅萬象は死したる如く寂寞を冤神の息吹かこがらしの風

○ 飛驒 萬殘月女史

夕しぐれ紅葉うつらふ野の路を相合傘にゆく二人かな

○ 石州 神の子

海見えて遠山見えてながめよき茶屋の小松に四十雀なく

○ 明石 孤蹄

普岳寺や山門ふりてゆく秋の寂寞の鐘にいてふ散りしく

○ 陸中 正木白萩

秋姫が終焉の時の聲と聞きぬ雨ふる夜半を旅にきく虫

○ ともちどり

秋の夜の月に琴の音とめ行けば吹く風かをる白菊の宿

○ 神戸 河村律子

かゝる夜に君や弾くらん琴の音のそれかと聴きぬ秋雨の音

○ 滋賀縣 松本華子

しめやかに秋の雨ふる峠路やとびゆく鳩の影のちいさき

○ 千代子

板びさし月影もるゝ竹椽に燈びけして虫の聲きく

○ 麹町 まぼろし子

遠くゆく君を送りし朝月夜駒止橋に霜いましろき

○ 讃岐 林靜子

うつしゑをみては頬ゑむ少女子のゑりあしなかき白萩のもと

○ 紀州 保子

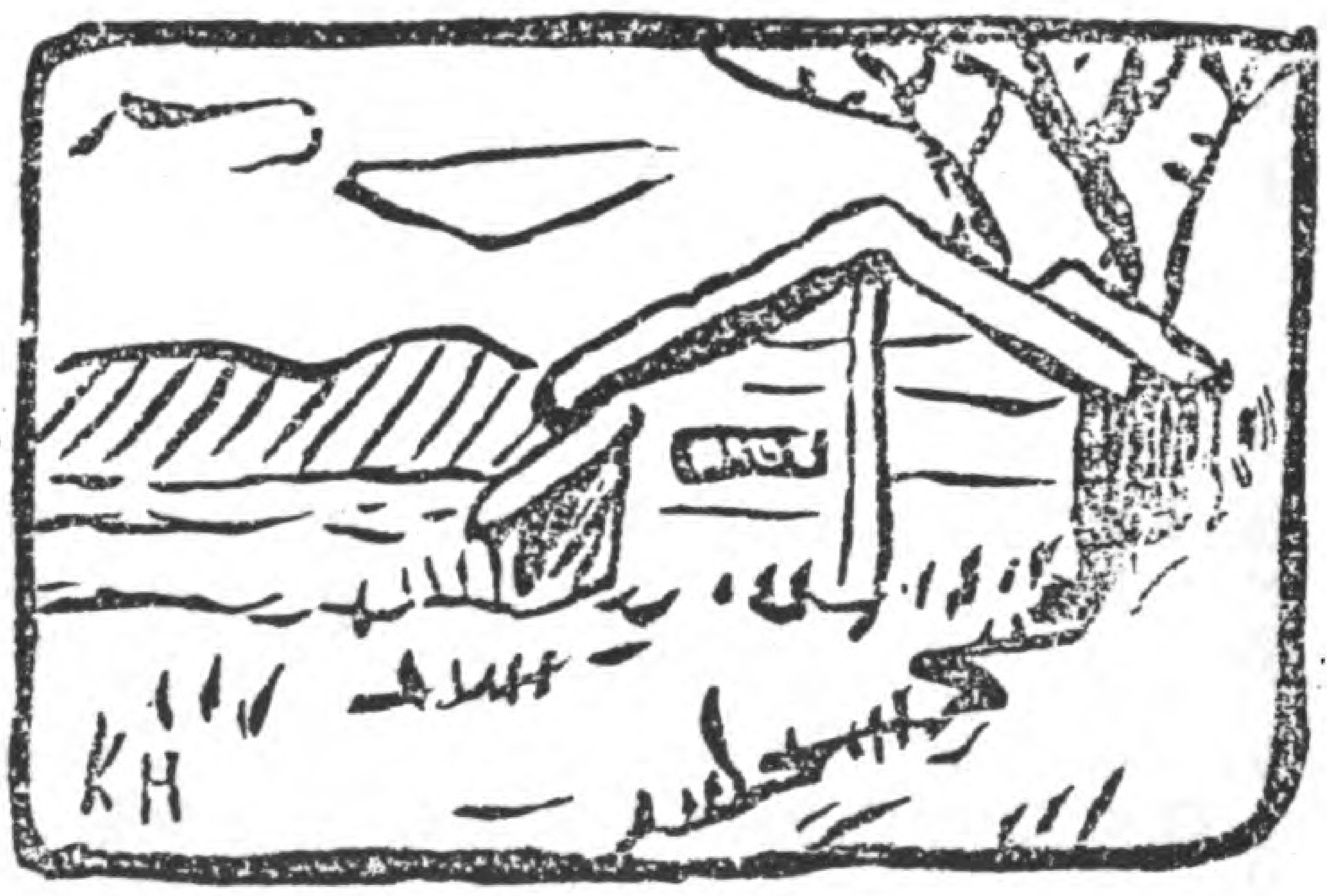
水よどむ山ふところの水鏡うつすによしと山百合のさく

○ 牛込 阿部きぬ子

おくて田の案山子の笠にふる時雨眺めて淋し此夕まぐれ

○ 澁谷 雅芳

萩の田舎〔賞外〕　浅草　濱田狂美



やみ人はみなまどろみて虫の音をきゝつゝ明す夜半の淋しさ

○ 靜岡 石原葉風

黄昏に草かき分けて眺むれば靜けき秋を稲穂ゆらぎぬ

○ 仙臺市 佐藤もと子

月見ては靈いて思ふ山寺の鐘の音遠き秋の夕ぐれ

○ 千葉 川名代子

踏み別て秋の路行けばほのしろう霜かとばかり白ぎくの咲く

○ 備後 竹葉子

吹きあれし夜べの嵐に栗落ちて里子せはしき朝の山路

○ 播摩 谷口文子

枇杷色の田面に續く萩原のかなたに白く蕎麥の花見ゆ

○ 常陸 綿引秋園女

愁ひをば語らふ友もなく蟬の青葉がくれに泣かむこの身か

○ さつま 永井ふみ子

秋風のおとづれそめし夕よりおくつゆしげくなりにけるかな

○ さつま 福山よし子

萩の葉に涼しき風のふきたちてつゆちる庭は秋めきにけり

○ 柳河 無名草

塒へかれて露の道芽生さすらへば思ませとや虫鳴きしきる

○ 大隅 竹中たけ子

美しき夕の雲た指さしてほゝ笑む君の思ひは如何

○ 芝區 加藤のぶ子

安房下総岩草ひろき湖上うす紫に夕雲のして

○ 秋田 T、K、子

吹く風に海苔の香高き海士が家のかどべに匂ふ梅のひともと

○ 美濃 木村竹園

山姫が手析り與へし紅葉をば秋風荒く癈れて踊る

○　青山　永井よし子
其川も其夜月も變られど友は世になし誰と語らむ
○　美作　性全黛女史
え堪ぬの胸を抱いておばしまに淋しき空の雲を見るかな
○　宇都宮　芳野靜子
秋更けで空もしぐるゝ夕暮に波路はるかに眞帆片帆見ゆ
○　柳河　清子
訪ひ來ませ野に七くさの花の彩夕べ涼しき鈴むしのこゑ
○　麹町　たちばな
遠寺の鐘の音消えて月落ちてあはれにもなく山時鳥
○　鹿兒島　池端千代子
霧晴れて日は暮れにけり秋の海沖の小島にいさり火見へぬ
○　鹿兒島　前田富子
漕ぎ出てし瀬戸の渡しに村雨のしぐれて見ゆる傘小舟かな
○　柳　宇子
龍田川流に舟をまかせけり散る楓葉に棹さしかれて
○　伊勢　つれ子
一本の庭の白菊花咲きて歌ぞよみたき我心して
○　陸奥　目時いせ子
月みてもかなしさまさる秋の夜半むしの聲さへほそりゆくなり
○　南多摩　金子楓蔭子
將軍の碑はいたづらに苔むして柵にかつちる夕紅葉かな
○　上總　小川くに子
衣更へて千里の旅の門わかれ風なき朝を怖の花散る
○　丹後　城下百合子
朝風に藤の花房さとゆれて水に影さす有明の月
○　京都　華子
しと〳〵と降る秋雨を眺めつゝ淋しく君よ何物思ふ
○　佐世保　藤村しな子
月さえて心はくもの秋の夜に獨りさびしく虫の聲きく
○　福岡　岩崎好子
摘みしやすみもいつかつくしがたはまべに立てば秋風寒し
○　攝陽芝　山本春子
秋雨や君住むかたへ雁おちて無心の雲に鐘細き暮れ
○　三鷗村雨
鈴虫の聲のとぎれに駒とめて南へ歸る燕を見る
○　東京　はつ子
戰跡のきれんに植ゑし此紅葉秋は來にけり色づき初めぬ
○　足柄　岩田小春
衣洗ふ音をやすめて少女子が見あぐる空にぬか雨ぞふる
○　播磨　中田勝子
亡き友の墓石抱へてたゞずめば小萩みだれて夕鐘ひゞく
○　前橋　厚木繁子
兄君を都に上ぼすしろにとて秋の夜な〳〵砧打つなり
○　越後　河内米子
便り絶へし妹がうつしゑ眺め入れば月頰ふ照りて露の宿れる
○　柳河　清子
いまだみず見もせぬ君の偲ばるゝ西のみ空の星の香に
○　本郷　朝井千とせ
うらぶれて獨物思ふ我が影の礎に淋し秋の夜更けぬ
○　尾張　野田栗子
宮島や神の灯遠くまたゝきて夕べすゝしく笙の音する
○　筑前　竹井きわの
賤が家にひとり咲くなる白菊も千代のかをりはかはらざりけり
○　山形縣　佐々木胡蝶子
行く秋のあはれはいとゞ身にぞしむ虫の音高き村の夕ぐれ
○　上毛　眞砂すみれ子
何んとなく亡き妹のをもかげによく似たるかな花賣少女
○　成田町　武田たき女
まどかなる夢のまゝにて背の子はそとわたされぬ春の夜の月
○　麹町　まほろし子
御手とりて今ぞ別れの野に立てば雲はちぎれて西に東に

文藝遊戲

姉妹合せ

はしがき

今年から每號文藝遊戲の欄を設けますに就いて其第一回として姉妹合せと云ふのを試みやうと皆さんに投稿をお願い申した處、幸ひ面白い原稿を澤山にお送り下さいました。是は或る母親が令孃に向ひ「何か一藝を敎へてあげるから好みを言つてご覽なさい」と言つたのに對して其答を求めたのです、其答へに依りて選者は或ひは姉とし或ひは妹とし、其內の好みの似合うたのを姉妹として合せて見たのです、其結果は左に發表する通りで、或は音樂或は繪畫、人さま〴〵の好みがあります、最も多いのは音樂繪畫、次いでは裁縫、和歌、造花、生花などで、中には類の變つたのもあります、五等迄は聊かながら賞品を差上ます、扨て又紙面に限りがありますので載せ得なかつた多數の投稿諸孃には謹んで其勞を感謝し、合せて次號の文藝遊戲欄にも此續きを出すことにいたします。次の文藝遊戲の方法は別項に出て居りますから何うか見落さないやうに

【暮の五日、選者しるす】

一等 姉

北海道天鹽 留萌村十三　椙原壽美子

母様私はミシンを習ひたいのですよ、和服の方は下手ながらも一通りは縫へますから、今度は父様や兄様の洋服やシャツを仕立てる事ができる位になりたいのです。父様のお服が古くなつたから武坊のに、なほしてやりたいなどゝ思つた時にすぐ御注文通りに着せる事ができたら、どんなに嬉しいでせう。先生からもお嫁に行く時には簞笥の代りにミシン一臺を持つて行く方がよいと申された位、しかしミシン許りあつても手がきかなかつたら、何もならないと思ひますものどうぞ〳〵これを習はして下さいましな。

一等 妹

八王子 八木町　井澤菊江子

母様、私に割烹を習はして頂戴、私ほんとに、實用に適つてよいと思ふわ、第一にお客様がお出の時などでも大急ぎて、下女を、お料理屋へ走らせ、目を圓くして騒ぐような事もなく、平生の時でも、此道を習ひ覺えて居たなら不味いものでも味よく喰られ、毎日同じ物を、お膳につける様な事もなく、家內中が樂しく快く暮せて、此上もない幸福だと思ひますわ、ですから一家の主婦となつても大變に入用な事と思ひますの、母様は如何思召ますか。

選者曰、此姉さんも、此妹さんも、どちらも實際的の良妻になられる資格があります、姉さんが洋服とミシンに眼を着けられたのと、妹さんがお客様の御馳走に騒がないやうにとの、何れ劣らぬ心がけ、將來は完全な家庭をお作り下さい。

（懸賞品）姉、裁縫書一册、妹、料理道具一品。

二等 姉

伊賀河山 郡小田村　高山浪子

妾は我家の裏畑一畝程頂いてそれに梅桃櫻牡丹ばら百合撫子萩朝顏菊等色々の草花を栽培して日夜之を愛し花が咲いたら妾は生花練習用造花の

見本などにして美しい心を養ひたいのであります。

（二等）妹　弘前市本町櫻島方　村林やす子

嬉しい事、では母様私に造花を習はして下さいな、私この位い〻事ないと思ますの、梅でも櫻でもばらでも、それに母様の御好の百合でも何でも造りたいと思ふものは、すぐ造られますし冬雪の降つてる時でも梅が見たければや梅を造つて見られます、かんざしだつて買はなくつても好なのを造れますもの、どんなにい〻か知れないワ、母様習はして頂戴な。

選者曰、何れを何れ梅も櫻の花くらべ、壇に作らうと云はれるだけ姉さんの思はくはよく冬の雪の中にも花を見て樂まうと云ふ妹さんの心ばえもやさしい。
(賞品)姉、園藝書一冊、妹造花一箱。

（三等）姉　豐前國築上郡南吉富村　井上靜枝

何でも好いた事をつて、そう嬉しいわ、ではね又兄様が聞くと解りおせぬ辭につてお笑ひになるだらうが妾ね歌が學ひたいわ、新派の方が好きよ舊派は皆同じ様な事計で…そして歌を詠むと品性も清くなる様であのよく歌つてある白百合の中から生れた女神の様なつて、妾歌を學うと自分もそうなる様に思つてよ。

（三等）妹　廣島縣深安郡川北村四八九　今西初野

おつかあさん私は御歌を習ひたいのよ、お上手になつたら皇后陛下の御前にも參れますから。

選者曰、姉は白百合のやうに清くなりたいと、妹はやんごとなき方の前にも出られるやうなりたいと、是を合せて理想とすれば、おふたりとも立派な歌人になられませう。
(賞品)姉、歌集一冊、妹、短冊五枚。

（四等）姉　臺灣台南縣警務課官舎　中山浦子

妾は繪畫が大すきですよ、女子文壇が着ますと三宅先生の水彩畫を一番にはいけん致しまして、人や水、雲、森などの形狀や、色彩をまねて書きますが、なか〱うまく出來ませんいつたい、畫家は一時的でなく、能く未來の成功を希望せねばならんそうですから、妾は何處かよい美術專門學校に入れて頂いて、一生懸命に勉強して、生涯美術家たらん事を切に希望致して居るのです。

（四等）妹　名古屋南伏見町二丁目　森部蝶子

私には洋畫を教へて下さい先達て展覽會へまゐりましたら或る方の洋畫が出て居りました、お年は十八だそうですが皆様がなか〱立派な物だと大變によく被仰見えました私も之から一生懸命に勉強して十八迄には立派になりたいと思ひます。

選者曰、妹さんの十八までとは餘り氣が若すぎる矢張姉さんのやうに未來の成功を希望して美術の學校に入學された方が確かでせう、
(賞品)姉、妹、同じく水彩畫繪葉書一組。

（五等）姉　赤坂區丹後町九十八　齋藤茂子

先日音樂會に悲しい曲を彈じて幾百の人を、よはしめた君、アノ表情に

とんだ目に露さへ宿して私なぞ仰ぎ見る事出來ませんてした、私は音樂を聞くと天人にてもなつた樣な氣が致しますの一音樂の中てもオルガンが一寸手がるてよいと思ひます、そして自ら歌を作てそれを彈て歌ふとオヽオルガンにしませう。

妹　　備後國松永上ノ丁　博山しか子

おとなりの花ちやんはまひをならつて、いらつしやるが、これは私はいやだ、ては生花にしようか、けれどあの先生はいつもきたならしい風をしてをられるからこれもいや、それならば造花にしようか、先生のうちが遠いから、これもよして、あお向の滿子さんは琴が御上手、あの歌會に彈かれた六段ほんとによかつた、それてはおつかさん私には琴をならはして下さいね、お母さんほんとてすよ、嬉しいわ嬉しいわ、ては明日から行かして下さいね。

選者曰、姉さんの洋樂に聞惚れ給ひしも、妹さんの六段に感服されたのも、大いなる音樂の力です、姉さんは演奏者の態度まて細い處に眼がとゞき、妹さんは先生がきたならしかつたり遠かつたりしていやになるなど、能く實情が穿たれて居ます。(懸賞品)姉、洋曲書一冊、妹琴曲書一冊。

秀逸

姉　　福岡縣　龍子

私がかつて經驗ある人から聞きましたに、學校を出てから内で空しふ過ぐしても廚の方は下女まかせて自分は御料理の書物も澤山よんでゐるから結構だと思つてゐて實際嫁いてからやつて見ると品物は時などによつて違ふ事もあるのてなか／＼思ひ通りに行かないて仕損じた事もあつた、それてお料理などは書物をよんだら早速下女に代つてして見るのも至極興が深く將來の爲になるからお母さんに習ひ又書物をよんで實際にするがよろしいとのお話を聞きまして大に感心致しましたから　お料理の法を敎へて頂きませう。

妹　　菊野

私はお料理のけいこをして料理屋から取るのよりは、もつと／＼おいしいのを作つて家内中で話しながらたべたいと思ひます。

姉　　京都府　竹葉女

要れ田舎の叔父樣の家へ　暑中休暇と冬休みとを利用して蔬菜果樹の栽培を習いに行きたいのです、充分習つて自分で出來る樣になつたら、まあ厭お百姓なんかにならないのよ、そしたら學校を卒へ郡夫樣の宅へ嫁し裏の十五坪の畑に色々な蔬菜や果樹を植付けかれて修得した叔父樣からの實地經驗によつて栽培したらどんなに愉快だろーか又多趣味だろーかと、そを思いますと一も二もない明日からでも行たい樣な氣がしますのお許し下さいますならやつて頂戴。

妹　　北海道　泉翠

私に何か一藝を、敎へて下さるつてほんとにうれしうございます、我儘な、お願かは存じませんが、園藝に關する事を、深く研究して見たいと平生から思つて居りましたの、花壇に美しい草花を、植ゑたり、野菜果物を作つたりして田園的生活をしたなら、きつと體も丈夫になり其等の花に、くらべて日々の行をつゝしみ心を正しく持つたなら氣品も次第に高くする事が出來ませうと思ひますから適當なる師につきて學びたう御座います、どうぞ此事を學ばして下さいまし。

姉　　大阪　稲穂女

まあ今年から學校以外にお稽古に通つて下さいますつて？　私はんとに嬉しいてすこと！　いろいろ考へて見ましたがこんなお轉婆者てすから琴やお花はとてもいけませんてせう、そうかといつてお茶は嫌ひてすし矢張り平常から習ひたいと思つて居ましたピアノが好いと思ひますの、何もそんな理由なんかないのてすけれど私一番

好きなのですもの、ピアノの音を聞いてますとね、何もかも忘れてしまふ様ですの、ですから何卒習はして下さいましな。

妹　　小石川　北澤　ふさ

私の好みと申すのは音樂です音樂の中でも手風琴や琴は持つて居りますからほしいとは思ひません唯オルガンかピアノです、私が日本橋幼稚園に居りました頃先生がオルガンをひき生徒が唱歌を歌はる其時アヽあれがほしいと思つた其頃より今までほしいと思つて居るのです夫につづいて遊戯も好みますですから遊戯唱歌はいつでも甲ですオルガンも餘り小いのはきらいです

姉　　大阪市　松田都喜子

其じや申ますがネ！お母さん、去年の三月に谷口さんの送別會がありましたでせう、彼時皆さんが會が終る時分に銘々各自得意があつたのです、其時横町の備前屋の房江様が大そう箏が御上手なので皆さんが非常におほめなすつたのよ、妾は其時發念てたまりませんでしたそれからは度々箏のおけいこを致しましたが何分よい教師にも習はず又お手本とてはなくたゞ暇にまかせて勝手に獨習致しましたがどうも思ふ様にまゐりません、幸ひ只今御母様の御思召もありますから何卒夜だけ箏の學校へ通はして下さいませ、ネ！お願ひですから。

妹　　南多摩　乙幡もん子

御母様が左様おしやるなれば御答致しますが、私しは學校で習ふ學科の中でも圖畫が磔番大好きで自分でも面白味があつて此の時間が樂みです、又平生でも畫を見たり描いたりするのが大好きです、そこで私しの望みと云ふのは、女子畫家となつて廣く名を知られたいのです、それに就てお願ひが御座いますが、今の學校を卒業したなれば東京の美術學校へ入學したいのです。

姉　　賤　女

私は織物を習ひたくあります、なぜと云へば日本では生糸が澤山出來るから今外國へ生糸の出る事は輸出物の中でも一番でありましよー、其出る糸を内地で立派な織物にして出したならばどーでありましよー、金高は生糸の二倍も三倍も取れましよー、其れを知りながら糸にて外國へ出し織物にして賣らつて輸入する、何んと口惜しい事ではありませんか、それと云ふのは日本に織る人と、機械がないからであります、だからこれから後は糸にて出さず織物にして、出したいと女の小さきむれに思ひます。

妹　　遠江　宮城　梅子

私は種々學校へやつて下さる外に一つ習ひたいものが御座いましたが今までは申しませんでした今お母さんの御言葉にあまへて申します、どうか御母さん私に機の織方ををしへて下さいまし私は此の機にいたくならつて今迄人のしらない織方をおぼゑて世間に出したいと思ひますからお母さんお願です。

姉　　淺草　百合女

母様。私はね、和歌を習はして戴きたいのよ。お友達から彼の美しい音樂會にお歌を一つ舞へていたゞく時の嬉しさつたら無いの。で私も如何かして立派な先生について習ひたいと思ふのよ。ね母様。お頼みよ。いゝでせう？

妹　　京都　うすらい

私は御歌を習はしていたゞき度ございますわなぜつて花を見ても月を見ても只見るだけでは面白ふございません見るもの聞くもの皆歌の種ですものこんな腐いたのしみは有ません。

姉　　京橋　今泉磯千鳥

郵便！と言ふ聲と共に受取つたのは母上様よりの手紙！開いて見たら「今年からお前達に學校へ通る外に何か一藝を敎へて上げやうと思ふ」つて私本當に嬉しいわ！有難いわ！、床に入つてから考へてみました。禮式、生花、編物折物結び、等は大抵家に居る時敎はりましたから、造花を敎へて頂きたひと？先刻先生に聞きましたら「造花と言つたつて花ばかりじやない上手になると野菜でも果實でも出來ます」つて！私本當に習ひたくなりました、お母様何卒造花を習はして下さい。

妹　　茨城縣　少　女

お母様、私は造花が習ひたい、何故つて私はきれいな花が大好き、それにこんな風通しの悪い町では何んなに手を盡しても美しい花は咲きません、だからお室へ造花を飾つて其中で勉强したり眺めたりしたいの。

▲以下五十二名は次號に披露す●●●●●●●●●●●●●●●

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

第二

○失明の妹

きぬきみつ子

春曉の花、秋夕の紅葉、人に目あればこそ其艶麗なるをも知れ、夏天の奇峰、冬日の白雪、人に目あればこそ其奇觀なるをも知れ、人は實に双眼の明かなるを得て、あらゆる慾望をも充たし、あらゆる歡樂をも諧せるなり。さるを我が可憐なる妹は、此等多幸の人をよそに、獨り白晝に闇黑の世を辿りつゝあり、嗚呼天は何故に彼に明をば與へざりけむ。前世何の罪を犯したれば斯かる冥罰をか蒙りけむ、天は何ぞ寧ろ死を與へざりし、死より尚苦しき終生の失明、天夫れ何等の殘酷ぞや。神夫れ何等の不仁ぞや。神よ幸に此可憐なる妹を見給はずや。將に妙齡に近からむとせるも係はらず。其色無き頰の瘠せたる、其愛らしき唇の濕ひ無き、其蛾眉の邊りに云ふべからざる痛苦のさまの表はれたる、千萬無量の怨を含んで閉されたる目の痛く打くぼめる、嗚呼神には涙は無きものか。其丈なせる黑髮のみは、さすがに漆を見るが如きも、哀れ彼は之を見る由もなき先天的不具者なりけり。手のなきはわろし、耳の聾せるは惡ろし。されども之を明なきと比べて果して孰れぞや。若し多くの人の如く双眼を完からしめたらむには、彼は今の如くに肉落ちざりしなるべく、色香も枯れざりしなるべし。其容貌と風姿とは方に人の良妻たるべきを失はず。況んや其心根の優しくして正しきは當に淑女として耻ぢざるべきに、悲しや不具の身とて父と母と我との外は、誰れ一人として同情を寄する者なし。人は云ふ、彼れは盲目の女なり、素より人に嫁する能はず。三絃はむつかしきもの也。幼きより學ばしめざれば覺え難ければ、從つて渡世にも都合惡しかるべしと。嗚呼人の言葉の何すれぞしかく冷かなる。我れにして木石にあらざるよりは。何ぞ可憐なる妹をして萬人の間に藝を賣らしむべけむや。假令衣食に窮すとも、我が手と足の存する間は、何ぞ其不具を衆人の前に曝して其冷笑を受けしめんや。我は世の冴え渡りたる双眼の乙女を見る毎に、萬感胸に迫り來りて、天を仰ぎ地に俯して、神の人を飜弄するの酷なるを怨嗟する也。

されども、又翻つてつら／＼思へば、神を怨むの未だ早きを知る、人の凡ての慾望は誠に目より起るもの、目見えて花を知り、月を知り、雪を知り、さては美しき衣を知り、麗しき家を知り、更に轉じて戀を知る。人慾內に愈々盛んにして、外に益々非隙生ず。人を罵り、人を賊ひ、人を疑ひ、人を猜み、人を羨み、人を怨む。四肢五躰假令能く完全せりと云ふとも德行既に壞頽せば、人の人たる所以何處にかある。斯の如くんば我は却つて失明の妹を多幸の人とせむか。由來神は殘酷にあらず、不仁にあらず。實に我が妹は神に因りて憐まれつる也。我は常に可憐なる妹の黑髮を撫でつゝ慰めて曰く、汝の明を失へる。天の罰を蒙りしにあらず。地の怒りに觸れしにあらず。却つて神は、汝に慾無からしめ、汚れ無からしめ、以て汝が心をして大地と一致せしめんとし給へるなり。汝、目無きを憂ふる勿れ。人の足らへるを羨む勿れ。人は目あれども禽獸なり、汝は不具なれども天使なり。塵にまみれし花や紅葉を見たしと思ふな。崩れ易き雲の峰、消え易き白雪を見たしと思ふな。汝は汝の胸に宿り給へる優しき女神の御姿を見よ、さるにても汝をはだみ給へる父と母との御姿のみは一目見せたや。

（評）天を怨み地を恨み翻つて神の攝理を說ける慰藉の語、一字一淚卒讀にたへず。

○冷たきねや

靜岡縣藤枝町　紅薔薇

淺黄染唐草模樣の厚蒲團ふうわりと重ねて、もえたつやうな紅絹裏とつた搔卷其上に展べた小間使は、お寢み遊ばせの挨拶もそこ／＼に、己が居間へと退つて行つた。

強ひらるゝ儘に、扇散しの繻珍の丸帶物憂く引といて、人肌に温まつた緋ネルの下着、胴拔の寢衣に、着更へて居た姿は、桃色紋縮緬の扱帶房々と結び下げると其儘、濃紫地亂菊もやうの裾廻を長く／＼疊々引いて、べたりと枕元に膝をくづすや否や、桐胴の丸火鉢に小手をかざして其上に片頰をのせた。

夜更の寒さが寢着の肌に泌み通るのも感じないで、少時深い／＼物思ひに沈んで居たが、軈て靜かに頭をもたげてホッと太息を漏すと、有明行燈の灯が幽かにゆれて、引廻した屛風に寫つて居た我影もゆら／＼と成た、見れば昨日あげた許りの高髷かや、橫に傾いて、兩鬢から乖れてる亂れ毛のしげさ、こけた頰の窶れもあり／＼と知らるゝにあゝこれも誰故……とばかり、

ほろ〳〵と露は手の甲を滑つて灰に落ちた。今宵も夫は何處へ泊つて、妻の愁を笑つておいて遊すやら、嫁いだ當座は夫は夫は、勿體ない程お優しいお方であつたのに、打て變つた此比のなされやう、お姑樣があゝ迄ひどく仰せらるゝごとに、御助勢こそなさらね、一言のお執なしも給はらず、意氣地のない奴と云はぬ許りのお顏付、それのみか此比の夜泊りのしげさ、ひよつとしたら外に……イヤ〳〵其樣な疑を苟且にもかけては濟まぬ、たとへ召使共は何といはうとも、飽迄妾は夫を信じて、お姑樣の御機嫌のお惡いのも、夫の情なく遊ばすのも、皆自分が足らぬ故と身を責めて辜へませう、さうしませう、爾う致ませう、恨むのは妾が惡い、はかなむは妾が屆かぬのだ、……けれ共苦し……、思ふまいと思ふけれど……、妾が今の夫に望まれずに……、儚なく心に描いて居た賤夫さんとの緣が……、思ひ通りに成つたらば……、オー其賤男さま、近比は頓に御氣質がお變りなされて、あのお年寄られた小母樣の仰せをもお聞入れなく、生涯獨身主義とか云張つておいて遊すとやら、もしや妾故……、おー濟まぬつらい、妾のやうな者をも、かねて淺からず思つて居て下さつたらしかつたのに……、心強くもふた親の切な勸めを否みかね、理想も希望もすつかり棄てゝ、進まぬながら此方へ來て見れば、誠この身に脊負ひ切れぬと許り、悟られまいと胸一つに秘めて、召使にさへ明さねば、何人も御存じはあるまいけれど、うはべ美くしい此ふすまの、夜毎夜毎、涙に濡れて疊まれる事は御座んせぬ、まして襦袢の袖、袂の紅絹、絞れば雫の血の涙かとばかり、まことある甲斐も御座んせぬ。

いつそもう妾は耻も外聞も捨てゝ、此お邸を拔け出て、(とても昔の儘ならぬ身を再び賤夫さんに願はうとは思はねども)自分相當な木綿夜具に、やすく快く、溫く眠りたう御座います。

とは言へ、妾がこゝへ嫁いだのを、此上もない一家の面目と喜んで、老先を樂しまれて居るふた親に、如何してそんな我儘が云はれませう、たとへ此身は此のち一睡も結ばれで、死するに優る苦しみをさせらるゝ共、よしんば其が爲に重い枕に打臥して十九年を夢と……、あゝいつそ早く病氣になつて、死んで了

學しらべ（其外）　常陸　今泉駿子



へばい〻、死ねば憂いも辛いも悲しいもない、死にたい、死にたい、…けれども…、よーむくろは動いて居て息の根は通つて居ても…、心が死んで終つたらば世々樂しいも苦しいもあるまい、さうだ、今から妾はふつつり死んだ氣に成て過しませう、花島八重は今日限り世に亡くて、奏夫人なる形骸の空しく働いて居るのみと…。

神經のないからだならば、此衾はおろか、荆棘を編んだ臺の上にも眠られぬ事はあるまいと、妾は屹と思案して、冷たく麗しい褥の擒と遂に成つた。（完）

（評）翠帳紅閨の裡愛なき結婚に涙を絞るもの獨花島八重子のみにはあらざらん。

秀逸

○白ぎく

信濃　帯刀きさへ

壹

宇宙の美天に凝りては星となり、地に結んでは此花とやなりけん、白妙の花葩美しく、けだかきその姿質に淸きはこの花なるかな。

星の靈をうけてや生ひたち、朝の靈をや孕んでや咲きけん、霜にもたわまず、明星の瞬きそめしごと、淸き香あたりをはらふ其容、實に崇高なるは野菊の白きなるかな、

貳

我が詩の友は病みぬ。

日々四十度の熱き血は之が額をめぐりぬ。

醫師はいよ〳〵死の神の手に委ぬべく宣告せり。

あ〻友は逝かんとす。

參

妾は、淸き朝明を、冷き露ふみて、野に立ちぬ。

友が惱み慰むべく、此花一枝えんために。

一帶の夜雲晴れて、日は朗かに輝きぬ

碧空ついてたてる樅の木かげ、茅萱の間に妾は此花を見出しぬ。

雪をも欺くばかり白く淸くさける其姿、奇しうも靈こもるよう覺えて、罪の子妾は、手折るにしのびざりき

かくて空しく戻りたりき。

四

あ〻、友は逝きぬ。

わが詩の友は逝きぬ「あはれ野菊」の一章を終焉の詩として。

覆したる盆の水は歸る時ありとも、『譽きし乙女のよく笑まん時ありとも、君が御魂は、永久に還らざるべしあ〻。

五

妾は再び老木のかげに野菊の花を訪れぬ。

あはれ、昨日まで美しうさき盛りし花は、早や何れか

の畫の手に摘みとられつゝ悲しうも白き花びら三つ四つこぼれたり、あゝ昨ありし君が命今日はなく、昨は驕りし清き花、今は泥にまみれぬ。

才秀てゝ幸うすかりし君が運命、崇高にして齢短かゝりし此花の生命によくも似たらずや。

あゝ、嗟、風寒う、雲とんで、妾が涙しきりに下る。

（評）白菊と詩人とともに崇高なり。

○若き畫工

秋田縣　黑丸とみ子

繪筆とるやうになりてより、三年五年は經ぬれど、まだ思ふまゝの物も畫かぬ口惜しさに、この春の初めより潜かに思ひ病ひ、桃の盛りを其儘に題にとりて、桃源の里にはあらねど、春水ゆるやかに南に流し、目もまばゆきまでの花の色に自然の戀を彩り、雌蝶雄蝶のもつれ飛ぶ羽音も輕く忍ばせ、束髮の前はふくらみて、眉は濃く帶は牡丹の紅に、春に狂ふ獅子も添ふべく、すみれの濃きを戀衣、裾はぼかしの菖蒲草、すくよかなるを其儘に、若き少女の立姿、春の思、希望の光、それもよしこれもよしと、思ひつきし其日より、一室に閉ぢ籠り、其儘に紙とりて、一點をうちては捨て、一線を畫きては破り、日毎々々にかいやれば、折々は我が室に見舞ひ給ふ母君の、などかくは物狂ほしきまでの仕業や、心なき春の水、靜なればこそ、岸の櫻の花もうつさめ、筆とり紙に向ひてはまづは靜に思へやなど、諭したまふこともありき。



子守（賞外）　神戸市　今田櫻町

かくて、春もすぎ夏の初となりぬ若綠小暗き窓のもと、なほ彌生の春の其日を夢に、感興の墨をかきなぐりて、まづはやう／＼思ふばかりの下繪をなしぬ。

五月雨しほ／＼と降り、菖蒲の匂ひ一室にかんばしき日を初めにて長は五尺、巾三尺ばかりの大絹のキメ濃なるを前にのべて、淡墨の筆をばやをらとりそめたり。

常には筆重く、自らさへうとましうも思はるゝ妾の、何者か來て、この腕を動かす如く、自ら驚かるゝまでの墨繪は、日ならずしてなりぬ。明日よりは、まづうす紅の花の色も染めんの嬉しさに、新しき繪具の一つ二つときて、そこらの紙にためしみたり。

思ひしよりも色よく出て、赤、黃、臙脂、紫、綠、蘇枋、さては胡粉の白きさへ、黑髮のふくよかなるに、リボンの色を染めぬ。

夏も夢の間に過ぎて、秋は上野の美術會、都の人を狂はせん日も近うなるにつれて、おもはずも忙しう筆をとりぬ、かくて思ひしよりもはかどりて今は大方なりぬ、床の間の邊り、夕の影を窓の光りにたゝて見れば妾ながらいみじうも畫き得たるよ、花爛漫として人も酔はん春の光、若き少女の、幸多き戀に笑める姿の、表情のいかに麗しきよ、唇は燃えなん思の色、目はしたゝらん情の露、頬のあたりまだ紅色のうすけれど、今日は日も暮れぬ、そは明日にも讓りてん。

明日にも終へて友に見せなば、其驚きやいかに、傍におはする師の君の、机にもたれて眼鏡越しに、むゝおもしろし、など一言のたまひ給ふ御顔の、如何に嬉しかるべきなど思ひつゞけて、其夜は夢に入りぬ……。

何處より何時の間に來にけむ、白き鬚の末は黄み、額の皺、波よりも繁く、にび色の衣あせたるを狩衣の如くに着て、白髪ゆら〳〵と肩に雪を散らせるか、痩せし腕に太き筆とりて、忽然!!!我が繪の前に立つよと見ぬ。

「今の世の若きものゝ作れるは、皆かゝる魔の神の貌なり、われらが目には見るもけがらはし紫の色戀の色なり、罪の色なり、けがらはし!穢なし!かゝらんはかくもあれや!」と、

驚き夢醒めて、寝惚のまゝ燈とりて、二階なる妾が室へと急ぎぬ、隙漏る風に燈火ゆら〳〵と畫に燃ゆるを壁にたてたる彼の繪に照らせば、えッ!

墨の色黒々と一面に塗られたるが、上に恐ろしき白き呪ひの蛇、舌は焔の燃ゆるなりけり。

（評）末段泉鏡花の小説に似て未だ及ばず。

○野みち　　上毛　かるかや

逢ふ時は刹那もおくれがちに、別るゝ時のなどてかく速き。限りなき憂愁の胸いだきて、二人は村外れなる土橋に着きたるなり。

……いざ友よ、さらば別れなむ、いつまでと果しなき名殘なれば……

振ふ手しかと握りつ、君はかく言ひて頬をそむけぬ、哀れ白うやつれたるその頬に、熱き涙ほろ〳〵とつたひて、さてうら枯れし野菊の花に……

あゝかつては何がし學館の女王と謳れて、才色いづれそろへる譽れに、友なる我までも何となう、誇らしう覺えたりしを、辛きは運命よ、人の情よ。

君も我も、同じ村校に鞭とる身となりて、うれしや樣樣の希望かたり合ひつゝ、朝に夕に、空ゆく雲の、美しう高う暮しけむ一と年。さるを高きを嫉む小さき子が、惡だくみに、あゝ何事ぞ、あらぬ汚れの名を囃されて、和胸の裂けむ思ひに、今日をぞ遠く、別れゆく

なる……。友は涙を吞みて、淋しうほゝ笑みつ、さてかく言ひぬ、去れど聲はいたくも振へたりき。

……幸くて在はせ……去らば友よ……

またの涙はら／＼と時雨れて、君はつと走り出て給ひぬ。行く秋の月は昏き初めつ、力なき光を野に投げて追ふに追はるべき君ならぬ悲しさに、枯柳によりて泣ける我は、ふと悲しき歌の聲に君を見やれば、白き顔ちらと見かへりて、小さき影は霧にかくれぬ。折から一しきり時雨ふりて、灰色の淋しき雲、なほ泣けとてか、恐ろしう、君が行方に流れてゆくよ。

(評) 清新。

○運命

芝　相澤義子

淡路から大阪通ひの小な汽船其のペンキ臭い三等船室の片隅に妾は獨り淋しく荷物に倚れて思ひに沈むのであつた騒がしかつた室内の話聲もやがて靜と變つて行き薄暗いランプの光が船のゆれる度毎にまたゝくと轟々たる機械の音が靜寂の間を響く。

げに計り難きは人の身の上未だ四月とたゝない前迄は淡路切つての造り酒屋、美濃屋と云へば知らぬ人のない妾の家、白壁の土藏もかしこ此所店には多くの下男下女を使ひお嬢樣とかしづかれ、日々の勤とせる學の道を終へて歸れば、内には優しいお父樣と、慈愛に滿ちたお母樣のお膝下に樂しく語つて美しく着て、溫かに眠り憂いもつらいも露知らぬ身の、人の世は何時も春の樣に樂しい物とのみ思つたのも無理はないのである其れが思へば夢の樣な家の零落、屋敷は取壞される藏も人手に渡る聞けばお父樣が相場とやらの失敗とか、一其れからはお父樣の自暴自棄お酒を浴びる程呑んだ其結果が、腦充血で果敢ない御最期涙の上の又涙お母樣と妾は殘つた僅かの家財を持つて今迄と變つて、わびしい暮しなれぬ水仕事や、さては賃仕事迄してのお母樣の一生懸命のお働きにやうやく細い煙をたてゝ居たのが、又してもつれない運命お母樣がふと風邪の心地床に付いたのがドッと枕が上らず、苦しい中に、醫者よ藥よと盡した甲斐もなくて雨降る淋しい夕、妾の手を握つて「儂の無い後は大阪に遠い親類だが店を出して居るから其れをたよつてお前はお出て」と云ふを名殘りにガックリと、泣く／＼野邊の送りをすまし、家もたゝんで、僅かの旅費、妾は此れから大阪に行く身よ、あすは又浪花の里にどんな夢を結ぶ事か。ふと氣が付くと船は灘にかゝつたかゆれる事が强くなつた、と今し吹き出す蒸氣の汽笛が人の身の上を悲しむ樣に長く細く胸に泌み渡るのである。

(評) さら／＼と書き流したるが却々にあはれ深し。

○おもひて

上總　山田沖子

けさ見れば燒野の原となりにけりこゝやきのふの玉しきの庭、

一旬觀じ來れば、うたかたの、かつ消え、かつむすびて、さだめなき世の、さてもはかなしや。松かれて、萱かげなき、この夕ばえの岡の、こゝが昔の野守の家ゐ。草生ひて、雲雀の巢くふ、この曉の野の、こゝが昔のなつかし小川。

まこと、出郭門直視、但見丘與墳、古墓犂爲田、松柏摧爲薪。とかいふことの、文選にぞあめる。そを、こしかたあさき身の、あさましくも、たゞふみの上とのみおぼえつるに、をこや、天地のさだめ、今ぞ、はじめて悟りぬる。

十年のむかし、むねをならべ、いらかをきそへりしも今は、ひたすらのあばら家となりて、誰訪ふ者もなく霜ふく風のみぞ、いとさびしき。

庭の木立の、日は暮れて、やがて、いでたる月の、かかるめるは、それよ、十年のむかしまで、わが庭に生ひたりし、老樹の銀杏。

かへりみれば、過ぎにしとき、わか竹、緑そふ深窓のもとに、たゞひとごとゝ、泣きける運命は、かなしも今、わが上にふりかゝり、宿もなき、荒野の月に、たもとをし沾る、身となりぬ。まいて、幼より蒲柳の身の、あしたの露に、たふれしこと、いくそたび、ゆふべの雨に惱みしも、いくそたび、おもふだに、げにあさましきを、さる人びとの、あたたかきみ情ありて、かくは、ながらへ來しかど、この夜、この身の、このうさ、いかで、えたへむや。

やよ、雁よ、さな雲に、かげかくしそ、幸うすき身にさめてうき世の、ゆくすゑかたれな。

（評）悲慨無量。

○ゑみ子　備後　松本薫子

妾の宅には七日前妹が生れたのです、妾から十七年目に生たれので、妾には前にも後にもたつた一人の妹ですもの、どんなに嬉しいか知れやしません、今日は丁度七夜に當りますので、阿父さんもお母さんも「薫さんお前名をつけておやり」つておつしやるのよ、妾は只嬉しくてほゝ笑んだ儘、何とかいゝ名は無いかしらと一寸考へたけれど、頓にはふさはしい名も思ひ浮びませぬので、すや〳〵とお母さまのお膝に眠つてゐる妹を受取て、そと接吻しますと、夢でも見てをつたのか、微かに笑を漏しますので、妾は思はず笑子‼と呼んだのです、餘りに聲が高かつた爲か、妹はパツチリ眼を見開いたが泣きもせず、又可愛らしく笑ふので、お父さんも阿母さんも「笑子か！〳〵」つて交る〳〵お手にお抱きなすつて、たわひもなくお喜びなさるのです、あゝ笑子！偶然に出た名とは申しますものゝ、妾はそれが確に妹の愛らしき心を現はしてゐるものと

考へます笑！笑と申しましても、其の中には自ら區別のありますもので、世の人のあらゆる笑を大別すると第一に愛らしき笑、第二に凄きゑみ、第三に飾りの笑第四に浮かぬ笑とすることが出來ると思ひます、とすれば妹の笑は？最も自然の愛らしき笑――天の帝から授かつたまゝの笑、だと思ひます、想へば妾はわが世に生を禀けてから最早拾有七年、其の間、世のあらゆる人の僞善！その僞善の笑餌に陥つて遂に知らず識らず、人より受けし恐ろしき笑の光を、妾の身より發して、人を射る身となつたのです、而して「あゝ妾は最早濁に泌まぬ清い處女ではない!!」と身を悶えてゐた今日この頃、愛らしき小さき妹を得て、其の清き美はしき自然の笑に接し、一週間の短き日とはいへ、妾はそが感化を受けし事は幾何だか知れませぬ「お孃さまは大層やゝさんのお好な性ね」とお爨どんの言葉に報いたゑみは、確に七日以前、人に作つた笑の何れよりも、全く異つてゐたであらうと信じます。かくて妾は、笑子の爲に精神的に生れ變つたのです、て妾は、妾も妹も、幾久しくこのゑみ湛へて、世を觀むものとなりたきことを、神に祈つてをるのでございます。

米とぎ（賞外）　藤崎美奈子



（評）ゑみ子とはよい名ですね。

○今日と明日と

姫路市　矢島芳子

明日ありと思ふ心の仇ざくら
　　夜半に嵐の吹かぬものかは

とのみ思ひて、ひねもす唯營々として身を勞し、聊(いさゝか)も樂しむの餘地なかりせば、此はむしろ愚なる業にて德とすべきものにはあらじ、かくを世夜の嵐に散る仇櫻とのみ觀じなば、はては深山の奥をたづねて厭世遯俗の庵をば結ぶに至らむ。されど

明日ありと思ふ心にほだされて
　　今日もはかなく暮しぬるかな

など言ふらむやうになりては、樂天に傾きて無頓着に流れん、例の不勉強不熱心など言ふは、大方明日てふ觀念にほだされて今日をうとんずるによるものぞ。さはれ、今日のみと思ひなやみて、くよ／＼と勉むるはむしろ消極にして、大事をなすゆゑんにはあらずや、たゞ明日てふ觀念にほださるゝことなく、よく明日あるをたのしみて今日をいそしむこそ、げにまことの、業にはあれ。

明日ありと思ふ心をたのしみてはげめよ今日を限りにはして

（評）穩健なる論旨。

俳句

巖谷小波先生選評

若水を銀の甕にすくひけり　長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

〔評〕高潔、壯麗、而も亦嶄新。

京五山鐘に銀杏を散らしけり　常陸國新治郡高濱町東大橋　酒葉貞子

〔評〕雄大の中俳趣津々たり。

秋袷病室の晝閑なり　伊勢國度會郡田丸町　乙部菊子

〔評〕悽婉にして又閑敦。

初空や杉十丈の神路山　南總愛宕山の南方松節の里　鏡花女史

〔評〕貴けなる句なり。

秀逸

幽鳥の聲きく山や藥掘　肥後　坂梨とみゑ

路つきて菊の花咲く小村哉　會津　雪月

掛取りを待たせて年を惜みけり　滋賀縣　藤野靜子

犬蓼の香ごしに見ゆる白帆かな　備後　白ばら子

冬川や杭にま白き鳥の糞　下總國　たか子

谷へ下る路狹くして花芒　堺市　浪江子

梁の鼠を叱る夜寒かな　越後　藤原不二子

名月に稻扱く隣同士かな　下總　萩原はな子

月の鴨蘆ある方へ泳ぎけり　和歌山　七星女史

元朝に日の出拜むや裏の山　深川　篠崎澄子

初夢を乞食の語る御堂哉　靜岡縣　松本節子

天馬空を走ると夢み今朝の春　横濱　松本久子

元日や駄馬に乘り行く村夫子　横濱市　撰波愁啼

夕榮や取殘されし柿光る　美濃　内藤美知子

出入する人にちりけり萩の花　伊賀　蟬涙子

曉の井戸に月見る寒さかな　姫路市　矢島露子

鷲すめる巖にぶつかる霰かな　群馬　かるかや

月冴えて柿盜人の影長し　千駄木　佐藤KS子

秋暮れて燈火寒き小村哉　安藝　伊津美

枕邊に小鼠耳語の夜寒哉　伊勢　板倉とし子

春の寺法會の果てし人歸る　伊勢　中村つれ子

羽板にはづかしき歌をかゝれけり　伊勢　中西とめの子

萩寺は木魚に暮れて時雨かな　廣島　さゝ舟

小さき子の行儀正しき雜煮かな　大和　玉の井

松黑く痩村見ゆる枯野かな　三河國　きす子

さゝ啼や黄昏かゝる栗の垣　上總　石渡ひさ子
鵯或日鶏の領地をおかしけり　和歌山　ゆき子
枯葉落葉夕少さき旋風かな　下總　伊藤みち子
風を塵む青疊あり夏の寺　新潟市　なり子
宇治山に雲雀落行く夕日かな　赤坂　内田露江
落葉するだら〳〵坂や馬の糞　秋田縣　江間のぶ子
神さびてしら梅稀に開きけり　相模　柚木とよ子
旅僧の衣に散るや柿の花　陸中　若生なか子
若殿は月に暴馬の稽古かな　西播　土井かつ子
藪一つ京を隔てゝ子規　房陽　花園
初日の出彩雲かける天馬かな　弘前市　紅葉女史
のり捨た舟に鴫なく夕哉　淺草　稲垣つる子
貴人の鸚鵡と語る小春かな　芝　相澤義子
禪寺の縁冷やかに落葉する　千葉縣　川島白明子
星月夜笛吹て人橋を行く　越後　藤原豐子
雛だいて寢て居る雛の主哉　宇都宮　芳野靜子
竹垣に乾した土鍋に時雨れけり　周防　岡部佐保子
やれ垣をしづかに守る黄菊かな　石川　白百合
秋ゆくばゆけよと撞きし鐘かそも　茨城　萩野花嬰女
初東風に髪一筋のゆるぎ哉　名古屋　とし子
中庭の竹に微風や星月夜　豐後　艮子
紫の傘につもりぬ春の雪　近江　孿子
雉子鳴いて春の靄破りけり　佐賀縣　武末登代子
陣營に別れの琵琶や秋の月　東京　木塚紫水女
夜寒さの孤燈を守る獄哉　牛込　和田てる子

秋風の棚より落つる埃り哉　岐阜　東原かほる
まる窓に三毛ののびする小春哉　大阪　和歌子
楓橋の夜泊に響く砧かな　深川　勝山千代子
新らしき橋かゝりけり梅の村　上毛　磯貝すゑ子
冬籠隣の人も來ずなりぬ　湖畔　青葉女史
野の寺や男一人の秋暮れぬ　尾張　野田葉子
相持して戰はざりき遠幟　千葉　木間絹子
朝晴や餌箱叩けば鹿の來る　下野　權太良子
秋の蝶行衛を風に任かせけり　神田　速月女史
小春日やよき人も行く小路かな　磐城　村岡花月
かたむきて烏とまれる案山子哉　香川縣　鎌田みつぎ
秋の雲信おとろへし古刹哉　伊勢　守岡みちを子
冬の日や狐おいだす葱畑　紀州　室谷保子
萩の露硯の水に加へけり　陸前　泉ちよ子
短夜を波白々と澪標　上野　宮田信子
御手植の松色換ぬ社頭かな　伊豆　石橋とめを子
背鼠稲三寸のそよぎ哉　群馬縣　松井清子
月の嵯峨假り寢に砧きく夜哉　臼杵町　白扇女
蟹の泡吹き離れけり初嵐　長崎　一ノ瀬もり子
病む人の寢顔に照るや秋の月　金澤　和田倫子
夕陽や花の渡しの船頭唄　栃木縣　櫻女史
禪寺や夜つく鐘に散る椿　秋田　菅萱とみ子
名月や橡近く聞くたばこぼん　岐阜　河合久仁子
柳散る漁村の暮や雁の聲　深川　砂村
秋一夜萩の小窓にねむりけり　尾張　寺本季子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

♥三　主家より伯母の許にある妹へ

麹町區上二番町四十八加藤邸内　しのぶ子

其後奥にて御取込事ありてつい筆取る暇なく、心ならずも打ち過し申候、今日は皆様小石川の御新宅に御出でなされ候まゝ、日の中に仕事はげみて一寸暇を得候まゝ、取り急ぎ戀しき御わたりに思ひを運び申すべく候。

其御許恙なう御渡りなされ候や伯母樣にも御機嫌よく候や、針の道御いそしみなされ候や、虫の音細くなりゆく此頃、すき洩る風もいとゞ身に沁みて、いつも御上偲び居り候、其折御身の袂かわきてありや、なしや、昔いま頃は裏に柿を落し、山に栗を拾ひ、うち連れて樂しく過し候事など思ひ出し候、其持山も今はよそのものなれば、など、御笑ひ下さるまじく候いつも却りてたしなめられつゝも、とかくはかなきくり言致され候。此方からだの暇とてはなく候へど、それでも氣骨はさまで折れず、少しつらきは朋輩の間に候へどそれとて眞心をもて交り候へば別に何事もなきものに候、それにつけても御身が痛はしく山々察し居り候。しかしとりにくき伯母樣の御機嫌も、もと〳〵御厄介になり居る事故充分氣をつけてお心にさはらぬ樣なさるべく候、つらしとてもとても〳〵女はそれを忍ぶもの、忍ばねばならぬものに候、まりやお手玉に日を送る娘さんたちとても、何れ女の數に洩れ候はぬうちは、いづれ其つらさを味ふ事に候はん、後になり不覺の涙を流し候よりも、いまより世の態知らるゝは却りての幸福と御思ひあきらめなさるべく候、とにかくは二人心を合せて御兩親の御石碑たて申すべく、お互に身躰を大切にしてはげみ申すべく候、心にまかすまじけれど折々消息たのみいり候、切手少しながら。

かへす〴〵からだが專一に御座候、かしこ。

（評）姉と妹とが亡き兩親の石碑せめては形ばかりなりとも建てんものと互に勵みあふ健氣さ。

♥四　○姉君の許に

本郷　田中常子

菊の香高き秋の空も早や暮れ方に相成候、姉君の御近狀いかに、いと〳〵戀しく候。
さて兄君より承り候へば、姉君には何かの事情よりしてこのたび離婚せんの御決心の由、誠に〳〵驚き入候如何なる深き事情の潜み居るかは委しく存じ申さず候へども、一たび人生の一大事たる鴛鴦の契を結び給ひ殊に秀ちやんといふ愛らしき御子供もあるものを、むげにも振捨てゝ再び生家に立歸り遊ばさるとは、そも如何なる淺間しき御考にて候哉、それも先方よりの申出に候はゞ詮方なき次第に候へ共、いはゞ姉君御一人の御心よりのこととひ〳〵海山無量のせつなき事あり候とも、又いかに申し分ありとも、一旦嫁ぎて子まであるその仲をかくては世間の聞えも恐しく、殊に兄君は背の君とは親しき友だち、義理人情の上より見ても、かゝる事は出來ぬと、且怒り且涙ぐみて語られ候、姉君よ妹の妾が御諫め申候などゝは近頃差でがましき事には候へ共、妾は只一人の姉君の爲に一言申しまゐらするにて候、何事も浮世のこと、これもかれも意に滿ち候ことは誠にこれなく候、御覽候へ春の花も咲きては散り、秋の月も滿ちては缺く。鏡なす大海原も怒濤逆捲き吼ゆる時あるものを、況して人の世のなどて思ひの儘になり候べき、風あり浪荒れし後にこそ始めて光長閑き春の日も得らるべきものなるぞ。姉君よあはれ姉君もまだ心若くておはしますよ。一生獨身生活とは、誠に手頼りなく心淋しきことと山々かと存ぜられ候、人の一生は短きに似てしかも永く候、病に苦しむ時もあるべし、老いて身の自由を失ふ時も來るべし、死も來るべし、かゝる時、そも誰が來て慰めむ、誰が來て病の床に一掬の水を捧げまつらむ、あはれ申すも涙の種子、父もいまさず母もいまさず、たとひ生れし里とは申ながら兄君一人の外は申さば他人にて候それに嫂君かくして御座候上は、自然又兄君一家の和樂を失ひ、よしや如才なき我姉君のさる事はなしといたし候とも、今より以上の憂きつらをさ御見給ふとゝ堅く堅く信じ申居候。あはれ妾が唯一人のなつかしき姉君よ、今一たび人靜りて萬籟寂たる夜半靜かに手を拱ぎて瞑目し御一考下されたく、人間界の不如意、獨身生活の無趣味、困難、迫害ありとあらゆる悲しき幻影は續々として現はれ來らむ、あはれいかなる深き事情の潜むとも、子を棄てゝの離婚沙汰＝位之に勝る悲慘と罪惡とはこれなかるべしと存じ候。姉君よ何卒思



雨あがり（賞外）　滋賀縣　川島嶺子

ひを顧へして再び和合の家庭を作り下されたくこれ妾が一生の願ひに候、至誠は神を動かす、一心に眞心こめて背は申すに及ばず、其舅姑小舅小姑に事へなされ候はゞ、皆樣とても木石ならぬ人、終に禍を轉じて福となすの時來るべしと存候、呉れ〳〵も一時の心にはやりて悔を千載に殘し給はぬ樣、千萬泣いて申上候。あまりの事に心亂れ手戰きて水莖のあともあとやさき切なき心を御推察今一度御思案の程呉れ〳〵も念じ上候、霜月暮方片破の月梢に落ちて萬籟寂たる草の戸にて、かしこ。

（評）奈何にかたくなゝる姉君なりとも此の文を見てはよも心を翻さぬことはあらじ。

○下駄を送りて

長野縣北安曇郡七貴村　翠波女

下駄うり吉太郎の君は妾が友に候ふ。町内名うての豪家に人と成り給ひて、妾とは無二の幼なじみに候ひしが、さだめなきは人の身の上に候ふ。父なる人の頓死以來、打ちつゞく不幸にさしもの家財悉く人手に渡りて、昔に變る貧窮零落、遂に彼の君が十一才の冬、母なる人と共にいづ方へか姿は見えずなり給ひてより、以來相見ざること既に七年。今日突然にも下駄賣りとなりて、妾が家を訪れ給へるに候ふ。

實に驚きとあやしみとに、妾は霎時ものいふすべをも知らず候ひき。

さても變り果てたる御姿や。ものいふことのいたくも大人びたまへることや。あはれ過ぎにし七年のこしかた、いづこの空にさすらひ給へる、恙はあらざりしやとのみ。問はんとして問ひえず、言はんとして言ひえず、相見相眺むること數時、唯だ人の世のまゝならぬをかこち申し候ふ。

乞はるゝまゝに色かはれる緒の三足を求め候ひしが、あはれうれしげなるそが御顏には、感謝の色をさへありあり浮ばせ給へるに候ふ。

おゝその箱負ひし後ろ姿。これやその上幼かりし友、吉太郎その君なるを思ひては、いよゝ胸打ちふさがりて、慰めんに半句の言葉とて出でず、いたづらに名殘のみ惜しうて、いましばしと袖とらへ候へども、主人持つ身なれば長居は無用、また相見んもおぼつかなしさらばとばかり飄然と北の方さして立ち去り給ひしよりはや二とき、あはれ君今いづこの土を踏み給へる。いづこの里にか入りたまひし。

誠やげに夢見る心地とは、かゝる日をこそ云ふに候はめ、さるにてもこの下駄。不遇なる友が手に成りし此下駄。いとゞ粗末に候へども、あはれこれが友、吉太郎の君には唯一のなりはひの品に候はずや。

うれしと思ひし一念こそこの四寸の板にこもり居るに候ふ。

されば妾、悉くこれを已れが足にかけんことの口惜しう候ひて、紅き緒の色、やゝ小さなるは故里なる妹へゆかりの色の小紫、似あひ給へる一足を御身が許にまゐらするに候ふ。

お氣に召すまじきは承知乍ら、世にも果敢なき友が身の上あはれとおぼし候はゞ、いたづらにはしたなきものとのみ思し召したまはず、御散策の時折、そがうつくしき御足に召させ給はゞ、たゞに妾のみの滿足には候はず、友が名なし小下駄も實に榮えあるべしと存じ候ふ。かしこ。

(評) こゝぞと取りたてゝいふべき節はなけれど幼馴染の零落せるに寄せたる同情は作者の人柄をさへ偲ばしむ、文にたるみなき大によし。

秀逸

○乳母の許に　石狩　初子

寒さのみぎり如何暮し居られ候や、絶えて久しうお便りもなく候へば老の身にお障りもやと心痛め居り候、こなたにては恙なく消光まかりあり候へ共其許さがりてよりは家の内も淋しう久敷お世話になりたれば後の母樣にも別れし心地致し、お膝許のみ懐しく思ひ暮し居り候。

幼き折は母樣のやうに思ひてばあや〳〵と慕ひより繁き家事の妨げもし、十一にも成て氣六かしく其許を困らせし事ども夫れより夫れと思ひ出ては何もわきまへぬ昔の戀しう偲ばれ候。

今少し近からば折々訪ねもし訪ねられもして昔がたりに樂しき夜も更さんと思へど夫れもまゝにならず誠に心もとなう覺え候。ちと寒さもうすらぎなば遊びがてらお越し下され度、老いたればとて餘りとぢ籠り居らるゝは身の爲めよろしからず候へば倖もあり汽車もある世に杖にのみ便らで思ひ立たれ度樂しみに待居り候此の文に添へて眞綿少々お送り致し候間胴着になりとおひきなされ度候、猶ほ氣候不順の折柄御身御大切になさるべく、先づは後の逢ふ瀬を樂しみつゝかしこ。

(評) 何歳になりてもなつかしきは乳母なりとか。

○酒樓なる兄上樣へ　飛騨　亮子

かへらせ給へ兄上樣、今宵はいたう木枯ふきすさびていたづきに痛み給ふ母君の心地いよ〳〵すぐれず成り給ひしに、かへらせ給へ兄上樣、一昨日よりの流連、思へば思へば淺間しく候よ。かゝる事申上げんははしたなき業なれど、柱と賴む兄君の、アヽいなればかく

も心の狂ひ給ひけむ。浮川竹の浮れ女に、誠の心のなき事はかねて知り給ふ筈なるに、昨日も今日もおかへりなきはいぶかしき限りに候。語らば母君の病ます〱募らんと君が行く先申さねば、知り給ふ筈もなく、「勇はいづこへゆきし」「勇は歸り來しか」と呼び給ふにつけ、妾の胸ははりさく計り、母君にかくれて涙にくれ居申候。

あはれ歸らせ給へ、歸りて母君の心を安め奉り、さては妾の胸のくるしみ晴らしてよ。迷ひさめての後の悔は八千度嘆くとも甲斐しなければ、今宵を限り、父上の居ませし去年の心に返り給ひ、必ず〱早くかへり來まさん時をぞ待ら侍る。

（評）苦衷察すべし。

○友の許へ

豐橋　房枝子

此文妹に認めさせ候、宜しう御判讀下され度候。

先頃は度々の御見舞、有がたく御禮申上候、實に袖に涙のかゝる時とて、暖き御性の常よりは一入辱く、嬉しきまゝに、堪へ情もなくて、ついも〱繰言のみ御耳に入れ、さてぞ御聞辛らかりし事と、今更申譯の致しやうもなく候、さりながら、愚痴はをみなの常とやら、況して斯樣に成果てし身を哀れと、思召して、何卒御許し下され度候。千度言へばとて、盲いたる眼の開く世のあるにもあらねば、最早繰言はふッつりやめと、覺悟極め候へど、一人在る時は、自づと涙の頬を傳ひ申候。

誠に、煩ひつきてよりは、一家打濕りて、笑ひ聲も絶え果てたりしを、あなた樣にも御存じの藤波樣、昨日入らせられてよりは、頤を解く、例の御輕口に、少しは蘇の心地も致して、珍しう琴柱の塵を拂ひ候、多年手馴れたればか、覺束なき探り手ながら、調子は以前にも變らずと、傍へに母の申され候へども、心なげにや、妾には、何んとなう、以前より音色弱く、沈みて聞え候。

藤波樣の御笛は、いつぞやより遙かに御上達遊ばされなか〱御見事に候、床に入る迄、あなた樣の御噂致し候。

今日は麗らかに霞める由、初めて窓を開き申候、庭の梅も漸う咲出でゝ、夜は朧の月の匂やかなる風情とか御歌の中のものと覺え候、いかて、晩景よりおはこびありて、冴えたる音締をば、此花になりとも聞かせ給はずや、藤波樣はじめ、拙けれど、妾も久々振にて御相手仕るべく、妹も、幼き手振に舞はむとて、早や紅扇など持ち出したる樣子に候。此樂しきまどゐに、今宵一夜は憂さをも、紛らす事と嬉しく、せめて一日なりともなどゝの愚痴は、決して洩らすまじく候。粗末

なれど、仕度も調へあれば、御夕飾は此方にておしたため遊ばすやう、猶ほ、御歸りには、作爺に送らせ申すべく候間、母上樣にも御心配遊ばさぬやう宜しう御傳へ下されたく、先は、一同御待ち申上候かしこ。

（評）盲ひたる少女の情あはれに描き出されたり。

○小島より

赤坂　森　英子

あら玉の年の始の御ことほぎ濱の眞砂のかずつきず目出度祝ひ納め候、昨夜つく〴〵淋しさの餘りやり戸一枚繰りて小窓によればはるかに寄せては返す浪の濱邊さへ冬枯れに見渡し覆う覺えてさへ渡る月の影を長う引きて歸りくる賤の女のさつま芋を己が丈より高く積てかつぎつゝ、夜目にもしるき黑髪の長きを無雜作に束ねたるさへ匂ひこぼるゝやうにて枯れ椿の木かげにかくれ候迄見守り居り候へば、南の方より聞えくる鐘の音にふと指折りかぞへはじめて都ははや今日が一とせの終りの日なりと心づき今夜は恰も除夜にて候はんとはるかに都の空を望みて思ひみだれ候ひき、今頃は定めし松竹のみどり美しき門には禮者のゆきかひ繁き御事ならんと實になつかしく存じ居候、さて姉上樣思へばをかしくも嬉しきことこそ候へ年頃姉妹のちぎりを結び候て親しみつゝ同じ月日に生れ候ひしもの故いづれを姉とも定めがたくて君が姉上よ妾が妹よと共にあらそひ候ひしも、今君には先に花の御年重ねさせられしてとにて候へばこれをよきしほとひとり妹となりすまし姉妹の別やう〳〵定まり申候へば左樣御承知下され度候、かしこ。

（評）よき思ひつきなり。



渡し場（賞外）　加賀　波佐谷磐子

○都の友へ

天鹽　天の舎女史

謹みて天長節を祝し奉る。今日は十一月三日の朝よ・・・あゝ。樂しき天長節に候ふ。明治文明の粋を拔き、人爲の美を盡したる花の都に住ひて、目のあたり九重の宮居を拜み、華族とやら尊き姫御達と共に此の佳節を祝ひます君は、如何ばかり幸多き御身に候ふぞ。人に生れても實に生れ甲斐ありとや申すべく候ふ。

併し、都會も時に取りてはせまきものに候ふ。有らゆる人爲奇異は、見盡されたる君も、此の寒村の天長節

は恐らく未だ見そなはせられぬ御事と存じ候ふ。寒村と申せば如何にもさびしい村といふ意味以外、此の地には別に寒い村として特別に適用いたさるべく、昨夜より吹き出したる大風の烈しさ、譬ふるに物なく、家も倒れんばかりにて、一夜、睫を交へずに明かし申候ふ。曉に至りて計らずもまどろみ、八時半といふに起き出づれば、庭は一面の銀世界、松も石燈籠も庭石も眞白に相成申候ふ。如何に物知らぬ田舍なればとて、天長節の御祝にまで綿帽子の裝束とは、ちと恐入候ふとは申すものゝ、實際は冗談所の騒に之れなく、初雪よりの大吹雪、加ふるに十年以來の暴風にて人家、漁舍の破壞浸水、船舶の流失夥しき者に候ふ。〆し硝子戸の外は、一寸も眞顔にて出られず、曾て滿洲の野に翻りたる旭旗のそれならねど、僅か十間の道路を隔てし向の軒に閃く日章旗もしかとは見えず、道行く人は更になく、門口、一間先は全く雪の世界にて、空氣も雪、大地も雪、家も人も木も山も雪ならぬはなく叔母か來たとて喜び狂ふ犬ころさへ見當らず候ふ。

辛うじて學校に至れば、生徒は僅か三百八足らず、平生の三分の一にも當らぬ次第に候ふ。之れも無理ならぬ事に候ふ。先づ形通り一時間餘の儀式を終へ、次は勳章授與式と幕を替へ申候ふ。支廳長の聞き取れぬ演說と凍えん計の寒さとにて、折角の天長節も、大分有り難くなく相成申候ふ。かしこ。

（評）諧謔なる筆致かへつて情の濃かなるを見る。

○寫眞を見て　よね子

秀子樣芳子樣なつかしき御姿繪、只今拜見いたし居り候、遠く茫々たる尾花を別けて、流れ出で候小川のほとり、野菊萩など亂れたる、背景げにいつぞや六つの袖つらねて、遊びたはむれしかの野邊に似て候はずや秀子樣は相變らず生花の料にや折り給へる桔梗の實に枝ぶりよく候事よ、芳子樣の御髮に香ふ愛らしの撫子そもいづこにて摘み給ひしか、あゝ妾も御地に居たらんには、必ず〳〵御袂に亂れかゝる、野菊をもちて、御二人の間に立ち候はんものをされど〳〵浮世にて候樂しかりつる都を捨てゝこゝ山莊の破れたる窓に、御二方の樂しげなる、御うつし繪を抱きてたゞ恍惚と暮れて行く、御地の空を眺むる身と相成候ては、なつかしきうれしき、思ひもいつの間にか消え失せて、今はたゞ御うらやましさのみむら〳〵と湧き返り候。されどこれもまだ住みなれぬ田舍住の、わびしきあまりに候へば、今一二年も立ち候はゞ、萬づ風俗も目なれ候べく、田舍は又田舍の樂みこれあるべくと存じ候鎭守の祭も來る舊三日とのよし、いかなるものかは未だ存せねど、淋しきまゝに指折り數へて待たるもをかしく候、あゝ戀しき秀子樣よ芳子樣よゆるしませ、又々かゝる事のみ申して、さぞかし御怒り遊ばしつらん、されど何も妾のくせと思し召して、何卒御心に懸けさせ給はぬやうくれ〳〵も願ひ上げ候。

（評）まのあたり寫眞をみるようなり。

新歌謡

編輯局選評

二等 越後 村山よし子

越後名物高田の雪は九尺位でまだ足らぬ

皆さん、新歌謡は斯う云ふ風に、自然にありのまゝに、人事でも天然でも歌うてごらんなさい。

三等 徳島縣勝浦郡生比奈村大字星谷村二十二番地 紫濃子

籾もすり上げお麥も蒔いた明日はそろそろくらじまひ

そろ／＼と云ふ言葉が能くはまりました。

四等 京都市松原通大宮 橡子

山は紅葉よ野は稻の穗よ内のお庭は菊の花

調子よし。

五等 岩代河沼郡上野尻 齋藤さわ子

鷄が鳴くぞや東が白らむ起きて汲みまし

よ化粧の水

化粧の水が一首の生命。

秀逸

○風のまに／＼舞ふ銀杏葉は落す扇か赫耶姫　麹町 淺井千鳥子

○ちよいと物置のぞいて琴の塵も拂はず忍び彈き　濵田 邦子

○おしよろ高島烟の末に蝦夷を見て越す雁ぶね　天の舍女史

自註、往昔かもゐ(サイヌ語の神)こたんより北は女の越ゆること能はざる所とし、或る外國人にまで稱せられし「おしよろ高島及びもないが、せめて歌棄、磯屋まで」の歌謡ありしに、今は却りて樺太までも鰊漁夫等の船（これを雁船といふ）に乘りて男女共に渡航するを以て。

○姉は大學わしやお茶の水二人自炊の小石川　信濃 櫻井操子

○花に浮かれて先からさきと入る日も知らずに舞胡蝶　早稻田 翠竹女史

○七つ不思議て名高い越後越路よい處雪がふる　新潟 ゆき子

○七時前にとび乘りすればにくや七時に五分過ぎ　東京 かなめ子

伊勢 蘆の舍女史

京は八坂の御塔の下をとほる小傘に花ふゞき
◯
月は東にお星は西に中を通ふるよ時雨雲

遠江　宮城雫子

○鶴の巣を組む尾上の松に七五三の節を張り替ゆる
奈良　白藤女

○春の長居に下女戸のかげで魔術使はる遊藝
備後　田邊露江

○咲いた花なら枘がよいに女十八他所に嫁く
京都　花翠女

○あれも雛ひたしこちらもしたしほんにせわしい年の暮
麻布　春子

○明日は元日妾しやうれしうて紅い着物の夢を見る
秋田縣　三浦おしゑ

○稻も豊年大根もあたり妾の蒔たる細大根
群馬縣　峰岸眞佐子

○なびく瑞雲霞と申せ潮路はるかに初日の出
周防　小藤

○里の妹から可愛い筆で便り嬉しき年賀狀
伊勢　見並愛子

○今年はじめて島田に結ふて手拭とつたりかむつたり
埼玉縣　中村歌香子

○空も主も私の胸も晴れてうれしやお正月
千葉縣　つた子

○恥しい日も近づきました今年十九の初春
伊勢　守岡みどり子

○寒いばかりが冬ではないと神が吹かせる小春風
下總　萩原はな子

○嬉しや新道の里町頌歌に銀のある響ほしや
京都府　穴田松江

○一つ一つになる夕鐘のひゞきから出る星の數
牛込　細谷すみれ

○新春の都や刹那くばる鈴にまじるよ羽根の音
新潟市　なみ子

○わしの次兄樣分家をするて今日は棟上げお餅なげ
南多摩　金子信子

○朝顔みた樣な花笠さした稚兒が入りゆく幼稚園
備前　村田生

○私しやゐなかの草かり姫萩咲いたら馬にやる
若狹　長谷川美尾

○化粧は終えたが外へは出れぬ三輪ちやん迎ひに來ればよい
相模　植木とよ子

○御殿樣も八重菊さへも落ちりや木の葉の下となる
若狹　藤本ふさ子

○三越白木の新柄よりも母の手織があたゝかい
荒川　久子

○わたしや村ての一つのポストいろんな文句が舞ふて來る
下野　眞月

○單衣着てさへまだ好い時節神のまよいか霜が降る
島根縣　伊藤喜多子

○山てまゝ食やお斎はきのこ箸はへし折る萩の枝
常州　夏山みどり

○弟修行の手助けすとて姉が機おる月のまど
本鄕　曾我露江子

○清い泉も谷間を出れば人の厭がる溝の水
成田町　武田たき

○田子の浦から富士山見れば夏の暑いのに雪がある
麻布　藤本香子

○水が涸れたて筧を覗きつ栗や落葉が堰とめて
下野　穴原のぶ子

○
下野　鈴木露江

○繪にかしたる蛇の目の傘に紅落ちら／＼初時雨　千葉縣　よし江

○黄金まいたは昨日の公孫樹今日は吹雪に枯れて立つ　上毛　五十貝すゑ子

○西行法師も知らない旅よ月に富士みる汽車の窓　湖畔　青葉女史

○雪はふる／＼野山はねむるたゞ聞く水車の音ばかり　伊豫　田中蘆江

○一時半なりや學校がひける早く歸つて稻なかろ　岐阜　河合久仁子

○うらは汽車道おもてはお寺西は藥屋東は田　秋田　黒丸とみ子

○友と別れて獨りで歸る萩原三里は蟲の聲　肥前　一ノ瀬春江

○小さ花笠舞衣きせて扇持たせてながめたい　肥前　林さゑ子

○此世戀しと月姫さまが忍び姿か夜の螢　京都　樋口波岡女

○乳母がいんでも子供は育つ姉が牛乳で守子する　日本橋　荒初きみ子

○若い／＼とそないふうちに私しや今年が十九歳　陸中　森　森子

○俺もなりたや籬の菊に通る人だちみな賞める　金澤　和田倫子

○都へ行くのはわしや嬉しいが山や田畑に名殘惜し　近江　藤野靜子

○京の娘子手に手を曳いて赤い日傘で神詣り　岩手　佐藤しの子

○薪を背負ひて山下る時わしと月との顔があふ　埼玉　夕月

○上は紅葉の濃き紅よ下は亂菊裾模樣

○此處は香取の龜甲山よ偶にや都の人が來る　下總　廣瀬女史

○内侍泣かした生野の路もいまはみせたや汽車路を　但馬　岩崎梅月

○私しや蕾であなたは蝶よお仲よしだと人がいふ　鹿兒島　久永よし子

○結ぶ初夢其まゝ蝶になつて見たいよ花巡ふて　八戸町　名久井さゑ子

○雲のかゝりし夕榮なれば明日の天氣は雨か風　近江　たゞみ

○叩く庖丁に音頭も揃ふ今日は七草福の飯　豐後　平山良子

○私春野の蝶々になつて花にかり寝をして見たい　宇都宮　大岡順子

○雪の降る夜に琴取り出してひとり淋しく夜を明かす　因幡　三橋春代

○わたしや田舍の愚な娘都姉さんうらやまし　能登　北島久子

○濱に千鳥の夢美しい三保の松原朧月夜　本所　江原とり子

○わしが住居は田舍のわら屋屋根に草生へ苔がむす　安藝　千島

○私の姉さん十九の年にここで話した蝶も居て　北葛飾　戸張とめ

○妾しや深山の炭やき娘りボン買ふ錢まだいらぬ　京都府　竹葉女史

○湖や汽船は話に聞いて私しや湖水の渡守　上野國　田中さだ子

○照らす初日にうら恥かしい娘晴れ衣の小ふり袖　常陸　酒葉花舟子

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○四駁

周防　内山美子

◎昔から來年の事を言ふと鬼が笑ふと言ふけれど、之は愚論である、來年どころか十年も百年も遠く計劃しなければならぬ、決して鬼の笑ふ筈がない、又笑つた所が何だ、鬼に笑はれる位に頓着しては駄目だ、十二分に將來の長計を立てねばならぬ。

◎棒ほど願つて針ほど叶ふとはよく言ふ事であるが、之が亦馬鹿論である、棒ほど願へば棒ほど叶ふ、針ほど願へば針ほど叶ふ、一錢出せばパンが一つ、二錢出せばパンが二つ、一里歩けば一里近くなり、十里歩けば十里近くなる、棒ほど願へば棒ほど叶ふ。

◎稼ぐに追つく貧乏なしと云ふ事も間違てある、隨分稼いでも貧乏はつきまとふ、昔は何うであつたか知らぬが、世知辛い今の世では、稼いでも稼いでも追つて來る貧乏がある事を忘れてはならぬ、

（評）稼ぎ追つかれ、稼ぎ、追つかれ、貧乏と根競べして、遂に貧乏をしてヘト／＼にしてしまふ覺悟が無くてはだめだ、痛快の論、古い評語だが全く拍案快哉を叫んだ。

四等　○苦痛の福音

上總千代田村　山田沖子

人生は常に活動を要す。活動は我等の生存義を表現する唯一の道也。活動とは自らにして起る運動の謂にあらず。人は常に的無きに矢を放たざる如く、人間の潑溂たる活動は必ずそが對象として外力の抵抗を要す。

鳩の大空を翺翔するや空氣の抵抗を感ず、されど若し空氣無かりせば鳩は遂に自由なる能はず。是れカントが引いて以て這般の理を暗示せる所也。

虎兒を得るには虎穴に行くべしと雖も、一毛の輕きも尚全く無力にして擡げ得べきに非ず。されば活動の對象たる抵抗は、其是を排除するに當りて、必ず幾分の苦痛を伴ふべきことと明

けし。さはれ人は本來さほど苦痛を苦しとするものにあらず。薄弱なる抵抗の、取て以て敵となすに足らざるものに對しては、却つて活動を厭ふに非ずや。譬へば、常に勝算ある敵手と棊局を爭ふを好まざる如く、成人の小兒と相撲するを欲せざるが如し。反言せば、人は多く苦痛の裡に在つて不可言の甘味に舌鼓する也。『艱難汝を玉にす』我等は玆に至りて苦痛の福音を解するを得たり。

之を過去に顧れば彼の曠野に圍まれて、道に塞がれ糧を絶たれたる聖仲尼は幸なる哉。何となれば、吾亦顏回と共に容れられずして、愈々夫子の大なるを見れば也。

十字架上に悲慘なる最期を遂げたる基督は幸なるかな。そは西歐幾億の後昆は其處に最も崇嚴なる、感激と畏敬と安慰とを求めつゝあれば也。

毒を仰げるソークラテースと佐渡に流されたる日蓮とは共に幸なる哉、故如何となれば、古代哲學は滚々として彼より流れ、佛敎の積極的威權は一度此によりて皷吹されたれば也。

敢て多くの引證を俟たず、史上の偉人は常に周圍の時勢と奮闘し、凡人と奮闘し、罪惡と奮闘し、而して復自己の健闘して備さに苦楚を嘗めぬ、佛陀の所謂一切世間多怨難とは、聽て偉人を生出する所以也。

證ずる所偉人は苦痛の所生也。苦痛を忍受すること愈々多くして、其風丰彌々高き也。

觀じ來れば災禍必ずしも災禍あらず、不幸遂に不幸にして終らず。嗚呼人類の受難史とは、聽て是れ一篇の福音書なるなからむや。苟も人類進歩の大觀に參與して一露の惠に浴せるものは、仰いで天の授くる貴き苦痛を拜受すべき也。

勞働を以て苦痛となす者よ、そはやがて愉快と滿足との生母なるを思へ。

活動は人生の要求也。聽て其生存義の發揚也。人生眞の安慰と光榮とは、唯汗と膏とを以て買ふ可きのみ。

（評）高く大に眞なる論、こと論旨を會得する人已に偉人たる道に一步を踏み入たる人なり。

秀　逸

○人物と富士　　岩代　華　薔　薇

富士より高き雲はあれども、高きを以て稱せられざるは何ぞや、浮動常ならざればなり。言語雲の如く容貌花よりも美なる小人ありと雖も、人物を以て稱せら

れざるは何ぞや、學才乏しくして主義柔軟なればなり才能はその始め廣く諸種百科の學に渡り、後に專門的に高く深く一科の奧を極むべし、獨り富士の高嶺の仲天に聳えて千古に動かざるは其の麓の廣大なるが故なるべし、富士の高嶺の壯嚴なると、人間の才能の壯嚴なるとは、此の點に於て一致せるものといふべし、空想空論を以て人物となる事能はざる事は風に浮動さるる雲の高きを誇る能はざるが如し、人物たらんと欲するものは、實行を先きにして自他を益する事業を成効し、名聞や批評の如きものに耳目を汚すべからず、富岳の狂風に動かざるを見よ。

（評）富士より高き雲の比喩面白いかな。

○先づ小事を全くすべし

陸前　佐々木利子

大事果して大事なりや、小事果して小事なりや。

さゝやかなる雫、流れ〳〵て海となり、こまやかなる眞砂すら、積りぬれば山となる。

日常の些々たる僞を言ふことを注意せざれば、遂には大なる虚僞を語るを何とも思はざる惡習慣となるものなり。

大事を成さんとせば、先づ小事より始め、高きに登らんとせば、先づ卑きよりせざる可からず。此の順序を正しく踏み行くを迂遠なりとして一躍雲間に入らんとするは得て事を仕損じ易し。漫りに大功を希ふ人は終に何事をも成し得ずして終り、これに反し先づ小事に忠實に撓まず進む人は求めずして終に大功を成すに至る。

偉人は一擧一働偉人也。

名文は一字一句名文也。

先づ小事より全くせずして直ちに大事を全くし、其功を收めんとするは不可能なり。古人曰く「小事に忠なるものは大事にも忠なり」と。惟へ！大事は小事の集合なれば小事をだに全くすること能はざる人にして如何で大事を全く爲し得るの謂れあらんや。

先づ大事、大功を忘想せずして、小事小功を忠實に全くせんことを期すべし。これ成功の順序にして秘訣なり。小事に忠なる人は、軈て大事を成すに相應しき人也。吾人成功者たらんとせば先づ小事に忠なれ。

（評）竊翁曰く知慧は小出しにすべしと

○破障子

肥後　三浦たけ子

破障子の裏表、外から眺めむには嘸寒からむと思はるれども、内に居る者は此れでも左程には感ぜざる可

し。乞丐に物を恵んで大なる慈善でも行つた様に考へる人は、躰よく馬鹿にされたるお人良しなり、先方にては難有くも何とも思はぬのみか、惠投の多少を評罵したり家内生活の程度を社會に公表せずとも限らぬ品物なり、少し油斷をすると下駄を掠つたり、臺所から鍋を抱へ出す位の藝當は苦もなくやつて除くるべし、「乞食を三日行れば止められぬ」、とは餘り莫迦にした辭てもなささうなり恐しきは習慣の力なるかな。

三角に破れたる障子の穴から外を望むにしても、遠く隔たれば三角に見ゆれど、近く寄りて覗視すれば人の立つて歩行くのも家の形態も皆立派に見得るものなり、世間狹しと唧つ人は此の穴より故意に遠除いて居る人ならずや、また女尊男卑など無暗に振り廻すんは、障子が何の爲に立てられたるも知らぬ愚で傲慢な人であらう。

障子の破れ目から外の冷たく乾た道を通つて行く人を眺むるに、溫か相なる衣類を澤山襲ね、其の上贅澤にも外衣など絡つた人は、寒相にそゝくさと走つて居るが、着類も薄い行商などは却而悠然りと歩行いてゐる、偉い者に成ると一刻千金要用が問えてゐるといふ譯でも有るまい。

要するに何事にも裏表は有るが、表が有る爲に裏が出來てるでも無ければ、裏を顯す爲に對照に置かれたる表でもなし、それ相當に場所と力を與へて有る者て其の劃限内に於て自己の全力を致せば其の者は既に偉なる者若くは意味ある生涯を送つた至人と云つて可なりと思ふ。狹い世の中でもなければ廣い世間にも不有、破障子にも相當の職責及納る可き所も有るのである

水車(賞外)福岡縣　古賀つれ子

(評) 言ひ足らぬ所なきにあらねど優れたる節々あり有望の筆。



○秘密

上毛　星香子

社會のこと、半ばは舞臺に於て演ぜられ、半ばは黑幕の中に於て演ぜられる。其の隱された半面を秘密と云ふのである。

秘密は人生の花である、秘密なき人生は實に無趣味なものである。故に、社會到る處秘密てふ聲を聞かざるはない。或は外交の秘密あり、或は軍機の秘密あり、或は秘密運動、或は秘密政策、或は何、或は何と、非常に適用されて居るが、果ては、慈善會軍人家族救護

會慈善病院等の如き、善美なる名の下に現はれたものにさへ、秘密の語を聞くに至つては、實に怪しむべきてはないか。高尚なる秘密は大に歡迎すべきものであるが、野卑なる秘密は大に忌むべきものである。
秘密は素と、社會の復雜なるに及んて、人間が餘儀なく假造したものてある。已に餘儀なく造られた以上はこれを、餘儀なく使用することは、固より當然であると云ふべきも、今日の如くてあるならば、その秘密の餘り多いのに、顰眉せずに居られようか。極端てはあるが、偉人には秘密はない。春來れば爛漫、秋來れば嬋妍、恰も鏡の花に於けるが如く、水の月に於けるが如くてあると、云はれて居る。故に、相互間に使用せらるゝ秘密の多寡は、直に以て社會の傾向、人心の清汚如何を、覗ふことが出來る。
人によつて造られたる秘密は、今は人を支配する程偉大なるものになつた。優美高潔なる秘密は、人情を濃厚ならしめ、醜汚野卑なる秘密は、殘酷にも人をして血を流さしむる。
嗚呼、秘密は實に愛すべくして、また大に恐るべきものてある。

（評）秘密を知らずんば世を知る能はず。

○雜感片々　[illegible]　かるかや

○物に熱するやよし、たゞ狂すべからず、熱せざれば事なりがたく、狂すれば事理の明暗を判すべからず。
◎同情の心は、人を活かしまた殺すことあり。同情にしてすぐることあらむか、人は必ず依賴心を生じ、爲に獨立の精神を失ふべし。然れどもその最も適當なる時に於て、適度にこれを失敗者に寄せんか、敗者は奮然として絶望の淵の深みより躍り出づべく、其狀さながら、彼の難船の舟師等が遥かに一點の燈火を認めたるが如く、無量の勇氣をひき起すべけむ。
◎吾は鐵の如き精神の人を敬愛す。世俗の中にありて冷然たればなり。而も溫情を解せざるが如きものにあらず、見よ其の一片をとりて、これを誠心の炎によりて溫めんか、やがて和氣靄然たるものとなるべし。これを撃ては怒りて火を散らし、これを紅焰の中に投ぜんか、憤然自らを顧みずして他を燒かむと欲す、決して屈辱を甘受するが如きものに非ればなり。

（評）明晰なる論。

新笑話　編輯局選

◯御白粉

府下北品川町山の下二〇四金竹方　丸山たつ子

姉「花子さん、そんなに御白粉つけると身體に毒よ」花子「あら身體じやないのよ顔だけよ」

◯稽古日

本郷區弓町一丁目廿五番地　朝井　松子

紳士「餘り長座を致しましてはお稽古のお邪魔に成りませうからおいとま致しませう併し令孃は幾日頃がお暇で御座い升か」令孃「ハアアノ一六が活花と茶の湯、二七が英語にバイオリン、三八が漢學と琴、四九が編物に造花、五十の午前が和歌午後が外出。

◯落書

日本橋區北鞘町二、池田みつ方　尾崎　雅江

母「敏雄やお前又お手本へ落書をおしだね、そんなこと先生が敎へましたか、敏「こんな事ぐらゐ敎はらなくつても直ぐ書けらア」

◯お月様

薩摩　簡牟田　菫子

子供「お母さんお月様は何箇あるの、母「何を云ふんだ、お月様は一つに極つてますよ。子供「でも時々形が違つてますもの……。

◯雨

大阪市　千藤　璋子

幼き娘「おッかさん、雨は何故降るだネ母親「草だの樹だの種々な物を奇麗に生やす爲に降るんだよ幼き娘「そんなら何故おとッさんの頭に雨は降らないんだネ

◯無花果

豊後　阿南　夏子

弟「姉さん、無花果は今たべないの？僕がしまつといてやらうか」姉「何處へ？」弟「僕のお腹によ！」

◯子守

周防　山田　ゆふ子

奥さん子守に向ひ「お前初めてと、御言ひだが随分すれておいでだれ――」子守「いゝゑ初めてあります、何所へ、行つてもさう言はれます」

◯年末

熊本　すゞめ

借金取「年末ですから金を是非頂きます、書生「でも旦那は御留守です、借金取「ですが頂かないと歸られませぬ書生「それでは一寸お待ちよ奥に行つて旦那にそう言ひますから

◯平氣

福井　黒川　好久

車掌「婆さん早く乘らなければ汽車が出發するよ」婆あさん平氣な顔で、「後の汽車で直に逐い付く。

◯二度の避暑

麴町　わらふかど

首尾よく切符なしで通つてきた避暑歸りの子供が「かあちやんいつまで坊は切符がいらないの？」母「もう大きくなつたのだから、今年でさへ無理したんだから來年は迚も爲効だよ」坊「ぢやあ今年のうちに早くもう一度行つてしまはうよ」

◯負惜み

本所　關根都女子

姉「お前追羽根一番下手のれ妹「うそよあたい上手なのよ姉「でもお顔がおしろいで一ッパイよ妹「あらお正月だからおけしよしたのよ。

◯新年松

奈良　白藤　女

甲「新年の松てどんな松だろう、乙「あれは勅題だ、丙「うん煙盤か、丁「なアにお杯をのせる物だなア。

短文

編輯局選評

一等

○松葉杉葉（賞品絹張洋傘）

岩代須賀川町　根本松江

冬は生木を焚き付ける位困難な事は無い、私は裁縫の餘暇に裏山から拾ひ集めた、松の葉杉の葉、今は物置小屋に充滿、能く枯れてゐる、之で今年の冬は永くとも心配はない。

新折焚く柴の記。

二等

○私の願ひ

北葛飾郡本吉川　戸張とめ

母が、私に、ながしもとをきれいにすれば後に、美くしい子が、出來ると、仰有つたから、日々、ながしをきれいにして居りますが、大きくなつて、きれいな、可愛い子が出來れば、それで私の願ひはかなふのよ。

可愛いゝ願ひ。

三等

○松並木

播摩揖保郡常全村　平谷たつゑ

朝は母樣と一緒に起きて、縫物屋へ行く迄はお手傳ひをします、晩に歸宅ても其通り、ですからいつも朝夕通る道すがら、長くつゞいた松並木をゆつくり歩きながら愛な本を讀むのが常です。

松葉を漆して。

四等

○袴のたけ

京都松原建仁寺町東入轆轤町七　岩淵國子

去年の紅葉狩に新調したお袴、丈は一尺七寸、今年の紀元節には一尺八寸、九月一日から一尺九寸、そして菊の盛りの天長節には二尺に致しました、やがて來ん嵐山の花見時には二尺三寸位になるでせう。

振分髮も肩過ぎて。

五等

○美しき夜

新潟夕榮町一、小島方　ゆき女

春まだ寒い如月の一夜、み歌使に隣村迄行つた歸路、月は朧に、駒下駄の底で淡墨色に、地にちつてをる梅葩を踏付て來かゝる

と、浸入る様な白梅の暗香が斷續に、歩む後から追つて來る、丁度此夜の明方手飼の鶯が雛生みました。

姫君は短册召し玉ふ。

秀逸

○お正月の毬　和歌山縣　津田久子

いつもお正月が來ると、妾は、お隣の春子ちやんと妹の美ちやんとに、毬を作て上げますの、去年は元祿がけの、今年は百合花がけのを作て上げますの。

手毬歌も添えて。

○天然　伊勢　中村てつ子

十一月三日の朝、伊勢海濱に出て四方を眺めました東から五色の征矢を放ちて朝日が出ます、西には千古變らぬ濱の松林、南には紅葉、北には漁家妾は白砂遠く連れる香良洲浦の根上り松に腰打掛て。

天と人との冥合。

○片栗の花　岩代　岸野常子

片栗は不幸の花です、可憐の花です、定めし人間の偏頗を恨んで居ることとてせう、妾は片栗の二字を見れば、まづ此花の不幸を思ひ、そしてひどく其を可愛がつた亡妹を思ひ、更に樂しかつた昔の春を思ひ、更にく不幸の今の身を思ふて小さい胸が一杯になる。

かたくりの花は百合に似て紫なり、葉はおほばこに似たり、正月頃花咲く故に初百合とも云ふ。



ふけ風よ（賞外）　福井縣　ろせい子

○都鄙の娘　本郷　朝井松子

「モー一度ジヨンソン先生から父樣に願つて頂いてどう仕ても一度は外國の地を踏たいと言ふの」と、お豐さんは今頃は東京さて何に仕て居るだんべエ己も一度行んで見たいもんだ、こちとらお女中で澤山だかと云ふのと、都會と田舍の女の違い。

田舍に居ると東京に出たいと思ひ、東京に居ると洋行して見たいと思ふ。

○繃帶　京都府　穴田松江

去年の秋妾が大切な桑の木を折りました時、自家用の巻軸帶と副木とて繃帶をして置ました、そしたら今年の春は不思議にも見事に發芽して立派に生育して居ります。

博愛。

○好きな花　兵庫　白ばら

妾は花が一番好きですが、色々ある中で理想の花が、一つあります、それは草花の野菊です、可愛らしいやさしい床しい其色は何とも云へないうす紫で、物あはれな秋の野にたゞひとり咲いて居る、あゝ愛らしの野菊よ。

詩を與へるなら野菊。

○水莖のあと　九だん　芳子

鵞堂先生其まゝの美くしい御水莖と藤子樣男子かと見まがふ正しき文字は光子樣御家流の優に麗はしきは艶子樣面白く癖のあるのが靜子樣かな文字の御上手なのは文子ちやん。

柔かに女らしきは芳子さん。

○美人　しら菊子

妹は美人である、熟た苹果の樣な頰には絶えず笑みを湛へてゐる、身の丈は妾より二寸七分高く、體量は十六貫九百目、年は十六の花ざかり。

姉妹合せにまごつく。

○冷たい　安藝　すみれ女

冬は何をしても冷たうございますけれど、雪の朝漬物を出すのが、何よりつめたいと思ひますよ。

諸孃は御存じございますまいけれど。

御存じの方もあり。

○燕と電線　韓國　手塚靜子

燕が翼を休めるには必ず電線にとまる、木にとまつて居るのは稀である。巣にも居らず空に飛んでゐない時には必ず電線にとまつて居る、燕と電線との間には何か深い事情が在るのであらうか。

動物學上の疑問。

○修身の御話　越後　曉月女史

妾十一時頃床に着いてそして康ちやんの優しき寢顔にみとれた。夢でも見たか『修身の御話』と寢語――オヽ潔白の康ちやんよ、そを忘れず勉め、と。繪入立志談を夜具の上に乘せて―

小さきスマイルス。

○名　京都　濱部愛子

祖母樣は菊の盛りの時生れたので菊子、私の次の妹は日本晴のカン〳〵と照つた時に生れたので照子、次の妹は靜かだつたので靜子次の妹は智惠が有りそうだとて智惠子、私は名が善すぎますのよ。

愛翫の愛、愛情の愛。

○女の寢顔　高知縣　[illegible]　牛　女

無邪氣なのは女兒と老母の寢顏。うらやましいのは美人のね顏。恐ろしいのは女中の寢顏。愛ひげなのは奥さんの寢顏。樂しげなのは娘のね顏。なつかしいのは友達の寢顏。そして見たいのは妾の寢顏。

寢顏を見れば美人英雄も凡て愚なるが如し。

○田園生活　奈良縣　中富よしみ

世の中に田園生活ほど愉快なものはないと信じて居られる都會の人々は、毎年都會に脱走する田舍の青年男女のおびたゞしいのをみて、さぞ不思議に思はれてしやう。

事實。

○寂しいお正月　下谷　梨村柳子

父上が御自慢のお謡や、母上が御機嫌よいお笑聲や、「僕これて五杯」なと〻頰ふくらます弟の姿や、「私だつて四杯よ」などゝ可愛らしい妹の姿やらが、見えるやうて聞へるやうて、下宿屋樓上のお正月は眞實に寂しくつて仕方がないの。

知らず、故郷の陸譜。

○水仙の花　堺市　竹叟文子

今度、伯母様が宿替なさつたので、行つて見ると庭に水仙の花が咲いて居ました。さつとこの家は若い繪師の夫婦が住んて居つたのてす。

水仙姫は繪師の戀人。

○我地方の諺　信濃　桐原撫子

一寸紙面を借りて拙地方の諺を書いて見ませうか、一元日に善事をすると一年中仕合せが續く、二足袋をはいて寢ると親の死ぬ時に逢へぬ、三夜笛を吹くと盜人がくる、四火を吹けば客がある、未だ澤山後は此次に

何うかあとも此次に。

○山道　名古屋　蝴蝶

中央線、千種から多次見間凡九里其間に隧道十四個あり、多次見より中津間七八里、其間の隧道八個あり、僅か十六七里間に二十二個の隧道あり、八九年前の旅人の困難思ひやらる‥‥今は座て四時間に行く。

越すに越されぬ大井河あらんや。

○からす　紀伊　文子

或夕の事てした、河原に澤山の烏が集つてましたから珍しく思つて眺めて居ると、其中の一羽が大きい聲てなく、すると皆とび上つて聲をそろへてなき又もとの位置に直ります烏にも何かの會があるのてせうか。

運動會てせう。

○十圓足らず　奈良　白藤女

本誌の課題披露お小遣を見ますとお答に成りましたのが總計六拾人外に參考が一つ、どれを見ても殆んど皆、お小遣は頂戴さるゝのにそれに比べて妾の毎日働いて九圓の給料世はさま〴〵ですね、時雨るゝや糊に冷たき手内職、此の感が御座います。

一圓の小遣より働いて取る五十錢。

○嫁入り　名古屋　小山かく子

長持、簞笥、鋏箱を擔つた行列が提灯を振り〳〵「嫁入りだア……」と頓狂な聲で先棒と後棒とが交代に叫ぶので、そらッと我勝に出て見る其間を相變らず怒鳴つて練つて行く、笑ふ批評する、之が當地の習慣である。

中ひに石を投げず。

○ちりもつもれば　豐前　工藤美香子

皆樣、淸書のかきくづしや作文の下がきを、安い紙だと思つてぽん〳〵おすて遊ばすな、三百枚たまれば紙布が一反織られますよ。

廢物利用。

○運動會　明石　孤蘭

テニスの球は高く低くネットの上をとんでワンツーの聲勇ましう、バスケットボールは源平に別れて各々勝敗を爭ひ、ブランコは高く動いて紫袴が輕う空中に靡いて居る。

曰くアマゾン、曰く體操。

○天長節　松江市　寺本芳野

朝とく起てそれ〴〵務めを終り、いざ是からお式にと妹の手を取て學校へ行ました、學校から歸つて見ると母樣はさも忙はしげに赤飯を蒸され、お晝は四人が一ッ台て睦まじくお天子樣の御誕生を祝ひました。

君が代。

○お初さん　德島縣　紫濃子

旦那大黑奥樣えびす一人若樣福の神あゝ何といふよい聲これはお初さんの毎年もみずりの歌てす。お初さんは七年もお隣に勤めて居る主人思ひの聲のよい人のよいお初さんを賞めぬものは私の村に一人もない。

村落に美談多し。

○小春　福島縣　片寄しな子

前は靑疊を敷いた如な大海原、後は削り下した如な斷崖、間に建つ茅葺の海士の住家。日あたりの好い緣側に白髮爺さんが蝦網を繕てゐる、その側に赧い首輪をした小猫が眠つてゐる。

沙上を歩む水鳥。

○田園の趣味　兵庫　柳田　白百合子

病後保養の爲めに手に豆をこしらゑて迄土かへした畑から青々とした枝豆やほうれん草などがいつもにぎにぎ敷夕の卓上にのぼりますのよ。

菜食論者。

○新聞　千葉　さかえ

妾の家は至て片田舍の農家でありますから、何時も新聞は午頃に配達されます。來ると直ぐ妾が本紙、父樣が附録、妾は廣告と日々の出來事を見れば父樣は諸物價を見るのが常てあります。

初刷は父に用なし。

○三里の糸　肥後　出田さつき子

私は、小學校を終へてから常に母樣の傍に居て裁縫、機織等致してゐますが或日木綿一反の縱橫の糸を一直線に伸べた處で細密に調べましたら恰度、三里十五町六間と成りました。

あるものですナ。



雨の日（賞外）　豐橋市　加藤芳子

○花賣娘　廣島縣　若草子

花賣娘が朝な／＼に賣り歩く籠も寂びれて、花よ花召せと呼ぶ聲も何となくうら寒くきこえる。もう高い峯には綿帽子が見えたに、あゝ此次は何の花を賣るてあらうぞ。

うつりにけりな……。

○不足にしたきもの　陸中　若生なか子

御父樣の借金と、御母樣の若白髮と、姉樣の御病氣と其れから妾の年の三つ四つも。

とは少し無理てせう。

○南瓜　德島縣　紫濃子

背戸の柑橘畑に獨生えた南瓜の蔓に、たつた一つ實がなつて、それが如何したのか直徑一尺二寸と云ふ大きさとなりました。誰云ふとなく珍奇よりも不思議だと云つて、日に二十人も見にきました。

珍世界に出品すべし。

○我が生涯　伊豫　曉子

此頃はいやてあつた店番も平氣てする、氣が高いとて嫌はれた叔母樣にも賞めて貰う、朝から晩迄米を炊いて掃除をして夜になると床に就く。嗚呼級中の秀才と呼ばれた自分は生涯こんなにして終るのてあろうか。

昔年の閨秀、今の瓦斐。

○屑織　沼津　渡辺とよお

ぬき糸や屑糸又靴たびの古いのなどをとき、つなぎ溜たら、三年目て大きな糸玉が、三ツてきました故三十錢てたて糸を買ひ横に織りましたら、丈夫な蒲團がわが三丈織れました。

○我が家の新年　秋田縣　黒丸とみ子

祖父は、鬚、白髪頭を雪に照して不情、苦笑。父は新聞に登稿の自分の漢詩の高評に喜ぶ。母は登校の妹にお化粧。兄樣は校友會幹事として學校へ。妾は黒紋付て友人と登校。海軍服の弟は前庭て朝から雪合戰。門は國旗、平和の風にゆるう。

○されぬの　秋田縣　佐藤いそ子

親子の縁、手織の木綿、繁昌な店の客足、東京諸新聞の殺傷記事、錆刀、お正月にわたくしへくる友達、輕業師の綱、妾と女子文壇の緣。

○歳暮　安房　木村比呂子

門に米屋炭屋から借金取が來るわけてもない此の山家の歳暮。町方の朝から借金取りが詰めて來るやうな歳暮とは全然違ふ。妾しは町に生れて平常美服をまとふのを羨やましく思はない。

○大好物　金澤　あけぼの

私の大好きなものは、女子文壇とそれにお琴とバイオリンと、オルガンと、薩摩琵琶と、手風琴と、テニスと、ブランコと、國語と歴史と、ヘイネの詩集と、そしてライスカレーとてある。

○浅間山　上毛　[illegible][illegible]子

妾は、窓から見える浅間山を以て、晴雨計に致します、即、其烟が眞直ぐ立ち昇れば上天氣、其が倒れると、上州有名の空つ風、又、其が雲となつて山を包み、山が見えなくなると、雨又は雪、必度當ります。

○小同窓會　石川　あけぼの

昨日私の家て小同窓會を開いた。まあ皆違つてしまつてよ、雪子さんは坊ちやん二人のお母さん峯子さんは陸軍大尉の令夫人友子さんは海軍少尉の未亡人操さんは女學生て腕白者それに私は師範てぐず〳〵者よ。

○朝霧　岩代　岸野常子

戸外に出ますと朝霧が一ぱいに罩て村も山も鎮守の森も見えない、背戸の山に五位鷺の聲が頻に聞えます、今右手の土橋を朝寒の風に頬吹せてせつせと渡つて行く新賢の爺さん、何やら口の中に獨語きながらボーッと霧の中に隠れて了いました。

○金錢入々帳　若狭　塚本ふさ子

隣家の駄菓子屋の御婆樣は此界隈打つてのむづかし屋て、何時手紙書いて上げても墨が薄いとか、切手が曲がつてゐるとか、小言澤山て、昨日も帳簿の表書に金錢出入帳と書いたら金錢入々帳と書けと云ふんてすよ。

○三十秒演説　神戸市　德永みれ子

諸嬢、一年より一箇月、一箇月より一日の尚貴重なるを御承知てありますれば、何うか一時間よりか十分時の方が尚短かきを知つて頂きたいのてあります。

○目出度　周防　椿　子

お伽噺の終りには、いつも、めてたし〳〵、祝文の終りには、いつも、目出度可祝、新年は何日も、目出度、女子文壇も、隆盛て三年になつて目出度〳〵。

○穂拾ひ　秋田縣　分家女史

妾稲刈稲上に氣付けて拾ひ貯へた穂、今摘きこなしたら上等白米、一斗貳升有り升した。

○私ののぞみ　本所　田中久子

紅いもみぢを集めて振袖に、紫の藤ばかまを穿て白い小菊は足袋に、女郎花を髮にかざして萩の雫を頬に染めて、そしてあの黄金色の銀杏の葉を扇に持て芙蓉の花の中で舞てみたいの。

○知り度きは

麹町　冷花女

世界ありとあらゆる花、各國の言葉に歴史、人の心に吾身の行末、死せし後の魂、日本帝國進歩の末。

○音曲の美

神戸市　櫻井白菊

音曲の美は歩く邊りの美なる景に伴ふ、朧月夜の春の窓、緑り雫たる木かげより、寄せうつ波に和する時、秋の最中の夜は更けて仰ぐ大空に月清く高殿より調ぶる時、雪の夜寒に燈火の漏る邊り等より響くは興深し。

○元日

南多摩　乙幡もん子

心忙はしき師走の關所も今日は後に見て、廣々と初日輝く奥の間に、私しも阿母様も阿父様も阿祖母様も阿祖父様も皆な集つて順に交す御盃、阿母様と阿祖母様のお顔は眞赤、わしの顔は暑い。

○繪葉書

筑前　田中とよ子

私が病て入院中お情ある諸孃方から御筆跡美しい繪葉書を下された、それをためて居た處今は絵葉書帖にみちて居ます、あゝ是にはお顔も知らぬ諸孃方の温いお情が一ばいこもつて居るのです私は見る度嬉涙が溢れて

○一月二日

豊後　平山艮子

一月二日仕初、暗い内に起きて阿父は草鞋を編み、阿母様は新たに私しの晴衣と云つてお機を織り初めて下されました、それで私しも書物の讀み初めをした後に、何かしたいものだと思つて、お爺様の肩を揉だ。

(日記の一節)

○今日の見た事

姫路　湖畔

此夏の頃朝掃除の時庭の松の木で蟬が蜘蛛の巣へかゝつて食はれてるのを見ましたが今日裏の鳥屋へゆきがけに鷄が仰向いて黑いものをくはへたのでよく見れば蜘蛛でした。私は言知らず立竦みました。

○眞赤になつた

東京　芝野水江女

追ひ羽根にあんまり夢中になつてお年始に行くのがおそくなつたのでそのまゝいそいで電車に乗り淺草まで行く内車内の人が私をヂロ〳〵見るのでモシヤと思ひそうつと鏡を出して見ると墨が頬にぺつたり。

○きまつてるもの

大坂市　角野富子

先づ硯は赤間關で墨は古梅園、筆は百方美人で鉛筆は鷲印、書く半紙も半切れも改良で形紙だけは美濃紙インクは烏印でペンはゼーペン、吸取紙が薄紅色で状袋も、そしてペン軸と風呂敷が蝦夷茶色袴の色も。

○我がクラス

神戸　池田紫雲女

私の級は十五人あります大抵信者で皆仲がよろしう御座います人の陰口を聞いたりする人は一人もありません御金は何處に何年置いてあつても決してなくなりません實に美しいクラスであります。

○去年の元日

豊後　後藤榮美子

朝、初日出を拜み、一家揃ふて雜煮を喰ふ、

晝、新仕立の袴を着し、先生の宅に廻禮をなす、

夜、清子様より年賀状來る、後ち加留多會を始む、中々盛んにして十一時終る、十二時床につく。

○新き年

萩の里　福本かをる子

明治參拾九年は、早や、いづこにか去つて、新しき、四十年はきぬ、年老いし人、若き人、幼き人、みな、一年世を、重ます…。妾も重れて、拾六才…。皆様、さらば…。

○日誌

石狩　白菊子

今年もやがて逝ふとするので恥敷身も反省すべく、一歳中の日誌を繰りひろげて見たが日一日として其筆の跡に「涙」の文字を殘さぬ處はない、吁何といふ淺墓な心では無かと悔ると共に來年の誌中に「喜」の言葉の絕ぬ様にと念じた。

○がり〳〵

越後　白菊

御父さんは飲みたがり御母さんは見たがり兄さんは讀たがり姉さんは着たがり弟は釣りたがりそして私はあみたがるのよ

○早いもの

備後　楢垣秋子

汽車は隨分早いもの電車自働車も又彈丸の行くのも早いものですが一番

行かない様で早いものは年月でせう。又もや新年を迎えました。

○婚禮服　下總　霞浦女史

妾の婚禮服を注文するのに母様と伯母様とは總縫のお振袖、兄様は洋服に、父様と姉様とは、淡白と紅白の留袖を、本人の妾は公債證書を望むのです。

○不思議　赤坂　紅葉の里

私は學校に七十人の御友達、他に一人の友達をもつて居る中で一番好きな親しいのは政子さん毎日學校で一緒になり年も同じ位の方が居るのにどうして妹のやうな他校の政子さんが好きで親しいのでせう不思議れ。

○新年號　下總　中村よし子

裁縫してゐた手をふと休めて、一日二日……と女子文壇の新年號發行日迄を數へて居ると、お酒に醉ふた父様に見つかつて『お嫁に行く日を數へるのは未だ早いよ』とニツコリ。妾は其に答へる術もなく、唯顔を赤くした。

○お正月　神田　筑紫ふみ子

いよいよ今日からお正月、髪を奇麗にあげて簪をさして、お白粉も紅もつけた。お目出度う御座います、お雑煮を澤山頂いてそれからいよいよ御年始廻り、

○嬉しい事　高槻　赤松春雨子

妾しが通つて居る學校で、こんど生徒がある雑誌を讀むのを禁止されました、そこで妾しどうしやうと思たら女子文壇ならかまはんと言はれたので嬉しいのよ。

○地主と小作　越後　五十嵐みつ

拾一月二日の朝大に霰降る、地主の若だん那は、園中に咲き匂ふ菊花の色あせんことを憂ひ、小作の五助は、刈り殘せし小田の稲の實の打ち落されんことを恐れて止まず。

○年賀狀　愛知　紫露女

明治四十の年の月の日の始め、おめでたい〳〵元旦、謹て賀ひ申上ます、一年の計は元旦にありと申ます、れーあなた去年の事はすつかり忘れなすつて今年は改めて新いそして賢いホームをお作りあそばせ。

○元日　秋田縣　三浦おしゑ

葡萄色の雲が動きそめて、いつよりも大きいと思はるゝはかりに、初日の影は生れました。手をうつ音はこゝかしこに起つて、折り〳〵笑ひ聲なども、きこゑてくるのです。まあなんと云ふ長閑さでしよう。

○女子文壇　福岡縣　林　洗耳

明治卅七年一月一日、諸嬢文學啓發の大任を背ふて生出た女子文壇、至て健全で感冒等に犯されし事無く又聰明である、彼が成年たる廿一世紀に於ては頗々たる文學雑誌の女王と成て有う、有望成哉女子文壇の前途

○夜　業　上野　つぎ子

五分心ランプを眞中に妾は機織り、其傍でお父さんは俵あみ、兄さんは縄綯ひ、お母さんは座敷の眞中で足袋つゞり、そして十時が鳴れば、お芋の溫かいのをお夜食に皆と喰べて寢ますの。

○反古がみ　麴町　淺井千鳥子

卷紙や半紙の端切れ、詩文書き損じの原稿紙、妹弟の切り細裂いた千代紙の端し等を面倒みて、かんじんよりを作つて貯へて置きましたら、漸々かんじんよりの帶が一本出來上りもしたそれで妹にやりました。

○參圓の行方　大阪　倭文子

姉様は其中まだいくらかを殘して襦袢の袖、私は金額を軍資に獻上、妹は猶不足して學校通ひの電車の切符、これを三年前私等三人が兄様から同じやうに戴いた三圓の行方です、そして今現在に殘つて居るのは姉様の襦袢の袖ばかりです。

○一　日　越後　松山けん子

つらいのは朝起される時、心持よいのは夕飯すみてのそゞろ歩行悲しいのは亡き母様を思い出した時そしてうれしいのは女子文壇が來た時。

○共同自炊　秋田　東海林桑子

四五日前から、靖子さんと、共同自炊を始めた、初めの程は、一回一合半の御飯で、間に合ひましたが、此頃は、どうした譯か、三合で、二人とも、不足らしい顔つき。

○夢　　豐前　とし子

ふと氣がつくと私は白衣の裾を長く引いて、大海原の中央を歩いてるのでした。私の行くてに咲いてる眞白の花からでしよう、神々しい何とも響へ樣のない響が聞えてゐましたが、突然ふわ〳〵と舞い昇ると思ふと、私は詩集を抱いたまゝの夢でした事を知りました。

○朝露　　因幡　三橋　春代

奇麗な朝露が稻株や土の毛に宿つてピカ〳〵美しい、それを僕の作造が蹂躙つて行くので、妾は暫く田の畦畔に立留つた。

○筏舟　　兵庫縣　角井ふじゑ

朝門の小川で口をすゝいで居ると筏舟に櫻の花が一輪入つて流れて來た、流した人がゆかしうて上流の方を見たが誰も居ない、受止てその櫻を本に挾み足許に咲いて居た菫を取て又次へ行けと舟にのせて。

○遊學地の自炊　　愛媛縣　熊野　波

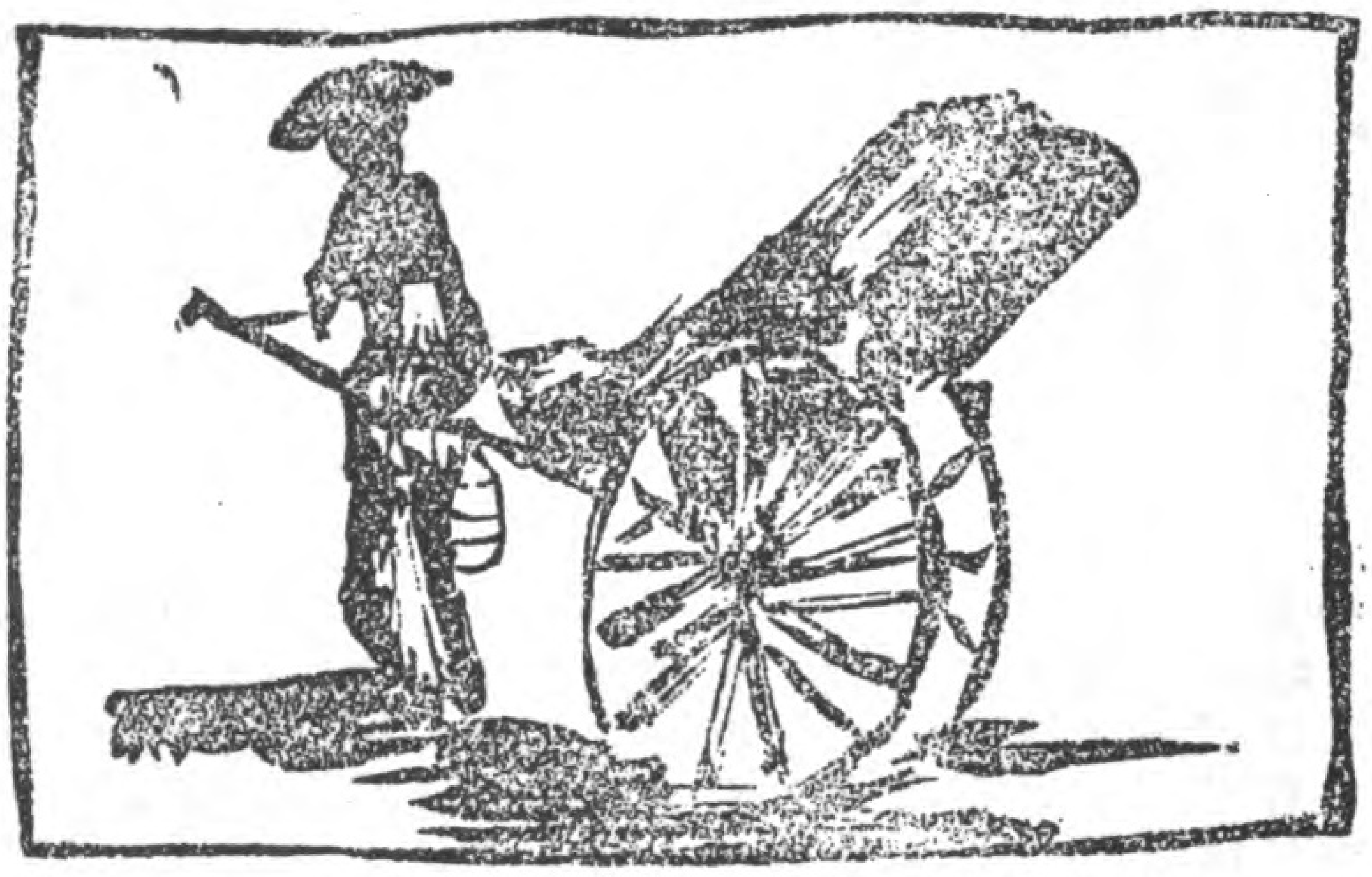
妹が米をとぐ間に、私が火を焚きつける、私が香の物を出す間に、妹は机の上に、お茶碗をならべる、それから御飯の出來るまでは、お唱歌の練習、食事中は、故鄕のはなしで持ちきり、私が淚を落すと姉さんよわい！

○祖母の賜物　　滋賀縣　松ヶ枝

祖母さんに聞た通りしましたら何時か、黑、白、赤、靑、黃等、二三寸の糸くずが袋に一ぱいたまつたので母さんに織て頂て、それで私の羽織と妹の前掛と取て未だ餘ります祖母さんが御出になつたら、袖無でも仕立て此御禮に差上樣ものを…。

○音樂帖　　北海道　相原すみ子

學校時代に敎つた事は一つもらさず、皆記してある此音樂帖。繰りひろげる每に或はほゝゑみ或は淚をそゝぐ此音樂帖。そして私の最も心を許して居る、唯一つの友は又此音樂帖。



車夫（賞外）　安藝國　小野智惠子

○菊　　米澤市　高橋ぬい子

父上が、日頃の丹誠あらはれて、黃、白、紅、小輪、大輪、菊の數々、今を盛りと咲き競ふを、見給ふお顏は、菊の花よりも、麗しかりき。

○燕の樂譜　　備後　松本菫子

妾の宅の後から、小櫻山の朝霧に消え行く五本の電信線に、數へ切れない程澤山な燕が、上に下にとまつてゐるので、妾は何時もそう思ふのです、燕がそこに自然の一大樂譜を作つてゐるのではないかと。日は美し風はよし、希望に滿ち〳〵た曉の天に、此の樂譜を奏づる、大樂手はないものでせうか。

○評判の小娘　　南多摩　金子信子

お隣の花ちやん取つて拾二ですが、水仕事やら洗濯子守等して實に能く繼母に仕へます、して其の三才になる連子を抱きれし夜は必ず一二度起き實母も及ばぬ程能く世話をするので實に村の模範少女となりました。

○霜夜　　讃岐　松永みつる

賑かな歌留多會が果て皆樣が歸つてしまふと急に寒さを感じて火鉢の火を掻出した障子を開けて見と屋根はもう眞白で正敎會の鐘堂の彼方に月は餘程傾いて居た臺所で居眠つてた下女と散ばつた蜜柑の皮や茶器を片付て寢室に來ると玄關の柱時計は一時を鳴つた。

○無果花　　埼玉縣　中村紫香子

納家の後の無花果が笑割てるので一つ味ふと甘くて旨い事は迚も栗柿等の及ぶ所でない、けれど餘り外見がよくないから人が多く味ふ氣にならないのです、人にもこの無花果の樣な不幸の者が幾らもあるでせう。

○色のさま〴〵　　神戸　楓子

愛らしいのは桃色、床しいのは紫色、はでなは赤色、ハイカラなはオリ

ーア色、高價なは樺鼠、温順のは茶色、美しいのは草色、すいなのはあづき色、趣味のないのは淺黃色、當時流行して居るのはクリーム色。

〇太平園子　　野多摩　愛子

といへば栃木の太平山へ詣つた方は誰も御存じの名物。でも諺通りなの、夏は前掛への爲めか酸いことがあり、冬はお湯の二度潛りが足りないので、心がかちかちするのよ、併し公園の眺望は關東平野を一見だわ。

〇音　　高松　玉藻女

琴、上品で奥床しい、三味線、月琴、共にいやしい、尺八、陰氣で濕つぽい、喇叭、活潑で勇ましい、鐘、暮になるのは哀れに物淋しいが朝は鐘がなると飛び起きる。

〇家風　　大和　繁子

北隣のお醬油屋のは午後六時頃から十二時頃迄、ちやぶ〳〵風呂を入り、南隣の三閉様の内は夕方から賑やかに皆なのお話しなさろ聲が十時過ぎまでしてゐる。

〇友の寫眞　　仙臺市　黒澤　玉露

近頃「スミレ女」と云ふ名て寫眞が屆いた。見ると眼鏡を懸けた、廂髮の美人てある。忘れたの否まぬが、四年前に別れた、菊子孃であつた。裏面に「廿世紀の男子と平行せんには如かず東京に遊べ」と。私は復た表を見た。側に居た母は呆れたと云ふ。

〇袖子　　北海道　飯田　季春子

稻荷堂の椽下に居た袖子、情深き父に救れてお風呂に入り髮を結て姉様のお下若を着て倶に學の道を辿つてより早十年、今年十八の美くしい子となつた。

〇柿の初なり　　富山縣　清水　たみ子

種を植ゑてから今年て八年目、始めて柿が三つなりました、選者様に一つ妹に持たせて差し上げます、妹年は入つてす。

〇古い日記　　横濱市　長谷川　波南子

此間虫干をした時、本箱から古い日記が出たのを、弟が見付けて、お父様や竹やが、居るにもかまわず大きな聲て。

文藝遊戲　女子新聞

▲諸孃をして假に新聞を作らしむ▼

（方法）　文藝遊戲の第三回として茲に『女子新聞』と云ふのを皆樣に作つて頂きたい、一人が一つ宛の記事を寄せて、本紙四頁の假の新聞を作るのです、少し面倒ですから能く此投稿心得を讀んで下さい。

『投稿心得』　あらまし投稿の種類を大別すると左の通りになります

〇論說　女子又は文藝の事なら宜しいが政治上に涉つてはいけません（三十行以內）〇雜報　新聞紙に所謂二面もの三面もの何れても宜し、新聞だからとて新しい事に限りません是は遊戲的のものですから何てもかまひせん學校の樣子、種々の會、殊に地方の面白き出來事、天候、變事、名士の逸話、新聞紙の現狀、女子敎育の事、美談、風俗、凡そあらゆる社會萬般の事柄を諸孃の見聞のまに〳〵書かれてよし、文體は隨意、成るべく十行內外、最も長くても三十行を超えてはならぬ。〇續きもの　續きもの即ち小說の一章、但し第一回てなく何回目かの處のやうにして書くこと、ある小說の中程の一回のつもりて新しく作ること三十行以內〇文苑　俳句、新體詩、和歌、川柳、一口噺など新聞にあるやうな文藝、但し新體詩は十行以內、一口噺は新しき出來事を材料とするを。〇短評　世間の事を短く評論して三四行宛に書いたものを二三十行を一文とすること。〇紹介　求むるもの、應ずるものゝ二種として凡ての紹介を紙上てする、三行以內。〇廣告　嘘の廣告に限る、諸孃が假に廣告らしいものを作つて見るので、ほんとうのものは一切採用しません。〇繪畫　新聞の挿繪風に時節に適した繪に限る、寸法は矢張二寸に一寸。

大略は右のやうに分類して置きましたけれど何にても新聞の材料になるやうなものを寄送して下さい、其中雜報を尤も多く願ひます、見たことを書けば宜いので必ずしも新聞的の變つた事實に限りません、日常の事ても宜しい、なほ投稿に就いて全體の心得は左に。

▲投稿用紙は半紙に限る▲一行必ず十五字に認めること▲一人一種に就いて一章限り▲締切は一月二十日、後れないやうに願ひます▲『女子新聞原稿』と書添えるのを忘れてはなりません。

▲賞品▲　其中より優等者五人を選拔し、賞品として東京にて發行する新聞一個月分、當選者の希望の新聞を贈呈す

見落す勿す

創業第三年紀念廉賣

紀念廉價申込期限 四十年一月三十一日迄（期限後は断然定價に復す）

▲好機逸すべからず▲丸でロハの如し

廉賣書目

書名	體裁	正價	廉賣價	郵税
▲詩と美文 玉むし	全中形 新式上製	正價金六十錢	廉賣價參拾錢	郵税六錢
▲女子懸賞文集	全中形 洋裝並製	正價金二十五錢	廉賣價拾五錢	郵税六錢
▲美文作法	全大形 洋裝並製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
▲小説美文 朝ばれ	全中形 洋裝上製	正價金四十五錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
▲言文一致文範	全大形 洋裝並製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵税四錢
▲卅九年精査 女子遊學便覧	全中形 洋裝並製	正價金三十錢	廉賣價貳拾錢	郵税四錢

各書の詳細は次頁にあり

（郵券代用は必ず壹割増に申受く）

右各書とも分賣いたします「**出版元**」へ早く申込ざれば無効になり升

出版元 **女子文壇社** 東京京橋大鋸町十一

——（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）——

卅九年一月より十月迄 女子文壇社出版＝紀念廉賣書の批評一斑

（正價及廉賣價格は前頁にあり略之）

河井醉茗著　山中古洞畫入

詩と美文 玉むし

▲婦人世界評

醉茗君の筆のやさしさは、本誌の讀者諸姉が御存知のとてありませう。この玉蟲は君の美文と新體詩とを集めたもので、いづれも婦人のために書いたのですから綺麗なものばかり、體裁もなかなか凝つたものです。

（四六判色クロース金箔入本綴上製）

諸大家序文　小森松風著

美文作法

▲中央新聞評

本書は總論に於て美文の起源名稱種類を說明して抒事文、抒情文抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文辭評法選文の案發讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳說したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

（菊判二百卅頁並製）

諸大家序文　小森松風編

言文一致文範

▲中央新聞評

言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論說、抒事、抒景、日記等數十編を示したり斯道研究者の歡迎を受くるものならん

（菊判二百卅頁並製）

鈴木秋風著　太田三郎畫入

小說美文 朝ばれ

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて温雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです

（四六判金刷厚表紙本綴上製）

諸大家選評（第三版）

女子懸賞文集

▲電報新聞評

當選の詩文を一纏めにしたるものにて短篇小說、消息文、抒情文、敍事文、論文、新體詩、和歌、俳句、はがき文、滑稽の諸欄に分てり近頃の青年男女の文章は一體に進み來りしが殊に本書は女子と云ふだけに時節柄歡迎者多からん

（四六版四百二十頁並製）

中村報知新聞記者著　學校長肖像入

實地精査 女子遊學便覽

▲萬朝報評

都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案內が、屢々改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は普く行屆けり、尚ほ職業案內及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

（四六判二百卅頁並製）

讀友倶樂部

○日記の始に

（題課）

○　奈良　白ふぢ

妾は小學校にありました際先生から日記の必用を「歴史なき國民は野蠻人なり、日記を備へざる人は完全なる人に非ず」と謂はれてから日記をしるします毎年新らしく綴ぢて初めには必ず其際敎へられた「愛スル人ニハ物ヲ貸ス可カラズ」「地ニ在ルモノハ墜ツル事ナシ」の格言と、うらぶれて工女となつてからは「勞働ハ神聖ナリ」とを加えました。

○　秋田　東海　林榮子

妾は至つて間拔けな生れてすから、此事などは一向氣が付きませんてしたが、四十年からは前年中にあつた第一の失敗と、第一の成功とを、毎年書いて老後の樂となしたい積りです。

○　東京　とき子

和歌、俳句、格言などは皆週日記帳に書載していますから私は只前書には『初めの心をまもれ』とのみ書きます。

○　みづ子

去年迄は母様の御役、今年からはお前にまかせるとの父上の仰せ、家政で習つた簿記法て、あつぱれ今年一年の大藏大臣を勤めをふせて、見たいもの。

○　神戸市　秋月子

日記の初にとは、先生良き題をお出し下さいました妾は壁頭勅題の和歌なり俳句を見苦し乍ら作りて記入します夫から當日の天氣の如何、昨年は妾の思ふ事が出來なかつたから本年は何でも勉强して目的を達するつもりてすそれに去年は餘り親しさに禮儀を失し丶友に後悔した事が在るから一層何事も注意仕樣と思つて居ます。

○　赤坂　梅津治美

新らしき年は來りぬ古き日記くり返し過ぎし日のありし事をよみて樂しむ今年中年の日記如何なる事の書き記さるゝやと思ひやられていと樂しいざ之より新らしく後にのこりてはぢざらん事其日の夜每に紙染めむ。

○　千葉縣　秋葉英子

妾の日記に初めに書くものは第一に其の年一ヶ年中の休暇の豫定表を作りて此を書いて置くの左に今年のを四月の休み（一週間）東京のお叔母さんの所にて暮すと夏期休業（五十日間）三十日間は東京にて英語と編物との講習をなすと、餘りの二十日は家に在りて學課の復習と家政見習とをなすと。

暑中休暇（二週間）此の内にはお正月があるので種々の會が開かれたり友人の訪問などありて常に豫定迠には行かぬから今年は只だ料理法を少し習ひ餘暇課の復習をなすこと

○　天龍川　吟平子

日誌の初めには何を書くかとの記者樣の御尋れ何てつゝみだていたしませうどうぞ御聞き下さい一等初めにかやうに書いてあります「日誌を認むるには每夜一時間を以て之に充つ若し認め得ざる事情ある時は翌朝必ず認むべきものとす」と其次には『日誌には永久保存すべきものなれば必ず眞面目にかつ「日誌には七分三分の虛を書き」の如き事なき樣心得べし』と其次には「妾より發せる信書及友人よりの玉章は其の大意を日誌に認むるものとす（但し妾が名譽に關するものある時は其の限りにあらず）」と其次は「總て此の日誌は妾以外の人の繙くを斷じて許さゞるものなり」と。

○　成田　天波子

此の日記は他人に見せんとして書くにもあらず又文作る力を增さん爲めにもあらず、されば飾の言葉も用ひず、より佳き文を成し上げんともせず、年老いて小春日に椽に出て孫共を集めて讀み聞かせ、老母の幼少の時の有樣を思はせ、妾も又過去數十年の昔の樂しき時代を想ひつゝ以て長き日を暮さんとして書くなり。故に現代の有樣を面白く寫せば妾は足れりと成すなり。

○　東京　芝野水江

私はいつも日記の初に格言を書いて置きます昨年の日記には急がば廻はれ、一事に熱心する人は幸福なりなど書して置きました今年は時間は買ふ能はずと書くつもりです。

○　京都郡　公女

中々趣味の有る題てす私は日記に限らず左の歌

を書いておきます。

　悪き事の猶この上に積れかし
　　限りある身の力ためさん

私はこれを絶えず見て心を励まして居ります。

○　宇都宮　柏崎　喜久子

四海波まづ改まるとともに吾は十九の齢の花の色香へん、起床五時半と改め、庭の掃除を一手に引き受け、夜に入りて雑誌二時間必ず讀み、短歌は一句以上ものし、臥床は九時半、一ヶ月に新聞二種、小説雑誌十種以内とし、文の道ひたぶるに力め廣く友どちへの鍼砭を求め、來ん年には都に上り音樂界に身を入れむ。

○　陸中　三光　女史

お恥しいながら妾二十？だけど兄さんは御入營なさるから今年丈は御兩親の御側に居よう、そして貯金は必ず五十圓まで進める事、去年の秋來年はと思つた海濱旅行も止す事、兄さんがお不在ても例年より澤山養蠶して絲にとつて手織つて、お除隊までに、丁とお召す許に仕立て置く事、又時々通信を上げて後顧の憂を無からしむ事、そして御兩親を慰藉する事等、以上。

○　石川縣　今永　君江

新年に當り若水を酌つて初日記の初頁に次の如く記す。

　克巳心をもて萬事を處せ、良心の命ずる所に働け。劣情にかられて名を汚すな。今日暮れて明日有と思な。我の希望の何なるかを日夜に想ひ。又朝の豫定と夕の實行とを對照せよ。我の身邊に神ありて最も神聖なるものと知れよ。最後に女子の道を忘るな。

○　あやめ子

今迄は何も書いた事は御座いませんが來る新年からは書く事に決めました。

　少年易老學難成、一寸光陰不可輕
　未覺池頭芳草夢、階前梧葉已秋聲

之れを書かうと思ひますのよ。

○　香川　緑口　松枝子

妾は毎年博文館から發行する當用日記に日誌して居ますが昨年の一日には勅題の新年の河をべんで冒頭に書きました。
今年は女子文壇の記者様と女學世界の糸先生とに差上げる和歌を新年劈頭に書く積りです。

○　常陸　梅　子

恥しながらありのまゝ申上ます私はこんな事を書て記きました皆様御笑ひ下さい。

　信用は一日に得べきに非ず
　正直にまされる智慧なし
　口をふせぐ事瓶の如く意を守ること城の如し
　人に交るには愛敬の二ッなり
　木靜ならんと欲すれど風やまず子親を養はんと欲れど親またず
　それに今年は丙午でありましたから
　丙午とて心配するなつとめて殖すも國のため
　手綱取綫てトゥともなる〻駒も碁盤にのるはいな

○　大阪　芙蓉　生

私が日記の初に書くことは左の通りで御座います。

天皇陛下萬歳
皇后陛下萬歳
皇太子殿下萬歳
皇太子妃殿下萬歳
皇孫殿下萬歳
各皇族殿下萬歳
帝國陸海軍萬歳
帝國臣民萬歳
天下泰平
五穀成就

○　酒田　りう子

うき事のなほ此の上につもれかし限りある身の心だめしに、限りあれば吹かでも花はちるものを心せはしき春の山風、露などあだなるものと思ひけん我が身も草におかぬばかりを、意志のある所に道あり情にはしるな道をたどれ、文の林のその奥に理想の花は咲くものをいかでたをさでやはその花を。

○　肥前　峰　子

何事もすむべき事はすますべしあすありなどゝ無な思ひぞ。

○　早來　柏の子

私毎年の日記帳の初めに下たの句を書くのよ少年老い易し學成り難し一寸の光陰を輕んず可らず之れを書くのよ歌はれ。

　明日ありと思ふ心のあだざくら夜半に嵐のふかぬものかは

○　大阪市　東　柳　子

丁度卅九年一月一日でした、清水さんの宅で當用日記を拜見しました其初に、廣く書を讀みて無益に時を費さず一生懸命に勉強して、專心に注意する事が、第一の肝要であります、と書いてあつたから私も今年は、新体詩に一生懸命になりませう。

○　永重町　梅花　女史

甚だ御それ多き事なれど妾は小學校に下し給ひし勅語を第一に書き其つぎには女子文壇の發行所をかくのよ。

○　蓬萊山姬子

一、日々見聞せし材料を保存せよ。
二、日々の雜費額を其日の終りに計算記入しおきて、經濟の思想を涵養せよ。
三、婦道――婦德、婦言、婦容、婦功。
四、欲に義を思へば恥をとらず。

○　京都　熊とく子

一年の計は元日にありとや今年こそはと斯くは日記の始めに記しぬ。

第一父母兄姉の無病と友垣には益々親密に、我務を大切に余暇には、出來得る丈けの勉强、然して珍らしき草花採り來て植物集本を造りて心を慰め倘ほ成可は節儉して貯金を心がけ夏は父母の力をからずに海水浴に出て行かむと。

○　信州　飯泉濟子

日記は生活の寫眞也。昔、泰西の英將は自己の肖像を描かしむるに方り黑痣の微も且つ之を洩らさゞらしめしといふ。世の欠點を秘して徒に長所のみを露はさんとする者と選を異にするを多とす、神ならざる限り完全ならざるは固より正にその所、但た常に自己の短所を知りて之を慎むは之を滌ふする唯一の途也、請ふ、寸毫の失錯殘度も敢て之を匿すの勇あらしめよ。

○　白すみれ

私はお正月の日記帳の初頁には左の歌を書かうと思ひます。

朝夕のめしさへこはし軟らかし
思ふまゝにはならぬ世の中

○　鹿島　武藤圖子

妾は親戚やお友達の誕生日を記して、カードか繪葉書を紀念に送ること、毎日歌一首を記すこと、善惡を行ひし度數、お友達の行ひ方と妾の行ひの比較を記さんと思ひます。

○　ふよう

色々書く事もありましやうが私はいつも格言二三則。

目的は必ず一途なるべし
不能の二字は愚人の字書に見るのみ、
失望は痴人の斷念なり、
誠實と勉强は不易の友

○　廣島縣　今西初野

私は日記の初めにこんなことを書かうと思つて居るのよ。

加賀の千代はほとゝぎすの句に名を上げぬ
われも勵まん歌の道なば

○　周防　翠設女史

噫!!! 涙て流しゝ明治三十九年! 噫宿望の一挫折を悔みしよ三十九年の長き月日忘れもせじ、その歳の二月中旬郡役所の掲示板に女子師範學校入學合格者人名の内に我が名を漁りて得ざりし、噫あの時。まだ綻びぬ櫻にもたれて如何に心は騷ぎしぞ、如何に決心をかなしつる。噫、立てよ勵めよ四十年は來れり、その二月〇〇日郡役所樓上師範學校入學試驗場嚴たる裡に、ゝを走らするは誰ならむ。

○　北葛飾　朝露子

私の日記の前書と申しても、別に、理屈ばつた事は書けませんから、書きませんが、せつかくの御たづれてすから申します、私は『日記とは其の日にありし、事故を書き置くものにてこれを、大切に保存し、未來に於て過去にありつる事を知らんが爲なり』以上これが妾の日記の初めてあります。

○　明石　植木初江

私は新年の日記の初には左の六ヶ條を書きます

一　教育勅語の御聖旨に副はぬ非行をせぬ
一　自宅職業の益金を育英事業の資金に積立つ
一　本年は速記術を研究する
一　惡弊の家政を改め明治の家政法に則る
一　朝起洗面後教育勅語を捧讀する
一　日記をつけて十分間其の日の行を默想する

○　東京　吉江子

私はこの一年前までは前書など書しませんてしたが今年は苦は樂の種、書籍は良き友なりとても書き置きませうと思ひます。

○　福岡縣　坂田登代子

明けて松竹門邊に靑々と緑滴る今朝何となう心すが〳〵しふ昨日の言葉も年改りたると思へば何故か古めかし今年は明治四十年來ん年の來ん事も幸を願ひし身の昨年は別して不幸多かりき今年は我身の十七才未だ子供の如き心地すれど人の目より大人びたるならんかてや學びの道にも精を出し此帳の何處を開きても嬉しきやうな日々の業記さん事又は彼世近き父母の不幸なきやう祈りつ先づは日記にはしがきとはなしぬ。

○　岡山縣　秋吟女史

凡そ文章を學ばんとするものは宜しく多讀多作多改の三要件を充實せざるべからずと而して多作の一方法として日記を草するも亦よしとす聞くからに我常にこれをなし後多改を試み以て學

びなんとす、されば日記にして日記にあらず只々文章の一端を學ぶの助けにもと日毎の思ひ出を鮮にそめて之れを日記とこそはすなれ。

○　武蔵波南子

此日記帳は東京の兄様が送くつて下されたのである。兄様は此品を送で、下さると同時に「此品を送るから毎日おつけなさい、而して兄様が御書し全度毎には見せなさい、其時若し見せなかつたら、不都合の事が書いてあつたりしたら、遠慮なくお前を叱るから其つもりて居なさい」と書いてある手紙を送くつてくれた。妾は之れを見て兄様のおつしやる通りを實行する事にしました。

○　秋田　T、K、子

新潮實子の鈴鳴しく、國旗は平和の風にゆるう閃く、今日は天に雲なし、地の露には塵なき目出たい四方拜、あゝ……この寄宿舍の新年は、やがて學校の拜賀式、過れば趣味ある福引（妾に唇枝石）午後、拾參通の新年の賀状、二便にて故郷より一月の小使、毎月の小使の倍の嬉しさ、夜に先生の許可にて歌カルタ、妾は雄の○印右手に七ツ、左手に十六。（昨年日記の一節）

○　秋田　角間川せい子

わたしは只去る年の不幸なる運命の神に掀翻されし逆境ん歎かずと誓ふ斯して來るべき幸福を待たん、尙盜賊的行爲を敢てせし沒德漢（絵葉書交換を倶樂部に掲せて居乍ら送つても返事のないの）に天罰を與ふべくイエスに祷ると共に淸淨無垢な誌友十萬の幸福と壯健とを祈る。

新課題

我が疑問

（疑問の種類は問はず、凡て諸孃の疑問を承りたし、七八つの子供も疑問を持つ、況してや青年の女子に疑問の無い筈はない、簡單に述べて御らんなさい（二月五日しめきり））

○郵便雜感（いうびんざつかん）（二月五日しめきり）

△雜誌の配達も郵便で來る原稿の送附も郵便に依る、諸孃の交際も郵便なら、絵葉書交換も郵便、なほ廣く言へば吉凶禍福、事業、娛樂、世間の出來事と郵便との關係は最も深い△郵便雜感は郵便に就いて皆さんの思ふ事、感じた事などを書いて頂かうと云ふのです、△郵便の事なら何でもよろしい、少し例を擧げて見ますと發受する郵便の數、時間、出す時の事、受取る時の事、ハガキの事、紙の事切手の事、切手の處置、郵便物の處置、郵便の書きやう自他の癖、配達夫の事、郵便局の事郵便に對する不平又は同情、郵便奇談、まちがひ、心得、分らぬこと、家族と郵便、又文族と郵便郵、便と電報、いくらでも問題はあります▲つまり郵便に就いて皆様の書かうと思ふ事を書いて御覽なさい▲原稿半紙半枚に十八行以內郵便雜感と題を書くこと。

諸孃と記者

○私は今年十四歲です兄さんに訂正してもらた物を投書しました、記者様いゝでしようか、字がへたで兄さんに字をかいてもらうては如何ですか、是非敎へて下さい（ゆきえ）（記者曰、下手でも御自分でお書きなさい）○記者樣私投書するの始てありますから御笑止てすけれどもまあがまんして兎に角御送りして見ます何卒此後ともよろしく御願ひ（越後與板町山中のぶ子）（記者曰、決してお笑止てはありません結構です）○記者樣私のやうな高等學校も卒業せぬ無學な者でもこれより度々投書さして戴かふと思ふて居りますが何分初めての事とて如何して投書してよろしいやら一寸も勝手が分りませんが別紙のやうにして投書しても宜敷いてしやうか御手數ながら御知らせ下さいませ（若松アグリー女）（記者曰、凡てよろしいてす）○記者さん左の問ひを大至急答へて下さい（一）第十五號の本誌諸孃と記者欄の紀伊田邊小山みどり子様の問ひの御答へに俳句を除いて皆半紙とありますが俳句は何へかいて出すのですか投稿規定には半紙一句とありますが（二）私の雅號をつけて下さい（三）寧樂と云ふ何てすか（神田謎月女史）（記者日、俳句は半紙でも葉書でもよしと云ふ事です、雅號をつけるのは一寸困ります、寧樂は奈良てす）○記者様龍の川の紅葉も美しいてせうが汚にしまない川舍にもいはれない色てすよ天長節は聲て大掛てしたのそれから廣津先生の二筋道はもーすかり完つたの續編はてないのでせうか（羽後りう子）（記者日、二筋道の續編は出たとおもひますが）○記者様私たち三人は投書したいのてすが笑われるかと思つて考へていましたの是からは思ひ切て投書するつもりてす（常盤子、和歌子、房子）（記者日、誰も笑ひません）○記者様私れ今年やう〳〵十四なのよ毎月れ文壇の發行ばかりまつてますわ文壇を見るのが何より の樂しみてす、皆樣の投書を見ると私も投書し

たくて困るのよ私投書してもいゝの？　記者様、私れ折角投書しようと思つて居つたのに十一月一日の發行に「十四と十三となら投書がむづかしいです」と記者様の御言葉があつたのでほんとに私落たん致しましたわ(弘前なてしこ)(記者曰、此文章を見ますと十四でも大丈夫です、お出しなさい)○明けましてお目出度う、あの子誠にお恥しいお尋ねですが納豆ですチ、あれどうして糸が出て來ますの兄さんに尋ぬると例も子、ダラク納豆といふからダラクにすればよいのサ(ダラクは當地方の方言で不潔のこと)とそんなこと計りどうぞお教へ下さいましな(東北の不知女)(記者曰、サア私もそれは存じませんナ)○私は未だまる十二です、拙作が菊花月誌上にでゝゐましたので大層びくりし、且つうれしうございました新體詩が大好きで澤山、よみもし、作つても見ました、これから毎月、投書致しますから、どらぞなほして下さい(失名)(記者曰、原稿にお名前を書き落してはいけません)○記者様私共姉妹は最初よりの愛讀者です先年四月當地へ參りましてから殊更につれ〴〵の友として愛讀して居ります私は十九才妹は十七才共に縣立女學校に通うて居ります、天長節以來當地は大嵐で船の出入も出來ず女子文壇も後れます(沖繩縣那覇區字若狹町裁判所まへ大島峰、同じく房×)(記者曰、恐らく女子文壇の發行日ばかりは期日より早くこそなれ、後れる氣遣はないのですが、流石に琉球のはてでは船の出入も少く自然に後れるわけでせう)○記者様私は文壇を非常に愛讀して居ります者でありますが一度投書してみたいと思ひますが何分淺學な者でありますから何だか恥かしくて投書する勇氣がありません今迄も和歌や消息文を何度も〳〵作りましたけれど皆すてゝしまいました(德島愛讀女)(記者曰、恥しい事はありません、破つたと思てお出しなさい)○記者さん相變らず御機嫌よくお目出度う存じます國にいる時分より女子文壇を見たい〳〵と思つて居りました九月上京しましてから毎月拜見しますが誠に面白い事れ私れ學校にも行かれないので亂筆ですが投書してみましたの私れ記者様察して頂戴よ九才の折小學校の遊戯の時誤て頭を打ちまして思ひもよらぬ不具となりまして人様とお話しする事が出來ません耳が聽へませんから學校もすぐよして字もこんな字でお恥しい小學三年迄しかやりませんので皆様のように書けませんさゝなら(藤原むらさき)(記者曰、お氣の毒な境遇、お察し申上ます、却て文藝などに樂みを深く持つやうになるでせう、聲のきこへないものは見て知る外はありませんから自然、文藝にも親みを持ち、又親みの深くなるのは不幸中の幸です)○記者様投書するにあて名を東京京橋區大鋸町十一番地女子文壇社とこう書けばとどきますか何卒お手かずでも次號でお答をぜひ願ひます。それから誌友倶樂部のを投書と同封にしてはいけませんか(陸奥白梅子)(記者曰、宛名は其通でよろしく誌友も同封でよろしい)○私は本年十六才です私六才の時尋常小學校へ入學して十四才の春銚子高等小學校四年を卒業して只今銚子たき田裁縫女學校に通學して居ります今迄女子文壇を愛讀して居りましても一度も投書した事が御座いませんで此度初めて作文と和歌を投書致しましたが少しもよく出來ませんけれどもこれからは熱心に綴で投書致しますから何卒惡いところは評をれがひます(千葉縣海上郡下總銚子町篠塚さと子)(記者曰、お尋れの小說も半紙へ書いてお寄せなさい)

繪葉書交換

○私はがきの交換を願ひます(函館大黑町一○五中野石)○妾も繪葉書の交換が致したいのですがよろしく御願ひ致します(岡山縣淺口郡三和村入方より子)○親愛なる賢友諸姉よ私しは高輪發の麓に住ひして居るふつゝかの者ですが此度び賢明なる諸姉様と繪葉書の交換を願ひたいのです就て御送り下された方にはたしかに粗末の品にても御返しを致します(芝區白金志田町三○飯倉たけ宅淺野のぶ子)○皆様私は始めて御交際を願ふ者よ繪葉書交換の御仲間へ入れて下さいな私し軍艦薩摩進水紀念繪葉書横須賀共濟會御川版三枚一組のを十三組以て居りますの求れな交換しますわ東京市內神奈川縣の人は斷り成可く關西地方の諸孃に分つ心よ地方の名所はがき十枚以上？舶來の上等五枚封入れて其れに編物を一つそえて御申込の方に送ります(東京市淺草區小島町七十一鈴木父市方はる子)○皆様繪ハがき御交換致しましょう然し封書にして送つて下さい編物も送つて下さいな御禮は必します(靜岡縣沼津驛東病院內吉澤すみれ)○諸姉様何卒繪はがきの御交換を願ひます御惠送下被ば舶來繪はがきに郡山源九郎社砂持紀念繪はかきスタンプ付六枚一組を添へて御返し申ます其他團體の紀念繪はがさ(スタンプ付)何にても御送り下被ば舶來繪はがきにて必ず御返し申ま

す(大和郡山新中小橋きく子)○私は女子文壇の愛讀者の一人であります どうか皆様繪葉書の御交換を御願ひ致します 私よりは自筆の面白き畫葉書を進呈致します (伊勢國飯山町大字北山岡分さだ) ○妾も愛讀者の一人です諸姉上様繪葉書交換を願ひます必ずですよすぐ御返事上ますよ(茨城縣那珂郡石神村外宿黑澤とみ子)○愛讀の諸姉様永久に繪はがきの交換を願ひます! 可成上等品なれ (神戸市北長狹通六丁目一〇五鶴田まさ子) ○諸姉様妾も繪葉書交換の仲間に入れて下さいなめづらしいのや 紀念的葉書は殊に好みますどうぞたくさん下さい (静岡縣沼津鐵道官舍安樂島方吾園女史) ○私は關ケ原の古戰場の繪端書に三百年祭の 紀念スタンプ付のを持つて居ますから 皆様上等の繪葉書と交換して下さいませんか成るべく歌や俳句を書いて下さい(美濃國山縣郡谷合内藤紅霞) ○御目出度初春なんて御祝申ます昔年は 諸嬢様の一方ならぬお情けにあづかりありがとう 本年も不相變の繪葉書交換御願よスタンプ付は尤も愛しますのよ (大阪市南區上本町二丁目五六増田方岡田登美子)○誌友の皆々様妾は 色々スタンプ付あります故皆々様も珍らしきスタンプ 付御送り下さい御返事屹度致します但し 汽車博覽會の紀念スタンプは一層歡迎します (静岡縣沼津官舍六號濱田方淑子) ○諸姉様上等の繪葉書(肉筆印刷物共)交換をお願ひ致します 又二枚以上封て御送り下すつた方には海馬(たつの おとしご)の標本三つある中一つ宛を差し上げます 但し差長さ九分本物にして造りしものに非ず (神戸二之宮町四六六鶴永みれ子) ○始めて誌友になりましたから何うか上等の繪葉書の交換を願ひます (神戸市中山手通三丁目二五ノ二三菅原さだ子) ○わたいれ諸葉書の交換を願いたいわ其れてれ 先着拾名様にリボン壹つ宛進上ます (金澤市大手町三六星野きみ子) ○大阪の落葉子様只今は美しき繪葉書御送り下されありがたく 誌上にて御禮申上げます(北海道留萠村相原すみ子)○今度都合によ繪りハガキ交換一切御斷り申します (大阪市中之島淺田玉子)○舶來、木版、印影、水彩何ても繪ハガキの交換仲間にして下さい (京都市新町通六角南中谷) ○一時的てなく末の末まで妹の如く繪ハガキの交換を下さる方はないてせうか(神戸市布引瀧標常子)○繪端書交換の皆様一々御返信くだされありがたう 京橋の横山浪子様は宿所不明て戻りました 向ほ末長く皆様と繪端書の交換願ます (大阪市東區和泉町一丁目野々村内伊藤初榮) ○寒さの折柄皆様にはお障りもありませんか妾繪葉書交換に就て皆様へ申上度い事があるのよ誌友倶樂部て 御芳名を見て交換を申込み返事を下された お方とは引續いて交換しますが何時も此方から送つた繪葉書に對する返事許りて進んで先方から下さるお方は一人もありません一度交換して眞心を示した 上は相方から送つたり送られたりしてこそ 眞の友誼的交際も出來るのてせうに此方から 送られば先方からは一向下さらない様ては 如何程繪葉書面には友情の籠つたお詞がありましても 妾にはお世辭としか思はれません言はゞ 義務的に返事を出すと言ふ様な仕方てはないかと思ひますが 皆様何うお考へ遊ばしますか承はりたいのよ (二柳女史)○記者様初め諸嬢様御目出たう、妾は十六號の本誌て繪はがきの事出しましたら どし/\と御送り下されまして有がたう、 第一番は牛込の花子様第二番は羽前の久子様第三番王子の 安子様第四番佐藤とよ子様以下略 すこの後も宜しく(神田旭町三二樋口方運月女史) ○お麗はしい皆様御願ひてすからどーぞ御交際して 下さいなそれから玉章や繪葉書の交際もして 頂だいな繪葉書は紀念ものも少しはありますよ 但し男の方はいやてすよ (静岡縣磐田郡岩田村旬坂中高柳しん子) ○皆様品は撰びませんから何卒繪はがきの御交換を御願ひいたします 沼津近在の御人もれ何卒(沼津町城内八十一番地山田きく子)○皆様美しひ繪葉書御送り下さいませ 先着十名迄に信濃名勝繪葉書及び風俗繪葉書さし上ます (信濃東筑摩郡入山邊村桐原得馬方操子) ○諸様妾にも畫葉書交かんの御仲間へ 入れて下さいましな (横濱市海岸通四丁目十九田島覺太郎方松本繁子) ○何卒皆様御手紙や繪葉書の交換して下さい先着八名迄は本年の 文藝倶樂部其他谷一册と手製の栞を差上げます 後のは美麗繪葉書て御に酬つて御返書致します (香川縣大川郡白鳥村大字湊鐵田みつぎ) ○誌友の諸姉上様繪葉書交換を願ます私しも同等の者て返禮致します (茨城縣東茨城郡橋村大字與澤八番地村山綠子) ○私にりぼんとしほり送り下さる方に 戦時畫報一册送ります但し先着二名に 皇太子皇太孫殿下の寶石入繪葉書何れてもあげます (富山縣上市町吉江重平方安田崎子) ○親愛なる諸嬢様繪葉書誠に有難存じます 私都合により繪葉書交換などめられまして交際なす 事が出きませんのよ私嬢

しく〳〵しかたがありませんはたいがいは御返事差上たつもりてす まだ〳〵御寒く相成ますから記者様はじめ皆様御身御大切に御健康のほどかげながら祈りおります（常陸國沼野榮子）○交際場裡の花たる 諸孃様方妾も漸く此頃本誌を愛讀するようになりましたから何卒御交際して下さい尚繪葉書や雜誌の御交換を願ふ上等繪葉書御惠投下 さ れた御方には婦人畫報差上升（福島縣岩代國保原町六丁目四番地小林野菊子）○皆さんお目出度う、私に美わしい繪葉書て、花々しく年始狀の御交換御願いたします、本誌第三年を祝し、優美な、はがきの方、先着五名へ美術繪はがき一組づゝ、十名へ洋裝美人はがきてお返し致ます、其他の方へもそれ〳〵に（備後福山東町、矢野志奈子）○誌友の諸姉よあはれなる埋れ身にいかなる 繪葉書にても心くるしからずめぐませ給へや 御返しはいたさんに（上毛桐生在廣澤村金子尙子）○誌友の内てクリスチャン求道者の御方に御希あつてよ カードヤ上等繪葉書に御愛讀の聖句を書入て御送り下さいまし又おすがたあみものも 御返事お禮はきつと差上ます （近江國甲賀郡三雲東町廿四番戸基督教會婦人部しらみづ女史）○諸姉様早速エハがきて松葉形栞お申込み下さ い まし て有りがたう、 約束通り六錢以上の方にのみ送附し以下の人へは送附しませんてしたから、 悪しからず、此度又『紅葉形』の栞出來ましたからお望みの方はかならず六錢以上の 美麗なるエハガキてお申込み下さいまし、 繪葉書は相變らず、御交換願ひます、可成きれいにペンておかきをれがひます、てはお待ち申して居ります、（北海道龜田郡七飯村字鳴川松井長子）○新歴和歌一首限り、上等繪端書に染めて交換を願升、但しアルバム入れとなす故、外國製又は入錢以上の物に限ります、黑丸松學返は即日。（秋田縣角間川町東中上町、渡部宮子、東京の高山文子、大和の堀江霜月、茨城の小泉濱子、米澤の釜屋政子、東京の山上秀子等なり、 誌上に報ず。（秋田南女子文壇愛讀會とみ子）○新年お目出度う親愛なる誌友の姉様よ妾は和歌が大好てすから 繪葉書に和歌や俳句を書いて御贈り下さいな 相當の御禮を致します地方の新聞や御玉章も 送つて下さい必つと御返事を致します幾久しく 御交換を（和歌山市北大工町十六番地大江方早川とし子）○近頃非常に繪葉書の交換が流行しますが 字葉書の交換は更に面白味が多かろうと存じます 御望の諸孃は御交換を願ひます （小石川區初音町十一武陽館内大石濵江）○誌友諸孃様、地理歷史の參考になる御地の名所繪ハがきを送つて下 さ い ませな、當地の名所繪ハガキて乾度御返し致します、どうか各地から澤山に願ひます （鳥取縣岩美郡河崎村八石みどり）○諸孃様妾は五月より愛讀者の一人となりましたから 寫眞や繪葉書の交換を御願ひ致します速に御返し致します （山口縣熊毛郡高九村今市山部内藤井芳子）○新年お芽出度う皆様の御幸福ないのります 唐突ながら繪葉書の交換を願ひます （周防玖珂郡余田村婦嶽子）○私はかた田舍に淋しく世をすごして居る者てすが每月〳〵取りまする 女子文壇により其うきをはらして居るのてす 此度私の出ました高等小學校に展覽會があるのてすから 諸孃様繪葉書の交換などしく〳〵してくだざい 其れを出品しますから生徒があみました シナりもきれいなのを澤山取よせて居ます 故何卒それも交換して下さい（廣島縣豐田郡瀨戸田町宮地碧水）○妾は繪はがきの交かんを此上もない 樂しみに致して居ります（東京深川區東森下町六礒部路和）○繪葉書の交換を願ひます、 妾の希望は可成未使用の儀スタンプ印影又は 一寸高尙なものを三四葉宛まとめて送つて戴きたいのてあります、 お禮には肉筆スタンプ或は必要な書物 （但し古物にあらず） などて御返し申します（名古屋泥江町、小山かく子）○孃様がたの中に政府發行戰役紀念葉書お持ちの方は 何卒御送りくださいませ妾は英國製のカードと葉はがきと 手製の絹栞とて必ずお禮しますは（新潟市寄合町十番戸岩瀨花枝）○誌友の姉上様各地の風景、 花類、 其他種々の繪はがき交換致しますから何うぞ御送り下さいませ御返事は早速致します （東京市牛込區辨天町六番地林順娥方林直子）○繪葉書交換を御願ひ申しましたら四方の 諸孃様より澤山御送り下され誠に有難う御座ます、 中には御返事申し兼る御手紙がありますが 右様のは御返事致しませんから不惡思召し下さいまし （埼玉縣秩父郡吉野村高山ふく子）○諸孃さん妾も木美麗なエハガキに和歌一首か俳句 一句か短詩一章書いて交換して頂戴な猶ほ外に 寫眞編物栞り造花等の交換も御願ひよそして御禮として 以上五種各先着一名に妾の不用新小說（金六拾錢）一部宛、 各五名に當地名所長命寺紀念繪葉書（スタンプ附）一組（六枚）宛添へて返へしてよそして 聖書御不用の方は惠んで頂戴な御禮に 同價以上の書籍に替

の眞命寺紀念エハガキ二組添へて御返へし申します（滋賀縣蒲生郡鏡山村西川第拾五番地谷口はる子）〇東京美術學校内の石野靜子様初め繪葉書くだされ難有御禮申しますよ尙以後も御見捨なく御交際れがいます必ず御返禮差上ますよそして玉章もれがいます（常陸茨城新治郡藤澤須永幾代）〇皆さん何卒繪はがき寫眞の交換を願ひます先着十名へは、私の寫眞を上げます、後はしなり繪はがきで必ず〱返禮致します、（栃木町入舟町島田淺吉方福見女史）〇京都の香菊様美しき御うつくしふ御めぐみ下され有難う外に今まて御手紙交換した方々も何卒御送り下さい其れから御玉章の交換も（陸中遠野町百市若生なか子）〇誌友諸姉様よ美くいし繪葉書の交換を願ます先着十五名のお方には女子文壇及び女子文學を御送り致します（越中國福岡町地崎ふさ子）〇誌友の皆さん何卒繪葉書交換して頂戴なそして俳句なり和歌なり一首を書いてれ、妾も俳句か和歌を書いて直ぐ送りますからとーぞ（越中高岡市通町三十一番地北本歌子）

諸嬢の交際

〇記者さん、愛讀者の皆様、新年は御目出度う御座います、一昨年の九月から本誌を汚してもう一年の餘、月日の過つのは早いものですれ、それだのに妾の様な愚な物は何等造詣する事もなく、少しも進歩しませんて御耻しう御座います、けれ共好な道は止められないて、本年も又御世話になります、いゝえ本年計りてはなく女子文壇のある限り、私の生きてる限りは永久に誌友となつて、皆様と一所に至誠至高純潔な文壇の爲に盡す覺悟て御座います、什麼か記者さん始め皆さん御見捨てなく願ひますよ、それから妾あの耻しいのですが御小遣も澤山ないし、皆様の様に美い繪葉書を差上る譯には行きませんけれど、若し永久に交つてやると云ふ御方があつたら御手紙下さいまし、屹度御返事致しますわ、今までも皆様から御端書を頂きましたけれど、只の一度位てそれきりになるのですもの、そんなつまらぬ交際には本統に詰りませんわ、什麼か長く交つて下さいな、けれ共殿方からは御免ですよ、中には名を女にして其實殿方が下さるのですもの、これからは若し殿方らしいと思ふ方には御返事は上げませんから惡しからずれ（下野國下都賀郡小山町神島谷新井孝子）〇記者様始め誌友の御方明けまして御目出度う妾も本ー去年の十月から誌友の一人に加へて貰ひましたから御引立を御願ひ申します、年の改まると共に奮發して投書しますから何分よろしく、又文通を願ひます（福岡市伊崎浦二三田中方勝つき子）〇皆さん明けまして御目出度う存じます、妾も一つ年をとつて十五となりました、新し度うをむかへたと倶に新しい御交際を願ひます（本郷區佐藤山姫子）〇諸姉様明けまして御目出とた御座ります今年も相變らず御交際下さいませ、皆様と一しよに女子文壇を可愛がつてやりませうよ（求贋町梅花女史）〇誌友諸嬢様よいお年をお迎なさいまし私も田舍にて一つ年を頂きます實に有がた迷惑なのよ相變らず御交際願升（八王子八木町三十七井澤菊江）〇記者様諸姉様方よ妾も女子文壇の愛讀者の一人てすから之をおちかづきに以後は妾のような者でもどつか御見捨なく御交際遊して頂戴な（神戸市兵庫山纖驛前柳田濃子）〇誌友の諸姉様に申上ます今迄妾しに御交換又は御送り下されし品々は繪はがきは七百九十三枚御寫眞はごく〱親しき方に廿六枚御玉章は二百六十五通其外小說雜誌美文新聞詩集あみ物リボンなど色々御交換又は御送り下さつて眞實に嬉しくつて毎度皆様より頂きし物を見ては感泣致して居りますのよアヽ思ひますと情なきは浮世折角この様にして御交際が結べたかと思ひますのも少時の間少し皆様に申上難き事が妾しの身の上に出來ましたのよ、てすからネ其事を一々皆様に御手紙を差上て申上れば宜しう御座りますが御多數の御方てすからごく〱親しき方三十人の方へは御手紙を差上ましたが其外の諸姉様は誠に失禮てすがこの文を御覧下さつて御承知を願ひます尙皆々様よりの品々は妾しか一生大切に秘藏に致して置きます其外妾しに御用の方は、來月十日迄に願ひますよ其日より後は妾は宅に居りませんの誠に御懐かしき事ながら皆様に御別れ申上ます終りに皆様どうぞ御からだは御大切に妾しも陰ながら御祈り申上て居ります左様なら（大阪市東區船越町二丁目七十八番邸中島孝次郎方春本千代子）〇女子文壇愛讀の諸姉様、私は下記の所に居る不束者てすが御見捨なく美くしいエハガキや玉章をドンドン御交換下さいな（靜岡縣引佐郡都田校伊藤夫子）〇滿天下の誌友様よ、妾は播州明石町より一里半程へだつる所の片田舍に住むものですが、古諺にも、京に田舍あり田舍に京ありとか言ひますから、あまり田舍娘なりとてお見捨なく寫眞、編物、繪葉書の交換願上候しかし繪葉書にば何も畫かずに願ひます、本

男の方は御斷り申します（兵庫縣明石郡櫨谷村ノ內谷口村能田道子）○或る事情のため、本誌の講讀を止めておりましたが、またく本誌を愛讀する事になりましたどうかお心安く、御交際、おや忘れた繪葉書の交換も、なすつて頂戴ナ。（尾張東春日井郡篠木村字神領光三郞方寺本須惠子）○満天下の愛する諸孃樣方妾に何卒草種子を御寄送下さいませんか御禮として愚父の短句のかゝつた短册をさし上ます叉永く御交際をいたしませう（仙臺市鐵砲町百五十番地堀越常子）○諸女樣愛讀者となりましたから宜敷願みますよ（宮崎縣宮崎町寺町繼永花子）○親愛なる誌友御姉樣妾は周防熊毛の片田舍の學校に通學して居る不束な者であります此度愛讀者の一人となりました以後は宜ろしく永久に御交際を願ひます（山口縣熊毛郡高木村山部寄宿舍山本ゆり子）○賢明なる諸姉樣淡泊な者ですが、御見捨てなく永久に友情的に御交換して下さい、乾度御返事しますからおうたがひなく御送り下さい又寫眞を送つて下さつた御方には粗品ながら大阪名勝を附けて答禮いたします（大阪市東區淡路町四丁目中村方東御子）○親愛なる誌友の皆樣以後宜しく交際を願ひます、繪葉書玉草など御送り下さいきつと御返禮いたします、（福岡市荒戸三番町百九十一番地佐藤きりゑ）○私は淋しき落葉の中に住んで居りましたが、小川國子さんや大谷ふく子さんなど、共に本紙を愛讀して居りますから御見捨なく御交際をねがひます（上總國長生郡新治村桂伊東ふみ子）○私も本紙愛讀の一人です、小川國子樣との友達です、每日落葉ふみわけ鳴く鹿と共に淋しき山里に住居る田舍女ですが、御見捨なく文通や、寫眞の交換を願ひます（上總國長生郡新治村桂大谷ふく子）○誌友諸姉樣へ立ちかへる年の始めの御祭き御祝申上ます本年も相變らずの御引立と御交際を願ます（信濃國小縣郡東鹽田村村山文子）○皆樣私も愛讀者の一人です何卒御交際を願ひます諸姉樣の前てこんな事申し上げるのも何だか變ですけど私は姉妹三人きりて兄も弟もないのよそして私が長女て十七次の妹が十五末妹が十二ですのよ數多い誌友諸孃のうちには私と同じ樣な方もあろふかと思いますどうぞみなさん御交りをねがひます（埼玉縣秩父郡三田川村近藤とく子）○御なつかしい誌友のお姉樣方私は今年十七才でありまして高等女學校に在學中で有ますが同じ年頃て成べく女學校に在學中のお方によろしく御交際を願ひます今私の手許に婦女往復用文、貞烈の婦人女子雜誌ムラサキ二册、阿波名所繪葉書一組とありますおのぞみの方は美しい繪葉書三枚以上御送り下さつた方には先着順に御送り致します但男の方は御斷り申ます又雅號の方も（德島市通町三丁目竹內方五島無子）○新年おめでとう私共は今宵かるた會を開きます皆さまご遠方ですが入らつしやい、お餅もお蜜柑もたんと調へて置きますよ、（伊豫迷小池）○諸姉さん私は山家に住て居る者ですがどうか皆樣の御仲間入をさせて下さいなそうして文の交換や歌の交換を願ひます（安房郡北條町北町高田字一樣方山本政枝）○記者樣始め誌友の皆樣明けまして御目出度御座います新年も相變らず御別こんに願ひます（橫濱市元町三ノ一七安藤仲子）○皆樣御目出うございます、お正月から田舍の洗耳にも、御交際下さいませよろしくおねがい致します（福岡縣嘉穂郡碓波村大字秋松林まつゑ）○妾は利根の川邊にすむふつゝか者てすが愛讀者となりましたから御交際下さい（群馬縣佐波郡玉村町大山良太郎方關根蓮子）○けふは年の始めてす何事も皆一年間の思想を定めればならぬいと芽出度き日てすこの芽出度き元日を祝すと共に本誌女子文壇のいよく盛大に榮えん事と愛讀者諸孃の健康と聊か祝意をのべて（越前三國町平木八十二番地新保勝子女史）○皆樣、妾は、紅葉の里に、すむ一人の愛讀者てす皆樣交際を、又御玉章の御交かんを願ひます（赤坂區靑山高木町十四番本留子）○私は貧女子文壇誕生よりの愛讀者ては御座りますが隙行く駒の足はやく第三年を御迎なされんとす今日いさゝか御祝ひ申上ます願くはこの後ますく御發展あらんことを（長野縣南佐久郡臼田小學校內澤路榮子）○皆さんたつしやてお歲を迎へお互にお目出たい事れ妾は去年校を終へて女子大學入學の希望を懐きましたが目今は或事情の爲めにほんとーに怖ろしい片田舍に住んて居ますのどーか皆樣繪葉書の交換やレッターの交際を願ますヲ不束な身の上て御座いますが先着五十名丈拙筆の上寫眞一葉と本月發行の雜誌一册お送りいたします（福井縣南條郡河野小學校ニテ美谷子）○諸孃樣大阪の町はずれに住む賤き者てすがお友達の中に加へて下さい、和歌俳句の御交際をも願ひいたします。大阪の方て本誌を愛讀なさるお方は澤山ありますように存じますが投稿なさる方がごくすくないようてす皆樣の他處の方々に遲れず澤山投稿の程希望いたし

ます(大阪市西區境川町八十六番地鎌田春枝)○皆様の内で府立第一高等女學校と、日本女學校跡見女學校の容子を御知せ下さい御禮として新年發行の女學雑誌の内で致します(市内京橋區南鍋町六番地佐々木光)○皆様私はまだ十五歳で何も知りませんから又色々御教へを願ます私に御はがき下さいました方には必ず御返しいたします(近江國彦根八丁目牧村まつゑ)○名古屋市の方にて御希望の方には當地の新聞雑誌差上ますから御知らせ下さい併せて御友誼願ますそうして先日御手紙下さつて返事を差上なんだ方は御名前を當欄迄御知らせ下さいませ(京橋様山浜子)○記者様諸姉様に御交際下さる様御紹介下さい(越後國岩船郡村上町木野瀬もと子)○多學の皆様よ私も愛讀者てすから宜しく御交際をねがひます又各縣の女學生様にも御交り下さい私も今女學校在學中てす(秋田高等女學校内泉落葉子)○諸姉様方よ妾は今年の花の盛りの年頃渡滿以來他國人の寄り集りにて打ちとけ語る友もなく淋しく哀れに日を送るものなれば小説又は栞、詩集文集などおもちの方はお貸し被下度必ず御返し申すは勿論乾度色々珍らしき品お禮します(滿洲大連都督府局官舎内福長高子)○新體詩及俳句をお作りになる諸孃様と交際をて御返禮は御申込の御方は繪はがきかお玉章に願たいてす當地の風景繪はがきにて差上ます(播磨國明石町内大明石村七三安孫ます子)○私は職務の餘暇に寫眞の稽古をしてひたすら自然の美にあこがれて居る者てすが此度のお休みにはどこかへ旅行したいと思ふて居りますのよけれども初めての所ては一向様子も分りませんので誠に困つて居りますお皆様の内で私の行く先を御案内して下さる方は有りますまいか成ろべく東京附近若しくは神奈川縣ならよいのですな澤山遠くなければどこでも構いません現住所は埼玉縣兒玉郡東兒玉村てすけれど一月の八日迄は下名の處に居ります(埼玉縣北埼玉郡三田ヶ谷村大字彌勒平野三重子)○玉章繪ハガキ御寫眞の御交換を願升妾し先着五名様にかぎりリボン及舶來の繪ハガキ御返禮致し升(金澤市石浦町名古屋商會内成田禎子)○静岡羽根安子様の仰せは大賛成てす静岡縣は兎角引込勝てすから安子様の仰せの様に盛に誌友會を開いて他縣に敗けぬ様に投書仕様てはありませんか御賛成の御方は誌上にて御答へ下さい、(静岡縣小笠郡掛川町武井京子)○私和歌俳句がすきてすのどなたか志の同じ方は永久に御交際下さいませんかおねがひします(神戸市兵庫門口町杉山とし子)○以後は宜敷交際を願ます、繪葉書御玉章、寫眞を送つて下さいませ御返事はかならず致します(神戸市京町A七十八番中島歌子)○前略十二月發行の女子文壇に神田の谷文子孃の海賀變哲様にと云ふ文を讀み犇と胸に答へ實に慙愧の至りに堪へず候御忠告卒有がたく存候希くば孃よ「諸孃と記者欄」まで住所御あかし被下度候(麻布區霞町一二海賀篤麿)

圖書換讀

○私は若菜籠、古今集遠鏡、新體詩さゝなみ金色夜叉續々編、才媛文集五、予の半面などがありますから伯爵夫人不如歸の歌黒潮破戒と交換して下さいませんか高價の本ならば尚他の本數積差上ます(美濃國山縣郡谷合内藤みち子)○諸姉様皆様の御手許に女學世界の臨時増刊の女學校生活がありましたなら大和田先生の雪月花と御交換下さいませんか(東京市京橋區銀座一丁目岡崎千枝子)○誌友の皆様御不用の本が御座いましたら御送り下さいませんか御禮には彩色刷日本名勝繪はがき十六枚づゝ差上ます(東京麹町區三番町六十六番地古川様方多田みの子)○澤山雜誌ありますから御入用の方は繪葉書て申込んで下さい必ず差上ます(静岡縣沼津鐵道官舎安樂島盛至方鈴木ちよ子)○皆様私の手許に小說類か夢三十八年の女學世界日露戰爭實記が有升から皆さんの内に夢の本か不如歸乳姉妹を御借し下さる方は有ませんか(越後國岩船郡村上町長島とみ子)○妾は兄様から貰いました秀才文壇が一年分御座ります今ては不用に成つてあります諸姉様の中て玉章か又繪はがき下された方には一册づゝ御送り乾度致します亦繪葉書の御交換も願ます(京都府綴喜郡草内村山岡房次方秀子)○妾に左の書物あります寫眞にて御申込の方に御召しのもの御差上ます波瀾自鳴あらひがみ、戀愛美文千金、女心、星、女夫波上下、いづれにても着順にて差上ます(和歌山縣東牟婁郡三里村萩臨本支店内かなる子)○皆様私の元に女子東京遊學案内が一册不用になつて居りますから御望みの御方は繪葉書か編物か「リボン」等と交換して下さい(長崎市勝山町七野瀬アイ子)○なつかしい諸嬢様よ妾は、小學校に奉職して居るふつゝか者ですが、行末長く御交りを願ひます、皆様の内に、伯爵夫人、少華族、緣不緣、人の兄、己が罪、夏子、御不用の御方は、川千鳥、なむあみだ佛、花紅葉、千

山萬水、與文英華、黄瀛白菊と御交換下さいませんか不肖ながら妾の寫眞を、そへて御返し致します（大分縣西國東郡吳崎村泊里茂子）○私の手許に小說「二人ミナシゴ」「涼子」「催眠術」「母の心」「女波男波」等が御座いますが皆樣の中で「夏子夫人、やどり木、少詩族、伯爵夫人上下、」の中何れかと交換して下さいます方は何卒下名へ（尾張國知多郡龜崎町井上登代子）○誌友皆樣の中で小說破戒、青春綠不綠等何れにても御送附給はりし御方へは妾の女學生（風葉新著）懸と双春潮て御返禮致しますわ（山口縣玖珂郡高森村島野淑子）○わたしは小說鍛子初枝の卷其他澤山持つて居ります皆樣の内に小說鍛子の卷既子夫人夏子魔風戀風御不用の方は何卒交換して下さい（備後双三郡青合村岸田好）○皆樣の內で何か面白い小說の御不用もの御持ちの方はなろべく早く御惠み下さいな御惠み下さらば相當の御禮に紀念繪葉書二枚づつ添へて差上げます（靜岡縣磐田郡岩田村旬坂中高柳しん子）○誠に勝手がましいお願てすが妾は奥深き山中に住まゐして居ります本誌愛讀者なれど交通不便のためつひ二卷十三號から十六號まで購め得ませんてした若し皆樣のうちに不必用になられたお方が御座いましたらどうぞ御惠み下さい其の代りゐず御返禮は色々の寫眞て差上ますよ（靜岡縣磐田郡大藤村伊藤ゆわ子）○皆樣の中で小說不如歸、朝暾、玉蟲、御持ちの方は私の、家庭教育、深山美人、新小說、其他色々有りますから何れかと交換して下さいませんか（信州東筑摩郡入山邊村桐原倹子）○どなたか昨際の方て本誌二卷十三號御不用の方は私の文章世界と御交換下さいれ、それてに先はおきて丶も一寸御知せを（播磨揖保郡常金村平谷つたゑ）○此度叔父より雜誌澤山貰いましたが。其中て左に記して有ますから美しい繪葉書にて、一月二十日迄に御申越下さい一册づゝ送ります、若し豫定數よりも多人數になりますればくじ引きて差上ます、一新聲、文庫中學文藝、秀才文壇都の花、日本婦人、別品、テニソンの詩、花守、女子文壇皆て五十七册、（信濃松本在入山邊村桐原登志子）○妾しは只今「源平盛衰記、神州元氣、馬琴傑作集、新作物には乳姉妹、想夫憐、血の涙、詩集には黄菊白菊、行く春、天地有情、秋の日」等所持して居りますがこの中お好みのを差上げますから「伯爵夫人、やどり木、夏子、淑子、青春」（全部）等お持ち合せの方はこの中いづれなとお交換下さい。（埼玉縣大里郡久下村大字久下田島修一郎樣方花村芳枝子）○妾の手許に小說（金剛盤、眞人の自白、不知火、文藝倶樂部の十一卷一號より本月分迄女學世界、中學世界、等有りますて皆樣の机上にて天うつ波、女夫波、冬子、乳姉妹、己が罪、夏子等御特ちなれば御望みの者と御交換が願ひたい（滋賀縣栗太郡物部村大字大門宇野民子）○親愛なる諸姉方樣よ妾繪葉書交換は厭てすが左記の書籍を御惠送下さいませんか御禮は致しますから（同價格の物品書籍）中學世界三十八年秋期增刊菊花環詩集花守日記まひる野（白鳩新聲號不論）藻草以上又同じ詩集が到著しました時は三者以下は獨逸縮來繪葉書詩集に郵券を添へて御返送致します書物は可成汚れていないのを望みます餘り汚れているのは御禮致しません（京都六軒町今出川南へ入井上方見互とも）

剽竊詩文の注意

▲第十六號の分。▲東京、しらまと女。の論文地賞閑夜は大町桂月氏著『筆のしづく』の卷頭にある閑夜の剽竊▲姫路、矢島みどり。の新體詩地賞『星の光』はハガキ文學二ノ二清野春雨の『星の光』の剽竊▲三河、金田みつ子。の抒情文地賞『短きちぎり』は國民中學會講義錄十二號文林來維新一の『星と露』の剽竊▲北海道、山崎入道子。の新體詩秀逸『稚兒』は『櫻冠』一ノ二より剽竊。

▲第十五號の分。▲越中、北本歌子、の短篇小說秀逸『水車』は三十年六月『少年文集』天賞六星與君の作の燒き直し▲金澤、大地波子。のはがき文秀逸『屋號』は百字文選十八頁須田の『風流なる看板』の燒直し▲香川、岡鉛雄。の新歌謠天賞『榮稱較つた……』の一首は俗謠を燒直したるものなれば懸賞當選を取消す▲靜岡、杉本靜子。新笑話地賞ハイカラ紳士は頑々話二號二十二頁及び其他にても見たりとの注意あり懸賞取消す。

○今回の注意者芳名は○若狹、塚本ふさ子○高岡、卯の花月夜○尾張、お、け女史○高四、無名氏○北海道、石崎ますゑ○牛込、細谷すみれ○和歌山、千越子○滋賀、辰井ふみ子○宇都宮、花枝子○龜井戸○鶴澤楽女○岩陽、梅子○長月○信濃、初音○周防、坪井文子○金森よしゑ○西播、うばら女史○高田鈴子。

新出版

▲「國旗合せ」 日本、英、米、清、獨、佛、露、伊の八ヶ國の國旗十枚總數八十枚一組を袋入とせしものにて字を知らぬ者にも出來る新遊戯なり組になる者がさまぐ〳〵可笑しき假名をつけて呼合ふ處に此遊戯の面白味は存りて敏捷、輕快、頓才、機智等を養ふが精神なるべし遊戯は年々陳腐になり行かんとする時、此の如く新工夫の遊戯品の出來るは欣ばしく先づ新年には何はさておき試みるべきものならん、體裁も宜しく色刷も美くしく女子が手函の裡に收むるものとして一品は具へざるべからず（本郷西片町十番地内外出版協會出版發賣金二十錢）

▲「桂の卷」 新體詩集なり選者は河井醉茗氏、青年の作家五十九名の作を集む、詩に初心なる者の作詩參考としては最も好き模範書なるべし新體詩に志ある者は新しき詩集を多く讀むべし之れ最も好き獨習法なり此意味に於て本書を諸孃の座右に薦む裝釘は中澤弘光氏にして表紙挿繪凡て高尚に出來たり（京橋區銀座三丁目佐久良書房發刊價金三十二錢）

▲「水彩畫講義錄」 水彩畫家中の新進として聲名ある丸山晩霞君の筆なり繪は凡て三色版にして印刷に注意してアルバムに貼附し一圖毎に筆者自ら言文一致の分り易き文章にて其描法を詳しく說明したり別に添削質問券なるものを附け何人にも其水彩畫を添刪し且質問に應ずる由なれば地方などにありて水彩畫を學ぶものには最も適當なる講義錄畫帖なるべし（京橋區五郎兵衛町金港文淵堂發兌、一册金六十錢）

▲「繪解キリスト」 さきに新約物語を著はしたる中村春雨君がキリストの一代を子供にも分るやう簡單にお話してそれに澤山繪を挿めたる繪本なり（金尾文淵堂發兌、一册金十二錢）

▲「西詩の薫」 西村醉夢氏が其弟と姪との爲に西洋名家の詩を講解したるものを一册に集めしなり然れば初めに原作を、次に直譯を、次に譯の解釋を置き西詩を味ふ用意は充分にて詩も成るべくやさしく分り易きものを選みしやうなりバーンス以下凡て十二人所謂西詩のかをりは余紙に匂ひて一度其書に接したるものは卷を放つに忍びざらん（京橋區北槇町二番地登文舍發兌定價五十錢）

▲「乙女の生涯」 著者は大村仁太郎氏、乙女時代の心得を述べたるものにて例へば少女の天性、少女と人形、愛の力、時の利用、趣味と年齡、感謝の心、滑稽なる結婚等殆んど六七十項目あり（牛込區矢來町二十六精華書院發兌定價六十錢）

▲「少年文庫」 坪内逍遙博士を初め早稻田文士の手になりたる少年ものゝ雜誌なり記事は皆よろしけれど體裁に今一工夫あらまほし（金尾文淵堂發賣一部二十錢）

▲「入學受驗準備書」 中學校及び高等女學校の入學試驗に應ぜんとする者の爲に編述されたる書なり、國語と算術の兩科あり、凡て問を設け答を擧げ説明も簡潔なり入學に志あるものは好個の參考書として座右に置くべし（定價三十五錢日本橋區本石町三丁目賢文舘發兌）

▲「女子書簡文」 新撰と銘打ちたる女子書簡文集にして著者は服部躬治氏、音樂會に誘ふ、染物屋へなど新しき題目も少からず、文體も一種の型に拘泥せずして候文、言文一致文なほどよく按排せり、終りに類語も添へたり上等用紙印刷製版二百頁定價四十五錢同上發兌）

▲新出版物の紹介を望まるゝ向は本社編輯部宛に寄送あれ

雜報

▲駒國舍歌塾の開設。 國學歌道に志深き安藤直方氏は今回斯道に熱心なる世の婦女子の爲駒國舍歌塾を牛込區納戸町八番地の自邸に開き多年の蘊蓄を傾注して斯道の爲大に盡す處あるべしと云ふ猶同塾には特に地方部の設もある由

▲三越呉服店。 三越呉服店專務取締日比翁助氏は過般來洋行中の處、衣裳界の現狀を視察して歸朝したれば追々同店の發展もあるべく差當り衣服附屬品等の新流行物を陳列する由

▲新聞の改革。 『日本』は三宅博士以下二十幾名の舊社員袂を聯ねて退社し『電報』は大阪每日の支社となり『每日電報』と改題すべく『やまと』も色刷になりて大いに發展すべしと

▲見落す勿れ。 投稿規則と懸賞方法は本年から新しくなりました、いつもの場處にありますから見落さないやうに

A. Who is Santa Claus?

甲. サンタ, クロスとは誰てすか?

B. It is a corrupt contraction of St. Nicolas, the patron saint of children.

乙. 小兒の守護聖人てセイントニコラスを略した訛てす。

A. Why do they hang stockings by the fireplace?

甲. 何故靴足袋を爐の側に懸けますのてしよう?

B. They think he comes through the chimney during the night when the house is shut.

乙. 家が最う閉ぢて仕舞つてからサンタ, クロスは來るものてすから, 烟突から這入て來ると子供等は思つて居ます。

A. I suppose their parents fill their little stockings with toys and candies, and the children believe that good old Santa Claus left the presents for them.

甲. 親達が, 可愛らしい靴下に玩具や, 御菓子等を入れて置くと, 子供達は, よいサンタ, クロス翁が來て御土產を置いていつたと思ふので御座いましようね。

B. They do. I tell you that it is the saddest disappointment for children when they learn that no Santa Claus actually lives in the world.

乙. そうて御座います. 本當に小供達がサンタ, クロスは世界に實際あるものてないと云ふ事を知る時に此上なく悲しい失望をする時て御座います。

A. So many lovely beliefs we have in childhood are cruelly wiped away as we grow older, and the world becomes very common-place.

甲. 幼年時代に持つて居る色々の美しい信仰は, 段々年行くに從ひ慘酷にも抹去されて, 世の中がつまらない, 俗なものに成つてしまいます。

B. I agree with you. That is exactly what Wordsworth meant when he said:—
"Heaven lies about us in our infancy."

乙. 實にその通りて御座います。彼の詩人ウオツウオルスが, 天は我等が幼年時代の周圍にあり, と咏じたのは, 丁度其意味て御座います。

glad you like them. If you excuse me, I shall go on with my sewing, and do please talk to me anything.	した樣で嬉しう御座います，御免下さい，私は仕事を止めませんから．何卒御遠慮なく何でも御咄しなさつて下さい。
A. Please go on with your work. Do you know that I enjoyed your Sunday School Christmas very much?	**甲．** サー何卒御構ひなく御仕事を成さつて下さい．大和あの日曜學校のクリスマスは面白う御座いました。
B. Very glad to hear that.	**乙．** そううかゞうと嬉しう御座います。
A. And you said that you would tell me more about Christmas when you were at leisure.	**甲．** 御暇の節に此クリスマスの事をもう少し聞かせてやるとおつしやいましたね．
B. Yes I did. Shall I begin now?	**乙．** 申上ました．今始めましようか？
A. Yes please if you do not mind.	**甲．** 御宜しくば何卒御願致します。
B. This festival is a specially happy occasion for children, exchanging presents and good wishes and enjoying feasts with their families and friends.	**乙．** 此祭日は格別小供等に取つては嬉しい日で，御互に賜物や厚意を取換はし，家族の者や友達等と御馳走を一所に頂くのです。
A. Is there any particular custom attached to it?	**甲．** 何か格別の風俗が此祭日に御座いますか。
B. On Christmas Eve it is the custom to hang their stockings by the fireplace.	**乙．** クリスマスの前夜即ちクリスマス．イーブに，小供等は自分の靴下を爐の側に懸けます。
A. What for?	**甲．** 何の爲ですか？
B. They believe that Santa Claus comes to fill the stockings with toys and other lovely presents while they are asleep.	**乙．** 寐て居る間に，サンタ，クロスが來て，玩具や種々のよい進物を靴下に入れに來ると信じて居ります。

ward routine, our inner life ought to be growing in earnestness, in force, in strength, in depth.

Yet there are some people whose life year by year is only a going around and around in the old beaten paths, with no onward movement. Our daily walk should be like one whose path goes about a mountain, but climbs a little higher with each circuit, until at last he gains the clear summit. While we must do in a measure the same things every day, we should do them a little better with each repetition. Speak a shade more kindly than the year before;

Think a little oftener;
love a ittle more;
Cling a little closer to the
Heaven'slove;
Thus life below shall liker grow
to life above.

Miller

り．斯く外部常規の業に勵みつゝ，内部なる精心は熱心，强固，氣力，深慮に富むべきなり。然れども，世には年々歲々舊道を巡周して一歩も新進せざる者往々之あり。吾人の行路は恰も山を昇る者の，一巡行毎に高きを占め，終に雲なき山頂に達するが如くあるべし。或點まで我等は日々同じ事を繰返して消光すれども，其反復毎に以前よりも增したる上達を以て之を成すべし。

去年よりは，
一際親切に他に談れ，
考慮の度をまし，愛を加へ，
天の愛に愈々信賴せよ，
さらば人生，清き靈生に
彷彿たるはやすからん。

Santa Claus

A. You seem to be very busy at your sewing. May I ask you what you are making?

B. I am making a doll's clothes for my youngest sister.

A. I see. How lovely they are! Are they your New Year's presents to her?

B. Yes they are, and I am very

サンタ，クロス

甲． 御仕事で大相御忙しそうで御座いますね．何を御拵へて入來しやいますの？

乙． 末の妹の爲に人形の着物で御座います。

甲． そうですか．何て御綺麗でしよう。御妹子さんへの御年玉で御座いましよね？

乙． 其の通り，貴女の御氣に召

英文 (一)

津田梅子閲　河井道子述

The New Year

"The year's at the Spring,
And day's at the Morn;
Morning's at seven;
The hillside's dew—pearled:
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn;
God's in his heaven—
All's right with the world!"

With sincere good Wishes
for your Happiness
in the New Year.

新　年

歳は春,
日は元旦,
朝は七時,
丘阪は玉露を敷き
雲雀は空に舞ふて
蝸牛荊棘に憩ふ,
神天に在りて
地上に和氣靄々たり。

新年に於て諸姉の幸福
愈々豐ならんを祈る。

Thoughts for the New Year

We ought never to be willing to live any year just as we lived the last one. No one is striving after the best things who is not intent on an upward and a forward movement continually. Our daily routine tasks are often too monotonous, yet even in them, there must be constant progress. We ought to do the same things better each day. Then in the midst of the out-

新年之感

我等過ぎし歳と何の異なる所なく又一年を過ごすを以て滿足すべからず。堪えず進歩を目的と成す者に非ずば, 至善最良のもの得んとて努力する者に非ず。我等の一定せる日々の仕事は屢々單趣に偏する事あり, 然れども彼等に於てすら, 尙常に進歩せざるべからざるものなり. 同じ事を成すにも日一日と其業に於て上達を表はすべきは當然な

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

明治三十四年十月創刊

壇友之優待

天下無敵青年筆戰雜誌

獎學大懸賞

毎月二回一日十五日發行

新年大附錄

●牧場の朝…………（大判上等用紙コロタイプ色刷）……佛人チャーレス、ジャックー氏筆

右は東都有數の稱ある東京印刷會社の印刷にして原畫は巴里美術館に藏せらるゝ世界著名のものなり

●雪のあした………（水彩密刷繪葉書石版十數色刷上製）…三宅克己先生筆

●御題新年の松（寫眞銅版）其他數葉本誌寫眞班の苦心撮影せられしもの及び泰西名畫を揭げ以て新年號の色彩とす。

第七卷第壹號（四十年一月一日發行）

秀才文壇

大判百三十頁

正價表

一冊郵稅共金拾一錢〇六冊全六十三錢〇十二冊全一圓廿錢〇廿六冊全二圓卅四錢

年二回定期增刊

内容の整備

△新年號名家の寄稿目次

△時代的讀詩眼……文學士 尾上柴舟
△ひつじかひ……文學士 中内蝶二
△理想の文章……文學士 武島羽衣
△讀書の餘香…… 野口米次郎
△藤原惺窩の思想…… 河野紫雲
△場合の彼れ……文學士 沼波瓊音
△故郷の松…… 河井醉茗
△日本詩史談…… 虛舟生

毎號選評大家

△敍事文△抒情文（中内文學士）△新體詩（馬場孤蝶）△俳句（高濱虛子）△新派和歌（尾上文學士）△和歌（佐々木信綱）△漢詩（虛舟）

△評論文△短篇小說△日用文△五行文學△人物評論△文士會（以上編輯局選）

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目（振替口座壹九五五番） 文光堂

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

主筆 文學士 大町桂月
文學士 沼波瓊音

青年

第一卷 第一號

每月一回一日發行

定價金拾八錢 郵稅金二錢

明治四十年一月一日發行

目次

次號主なる執筆者

伯爵 佐々木高行
小栗風葉
男爵 文學士 千秋季隆
柳川春葉
理學博士 橫山又次郎
竹越三叉
文學博士 井上哲次郎
幸堂得知
第一高等學校教授 藤代禎輔
饗庭篁村
音樂學校教授 上眞行
河井酔茗

發行所 青年社 東京市本鄉區東片町百廿七番地

（戌の三）

此社告を愛讀諸孃の精讀を乞ふ

募集課目

第參卷より改正

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種
◎叙事文 ◎抒情文 ◎書簡文 ◎評論文（各半紙廿四字詰三十行以内楷書に認めらるべし）
◎短篇小說（半紙總かな付）（廿四字六十行內） ◎新體詩（半紙十句以內）

乙種
◎和歌（半紙半分一首宛） ◎俳句（仝上） ◎新歌謠（仝上）
◎短文（半紙かな付廿四字五行） ◎新笑話（半紙半分十六字詰） ◎圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種
◎文藝遊戲（半紙十六字詰）
◎誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

獎學懸賞品

甲種	第一等	婦人持銀側時計……價格金拾圓
	第二等	新柄反物……價格金參圓
	第三等	縮緬半襟……價格金壹圓
	第四等	圖書切符……金七拾錢
	第五等	同……金五拾錢
乙種	第一等	流行絹張洋傘……價格金五圓
	第二等	流行帶止……價格金壹圓
	第三等	化粧品……價格金五拾錢
	第四等	圖書切符……金參拾錢
	第五等	同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる様前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定 必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は「原稿在中」の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返付せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（每號水彩畫繪端書 給手本寫眞口繪入） 每月一日發行

一册（大判百頁）	金拾錢
八册（半年分增刊共）	前金七拾六錢
十二册（一年分增刊除ク）	前金壹圓八錢
十六册（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢

此外郵税壹册壹錢づゝ申受

定期增刊 二月十五日 五月十五日 八月十五日 十一月十五日 發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法是は半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます

明治三十九年十二月廿九日印刷
明治四十年一月一日發行

無比廉價 金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話「本局六〇七番」 女子文壇社

特約賣捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

（坪內製本）

産科婦人科を以て名聲世界に赫々たる醫學博士専門諸大醫の賞賛を得たるのみならず畏くも上　宮様方の御用を蒙るに到る誠に本剤の名譽と云ふべし

醫學博士 慈惠病院長 高木兼寛先生（東京）
醫學博士 小兒科婦人科専門 瀨川昌耆先生（東京）
醫學博士婦人科専門ドクトル 緒方正清先生（大阪）
産科婦人科専門 醫學士櫻井病院長 櫻井郁次郎先生（東京）
産科婦人科専門ドクトル 木村順吉先生（東京）
産科婦人科専門ドクトル 佐伯理一郎先生（京都）
小兒科婦人科専門ドクトル 小林山郷先生（大阪）
婦人科専門獨逸ドクトル 朝山義六先生（横濱）
柴田婦産兒科院長醫學士ドクトル 柴田耕一先生（名古屋）

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱賛を恭ふしたれども略す



中將湯

見よ



主治効

●子宮病 ●血の道 ●逆上頭痛 ●腰足冷込
●下腹痛み ●胸先差込 ●白血長血 ●こしけ
●婦人神經 ●氣ふさぎ ●癇高ぶり ●夜眠られず
●産前産後 ●古血の滯 ●難産流産 ●しびれ水腫
●月經不順 ●月經滯り ●月經痛み ●血ぶとり

此外 凡て子宮血の道産前産後月經不順より起りし諸症に用ゆれば血のめぐりを調へ帶下を止め欝を開き自ら心氣を爽快ならしむ

改正定價

一日分十錢
四日分卅五錢
一週間六十錢
二週間一圓十錢
三週間一圓六十錢
五週間二圓五十錢

本舖へ御注文の方は病人の御容體詳しく御申越あれ

注意 持藥として御服用の御方は五週間分御求め被下候得者至極御徳用に候

中將湯本家 東京日本橋通四丁目 電話本局一〇九七番 津村順天堂本店
中將湯本家 大阪丼筋大寶寺町南 電話東二七八番 津村順天堂支店